

# Historical Library of Matsue City 11

March 2018

## MATSUE SHISHI KENKYU No.9 Research of Matsue City's History

松江市歴史叢書  
11

Spatial characteristics of Matsue castle town in the early Edo period

—Through the analysis of “Matsue castle town map in the Horio period”—

..... OYA Yukio • WATANABE Rie (1)

Rock types present in the stone walls of Matsue Castle, and their sources

..... SINGU Atsuhiro • SAWADA Yoshihiro • FURUTA Hiroko • NORIOKA Minoru (23)

〈Historical Materials Introduction〉

About “Old Matsue castle drawing” depicting the castle facility before Meiji 8 And similar painting materials

..... WADA Yoshihiro • OKAZAKI Yujiro • INATA Makoto (63)

Matsue City Historiographic Journal ..... Historical Sources Compilation Section (71)

Kuwabara Yōjirō and His Research on Arts and Crafts: With a Transcription of the Table of Contents of “Ōbei Bijutsu Angya”

(The Expedition to the Europe and America, 1910-13)

..... MURAKADO Noriko [45]

Newly Discovered Merchant Documents: The Kuwahara Family of Money Changers and Bankers, and “Shigi”

..... MURAKADO Noriko [33]

Activities of small-scale cargo vessels in the Matsue clan territory in the late Edo period ..... NAKAYASU Keiichi [19]

The position and role of Tegakuin, Matsudaira Nobuzumi's wife ..... ISHIDA Syun [7]

About prayers when building Matsue-jo castle tower ..... OKITA Tetsuya [1]

Historical Library of Matsue City

# 松江市歴史叢書11

2018年3月

松江市史研究 9号

- 近世初期における松江城下町の空間的特性 -「堀尾期松江城下町絵図」の分析を通して— ..... 大矢幸雄・渡辺理絵 (1)  
松江城石垣の岩石とその原産地 ..... 新宮敦弘・澤田順弘・吉川寛子・乗岡 実 (23)  
〈史料紹介〉明治8年以前の城郭施設を描いた「旧松江城図面」と類似の絵画資料 ..... 和田嘉宥・岡崎雄二郎・稻田 信 (63)  
松江市史編纂日誌 ..... 史料編纂課 (71)  
桑原羊次郎とその美術工芸研究 -附『歐米美術行脚』目次翻刻- ..... 村角紀子 [45]  
新出の商家文書紹介 -両替商・桑原家と「志儀」- ..... 村角紀子 [33]  
近世後期、松江藩領における小型廻船の活動 ..... 中安恵一 [19]  
松平宣維室天岳院の立場と役割 ..... 石田 俊 [7]  
松江城天守築城鎮宅の祈祷について ..... 大北哲也 [1]



堀尾期松江城下町絵図（島根大学附属図書館蔵）

松 市  
Matsue City

Suetsugu, Matsue-city, Shimane-pre, Japan



9784904911402

ISBN978-4-904911-40-2

C3321 ¥1500E



1923321015005

松江市

定価（本体1500円【税別】）

松  
江  
市

松 市

松江市歴史叢書11  
松江市史研究9号

2018年（平成30年）3月1日発行

編集 松江市歴史まちづくり部史料編纂課  
発行 松江市  
〒690-8540 島根県松江市末次町86番地

印刷 渡部印刷株式会社  
〒690-0874 島根県松江市中原町192

## は　じ　め　に

松江市では、平成19年（2007）から始まった「松江開府400年祭」を契機に、「松江市史の編纂」「松江城国宝化推進室の設置」「松江歴史館の開館」など、歴史史料の調査研究体制を整えてきました。「松江城の国宝指定」や、国宝指定の決め手となった「祈祷札の再発見」は目に見える大きな成果ですが、その他にも、『松江市史』の計画的な出版を含め、松江市域の歴史に関する調査研究が多くの研究者と連携して進められ、その成果は『松江市歴史叢書（市史研究）』など、各種の出版物や市史講座などで逐次紹介されています。

松江市史編纂事業を通して明らかのように、松江市域の最大の特徴は、古代から現代にいたるまで、出雲地域、島根県の政治権力の中枢が置かれた場所ということであり、そのため、松江市域には松江城をはじめ、まだまだ驚くほどの貴重な歴史史料が残されています。

松江市では、これまでどおり「市史編纂事業」や「松江城の調査研究」を基本としつつ、地域に埋もれている貴重な史料、松江市保管の歴史的公文書など、松江市域の歴史史料の調査・研究を引き続き進めてまいりたいと思います。

さて、今号では絵図・地図、自然環境、松江城、近世史、近現代史に関する研究成果を掲載しています。

今後とも、この「歴史叢書」に対し、多くの地域史研究者のご参加をいただくことで、松江の歴史が一層明らかになるとともに、その成果が未来に向かって歩む人々の生き様に大きな示唆を与えてくれることを願ってやみません。

2018年3月

松江市長 松浦正敬

## 松江市史編纂体制図

区分	役割	委員会名					
編纂委員会	・市史編纂の成績を市民に還元していく事項の協議 ※住民、行政、専門研究者が一体となり市史を作り上げるため、地元有識者、専門研究者で構成する。 ※市史全体の編集 ※必要な史料（資料）の調査・整理及び総括	◎ 田坂大拙 ・ 安部登 ○ 井上寛司 ・ 田坂郁夫	乾隆明 ・ 引野道生 ○ 小林准士 ・ 勝部昭 ○ 井上寛司 ・ 川崎勉 ・ 長谷川博史 ・ 西田友広	委員会団体 ・ 竹永三男 ○ 小林准士 ・ 岸本覚 ・ 鳥谷智文 ・ 東谷智 ・ 三宅正浩 ○ 井上寛司 ・ 渡辺浩一	安部己圓枝 ・ 竹永三男 ○ 小林准士 ・ 岸本覚 ・ 鳥谷智文 ・ 東谷智 ・ 三宅正浩 ○ 小林准士 ・ 竹永三男	委員会団体 ・ 川島美美子 ・ 大矢幸雄 ・ 大矢幸雄 ・ 大矢幸雄 ・ 西尾克己 ・ 西尾克己	仁田玲江 ・ 喜多村正 ・ 喜多村理子
編集委員会	※市史全体の編集を中心となつて行うため、各分野の専門研究者で構成する。	田坂郁夫 ・ 佐藤信 ・ 西尾克己	高安克己 ・ 大日方克己 ・ 佐藤信 ・ 西尾克己	勝部昭 ○ 井上寛司 ・ 田坂郁夫	勝部昭 ○ 井上寛司 ・ 田坂郁夫	勝部昭 ○ 井上寛司 ・ 田坂郁夫	喜多村正 ・ 喜多村理子
部会長	・編纂事業の具体的な内容の企画・立案 ※各部会の部会長で構成する。 ・市史各巻の内容を検討 ・必要な史料（資料）の調査・整理 ※市史各巻の編集を中心となつて行うため、担当専門分野の専門研究者で構成する。	田坂郁夫 ・ 藤部昭 ○ 井上寛司 ・ 田坂郁夫	高安克己 ・ 大日方克己 ・ 佐藤信 ・ 西尾克己	勝部昭 ○ 井上寛司 ・ 田坂郁夫	勝部昭 ○ 井上寛司 ・ 田坂郁夫	勝部昭 ○ 井上寛司 ・ 田坂郁夫	喜多村正 ・ 喜多村理子
専門部会	・部会で議論した内容に基づく執筆 ※市史各巻の執筆を行うため、部会の専門委員と部分執筆者で構成する。 編集委員・専門委員以外の執筆者⇒ (松江市職員、スポーツ財團職員は未掲載)	河原莊一郎 ・ 入月俊明 ・ 三瓶良和 ・ 濑戸浩二 ・ 田中秀典 ・ 谷永一 ・ 営繩研究セミナー講師 ・ 森茂晃 ・ 岩田貴之 ・ 林成多 ・ 淀江賢一郎 ・ 野津貴章 ほか	池淵俊一 ・ 松尾充昌 ・ 西尾克己 ・ 山根正明 ・ 中野賢治 ・ 下房俊一 ・ 伊藤康宏 ・ 要木純一 ・ 中安恵一 ・ 原 豊二 ・ 井口隆史 ・ 中間由紀子 ・ 保永辰利 ・ 中野義夫 ・ 井口憲治 ・ 工藤泰子 ・ 勝部昭 ・ 喜多村理子	伊野健太郎 ・ 森本幾子 ・ 西尾克己 ・ 山根正明 ・ 中野賢治 ・ 下房俊一 ・ 伊藤康宏 ・ 要木純一 ・ 中安恵一 ・ 原 豊二 ・ 井口隆史 ・ 中間由紀子 ・ 保永辰利 ・ 中野義夫 ・ 井口憲治 ・ 工藤泰子 ・ 勝部昭 ・ 喜多村理子	河原莊一郎 ・ 内田融 ・ 関耕平 ・ 廣瀬清志 ・ 内田和義 ・ 井口隆史 ・ 中間由紀子 ・ 保永辰利 ・ 中野義夫 ・ 井口憲治 ・ 工藤泰子 ・ 勝部昭 ・ 喜多村理子	西島太郎 ・ 安高尚毅 ・ 中野茂夫 ・ 横川真一 ・ 花谷 浩 ・ 佐々木倫明 ・ 德岡隆夫 ・ 佐々木倫明 ・ 淀江賢一郎 ・ 漢邊正巳 ・ 伊藤孝一 ・ 西島太郎 ・ 安高尚毅 ・ 中野茂夫 ・ 横川真一 ・ 花谷 浩 ・ 佐々木倫明 ・ 德岡隆夫 ・ 佐々木倫明 ・ 淀江賢一郎 ・ 漢邊正巳 ・ 伊藤孝一	西島太郎 ・ 横川真一 ・ 花谷 浩 ・ 佐々木倫明 ・ 德岡隆夫 ・ 佐々木倫明 ・ 淀江賢一郎 ・ 漢邊正巳 ・ 伊藤孝一
事務局体制	1. 市史編纂事業の事務的統括 2. 編集委員等専門研究者の支援 3. 史料収集調査、行政事務等の編集作業・出版 (市民の代表としてのチェック機能も) 4. 文化運動の推進(講座やシンポジウムなど)	専門部会員（専門委員）、執筆者合計 18 13 11 19 24 10 22 12	(松江市) 市長：松浦広明、副市長：星野芳伸 (松江市教育委員会) 教育長：清水伸夫 (歴史まちづくり部) 部長：藤原亮彦 次長：永島真吾 (史料収集課) 調査主任：小山祥子、行政事務員：梅田信子 (市民の代表としてのチェック機能も) (松江城調査研究室) 室長：山本盛治、専門官：卜部吉博、専門調査員：石塚晶子、専門調査員：北村久美子、専門調査員：佐藤義子 主任編纂官：内田文恵、専門調査員：北村久美子、専門調査員：佐藤義子 副主任編纂官：内田文恵、行政事務員：高橋真千子				

# 近世初期における松江城下町の空間的特性

—「堀尾期松江城下町絵図」の分析を通して—

大矢幸雄・渡辺理絵

## はじめに

城下町松江は、戦国時代末期から近世初期にかけて活躍した大名、堀尾氏によって建設された町である。しかしながら、城下町建設の時期やその過程について、実戦をかなり意識した城下町と言われながら（松尾2008：74）、具体的な家臣団や鉄炮隊の配置など、未だ詳細な解明には至っていない。また、寛永12年（1635）12月正月16日に京極忠高が家老多賀越中宛に送った「覚」には、「四月朔日、より八月朔日迄奥谷にて一所、外中原ニテ一所、天神橋越所ニ相究可被申扱候其外可為無用候やしきニテうち候事ハ帰国之上可申出候事」（上野富太郎・野津静一郎編1941：57）とある。つまり、奥谷、外中原、天神橋以南の地域は、京極氏の時代までに町が出来ていなかったようで、松江城下町の形成時期についても不明な点が多い。

その背景には、松江城の築城と城下町の建設を行った堀尾氏が、堀尾忠晴の死去により寛永10年（1633）に改易となってしまい、一次史料を含む多くの関係史料が消滅ないし散逸してしまったことが大きいと言われる（佐々木・福井2016：9）。

こうしたなかで、近世初期の作成とされる「堀尾期松江城下町絵図」141.0×117.0（島根大学付属図書館所蔵、以下堀尾絵図とする）（図1）の存在は、建設当初の城下町松江の特徴とともに、雑賀町を含む街区建設の経過、家臣団の人的配置構造などを明らかにする上で貴重な史料と言える。

さらに本図は、正保城絵図がつくる以前の作成である。城下絵図が豊富に残る個別城下町は少なくないが、その中でも正保城絵図以前の城下絵図が伝来する例は少ない（矢守1974：84）。たとえば米沢には藩政文書としての城下絵図が26葉残るが、その中で正保期以前のものは1葉のみである（渡辺2008：26-27）。同様のことは仙台、佐賀、高知などにも当てはまる。さらに、近世初期の城下絵図を対象とした地理学的研究となると一層限られ、最近では洲本（平井2009）のみである。

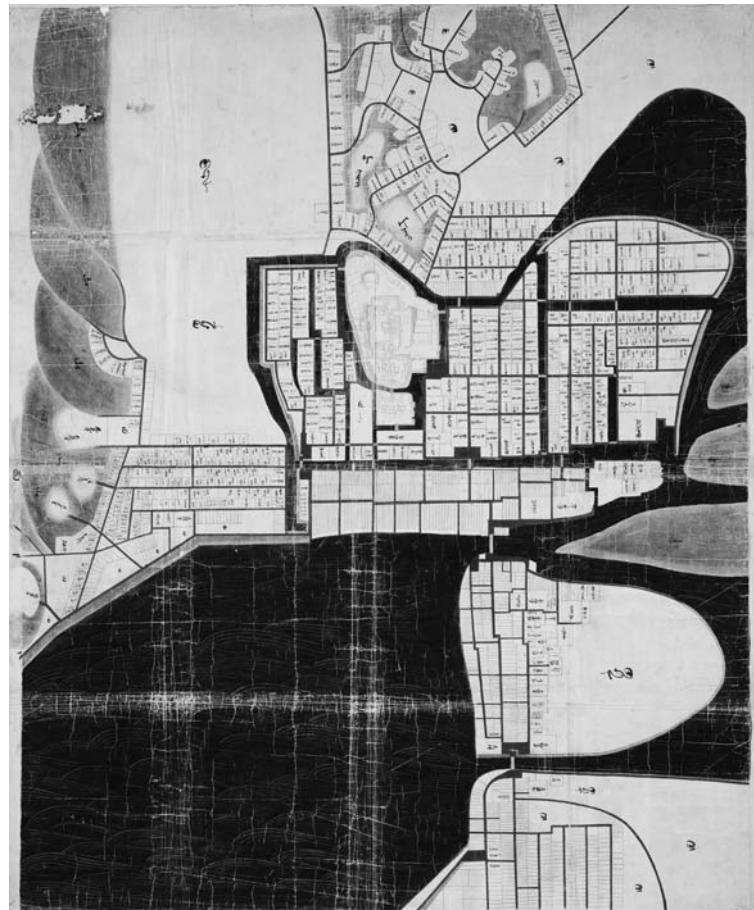


図1 「堀尾期松江城下町絵図」島根大学付属図書館蔵

すなわち、近世初期は城下町における空間構造や地図史的研究の空白部分と言えよう。

以上のこととを視野に入れ、本研究は身分社会の構造を、「人びとのつながりや小さな社会を個々の要素と見て分節的に捉え、それらの積み重ねと相互の関係によって全体が構成されている点を重視する」（吉田伸之2015：v-vi）視点を基底に置いて、家臣団の構成を細分類し、その役割と配置などを明らかにしたい。

それには、堀尾絵図の史料吟味を行うとともに、この絵図と家臣の名や禄高、地位、役職などを記した帳面（別称に分限帳、侍帳、家中帳、給帳など）を結合して基礎資料とする。さらに得られた大量のデータは、GIS（地理情報システム）分析法を用いて、近世初期の城下町松江の内部構造を多角的・科学的に明らかにしたい。

## 1 堀尾絵図の研究成果

堀尾絵図は、1980年に島根大学が東京の古地図店より購入したもので、当初は「堀尾時代松江城下図」と銘々されていたが、平成20年9月2日に現在の地図名に変更されて、島根大学付属図書館が所蔵している。

松尾寿は、『島根大学付属図書館報 松風』（1997：54）に絵図購入の経緯を述べるとともに、描写・記述内容から次のように分析している。武家屋敷に記されている氏名は「堀尾山城守給帳写」（松江市・円成寺蔵）に記載されている堀尾忠晴家臣団609名のうちの約63%にあたる382名の氏名と一致する。殿町の北端は「堀尾民部」ではなく「堀尾采女」の屋敷になっていること、堀尾采女の父堀尾民部が死去し采女が家を継いだのは元和6年（1620）であるとして、絵図の「内容年代」を元和6年（1620）から寛永16年（1633）の14年間と認定している。

「作成年代」については、「いつの時点かに描かれたか、またはそれをもとに後世の人が忠実に模写したもの」として、最終的な結論には至っていない。

さらに本図は、「松江城築城とその城下町建設が完成した慶長16年（1611）からわずか9年ないし22年しか経っていない時期の絵図であるので、近世初頭の城下町建設者のプランが良くわかる貴重な絵図である」（松尾2006：90）と述べている。

当時、島根大学付属図書館の館長であった高安は、山陰中央新報に掲載された記事のなかで、専門家の集まる学会での議論を紹介している（高安2007）。議論の内容は、「城周辺に広がる城下町の街路が、現在の松江旧市街のそれとほとんど変わらない」、「後の正保年間（1644-48年）の城下町を描いた「出雲国松江城絵図」と比べても正確すぎる」といった疑問、さらに「南の雜賀町一帯の街路や区画が、後の時代とかなり違っており、絵図の正確性との矛盾がある」などの指摘を受けた。その後、専門家の助言を得ながら紙片の放射年代を測定することとした。

測定にはサンプル量が従来法の1000分の1程度ですみ、測定値のばらつきの補正が容易にできるAMS法（加速器質量分析法）を用いた。その結果、この絵図の「和紙が作られた年代は1600年代初めの2～30年間のいつかである可能性が最も高く、それはまさに堀尾氏が松江城と城下町を建設した頃の年代と重なる」（高安2010：104）のである。この結果は、絵図の「内容年代」と「作成年代」が近いことを証明している。

さらに西島（2015：45-72）は、堀尾図は、「縦四列、横四列、計16枚の和紙を貼りあわせて料紙とし、角筆による凹線が、堀尾図には全ての部分で描かれている。角筆の凹線は墨で線を引く前の下書きとして使用された。」とその制作工程の分析を行っている。その結果、「藩主堀尾氏独自の都市計画のあり方を知ることのできる城下図」であり、「堀尾吉晴が作成した清書図（原本）そのものだと判断され

る」とも述べている。

水田（2008：75）は、「日本の町絵図は、建設された後の状況を示すもので、建設計画を示す絵図は稀である」として、堀尾絵図は「既存の城下町に一部の建設計画を書き入れた珍しい絵図」と報告している。さらに水田（2013：19）は、平成16年の堀尾図検討会（島根大学付属図書館主催）において、「宍道湖の藍色が古色然としている。白の顔料に胡粉を使用するのは17世紀前半まで」との意見があつたことを紹介しており、もし作図に使用された顔料が17世紀前半のものならば、堀尾絵図の「作成年代」は高安の分析結果とも一致することになる。

総じて水田は、堀尾絵図は「家臣の宅地割と住居の配分が終わったのちの現状を記入した町図」としながらも、雑賀町については、「絵図の描かれた時点では屋敷は存在せず、計画図が含まれた町図」とみなしている。

松尾（2008：74）は、格式や禄高の異なる家臣の配置、道路網や丁字路・鉤型路などの街区形態、寺院の巧妙な配置など城下町全体の構造を分析するなかで、城下町松江は、「実際の戦いを想定しつつ軍事面にかなり力点を置いた合理的・計画的な城下町である」と指摘している。

以上の研究成果から堀尾絵図は、近世初期、元和6年（1620）から寛永10年（1633）頃の松江城下町を描いたもので、堀尾期に作成された彩色図と推定されること。また武家の屋敷割は、城郭の位置する大橋川以北を中心に描かれ、橋南の雑賀地区は街路を表記するも計画図に近いこと。松尾は、絵図と史料「堀尾山城守給帳」を結合して重臣を中心に、その石高、屋敷地や鉄砲隊の配置状況などから城下町松江の構造分析を行っているが、内部構造の詳細な分析にまでには至っていない。西島の「堀尾吉晴が作成、清書図（原本）」の指摘については、更なる検証が必要であろう。

## 2 「堀尾古記」・「堀尾家記録」からみた「堀尾絵図」の年代

表1は、「堀尾古記」（島根県編1965：1-10）と「堀尾家記録」（島根県編1965：11-21）をもとに、堀尾絵図と堀尾期給帳の年代判定に関係すると思われる事項を年表にしたものである<sup>(1)</sup>。年表中「絵図」・「給帳」の欄は、左側に記載された人物が絵図や給帳に確認できるか否かを○×で示した。

表1 堀尾家臣団の動向

年 月		動 向	勘定（算用）								備 考
			絵図	給帳	①	絵図	給帳	②	絵図	給帳	
元和5年	1619	伊豆、源左衛門江戸御供			少兵衛			後藤吉右衛門	○	×	
元和6年	1620	3 堀尾民部果てる	×	×							采女屋敷替
元和7年	1621	9 忠晴帰城			少兵衛			後藤吉右衛門	○	×	
元和8年	1622	正月 忠晴有馬湯治			少兵衛			後藤吉右衛門	○	×	
元和9年	1623	正月 忠晴有馬湯治									
寛永元年	1624	役の衆より取小姓			少兵衛			後藤吉右衛門	○	×	
寛永2年	1625	村尾（七郎右衛門）被召放	×	×							
寛永3年	1626	5 上洛			後藤吉右衛門	○	×				
寛永4年	1627	2 松江御立			後藤吉右衛門	○	×	長谷川加兵衛	○	○	
寛永5年	1628	卯月（小嶋）伊豫果てる	×	×							隼人内あり
寛永6年	1629	2 御屋敷作事初			後藤吉右衛門	○	×	長谷川加兵衛	○	○	
寛永7年	1630	松江御立									
寛永8年	1631	6 磯部加左衛門江戸へ			長谷川加兵衛	○	○	磯部加左衛門	×	○	
寛永9年	1632	7 林喜平次9月算用に	○	○	長谷川加兵衛	○	○	林喜平次9月より	○	○	9月小嶋隼人御供
寛永10年	1633	9.20 山城忠晴御果てる			長谷川加兵衛	○	○	林喜平次	○	○	
同年	1633	9.26 松村監物切腹	○	○							

「堀尾古記」・「堀尾家記録」堀尾虎雄家蔵

堀尾絵図の「内容年代」について初めて論述したのは松尾（1997）である。松尾は、「堀尾古記」の元和6年（1620）「民部果てる」を根拠に、その子采女が家を継いだ元和6年（1620）を上限として、堀尾家改易の寛永10年（1633）までの14年間と判断した。この分析結果は、今日まで堀尾絵図の内容年代として継承されている。

念のため、松尾（1997）が着目した「民部果てる」以外についても、「堀尾古記」の記述内容と絵図の整合性を検討したい。たとえば「堀尾古記」では①寛永2年（1625）「村尾七郎右衛門被召放」、②寛永5年（1628）「小嶋伊豫果てる」、③寛永10年（1633）「松村監物切腹」が記される。

①は代官の竹林弥惣左衛門が元和四年（1618）に発生した隠岐百姓による江戸直訴事件の責任をとって「切腹」を仰付られた事件である（西郷町誌編さん委員会1975：643）。その責任をとって寛永2年（1625）村尾七郎右衛門は「被召放」（追放）された。村尾は堀尾絵図、給帳ともにその名前は見えない。

つぎに②については堀尾吉晴の甥小嶋伊豫を指している。伊豫の子は小嶋隼人である。給帳には小嶋隼人のみ「2千石、外ニ鉄炮隊20人」とあり、父の死後も堀尾一族の重鎮として小嶋家を継承したと思われる。しかし、絵図には小嶋伊豫、隼人の屋敷はなく、なぜか殿町には2ヶ所の無記名の屋敷地がある。ただし絵図の内中原町北東隅には「隼人内 古濱茂右衛門」と記した屋敷がある。武士名の頭に記載された「○○内」は、「采女内」、「小池外記内」、「大隅内」、「丹波内」、「志摩内」、「九十郎内」、「頬母内」、「隼人内」の8名で、それぞれ堀尾采女、小池外記、堀尾大隅、前田丹波、牧志摩、堀尾九十郎、堀尾頬母と推定され、「隼人内」は先述の小嶋隼人のほかには考えられない<sup>②</sup>。彼らはいずれも1000石以上の重臣であり、屋敷は小池外記の末次町東を除くと殿町に集中する。小嶋隼人の屋敷地が描かれていらない理由は定かではないが、「隼人内」に着目するならば、絵図の内容は小嶋伊豫から隼人への継嗣が済んだ寛永5年（1628）以降であると考えられる。このように想定すれば、寛永2年（1625）に「被召放」（追放）された村尾七郎右衛門が絵図にない点も調和的である。

### 3 「堀尾古記」・「堀尾家記録」からみた「堀尾期給帳」の年代

給帳（分限帳）は、家臣の軍事的配置や役方に応じて名前と知行高を記した帳簿で、そこで記載順は家臣団内部での地位を表している。堀尾期の給帳については、管見では8冊の存在を確認している<sup>③</sup>。

給帳の年代について、『島根縣史 九』（1930：91-92）では、「雲隱両国之大守堀尾帶刀先生吉晴公給帳」（田中莊次郎蔵、以下「田中本」）は「吉晴在世中のものにあらざる證なり」として、寛永元年（1624）より寛永4年（1627）に至る間に編成せられたとする。「堀尾古記」寛永元年の條「此年吟味」に「役ノ衆ヨリ御取候小性二年目ヲ自賄ニ究御知行被下衆□□□□□の記述は注目を要す」として、大坂や広島出陣などによる財政難から「自賄の制」による「藩士給祿の吟味」が行われたとする。そこから、「此財政整理の必要上より生まれたるものは則此給帳なり」として、藩財政整理の始まった寛永元年（1624）から長谷川加兵衛が勘定（算用）に就任して整理が終了した寛永4年（1627）の間にこの給帳が作成されたとする。勘定（算用）の就任が財政整理の終了とどう関連するのかは不明である。

さらに「堀尾山城守給帳」（円成寺蔵、以下「円成寺本」と呼ぶ）は、記述内容から「田中本」に「増改を加えたること明なれば」、「其時代色紙質等より推定」すれば「堀尾家断絶と共に寺納せしもの」と推定している。

「田中本」の小性佐沼刑部は「円成寺本」では佐治刑部、中嶋惣右衛門は中嶋惣左衛門、藤田源太夫は藤田孫太夫と家臣名に異文字が多数あり、こうした異文字は給帳1から5に共通して多い。他と異なる「円成寺本」の家臣名は、堀尾絵図とはほぼ一致している。

佐々木（2007：43-45）は、上記の2冊に「出雲・隱岐堀尾山城守家中給知帳」（春光院蔵、以下「春光院本」と呼ぶ）、「寛永十葵酉改 出雲隱岐両国主堀尾家給帳」（島根県立図書館蔵）を加えて比較するなかで、「春光院本」、「円成寺本」、「田中本」は「家臣の記載順や文言的にもよく似ている」として、その底本は同じと見ている。違いとしては、「春光院本」はその表紙には「寛永十暦壬酉九月日」とあり、末尾には各郡の高・在郷町の町数等を記してある。さらに家臣名の余白には堀尾氏の断絶後に仕えたと思われる大名家等の注記があるとして、「春光院本」は記載内容が充実していると判断している。

給帳の作成年代については、詳細な分析には至らず『島根縣史 九』の年代分析を紹介するに留まっているが、「春光院本」は表紙の年記から堀尾氏の改易と結びつけて考えるべきものと述べている。「春光院本」の注記事例、仕官先のアイス（会津）「加藤式部殿」は寛永20年に死去した加藤式部大輔明成であるとして、寛永15年松平直政の出雲入国以降寛永20年以前に編成された給帳とみている。さらにこの給帳は、他の給帳にない情報量からみて、現在残されている給帳のなかで最も原形に近いと推定している。

筆者は、上記以外に旧来より地元にあった「出雲隱岐両国主堀尾家給帳」（島根大学付属図書館蔵「桑原文庫」）、「出雲隱岐両国主堀尾家給帳」（野津家蔵）、「出雲先ニ国主堀尾家給帳写」（島根県立図書館蔵『消暑漫筆』所収）の3冊と、新たに入手した「堀尾期給帳」（『扶持米注文』）（東大史料編纂所蔵山路家文書、以下「山路本」と呼ぶ）の8冊を人名やその配列（小性1番目から30番目まで）を中心比較した（表2）。

表2 堀尾期給帳の内容比較

給帳名	所蔵	給知	蔵入	備考
1 「雲隱両国之大守堀尾常刀先生吉晴公給帳」	島根県立図書館蔵	18万687石9斗余	8万3481石余	旧田中荘次郎蔵、寛保3年・寛政12年・文政元年書写、追記なし、
2 「出雲隱岐両国主堀尾家給帳」但寛永10年癸酉改	島根県立図書館蔵	18万687石9斗余	8万3481石余	嘉永4年以降吉塚成保書写、追記なし、家臣名順番1と同じ
3 「出雲先ニ国主堀尾家給帳写」寛永10年癸酉改	島根県立図書館蔵『消暑漫筆』所収	18万687石9斗余	8万3481石余	寛政4年以降松原基書写、追記なし、家臣名順番1と同じ
4 「出雲隱岐両国主堀尾家給帳」但寛永10年癸酉改	島根大学付属図書館蔵「桑原文庫」	18万687石9斗余	8万3481石余	天保3年布施藏本校合、松平出羽守家来栗原寛齋源希陸、追記なし、家臣名順番1と同じ
5 「出雲隱岐両国主堀尾家給帳」但寛永10年癸酉改	野津家蔵	18万687石9斗余	8万3481石余	文化10年写、中嶋彦次朗合力、追記なし、家臣名順番1と同じ
6 「堀尾山城守給帳」	円成寺蔵	18万687石9斗余	記載なし	追記なし、家臣名1と異なる、1~5と文字の違い有り
7 「堀尾期給帳」『扶持米注文』（影写本）	東大史料編纂室蔵「山路文書」	18万950石9斗2升8合	8万3326石余	加藤式部、死など追記158人、記載順番独自
8 「出雲・隱岐堀尾山城守家中給知帳」	妙心寺派春光院蔵	18万950石9斗2升8合	8万3326石余	加藤式部など追記169人、記載順番独自

藩の総石高は、円成寺蔵を含む地元所在の給帳は共通して「高18万687石9斗余」であるのに対して、「春光院本」・「山路本」は「高18万950石9斗2升8合」、さらに仕官先などの追記が多いことから、両グループは底本の系統が異なっているように思われる。家臣名の記載順位は、給帳1から5の1番目から11番目までは一致するが、「円成寺本」とは明らかに配列が異なる。堀尾家の菩提寺に所蔵する「円成寺本」は、書写が繰り返された他の給帳と違って、むしろ原形に近く、この給帳が、後に地元を中心に書写されたのではないかと推定する。

とりわけ「山路本」は、他の給帳が知行取を中心に約600名の家臣を記しているのに対して、8冊の中で唯一、切米取、扶持方などを加えた1,100名以上の情報量をもつ給帳である。巻末には、「給知合拾八万九百五拾石九斗弐升八合、蔵入合八万三千三百弐拾六石余、切米合壹万八千四百九拾弐石六升、右内八百四石八斗 納升、扶持方合四千五百人、銀子合四拾貫六百六拾八匁 小判壹歩共ニ」と当時の松江藩の総収入が記されている。

森下（2012：13）は慶安5年（1652）萩藩の分限帳は知行取907名に加えて、さらに3倍の「扶持

方・切米遣わす者」を分析するなかで、それは「ちょうど来藩していた国目付けに提出するため、特別に記載されたもの」と推定している。「山路本」の場合も萩と同様に「特別の目的」で作成されたかも知れない。

本稿では、給帳の内容年代をさらに究めるため、原形に近いと思われる「円成寺本」と「春光院本」、情報量の多い「山路本」について勘定（算用）に焦点を絞って比較することとした。

「堀尾古記」には、寛永9年（1632）の勘定（算用）に林喜平次の氏名とともに「9月ヨリ加ル」の記述がある。前年の寛永8年（1631）の勘定（算用）は、長谷川加兵衛、磯部加左衛門であるから、次年度の9月に林喜平次が加わり3名になったと思われる。給帳「円成寺本」・「山路本」は長谷川加兵衛と林喜平次の2人が勘定（算用）で、磯部加左衛門は小性に就任し江戸滞在のようである（表1）。堀尾絵図には磯部加左衛門の名前は確認できない。「春光院本」は、長谷川加兵衛と林喜平次、磯部加左衛門の3名が勘定（算用）である。

つまり、給帳「春光院本」は、林喜平次が勘定（算用）に就任した寛永9年（1632）の給帳、他の2冊は磯部加左衛門が小性となった寛永9年（1632）から堀尾忠晴が亡くなり改易される寛永10年（1633）までの2年間に絞ることができる。いずれにしても確認できた堀尾期8冊の給帳は、堀尾氏改易直前ないし改易時の家臣の名前や禄高を原形として、その後に仕官先が追加され書写された給帳から構成される。

#### 4 堀尾絵図の雑賀町

江戸時代雑賀町は足軽の住んでいた町である。足軽は本来、戦国期の戦乱の中に生み出された労働者の性格をもつ戦闘員で、弓、鎧、鉄炮などの部隊を構成して戦闘の中核をになった。近世においても大名の軍隊にとって重要な戦闘部隊であり、城郭防衛のため城下町の要所に集団で駐屯し、足軽町を形成した。（吉田2015：9）

堀尾絵図について、「絵図の成立時期の疑問」や「計画図の疑義」が生じた原因の一つが雑賀町（東側の町）の描き方にあった。図2中、南北に伸びる6本の街路のうち、西側から2本目と3本目の中央を境に、堀尾絵図では東方の屋敷地は東西方向に長い短冊状である。その後、松平期より今日に至る屋敷地は南北方向に長い屋敷地となって、堀尾絵図とは明らかに異なる。つまり、堀尾期の雑賀町には足軽が住む屋敷があったかどうかという疑問である。

##### （1）旧雑賀町と鉄炮町の相違

雑賀町（旧雑賀町）と鉄炮町の区別がわかる史料に「松江城下武家屋敷明細帳」（広島大学付属図書館蔵、以下「屋敷明細帳」と呼称す）がある<sup>(4)</sup>。屋敷明細帳は、屋敷ごとに屋敷の規模と向き、間口、奥行がまず記され、続いて居住者の代替わり、移動などが記録されている。記載内容は、貞享期

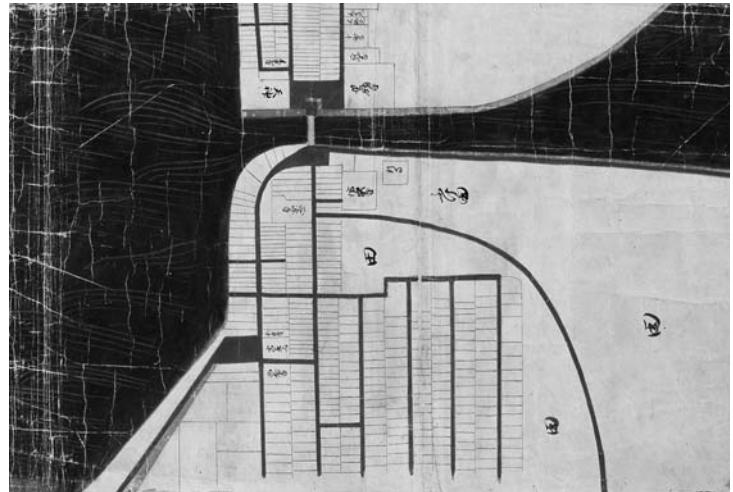


図2 鉄炮町の屋敷地拡大図

(1684–1687) から明治初期までの約二百年間で、途中延享年間を境に帳簿は前期と後期に分かれる。

現在の雑賀町については、前期は「雑賀町並山根」(7-254)、「鉄炮町・地形場」(7-389) の2冊、後期は、「雑賀町」(上・下)(7-253)、鉄炮町(智・仁・勇)(7-37)、「新鉄炮町」(7-39) の6冊からなる。この史料では、雑賀本町や横浜の一部を含む地域を「雑賀町」、その東側は「鉄炮町」と記して明確に区別されている。『意宇郡松江地誌』(松江市教育委員会編2017:984)には、「寛永ノ頃雑賀町(今ノ本町通及ヒ横浜通)鉄炮町(今ノ津田街道以南ノ地)等ノ称アリシニ後年暦不詳合セテ一町トナシ今ノ称ヲ用フト云フ」とある。つまり、寛永頃にあった雑賀町(旧雑賀町)と鉄炮町の2つの町は、後に統合されて現在の町名になったようだ、明治12年の『出雲國松江市街之圖』(国立国会図書館蔵)には、鉄炮町の名前は無く、その場所は現在の名称である「雑賀町」と記載されている。

「雲陽大数録」には「寛永十五戊寅の頃までハ、春日村田原谷・国屋村舍人坂の所に足軽町有之と古書に見へたり、京極氏古図にも、右両所のも大分の人家有之、正説と見へたり、殊此絵図鉄炮町山根へ五町つきつめな(た)り、両所の足軽今之鉄炮町へ移ると見へたり」(松江市教育委員会編2011:648)とある。

この史料から、①寛永十五年(1638)頃まで春日村田原谷(現在の奥谷町春日神社付近)・国屋村舍人坂(現在の外中原町法眼寺北付近)に足軽が住んでいた、②両所の足軽が鉄炮町へ移る、③鉄炮町山根へ五町つきつめ、(南は山根で行当り、東は五町までの範囲が鉄炮町

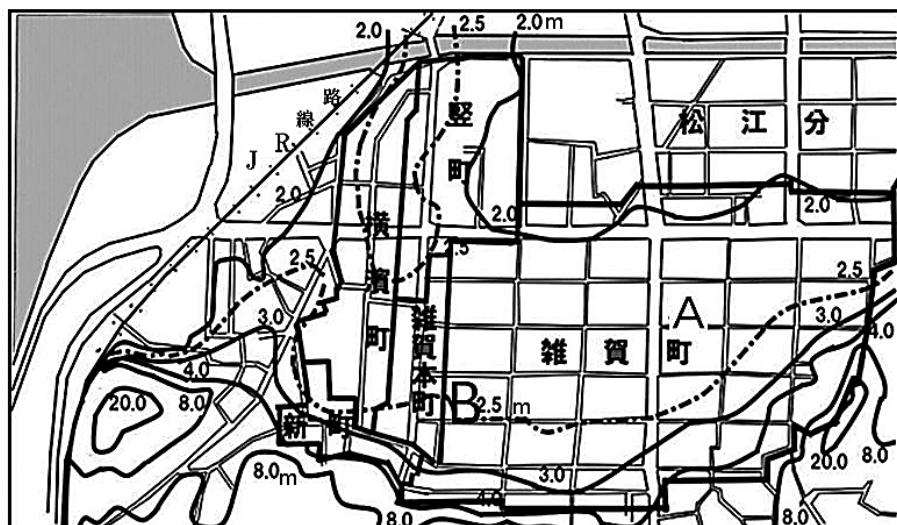


図3 現在の海拔高度と明治初期の町区画(大矢作図)

か)(雑賀郷土史編纂実行委員会編1991:43)が読み取れる。ならば、前述した京極時代の覚は、「奥谷、外中原及び天神橋以南の地域は京極氏時代までに未だ街区(ちまた)が出来上がっていなかった」(上野富太郎・野津静一郎編1941:60)ようだ、堀尾期の鉄炮町には足軽が住んでいなかったと思われる。その理由は、「今の雑賀地区を含めて一帯は沼沢地」(雑賀郷土史編纂実行委員会編1991:20)であったため、屋敷地の造成が他の場所に比較して遅れていたのではないかと推定される。

図3は、明治12年の『出雲國松江市街之圖』(国立国会図書館蔵)に現在の雑賀町の海拔高度、および町名、JR線路を重ねたものである。この図から現在の雑賀町は、南の山側から天神川方面に向かって海拔3mから2mへと低くなる地域と、海拔高度が丘陵状にやや高い西側の雑賀本町から成っていることが分かる。

雑賀町東側(鉄炮町)の開府当初の海拔高度は、A地点で約80cm(現在は2m)、B地点で130cm(現在は2m50cm)と、A地点は山側に近いB地点より約50cm低かったこと、さらに後に1m以上の盛土が行われて現在の地表面が出来ていることがわかる。年代の異なる盛土の中には、瓦片や陶磁器、赤貝・シジミなど人々の生活跡が見られる<sup>(5)</sup>。

よって鉄炮町全域が屋敷地に利用されるようになるのは、土地の高燥化が進められて住居環境が整ってからと思われる。

## (2) 絵図（堀尾期・延享期）で見る 旧雑賀町

図4は堀尾絵図と元文一延享年間（1736～1748）「松江城下絵図」（島根県立図書館蔵、以下延享絵図とする）の旧雑賀町付近について、道路、屋敷地を描いたトレース図である。道路は、堀尾絵図では南北方向に3本あり、延享絵図では西側の2本は堀尾絵図とほぼ同位置にある。

さらに2本の道路は、現在ある天神橋から南に直進する道路（古くからの主往還）とその西側を緩やかにカーブして南下す道路（現在の横浜・新町線）と一致するように思われる。つまり、堀尾絵図に描かれた旧雑賀町の主要道路は、現在でもほぼそのままの位置で供用されている。

表3は、図中の①から④の場所にある建造物などを一覧にした。これをみると、一部に寺院の名称が異なるものの、堀尾絵図に描かれた街路や寺院は現在もほぼ同じ位置にあると判断できる。

① 信楽寺は松江開府の際に富田より当地に移転し、いく度かの焼失をへて今日に至っている。

② 正源寺は、「比寺元富田にあり法喜山圓照寺と称せしを僧祐念現地に移転し、慶長十七年（1612）七月本堂竣工し、元和三年（1617）砂松正源寺と改称した。雲陽誌に「往古此邊を経塚とて砂山なりしを祐念といふ僧始て寺を建立す」とある。（上野富太郎・野津静一郎編1941：1482-1483）。僧祐念の存在については、寺宝「教如上人の御影」の裏書に「寛永三丙寅暦三月六日雲州意宇郡津田庄松江村正源寺常住持也」願主 釋祐念とあり、寛永3年（1626）にこの地に正源寺があって僧祐念が居住していたと推定される。寺宝は、元和3年（1617）に寺の開山を許された古文書とともに、現在でも正源寺に所蔵されている。

③ 屋敷割帳によると、貞享期（1684-1688）以降、明地隣の屋敷には、「鉄炮台屋屋敷」、「船着場」の記述がある。両絵図に記載されている明地は、堀尾期より広場として、さらには港の荷役の場などに利用されていたのではないかと推定される。この付近は、松平期から明治時代まで宍道湖南岸の船着場であった。

④ 西念寺、徳専寺は、雲龍山徳専寺といって豊町の徳専寺とは異なる。元は富田にて開山されたが「其の後当地に移転せしも其の年月共に不詳」（上野富太郎・野津静一郎編1941：1484）。

以上のことから、堀尾絵図に描かれた旧雑賀町付近は、堀尾絵図の作成時以前から実在した寺（信楽寺・正源寺）が描かれている。ならば前述した堀尾絵図の内容年代は「寛永5年（1628）を下る」とは

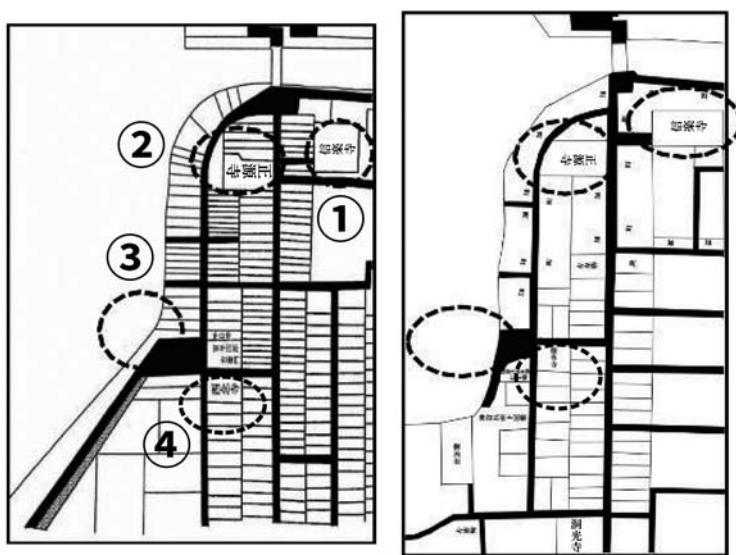


図4 堀尾期・延享期の雑賀本町

表3 屋敷地の比較

	堀尾図	延享図	現在
①	信楽寺	信楽寺	信楽寺
②	正源寺	正源寺	正源寺
③	明地	明地・舟着場	民家
④	西念寺	徳専寺	徳専寺

矛盾はしない。

## 5 GIS城下町マップによる城下町松江の分析

### (1) 「堀尾期松江城下町絵図」のGIS化とデータ作成

堀尾絵図は、道路を赤で、丘陵・山・土手を緑で、宍道湖や堀の水系は紺で彩色した繊細美麗の手書き絵図である。絵図の法量は、東西117.0cm、南北141.0cmの長方形で、現在の松江城下の東西2.8km、南北3.1kmの範囲を描いてある。

GIS城下町マップとは、城下絵図に描かれた情報をGIS（地理情報）上で電子化したもの指す。GISを用いる理由は、「屋敷の位置を経緯度によってあらわすことで、現在の都市域との照合が容易になる」、「他の空間情報（例：標高）との関連性を見る点でも有利」、「屋敷に関連する様々な付帯情報をデータベース化し、この屋敷の属性値として関連付けることが可能になる」（渡辺・大矢2017：3）などである。本研究では、電子化の方法にGIS（Arc Map10.2.2）ソフトを用いて、古地図である松江城下絵図と現代の国土基本図（1/5000：1962年発行）を重ね合わせることで新たな知見を得ることとした。

1962年発行の国土基本図は、高度経済成長期以前の古い松江の市街地が描かれているため城下町絵図との結合が容易である。その場合、投影座標系は古い地図に対応する「日本測地系（Tokyo）」を選びこれをベースマップとした。そして、松江城下絵図と国土基本図を重ねて、街路の交差点、橋と道路の合流点、寺社境内の境界など同一地点と思われる215の地点（コントロールポイント）を結合して位置補正（ジオレファレンス）を行った。変換の1次多項式RMSエラーはForward：80.249と、松江城下絵図と実際の距離との差が平均して約80mであること、この絵図が実測図ではないことを示している。

城下町絵図に書かれた武家屋敷、寺社、町屋（街区ごとに集計）などの土地区画は、パソコン上で多角形（ポリゴン）を描いてデータを取り込む基礎区画とした。さらに、全てのポリゴンにIP番号とは別に通し番号（仮想の番地）を設けることによって、時代の異なる絵図・地図の屋敷地を管理する基礎的番号とした。

その場合、以下のようなフレームワークを設けた。

- ① 江戸時代のほぼ中間的な時期である、「(延享年間) 松江城下絵図」（島根県立図書館蔵）に描かれている屋敷地を、現在確認されている松江城下町絵図の基本図に位置付ける。
- ② 番号は、4桁の数字を単位として、殿町・母衣町を1000番台、内中原町を2000番台、以下北堀・石橋町3000、奥谷町4000、南田町5000、北田町6000、外中原町7000、末次・白潟を一括8000とし雑賀町に9000番台を充てる。
- ③ 延享年間の既存の屋敷地が分割された場合、新たに屋敷地が出来た場合などを想定して、屋敷地の番号は100番台（100から999）を振り分けることで、多様な変化に対応できる手法をとった。

堀尾期松江城下図では、総ポリゴン数946、それより明地189、寺社・施設など56、町人地（街区ごと）49、水田21を差し引くと、人名記載の屋敷地が635となる。次に、この635の人名について、「堀尾期給帳」（「山路本」）に記載された人物と照合し、完全に一致した場合のみ、格式、禄高、御役、鉄炮隊の有無などを給帳より基礎的データとして入手した。「右⇒左、次⇒治、少⇒庄」など一字違いの人物でも同一人物とはせず、さらに「堀尾山城守給帳」（「円成寺本」）と照合して一致した場合のみ基礎データに含めた。

その結果、人名記載のポリゴン数635の内、一致した知行取379名に切米取21名、与力19名を加えると419の人名（禄高は与力を除く400名）が給帳と照合でき、堀尾絵図の65.9%の人物が確認できたこと

になる。絵図に家臣名があって給帳と結合できない人物は、留守居とか一門組の番士、江戸・京詰などの役にあって城下内に屋敷をもっていない家臣、代替わりに遭遇した家臣（苗字が一致しても名前が異なる）、与力、切米取や扶持米取の下級武士や奉公人たちと思われる。

絵図と給帳の人名を結合しようとする場合、それぞれの記載内容年代が近いほど一致率が高い。（渡辺・大矢：2017：4）堀尾絵図と給帳「山路本」との一致率65.9%は、両者の内容年代が非常に近いか、一部重なるかも知れない。

## (2) 家臣団の構成と格式

戦国末期から藩政初期においては、家臣団の身分序列は軍事編成に順応していた。具体的には家臣団は「家老を筆頭に中核としての馬廻や、藩主に近侍する手廻などといった馬上の武士、あるいは徒歩クラスのものがあり、さらにその下には鉄炮・弓を扱う足軽や、中間などの奉公人クラスを多数抱えている。一覧表にすればどの藩でも同じような図柄となるであろう」（森下2012：10）と言われる。

堀尾期の家臣団を給帳「山路本」を中心にみると（表4）、625名の侍士が藩主の直臣である小性・小児性を筆頭に、伽之衆・医者、歩行、馬廻・馬巡、大番組（一門が番頭をつとめる組について、『松江市誌』（1941：46）では大番組、『島根懸史九』（1930：100）では鉄砲組としており、ここでは大番組と仮称する）、先手組（『松江市誌』1941：46）は「弓鉄炮之先手組」としているのでこれを使用する）、留守居などの組に属している。

表4 家臣団の構成

	組 数	知行取人数	総石高	切米取人数	総石高	与力人数	備 考
小性・小児性		79	19,750	25	350		
伽之衆・医者		8	1,600				
歩 行	6	12	685	123	1,722		
馬廻・馬巡	4	80	27,390			37	&鉄炮49
(大番組)	13	296	83,700	#254	2,604	289	&鉄炮355
(先 手)	21	26	18,620	#516	5,009		鉄炮350、伊賀・雜賀80、弓41、のぼり49
勘 定		5	910				
留守居		72	5,243	97	1,201		
鷹 師		3	230				
式百石房(後家)		5	360				
坊主頭		5	200	33	340		
料理人				19	176		
細 工		13	1,458	33	430		
大 工		8	333	51	282		
道 具		1	35	76	503		
そくり取		1	23	16	92		
馬 取				45	310		
水 手				61	381		
尾小人四組		8	528	396	2,225		
早 道				98	545		
門 番		3	68	15	113		
下 男				22	120		
女房達				17	154		銀子
*その他		—	20,214	139	328		
合 計		625	181,347	2,036	16,885	326	
給帳巻末記載	給知 蔵入	180,950石 83,326石	切米 扶持方	18,492石 4,500人			*その他、京・江戸・隠岐・寺社など #一部推計値あり &先手組と重複か ☆各組の扶持方数は省略した

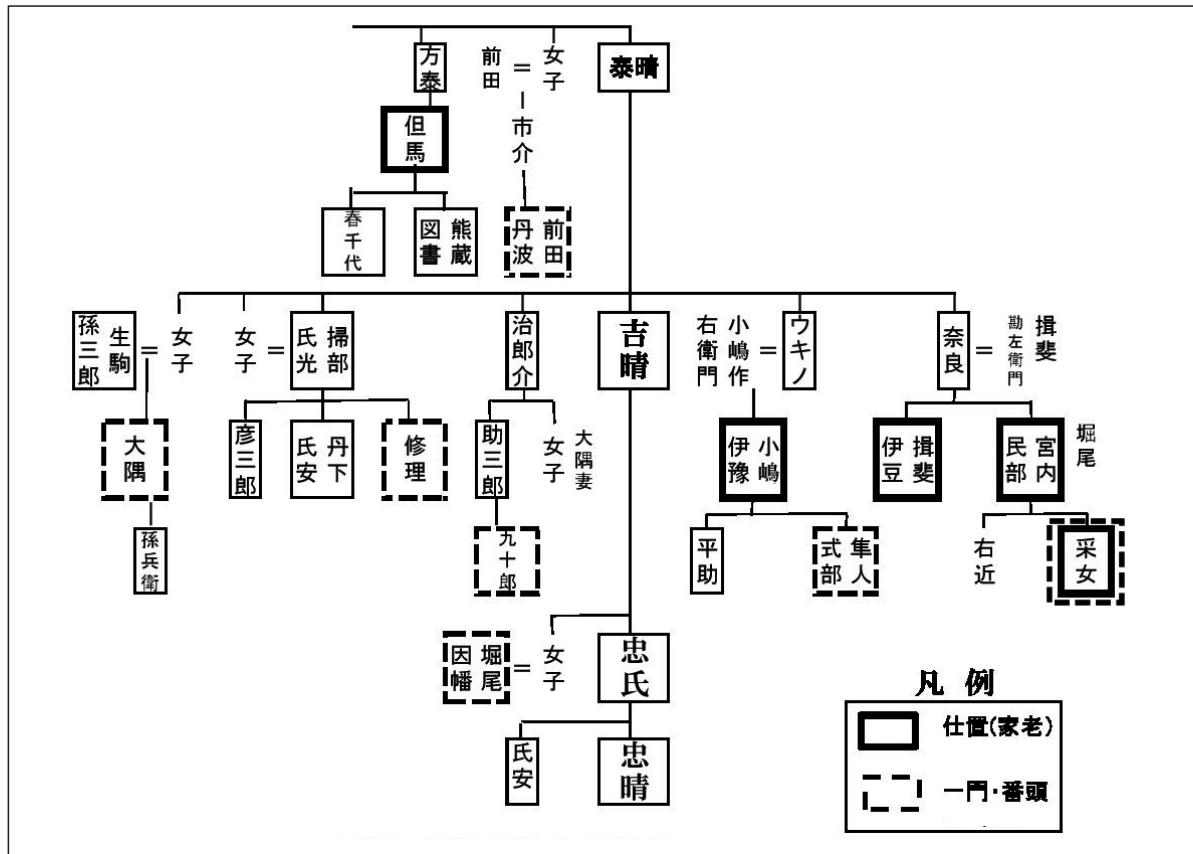


図5 堀尾家の系図（『堀尾家略系図』亀山市歴史博物館蔵より作成）

小性・小児性組は、配下に徒歩6組を従えて藩主の御側役を務め戦時には軍役に従う。寛永10年（1633）5月20日堀尾忠晴（山城）逝去の際には、小性・小児性組の組頭である松村監物は藩主への忠誠心から切腹を遂げている。

馬廻・馬巡組は、堀尾丹下（家）、堀尾孫兵衛、生駒十太郎、松田忠兵衛の堀尾一門または側近4家が番頭として、配下には知行取80名、与力37名を従える。侍士の平均禄高が342石と高く、本陣の警固や藩主の親衛隊を勤める。

大番組は、堀尾九十郎（1000石）、堀尾修理（6500石）や堀尾因幡（4900石）、堀尾采女（4000石）、堀尾左兵衛（2500石）、堀尾大隅（2120石）、小嶋隼人（2000石）など堀尾家一門（図5）<sup>(6)</sup>を番頭として、知行取296名（全体の47%を占める）、総石高83,700石と禄高及び人数共に多い。1組の平均人員構成は65人で、その内訳は知行取23人、切米取20人、与力22人である。

番頭の筆頭に記載されている堀尾九十郎（1000石）、さらに神保清十郎（2000石）、中嶋次太夫（1700石）、下方又之丞（1000石）などの組は、鉄炮20人程度を配下にもちながら、下級組士の数は他の組の半分以下であるためか「各給帳に見ゆれども其職掌明ならず」（島根県史編纂掛編1930：105）との指摘がある。ならば、この組の筆頭は仕置役格でもある堀尾修理であると思われる。組数は堀尾九十郎を加えて13組とした。

先手組は、仕置役揖斐伊豆を加えて21組とした。各組は1ないし2名の侍士が物頭となり、配下に20人から40名の足軽を抱え、鉄炮・弓・槍などで戦う専門的な戦力である。物頭を統括する隊長は、「山路本」では堀尾但馬（3000石）とその子堀尾熊蔵（300石）、堀尾春千代（100石）であるが、「春光院本」や「円成本」では、堀尾但馬の前に「揖斐伊豆（3000石）外伊賀（鉄炮）四十人」とある。組の末

尾には先手組の総禄高19,020石と記されており、組士の累積石高に揖斐伊豆の3000石を加えると両者の差が400石とほぼ等しくなる。給帳「山路本」は揖斐伊豆の名前は何らかの理由で欠落しているよう、堀尾但馬とともに先手組の隊長格として雑賀者、伊賀者各40名を配下にもつと判断した。両者は、数度にわたって仕置を務め、屋敷地は松江城東側の堀尾一門が集中する一画にある。

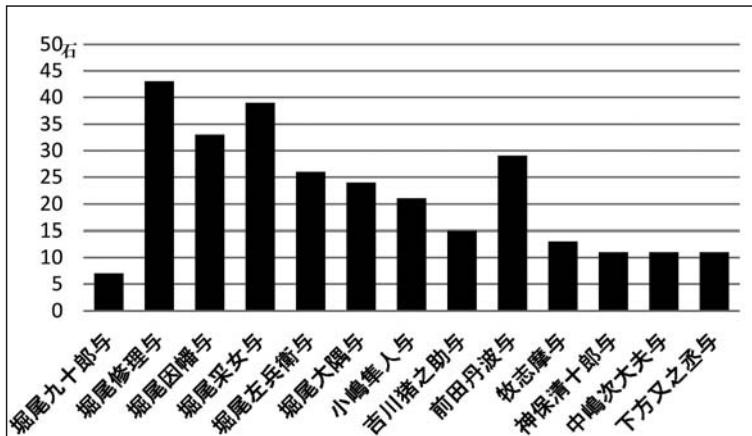


図6 大番組組士の人数

#### (1) 軍役を支える「大番組」と「先手組」の配置と役割

給帳「山路本」には、知行取を主体とする大番組と切米取・扶持方を主体とする先手組が堀尾家臣団の中核を成している。大番組は、萩藩では大組（森下徹2007：209）、広島藩では馬廻り組（土井作治2015：93）と呼ばれる。ここでGIS分析の特性の一つである「屋敷に関連する様々な付帯情報をデータベース化」を生かして、中核的家臣団の配置構造を把握することとする。

大番組の構成は、総禄高は2千石から1万4千石、抱える知行取は7名から43名といずれも差が大きい（図6）。特に堀尾修理組は組士43名、総禄高1万3千920石を抱え、堀尾因幡組、堀尾采女組とともに、堀尾一族を代表する仕置役格の家臣である。

各軍団の詳細な配置を見るため、大番組は知行取と与力数を合せてほぼ30名以上の9組（番頭と組士）、先手組は物頭20名、隊長格の揖斐伊豆、堀尾但馬と彼らが抱える伊賀者、それぞれの屋敷地を図



図7 大番組・先手組の屋敷

示した（図7）。

大番組番頭の屋敷は、堀尾修理と屋敷地不明の小嶋隼人以外はいずれも殿町にあり、付近には同組の次席と思われる家臣が番頭の隣りかその近くに屋敷地を拝領している。組士の屋敷は、北田町、南田町、北堀町に集中しており、城下町東方の防衛を意識した配置のように思われる。さらに番頭と組士の配置を詳細に比較すると、堀尾修理組は武家地全域に分散しているのに対して、堀尾采女組は北堀町、堀尾左兵衛組は南田町と北田町のように、組によって各町への配置に偏りが伺える。堀尾采女組や堀尾大隅組にいたっては、番方の屋敷付近に組士とともに与力なども住み、さらに下屋敷もあることから、その地域一体が組屋敷の感じ

がする。

天和2年（1681）の分限帳と絵図を結合した萩藩では、「大組の1つ増田九左衛門組大組8組全体としてみれば、各組入り乱れて市中全域に散在していた」（森下2007：218）と言われるが、松江城下の場合は、地縁的な同属性が重視されているように思われる。

外中原町清光院下には「伊賀○○」ないし「いが○○」と名のついた伊賀者の屋敷が29ヶ所ある。堀尾給帳にも「伊賀」の記述があることから、城下西方の守りを伊賀者で固めていたと思われる。絵図に描かれた伊賀者は、関ヶ原の戦いから約30年を経過しており、その動向については不明である。

一方、先手組は、伊賀鉄炮組、雑賀鉄炮組を従える揖斐伊豆（3000石）または堀尾但馬（3000石）を含めて21組から成る。物頭は、久徳内膳（1200石）、山田角太夫（500石）をはじめ500石前後の高い禄高で、足軽500人余りを抱える軍團である。（図8）。1組当たりの人数は、知行取1人に切米取約20人から30人の構成で、鉄炮や弓・のぼりなどの武具を所持している。

物頭の配置は、畠久右衛門（800石）は京橋川と四十間堀の合流点、木戸十条坊（800石）は京橋川北詰の勢溜横、田中幸兵衛（500石）は米子川と京橋川の合流地点、山田角太夫（500石）は北田町東の北田川出口付近、さらに与力を配下に持つ小池外記（1000石）は末次町の御茶屋屋敷西隣に位置して、大橋川から京橋川入口付近を監視しているように思われる。いずれにしても、先手組の実戦部隊を差配する物頭の屋敷地は、大番組の番頭の屋敷地と比較して、一層軍事上の要衝に配置されているように思われる。

以上、橋北地区の軍團構成員の配置状況からは、家臣団の隊長をトップに階層的な軍團を構成とともに、城下の特性を熟知した上で機能的・実戦的に対応できるような人的配置を行っているといえる。

都市構造においても、複雑な丁字路・鉤型路、寺院の巧妙な配置などから「実戦を想定しつつ軍事面にかなり力点を置いた合理的・計画的な城下町である」（松尾2008：74）と指摘するように、堀尾絵図からは戦国の世の特徴を多々認めることができる。こうした橋北地区の軍事的特色をみると、開府より約30年経た城下町南部、とりわけ主要往還のある雑賀方面に橋南地区を守る一定の軍團が配置されてい

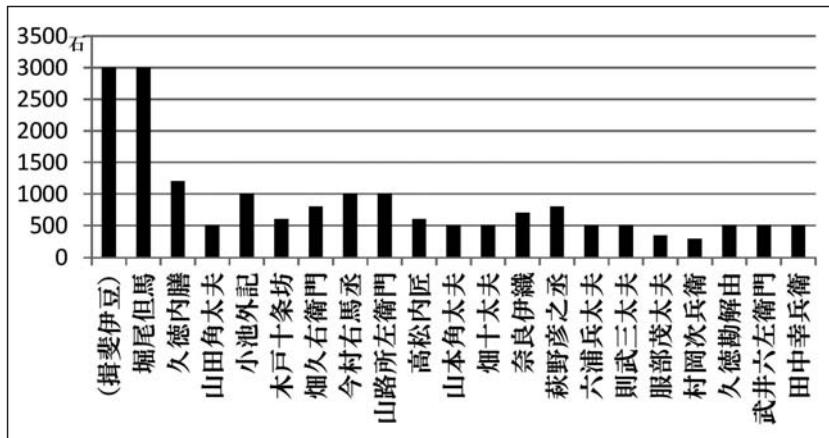


図8 先手組 隊長・物頭の禄高

たと判断したい。

## (2) 諸役と施設の配置

家臣団のトップには家老格の仕置「其の人数2人乃至3人にて在職年数には定りなし」（島根県史編纂掛編1930：93）がおり、寛永期には堀尾但馬、堀尾采女、揖斐伊豆、村尾七郎右衛門らが就任していた。

平士を給帳「山路本」から列記すると、小性、伽之衆・医者、小児性、歩行、勘定方（算用）、留守居、鷹師、坊主、料理人、細工人、大工、馬取、水手、尾小人、早道、門番などと続く。小性組は補佐役の小児性、医者、歩衆とともに、藩主に近侍して職務・生活支援などに務める。勘定方は藩の徵税や出納役、留守居組は参勤交代が始まる以前は常に在国していたようであるが、職務の詳細については不明である。こうした平士は、多くの切米取・扶持方である下級武士や奉公人によって支えられていた。小性組の組頭松村監物は殿町三の丸東出口付近に屋敷地をもち、組士は殿町から内中原町を中心にかなり広範囲に配置されていることが分かる（図9）。その配下である歩衆頭の富山六兵衛、荒木武右衛門、細田徳左衛門の3人は外中原町に隣合せに屋敷地が有り、この一帯に多数の切米取・扶持取の徒衆が住んでいたと推定する。

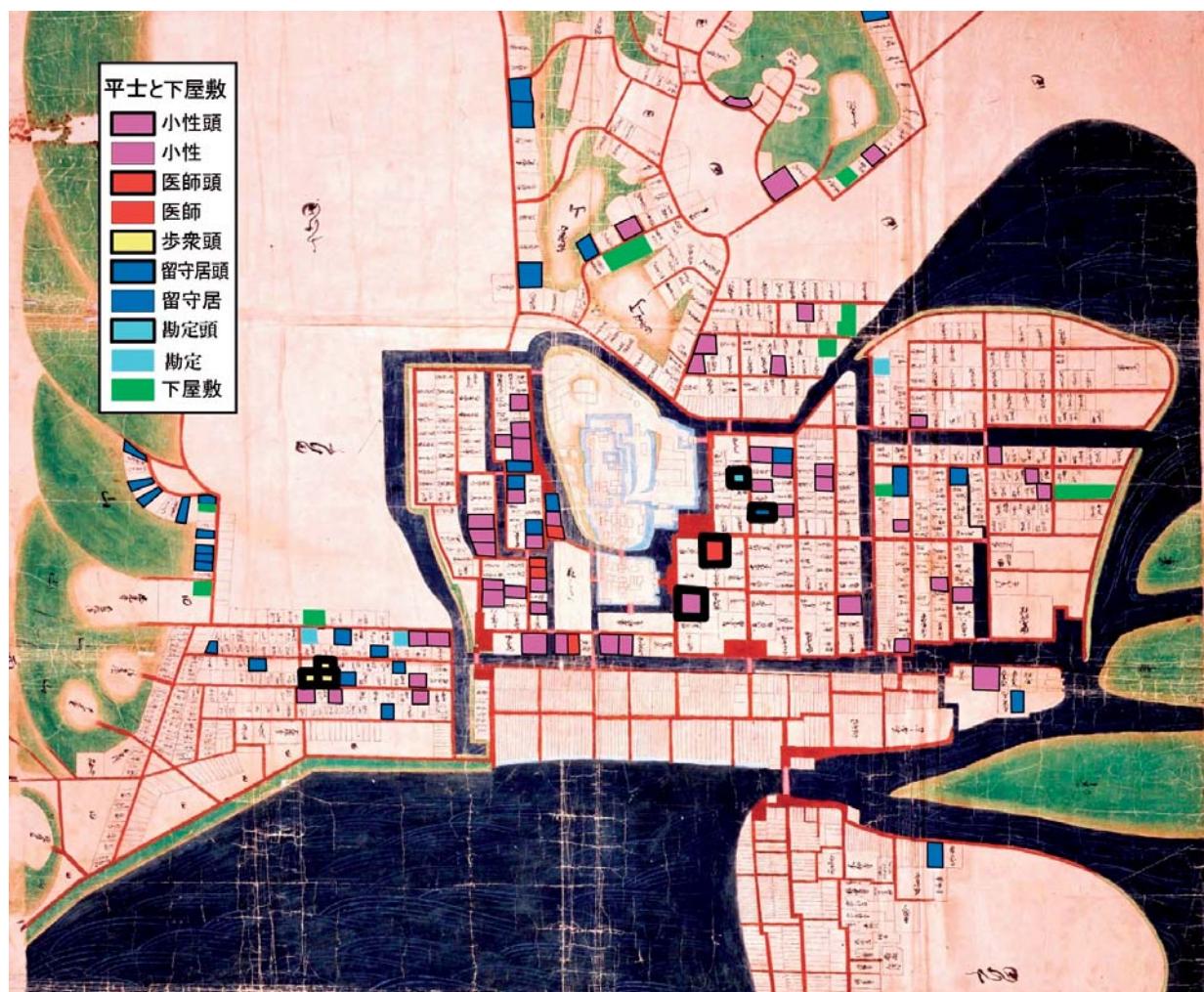


図9 平士の屋敷と下屋敷

給帳の順番では小性組の次に医者が並ぶ。その頭は400石取の立入寿斎で、屋敷地が松江城に面した大手前通、他の医者も三の丸西に屋敷地があり、いずれも藩主直属の側醫たちと思われる。戦乱の世の医者は家臣団のなかでも重鎮に匹敵する地位にあったと思われる。

留守居は給帳では、72名の侍士の内17名が100石から300石取の組士で、76.3%は100石以下の下級武士である。配下には、約100名の切米取・扶持方がおり、その配置は、外中原町の舎人坂（法眼寺）付近、北堀町西原・奥谷町赤崎などの往還沿い、白潟地区の和多見東、南田町船屋南の大橋川沿などに屋敷があり、城下の警護役ではないかと推察される。その他、「尾小人」は城下内外の清掃や普請を担い、「水手」は御用船の船乗りとして松江藩の役務を担っていたと思われる。

一方、諸施設の配置について一覧を示した（表5）。堀尾期の下屋敷は堀尾但馬、揖斐伊豆、堀尾大隅、松村監物、堀尾因幡の堀尾一門の重鎮とともに、9名が拝領している。一門以外には、医者頭の寿斎、先手組物頭の則武三太夫のほか組士では前田十左衛門（300石）と畠田利（理）兵衛（260石）がいる。前田十左衛門は先手組、畠田利（理）兵衛は留守居組のいずれも次席で、何らかの功績により下屋敷を拝領したと思われる。

下屋敷は、北堀町に2軒、奥谷町に2軒、南田町に2軒、外中原町に3軒ある。諸施設のうち、「馬屋、鷹部屋、花はたけ、船屋」については、面積の変動はありつつも松平期以降も引き続き同様の利用が続いた。

堀尾絵図には、天守閣北側に位置する宇賀山の山頂付近と西側の2ヶ所に「古屋敷」と記載された比較的広い屋敷地が描かれており、城下町建設当初に設けられた施設ではないかと推定される。

このように堀尾絵図は、開府から30年後の松江城下町の都市整備状況を想起させる貴重な絵図であるといえる。

### (3) 家臣の禄高と屋敷地

江戸初期の家臣団は、いつでも臨戦態勢に移れるよう編成されて、それが家臣団の身分秩序においても重要な意味をもって、さまざまな格式で秩序づけられた。屋敷地についても、城郭との距離や正門の方向、街路の幅なども格付けにとって重要な条件の一つであったと思われる。

寛永期の給帳「山路本」には、組ごとに635名の侍士名とともに、松江藩全体の禄高の内訳が書かれている。給帳と一致した400名の家臣について禄高別の分布を図示（図10）、さらに表6では各町の分散

表5 下屋敷・施設の配置

下 屋 敷	屋敷番号	家臣名	禄 高	格 式	町 名
	3063	堀尾但馬	3000	先手組隊長	北堀町
	3083	揖斐伊豆	3000	伊賀物頭	北堀町
	4003	堀尾大隅	2120	大番組番頭	奥谷町
	4113	松村監物	2000	小性頭	奥谷町
	5031	堀尾因幡	4900	大番組番頭	南田町
	5063	前田十左衛門	300	先手組	南田町
	7090	寿 斎	400	医者頭	外中原町
	7107	畠田利(理)兵衛	200	留守居	外中原町
	7115	則武三太夫	500	大番組番頭	外中原町
施 設 一 覧	屋敷番号	施設名			町 名
	1016	馬 屋	○		殿 町
	113	藏やしき			殿 町
	1002	鷹部屋	○		殿 町
	2001	花はた	○		内中原町
	3039	古屋敷			北堀町
	160	古屋敷			奥谷町
	3028	瓦 焼			北堀町
	5004	船 屋	○		南田町
	5003	材木屋			南田町
	8076	茶屋屋敷			末次町
	245	鉄炮場			外中原町

○印：屋敷地変らず

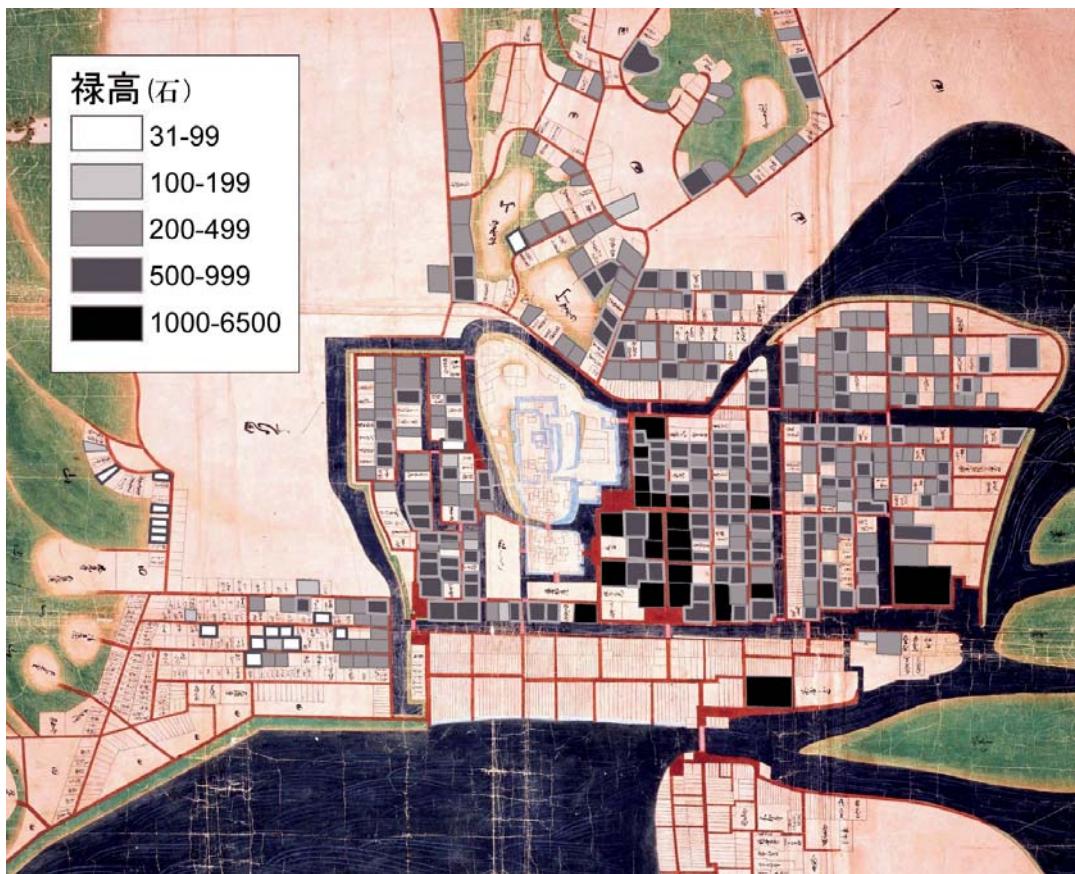


図10 家臣団の禄高別分布

度を示した。

つまり、家臣の各町の比較を通して、城下町の地域的な特性を明らかにすることを目的としている。禄高の階級区分は概ね上級・中級・下級の家臣を想定した5段階とし、千石以上の22名（全体の5.5%）は禄高の差が大きいため一括して表示した。禄高をながめると、1万石を超える大身はいないが、一方では200石から500石の中級家臣が199名（約50%）と多く、上級家臣を含めると55%になる。上・中級

表6 町別の禄高分布

禄高（石）	殿・母衣町	内中原町	北堀・石橋町	奥谷町	南田町	北田町	外中原町	白瀬・末次	合計
3000以上	5				1				6
2000	5								5
1000	10							1	11
500	20	6	2		8	1			37
400	6	1	0	1	2	2			12
300	21	11	7	1	8	4	1		53
200	10	16	26	5	27	12	1		97
100	1	24	20	15	32	30	20		142
100以下		1		1			14		16
切米取		4	1	4		1	9	2	21
合計	78	63	56	27	78	50	45	3	400
ポリゴン数	103	90	92	95	107	71	281	107	946

家臣の数は時代の下降とともに減少している。(太田和夫1972:33-34)。

上級家臣は、松江城の東側、北堀川付近より堀尾采女(4000石)、揖斐伊豆(3000石)、堀尾但馬(3000石)、神保清十郎(2000石)、前田丹波(3000石)と続き、さらに南殿町通りに牧志摩(2000石)、久徳内膳(1200石)、堀尾九十郎(1000石)、堀尾左兵衛(2500石)など殿町一帯に屋敷がある。この家臣は、代々家老や仕置役を務める人物か、大番組の隊長または番頭を務める人物で、大部分は堀尾一門とその縁戚関係にある人物と想定される。よって、殿町一帯は屋敷の約50%が500石以上の禄高取の重臣で、1000石以上では家臣の実に90%以上が殿町に住んでいることになる。

松江城下の東南、京橋川が大橋川に合流する場所には堀尾修理(6500石)の広大な屋敷がある。堀尾修理は、堀尾吉晴の弟堀尾掃部の長男で、堀尾一族の代表格として城下町東部の防衛の拠点に配置されたと推定される。

この屋敷地は、京極期には多賀家、松平期には大橋家と各時代の最高禄高を挙げる家の屋敷地であった。図10から町ごとに禄高の高い地域を眺めると、外中原町では四十間堀に接した東側、内中原町は京橋川に近い地域と内堀に面した場所、南田町は南側、北田町は南田町との間の堀川付近と、いずれも堀川ないし水路が合流する場所(位置)である。末次本町周辺の地域は、城下町松江の成立する以前に内海水運の「物流拠点」である港湾として機能し始めていたと言われる(松江市教育委員会編2016:435)。

堀尾期の四十間堀は、島根半島南側の降水が流入する場所で、開府当初は荒隈土手により宍道湖への水の流入は閉ざされていた(大矢・渡辺2015:3)。宇賀山の開削は、松江城の防衛強化や城下町の埋め立用土の供給を目的としただけではなく、城下町西部の排水路として、さらに大橋川から京橋川、北堀川、米子川、北田川を巡る水運の確保を目的としていたと思われる。

表6中のポリゴン数には、侍士や足軽、職人などのほか、寺社、明地、水田、町人地などが含まれている。それを考慮したうえで町ごとに禄高を比較すると、殿・母衣町は高禄の家臣数が突出して多く、逆に外中原町は100石以下や切米取の下級武士が多い。その他の町は、100石・200石取を中心に禄高に一定の幅がある。

ポリゴン数に対する家臣数の比率は、奥谷町28%、外中原町16%と低い。奥谷町の場合、明地39ヶ所、寺社など9ヶ所、禄高不明の人物16人などが含まれる。外中原町は「いが庄吉」「宗春」「兵久郎」など名前のみ書かれた屋敷地とともに中間、医者、僧侶など122人、さらに明地79ヶ所、寺社、水田、町人地などを含んでいるのが低率の原因である。両町は、知行取の家臣よりも切米取や奉公人などが多いと言える。

以上のことから、江戸初期の松江城下の武家地は、家臣の身分秩序に相応しい屋敷地が与えられており、殿町をトップに外中原町まで、城からの距離と立地環境に応じて一定の格付けがあったことが明らかとなった。

## ま　と　め

本研究は、近世初期の作成とされる堀尾絵図と家臣の給料表ともいえる給帳「山路本」を結合し、さらに地理情報を加えることによって、城下町内部の構造や家臣団の組織的役割にアプローチした。その結果、得られた知見はその内容から大きく2つに集約できる。1つは堀尾絵図と給帳に関すること、他方はそこから見出した近世初期の家臣団配置に関する点である。

まず、前者については絵図には武士名の頭に「○○内」と冠した人名が記載され、その中には小嶋隼人を指す「隼人内・・・」が注目された。小嶋隼人の継嗣は寛永5年(1628)のため、堀尾絵図の内容

年代は、従来の元和6年（1620）からではなく、寛永5年（1628）から同10年（1633）の間に一層狭められる可能性が示唆された。ただし、小島隼人自身の屋敷が絵図に描かれていないことへの注意は必要とする。

さらに、絵図に記載の人名は、複数の系統のある給帳の中で「円成寺本」とほぼ一致することも確認できた。これに関連して堀尾期の給帳「山路本」は、寛永9年（1632）から堀尾忠晴が亡くなる寛永10年（1633）までの2年間の記述内容と推定できた。また旧雑賀町付近には、堀尾絵図に記載のある「信楽寺」「正源寺」が絵図成立以前から、当地に実在していたことが確認された。以上の点から、堀尾図の景観年代（内容）は1630年前後と考えて矛盾は見いだせず、近世初期城下絵図としての位置づけに間違いない。

また、給帳については、新出のものをふくめた8冊についてその系統関係を検討した。「円成寺本」は原形に近いことが示唆され、後に地元を中心に筆写され広がっていったと推定される。この「円成寺本」と「春光院本」、「山路本」について比較すると、「春光院本」は寛永9年（1632）、他の2冊は寛永9年（1632）から堀尾吉晴が亡くなり改易される寛永10年（1633）までと、それぞれ年代を絞ることができた。

堀尾絵図と給帳の以上の知見を得て、堀尾絵図に記された家臣団の分析には情報量および作成年代の観点から「山路本」がもっとも適しており、堀尾絵図の65.9%の人物が「山路本」で確認できたことの意義は大きい。

つづいて家臣団の配置に関する知見をまとめる。大番組は北田町、南田町、北堀町に集中しており、組士の配置には地縁的な同属性が重視されていることが示唆された。先手組の物頭の屋敷地は、大番組の番頭の屋敷地に比べて、一層実戦を意識した場所に配置されている。御側役を仕切る小性役は城下全域に配置され、留守居や徒士、医者は各役の特性や格を考慮した屋敷配置が看取される。堀尾期に設けられた「馬屋、鷹部屋、花はたけ、船屋」については松平期に引き継がれており、こうした点からも松平期の城下町は、堀尾期に基礎を置くと言えよう。

町ごとに屋敷の充足率（ポリゴンに占める人名入り屋敷）を見ると、殿町、母衣町や内中原町、南田町、北田町のような、人工河川や宍道湖で囲繞された範囲では充足率が高く、その縁辺では空地や水田などにより値は低いという地域差が確認できた。

以上を概観すると戦乱の世を経て30年たった松江城下町は、幕藩体制の確立を目指して着実に国づくりが進行しつつあるように思われる。今後は、新たな史料の蒐集につとめて、雑賀町の街区形成や足軽の居住時期などについては更なる検証を図るとともに、「松江城下の人びとの暮らし」にまで深化・発展できることを課題としたい。

## 附記

本研究に際して、山口大学教授森下徹先生よりご助言を賜るとともに、松江市史編纂室専門調査員の福井将介氏より史料の提供を頂いた。給帳の翻刻にご支援を頂いた面谷明俊氏に厚く感謝する次第である。

## 注

- (1) 犬野真由は「堀尾家由緒書」（春光院蔵）と「堀尾家記録」（堀尾虎雄氏蔵）、「堀尾公理由書」（円成寺蔵）の記載内容について、旧臣連署の訴状、軍功、徳川氏との関係、後の書き足しの4点を比較した。その結果、記載内容はほぼ同じ内容としながらも堀尾吉晴の軍功に関する記載は、「由緒書」よりも「記録」が詳しいと述べている（松江市教育委員会編2007：22-23）。堀尾虎雄所蔵の史料は「堀尾家文書」として2点が含まれる（島根県

教育委員会1979：2)。

- (2) 「内」を付した屋敷地16ヶ所に記された武士名は、「堀尾給帳」にその名を一人も見出すことができず、有力家臣に仕える重臣与力（松尾2008：62）であると推定される。与力は、戦国期は寄子・寄騎と呼ばれ、「侍大将や足軽大将らに付けられた騎士を指す呼称」（国史大辞典編集委員会篇1993：472）であって、家臣中の有力者に預けられたものである。与力屋敷16ヶ所のうち北堀町は9ヶ所、奥谷町の南側に3ヶ所と地域的に偏りがある。
- (3) 堀尾期に関わる給帳のうち、「雲隠両国の大守堀尾帶刀先生吉晴公給帳」（田中荘次郎蔵）は、大正十年十月廿十五日島根縣史編纂に際して写した謄写本である。「出雲国隠岐両国主堀尾家給帳」（島根県立図書館蔵）は、吉塚成保が嘉永四年より堀尾期から松平期までの12冊を書写した一部である。「出雲先ニ国主堀尾家給帳写」（島根県立図書館蔵）は松江藩士松原基（まつばら・もとい）が寛政四年より作成した『消暑漫筆』全150巻に収録された史料で、巻末には北田町の蔵本を書写したとある。「出雲隠岐両国主堀尾家給帳」（島根大学付属図書館蔵）は「桑原文庫」に所蔵されている史料で、奥書には「松平出羽守家来栗原寛斎源希陸 天保三壬辰年八月以布施之蔵本校合」とある。「出雲隠岐両国主堀尾家給帳」（野津家蔵）は裏表紙に「文化十年歲在癸酉秋八月廿二日写畢 中嶋彦次郎合力」とある。
- (4) 広島大学付属図書館所蔵の『広島国税局寄贈 中国五県 土地・租税資料文庫目録 第一部』におさめられている史料で16項58冊におよぶ。
- (5) 雜賀町の発掘に関しては、松江市歴史まちづくり部・埋蔵文化財調査室調査係より試掘を含む具体的な情報等の聴取による。
- (6) 「堀尾家略系図」（亀山市歴史博物館蔵「加藤家文書」）を参考に作成した。

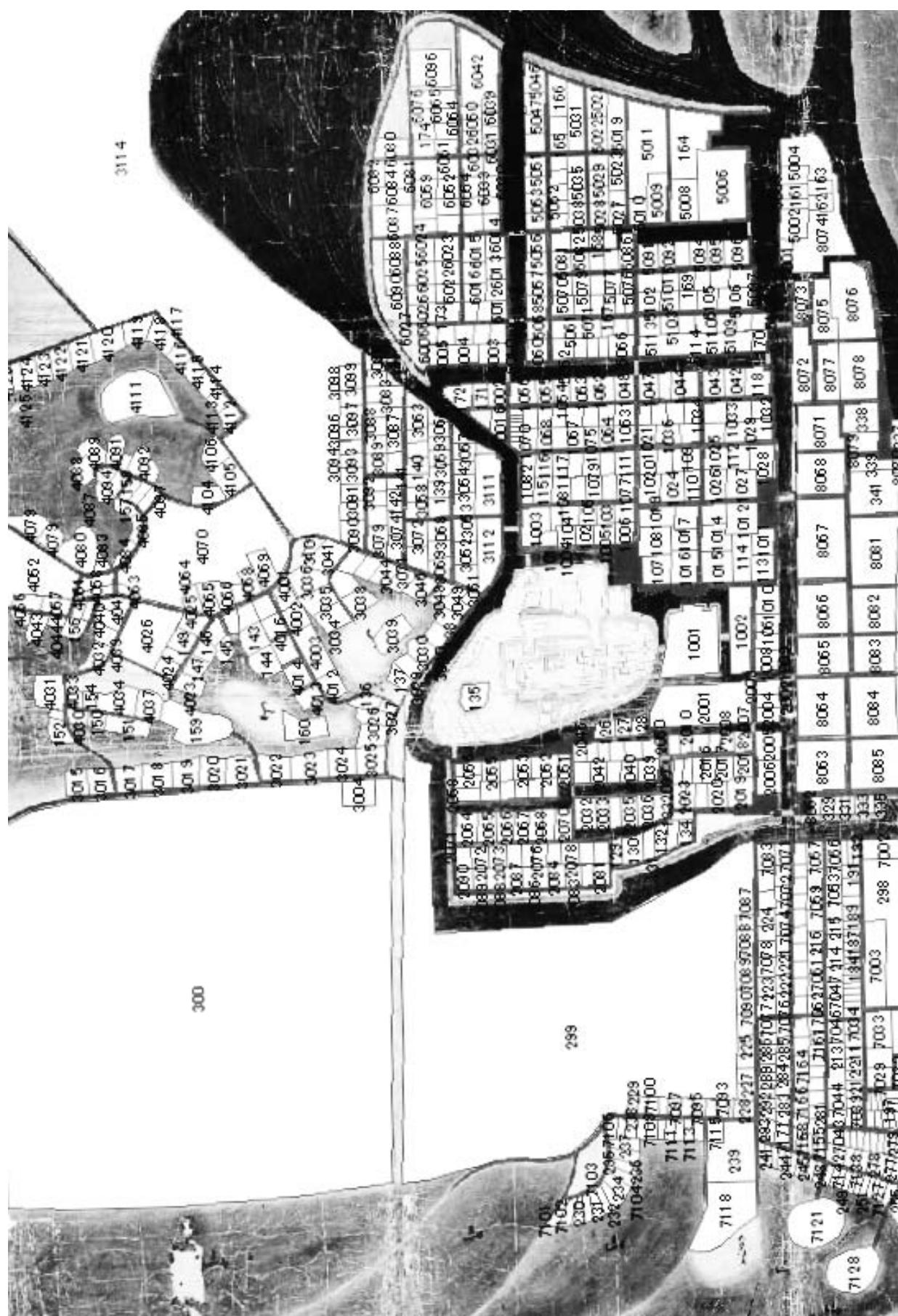
## 参考文献

- 上野富太郎・野津静一郎編（1941）『松江市誌』、松江市序刊。
- 大矢幸雄・渡辺理絵（2015）「19世紀中頃における松江・北堀町新橋の住人と空間構成」、松江市史究5号、『松江市歴史叢書7』。
- 太田和夫（1972）「松江藩の家臣団の構造」、『島根史学14』。
- 狩野真由（2007）「(三) 堀尾家由緒書」、『松江市歴史叢書I』、松江市教育委員会。
- 国史大辞典編集委員会篇（1993）『国史大辞典14』、吉川弘文館。
- 雑賀郷土史編纂実行委員会編（1991）『雑賀の今昔』、雑賀郷土史編纂実行委員会。
- 西郷町誌編さん委員会編集（1975）『西郷町誌 上巻』、西郷町役場。
- 佐々木倫朗（2007）「(四) 出雲・隠岐堀尾山城守家中給知帳」、『松江市歴史叢書I』、松江市教育委員会。
- 佐々木倫朗・福井将介（2016）「いわゆる「松江城築城物語」に関する再検討」、松江市史研究7号、『松江市歴史叢書9』。
- 島根県教育委員会（1979）『島根県古文書等所在確認調査報告書1977-1978』、島根県教育委員会。
- 島根県史編纂掛編（1930）『島根縣史九』、島根縣内務部島根縣史編纂掛。
- 島根県編（1965）「堀尾古記」、「堀尾家記録」（堀尾虎雄家蔵）、『新修島根県史 史料篇2』。
- 高安克己（2007）「堀尾期松江城下町絵図」の放射性炭素年代」、『山陰中央新報』1月23日付、11面。
- 高安克己（2010）「松江の原点「堀尾期松江城下町絵図」の年代」、松江市教育委員会編『松江市の歴史像を探る』、松江市ふるさと文庫10、松江市教育委員会。
- 土井作治（2015）『広島藩』、吉川弘文館。
- 西島太郎（2015）『松江藩の基礎的研究』—城下町の形成と京極氏・松平氏、近世史研究叢書院。
- 平井松午（2009）「近世初期城下町の成立過程と町割計画図の意義—徳島藩洲本城下町の場合—」歴史地理学51-1、1-20。
- 広島大学付属図書館 貞享期-延享期（1684-1747）「松江城下武家屋敷明細帳」、『中国五県 土地租税資料文庫』、広島大学付属図書館。
- 松江市教育委員会編（2011）「雲陽大数録」、『松江市史 史料編5 近世I』。
- 松江市教育委員会編（2016）『松江市史 通史編2 中世』。
- 松江市教育委員会編（2017）「意宇郡松江地誌」、『松江市史 史料編9 近現代I』。

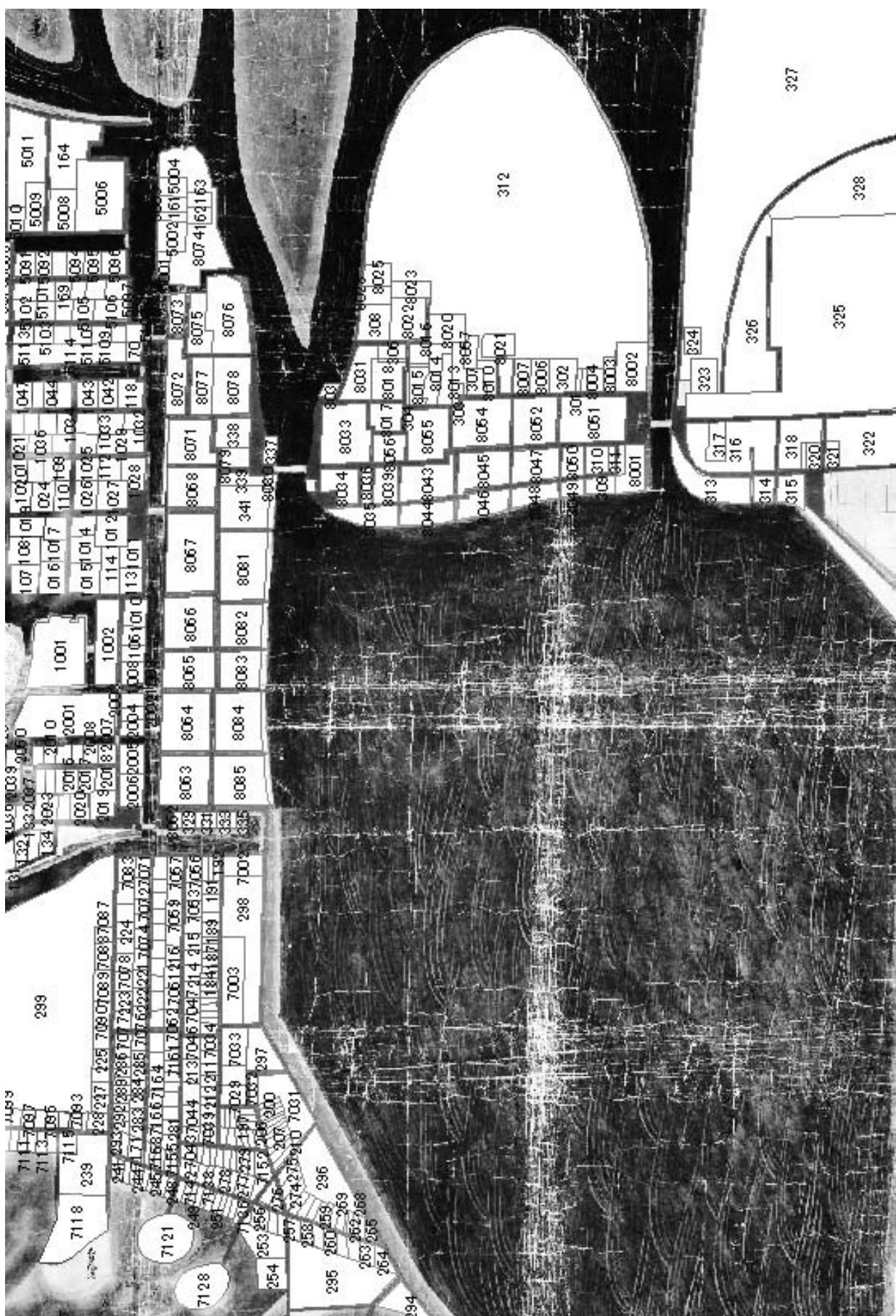
- 松尾 寿 (1997) 島根大学付属図書館蔵「堀尾時代松江城下町図」について,『島根大学付属図書館報 松風』。
- 松尾 寿 (2006) 「松江城下町絵図（堀尾期）（解説）」,『絵図の世界—出雲国・隱岐国・桑原文庫の絵図—』, 島根大学付属図書館。
- 松尾 寿 (2008) 『城下町松江の誕生と町のしくみ』, 松江市ふるさと文庫5, 松江市教育委員会。
- 水田義一 (2008) 「計画図としての城下町絵図」,『歴史地理学50-4』。
- 水田義一 (2013) 「松江城下町と城下町の建設」,『松江城研究2』。
- 森下 徹 (2007) 『武士の周縁に生きる』, 吉川弘文館。
- 森下 徹 (2012) 『武士という身分 城下町萩の大名家臣団』, 吉川弘文館。
- 矢守一彦 (1974) 『都市図の歴史－日本編－』講談社。
- 吉田伸之 (2015) 『都市－江戸に生きる』, シリーズ日本近世史④,岩波書店。
- 渡辺理絵・大矢幸雄 (2017) 「18－19世紀の松江城下における武家屋敷の流動性とその背景－歴史GISと屋敷管理史料からの分析を通して－」,『歴史地理学59-2』(通巻284号)。
- 渡辺理絵 (2008) 『近世武家地の住民と屋敷管理』大阪大学出版会。26-27

(おおやゆきお 元松江市立中央図書館長)  
(わたなべりえ 山形大学准教授)

### 資料1：橋北地区の屋敷番号



資料2：橋南地区の屋敷番号



# 松江城石垣の岩石とその原産地

新宮敦弘・澤田順弘・古川寛子・乗岡 実

## 1. はじめに

2016年4月14日と16日に、震度7を記録する地震が熊本県熊本地方を襲った。この地震によって熊本城の城壁が無残にも崩落した映像は記憶に新しい。同年10月21日午後2時過ぎ、我々が松江城の城壁調査をしているまさにその時に、緊急地震速報が流れ、城壁から離れた直後に揺れを感じた。倉吉市を中心とした鳥取県中部地震であった。松江城の城壁でも孕んでいるところが所々に見られ、大きな地震に見舞われれば崩落する危険性はある。城が地震列島日本にある限り、常にその危険性と隣り合わせであることを念頭におかなくてはならない。

2015年7月8日、松江城天守が国宝に認定された。観光客は以前にもまして増加し、週日でも賑わいを見せている。この素晴らしい文化遺産を後世に残すために、天守のみならず松江城全体についての基礎的な資料をまとめめる必要があるが、城壁についても同様である。松江城に関する資料は江戸時代から多数あるが、城壁に関しても昭和25年から30年にかけての天守大修理の報告書を初めとして、最近に至るまで多数の修理・調査報告書が出され、また論文や普及書などの数多くの資料が出版されている（松江市、1955、松江市教育委員会、1996、2001、2007、松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団、2011；松江市史編纂委員会、2018刊行予定；岡崎・飯塚、2007；松尾、2008；山根、2009；乗岡、2014、2017など）。

2018年3月出版予定の『松江市史』別編1「松江城」（松江市史編纂委員会、2018年刊行予定）において、松江城の城壁に使われている石材について先山によって報告されているが、調査された城壁が限られている。また、彼の手法は地面から1m程度の高さにある石について肉眼観察と帯磁率測定を用いて岩石種を判定していく方法である。石垣の石がランダムに配置されているのならこの方法は統計的に意味があるものであるが、石垣は人為的に作られたものであり、また創建時以降たびたび修復がなされており、それについても考慮しなくてはならない。

本研究では城壁の写真とともに松江市が平成24年から27年にかけて行った石垣の概要図とレーザーオルソ図を用いて、肉眼観察と帯磁率計測定ができる地表から高さ3～4mまでの範囲で岩石種を判定した。また、肉眼観察が可能な石垣に関しては4mよりも高い範囲の石垣の判定も試みた。岩石種の判定について帯磁率測定は有効であるが、岩石によっては磁性鉱物が偏在することもあり、異なる岩石種でも、一部では帯磁率がオーバーラップすることもあるので、岩石種の判定には肉眼観察が重要である。ただし、鑑定は非破壊で行われ、また表面が苔でおおわれていたり、著しく風化していたりしていることもあり、その場合、帯磁率を基礎に、石の形態なども参考にして判定した。

昭和25年から30年にかけて実施された松江城天守の大修理の際に、当時、島根大学の教授であった岩石学専門家の山口謙次によって天守台の岩石の調査が行われ、報告された。調査の際に採取された岩石標本と偏光顕微鏡観察用薄片（プレパラート）が松江歴史館に保存されているが、その標本も調べた。また、城壁に使われた岩石について現地に出かけ、調べるとともに、岩石の顕微鏡観察を行い、岩石の化学組成も調べたので報告する。

松江城石垣は創建以来、修理が繰り返されているが、時代の違いと岩石種の関係についても考察した。

## 2. 石垣に使われている石材とその原産地

島根県学務島根県史編纂掛編（1930）「島根県史」には「吉晴は千鳥城築造に要する石材の供給には苦心の結果宍道湖中の嫁ヶ島を初め東方半里許の川津、大井、大海崎の諸村及意宇郡矢田山より搬出せり」と書かれている。この記述がどの史料に基づくものか定かではない。我々が調査した範囲で確認できた石垣の石の種類はおそらく江戸時代に使われたと推定されるものは矢田石と大海崎石を主とし、他に森山石、花崗岩、忌部石（安山岩）である。明治以降の補修にはこれらの他に島石、中粒黒雲母花崗岩、来待石が使われているが、城壁として表立ったところには嫁ヶ島の石は見受けられなかった。

### 2-1. 松江歴史館に保存されている天守台の石

昭和25年（1950年）から昭和30年（1955年）にかけて天守台の大修理が行われ、その記録は「重要文化財松江城天守修理工事報告書」としてまとめられている。この修理時に天守台の岩石調査にあたった山口鎌次は「改修工事当局者が松江城築城に関する古記録によって石材の原産地を明らかにしようとしたが、口碑伝説はあっても正確な記録は発見できなかったことから石材の岩石学的な調査を委嘱された」と述べ、3ページにわたって天守台や石垣の石材と原産地について報告した。天守台の石垣については北側面と東側面からそれぞれ20個の試料を採取し、偏光顕微鏡（岩石顕微鏡）観察も含めて記載している。採取された岩石のうち北側面の20個の内15個が角閃石粗面玄武岩（矢田石）で、残り5個が角閃石粗面安山岩（大海崎石）、東側面では20個の内18個が矢田石で、残り2個が大海崎石とした。ただし、これらの岩石の比率は天守台城壁の岩石種の比率を表すものではないと断っている。天守台の石の記述とともに石垣の石材の原産地と考えられる嫁ヶ島のカンラン石粗面玄武岩、忌部の複輝石安山岩、大根島のカンラン石玄武岩、矢田の角閃石粗面玄武岩、大海崎の角閃石粗面安山岩、島根半島真山付近の石英角斑岩（変質した細粒の珪長質火山岩）、本庄の閃緑ヒン岩について顕微鏡記載も含めて報告している。

山口鎌次によって採取された天守台の岩石とそれらの顕微鏡観察用岩石薄片40個は松江歴史館に保存されている（図2、3）。澤田・新宮は松江歴史館の許可を得て、これらの岩石を調べ、また、偏光顕微鏡による記載を行った。天守台石垣および原産地の岩石の記載は顕微鏡観察も含めて、山口鎌次の記載が正しいことが確認されたが、以下に天守台石垣の岩石について顕微鏡写真も含めて記す。

1) 矢田石（斑状单斜輝石—普通角閃石粗面安山岩） 前述のように天守台北側面の18試料、東側面の15試料が矢田石である。緻密、堅牢な火山岩（溶岩）で、新鮮な面では暗灰色、風化すると明灰色となる。肉眼的にも照りのある黒色の普通角閃石の結晶（斑晶：大きな結晶）が目立つ岩石で、大きなものでは長さが1cmに達するものもある。また、白色ないし透明感のある斜長石も目立つ。顕微鏡で見ると斑晶として斜長石、普通角閃石、单斜輝石を含む。斜長石は柱状で、自形（結晶本来の形態）で、最大なものは長さが5mmに及ぶ。塵状の包有物を含む結晶やスponジ状結晶もある。普通角閃石は長柱状、自形で、最大の長さは3mmである。多色性（单一の偏光下で色がついている）が顕著で、明茶色ないし茶色と茶色を帯びた黄色ないし明黄色を示す。周囲をオパサイト（高温酸化など変質によってできる黒色の不透明物質で主に磁鉄鉱やチタン鉄鉱からなる）によって縁取られる結晶（オパサイト・リム）も多い。单斜輝石は短柱状、自形で、最大長は1.6mmである。石基（細粒の基質）は填間状、一部で流動組織を示し、斜長石、普通角閃石、不透明鉱物、メソスタシス（結晶の間を埋める極細粒物質）からなる。他に融食された捕獲結晶や斜長石や单斜輝石からなる細粒の岩石が含まれる。石英の捕獲結晶を含む薄片もある。緑泥石からなる杏仁状構造（火山岩の空隙を満たす物質によって充填された“あんず”状の構造）を示す部分もある。（図4）

2) 大海崎石（無斑晶質デイサイト） 前述のように天守台北側面の2試料、東側面の5試料が大海

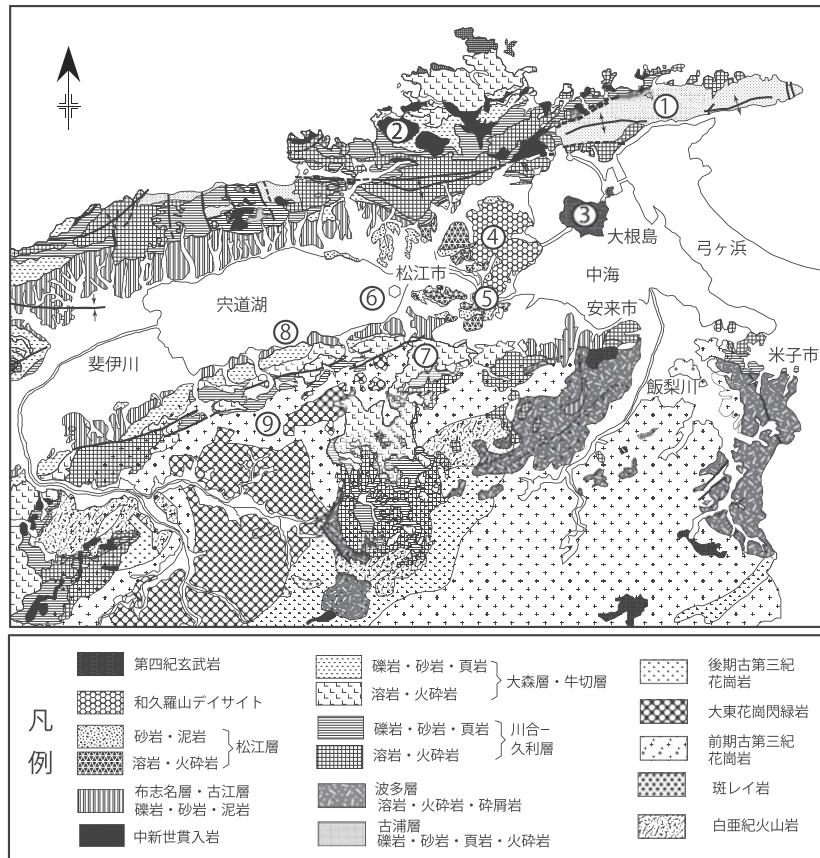


図1 松江城の石垣に関する石材の分布。

1：古浦層の分布地域。森山石（海石）の産地。2：島根半島の中期中新世貫入岩、大芦御影（閃緑岩）。3：大根島・江島の玄武岩（島石）。4：嵩山・和久羅山（大海崎石）。5：矢田石（松江層中の粗面安山岩）。6：嫁ヶ島（松江層中の玄武岩）。7：忌部安山岩（大森層中の安山岩）。8：来待石（大森層中の凝灰質砂岩）。9：忌部花崗岩（鶴花崗岩の一部）。地質図は新編島根県地質図（1997）に基づき作成。

崎石である。灰色の緻密な火山岩である。斑晶量は極めて少なく、わずかに斜長石、普通角閃石、アクチノ閃石の斑晶を含むのみである。斜長石斑晶は柱状、自形で、最大長は1.7mm。普通角閃石は針状で、最大長は1.5mmである。茶色を帯びた黄色から明黄色の多色性を示す。オパサイト化しているものやアクチノ閃石化しているものも多い。石基は流動組織を示し、拍子木状の斜長石、普通角閃石、単斜輝石（？）、不透明鉱物、メソスタシスからなる。（図4）

## 2-2. 松江城石垣の岩石記載とその原産地

以下に原産地と石の特徴について述べる。松江市周辺における石材の産地を図1に示した。

1) 矢田石 矢田周辺に分布する後期中新世、約1200万年前の松江層中に含まれる斑状の单斜輝石・普通角閃石粗面安山岩溶岩である（図8、表1）。暗灰色で、堅牢、気泡を含まない緻密な岩石である。針状の角閃石斑晶や斜長石斑晶を特徴とする。角閃石斑晶の中には長さが1cmに達するものもある。矢田石は国道9号線沿いにわずかに露出するだけであるが、大橋川の河川修復工事の際には川岸に露頭があり、また径が数10cm～1m程度の玉石も見られた。後述のように松江城の石垣には多量の矢田石が使われており、主要な産地は東光台と推定されるが、巨大な団地ができており（図5）、現在、採石現場は確認できない。石垣には角がとれた丸みを帯びた石が使われており、採石場から採取されたというより、転石が利用されたと推察される。帶磁率は一般に $10\sim20\times10^{-3}$ SIであるが、中には $5\sim10\times10^{-3}$ SI、あるいは $20\times10^{-3}$ SI以上のものもごくまれにある。岩石薄片写真を図8に示した。内容は、上述の天守

台石垣中の記載と同様である。化学組成は $\text{SiO}_2$ が56.9重量%で、火山岩の分類に使われるアルカリ元素は $\text{Na}_2\text{O}$ が4.4重量%、 $\text{K}_2\text{O}$ が2.0重量%で、粗面安山岩の領域にプロットされる（表1）。

2) 大海崎石 和久羅山から嵩山とその東方にかけて広く分布する末期中新世、およそ600万年前（川井・広岡、1966）に形成された無斑晶質デイサイトのドーム状溶岩である（図6）。灰色ないし薄いレンガ色の緻密な火山岩である。岡崎・飯塚（2007）によれば嵩山の東端部の大海崎地区には「石場」、「立岩」、「大岩」などの字があり、石切り場や採石場があったと推察される。帯磁率は $2.0 \times 10^{-3}\text{SI}$ 以下のものが多いが、 $7 \times 10^{-3}\text{SI}$ 前後のものもあり、値は矢田石とオーバーラップする。これは磁性鉱物の不均質や酸化度による違いを反映していると推定される。石垣調査においても大海崎石とも矢田石とも判定が困難なものもあるが、普通角閃石斑晶の有無（量）によって判定した。薄片写真を図8に示した。内容は、上述の天守台石垣中の記載と同様である。化学組成は $\text{SiO}_2$ が63～65重量%で、 $\text{Na}_2\text{O}$ が4.0～4.6重量%、 $\text{K}_2\text{O}$ が1.1～1.5重量%で、デイサイトの領域にプロットされる（表1）。

3) 忌部安山岩 「忌部石」という名で呼ばれる石は、地元では花崗岩・花崗閃緑岩に使う人もいるし、また安山岩に対して用いる人もある。ここでは混乱を避けるために安山岩を「忌部安山岩」と呼ぶ。花崗岩類に関しては後述する。忌部安山岩は「長黒石」とも呼ばれている。忌部安山岩は中期中新世、約1450万年前の大森層中の斑状斜方輝石・単斜輝石安山岩溶岩である。花仙山、忌部、忌部高原にかけて広く分布する。塊状で、緻密、堅牢な黒味を帯びた石で、風化すると灰色となる。斑晶として斜長石、単斜輝石、斜方輝石、不透明鉱物を含む。斜長石斑晶は柱状、自形で、時として集斑状組織を示す。単斜輝石斑晶は短柱状、自形である（図8）。斜方輝石斑晶は柱状、自形である。多くはバスタイプ（緑泥石、蛇紋石、ブルース石などの集合体）によって交代されている（図8）。忌部川河口、乃木福富町付近には忌部安山岩の転石が多くみられる。化学組成は $\text{SiO}_2$ が61.1重量%で、 $\text{Na}_2\text{O}$ が3.0重量%、 $\text{K}_2\text{O}$ が2.2重量%で、安山岩の領域にプロットされる（表1）。

4) 森山石（海石） 森山石は島根半島東部美保関町を中心に分布する前期中新世、約1900万年前の古浦層と呼ばれる礫岩や砂岩である。森山石とも海石とも呼ばれる。堆積岩であるので、大きく見ると層状であるが、中には1m以上の厚さを持つ塊状の岩石もある。美保関の海岸には、矢穴を残した小規模な石切り場が点在している（図7）。美保関町森山の航空自衛隊高尾山分屯基地に通じる道の端には大きな石切り場跡地があるが、これは近代のものであろう。

5) 忌部花崗岩 忌部付近に分布する花崗岩類に対して「忌部御影」と呼ぶ人もいるが、これには「鶴花崗岩」と「大東花崗閃緑岩」が含まれている。忌部付近の花崗岩は前期古第三紀、約6000万年前の鶴花崗岩（鹿野ほか、1991）と呼ばれる岩体の一部である（鹿野ほか、1994）。「鶴花崗岩」は松江市から出雲市にかけて広く分布しているので、ここでは忌部付近、玉湯町から大庭町にかけて分布する花崗岩を「忌部花崗岩」と呼ぶ。塊状の中～細粒の黒雲母花崗岩を主とするが、アプライト質花崗岩を伴う。忌部安山岩と同様、忌部川河口付近、乃木福富町付近に直径数10cm程度の転石が多く見られる（図30）。それらの帯磁率は中粒黒雲母花崗岩の場合は $3 \sim 8 \times 10^{-3}\text{SI}$ と高く、山陰帶の花崗岩を特徴づける磁鉄鉱系列に属するが、アプライト質花崗岩や一部の中粒黒雲母花崗岩の中には $1 \times 10^{-3}\text{SI}$ 以下で、帯磁率の上からはチタン鉄鉱系列に属するものもある。

6) 嫁ヶ島の玄武岩 中期中新世、約1200万年前の玄武岩溶岩である。床几山にも同様な玄武岩溶岩が分布する。嫁ヶ島の玄武岩は発泡した暗黒色～暗灰色の塊状岩石である。斑晶として斜長石、カンラン石、単斜輝石が含まれる。石基は間粒状組織を示し、斜長石、カンラン石、単斜輝石、不透明鉱物、メソシタシスからなる。化学組成は $\text{SiO}_2$ が49.6～50.9重量%で、 $\text{Na}_2\text{O}$ が3.3～3.9重量%、 $\text{K}_2\text{O}$ が1.4～1.5重量%で、玄武岩～粗面安山岩の領域にプロットされる（表1）。

7) 島石 大根島、江島の玄武岩で、約18万年前に陸上で噴火した溶岩である（沢田ほか、2009）。著しく発泡している。斜長石、カンラン石、単斜輝石を斑晶として含み、石基は間粒状組織を示し、斜長石、カンラン石、単斜輝石、不透明鉱物、メソスタシスからなる。化学組成は玄武岩から粗面玄武岩まで広い範囲に及ぶ（沢田ほか、2009）。

8) 来待石 来待を中心に宍道湖に沿って東西に分布する中期中新世、約1450万年前の凝灰質砂岩である。塊状で、黄土色をしている。安山岩、デイサイト、流紋岩、真珠岩、花崗岩の岩片、斜長石、石英、カリ長石、単斜輝石、普通角閃石、不透明鉱物の結晶破片、火山ガラス、および沸石や粘土鉱物などの2次鉱物から構成される（沢田、2000）。



図2 松江歴史館に保管されている昭和25年～30年の天守大修理時に採取された天守台北側面と東側面の石。

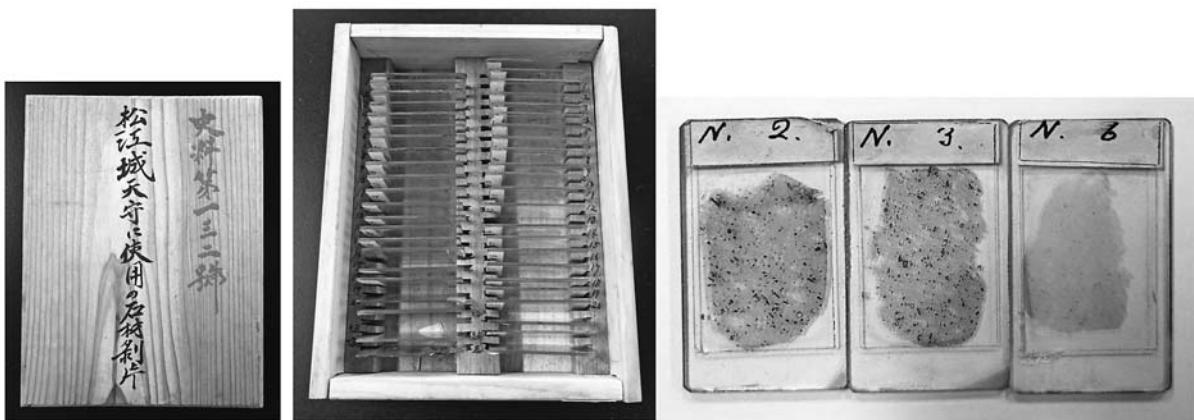


図3 松江歴史館に保管されている昭和25年～30年の天守大修理時に採取された岩石の偏光顕微鏡観察用の岩石薄片（プレパラート）。岩石薄片の大きさは4.7cm × 2.7cm。

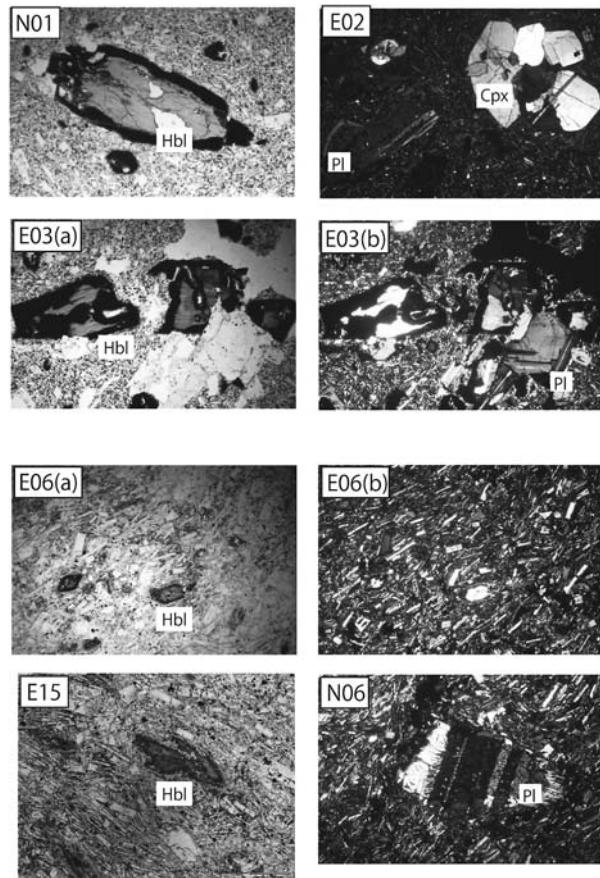


図4 天守台北側面(N)と東側面(E)の石の偏光顕微鏡写真。

横の長さは3mm。N01、E02、E03は矢田石。E06、E15、N06は大海崎石。N01、E03(a)、E06(a)、E15は単ニコル、その他は直交ニコルでの写真。鉱物の略号はPl：斜長石、Hbl：普通角閃石、Cpx：单斜輝石。



図5 ドローンを用いた東光台の全景。

手前は大橋川。撮影は株藤井基礎設計による。



図6 和久羅山東方の輝陽鉱業の大海崎石採石現場。



図7 森山石採石場跡（美保関町軽尾）（河野重範氏提供）

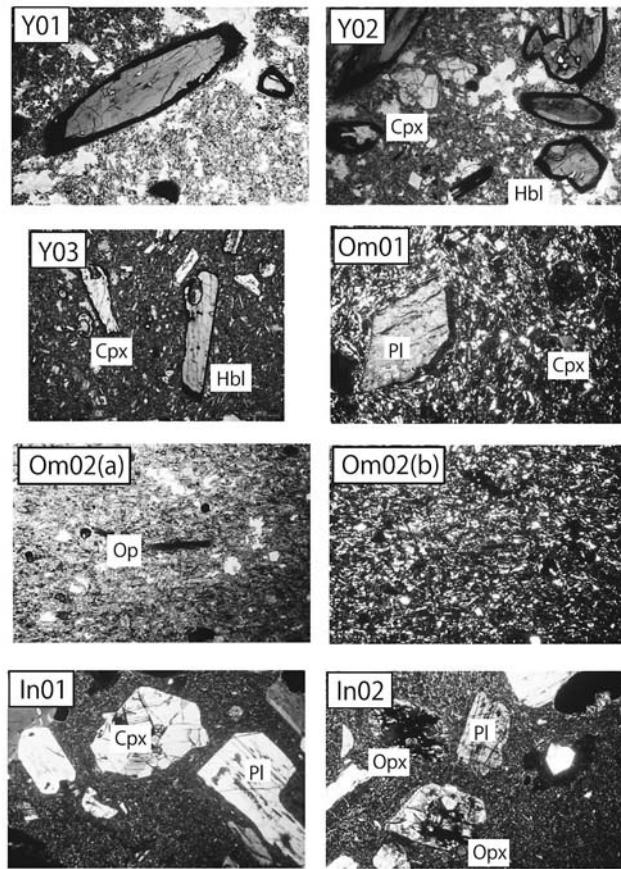


図8 松江城石垣関連岩石の偏光顕微鏡写真。

横の長さは3mm。Y01～Y03は矢田石。普通角閃石をとりまく黒色の物質はオパサイト。Om01、Om02は大海崎石。Y01、Y02、Y03、Om02(a)は単ニコル、その他は直交ニコルでの写真。In01、In02は忌部安山岩。鉱物の略号はPl：斜長石、Hbl：普通角閃石、Cpx：単斜輝石、Opx：斜方鉱石(大部分は変質している)、Op：オパサイト。

表1 石垣に使用されている岩石の原産地における化学組成

試料番号	MT12-1	MT12-3	OMS1-1	OMS-2	OMS-3	OMS-4	INB-1	OBS-1	YM-1	YM-2
岩石名	矢田石	矢田石	大海崎石	大海崎石	大海崎石	大海崎石	忌部安山岩	忌部安山岩	松江層玄武岩	松江層玄武岩
採取地点	東光台	大橋川端	和久羅山	嵩山	嵩山北	朝酌町	忌部	大庭空山	嫁ヶ島	嫁ヶ島
	やや風化		朝酌町	上宇部尾町	上本庄町	大橋川北側				
岩石種 (重量%)	斑状角閃石 粗面玄武岩質 安山岩	斑状角閃石 粗面玄武岩質 安山岩	無斑晶質 デイサイト	無斑晶質 デイサイト	無斑晶質 デイサイト	無斑晶質 デイサイト	斑状斜方輝 石・单斜輝石 安山岩	斑状斜方輝 石・单斜輝石 安山岩	カシラン石 玄武岩	カシラン石 粗面玄武岩
SiO <sub>2</sub>	55.70	56.94	64.61	65.03	63.73	63.84	61.09	58.45	50.85	49.58
TiO <sub>2</sub>	1.22	1.07	0.34	0.38	0.42	0.37	0.75	0.73	1.68	1.85
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	20.77	18.84	18.14	18.36	19.82	18.44	16.47	16.10	17.60	18.75
$\Sigma Fe_2O_3$	6.90	6.94	4.61	4.75	4.76	4.39	7.06	8.03	8.97	6.77
MnO	0.11	0.10	0.08	0.06	0.10	0.09	0.09	0.29	0.14	0.29
MgO	2.78	2.60	1.36	0.88	1.92	1.87	2.59	4.00	7.01	2.27
CaO	5.71	7.09	5.74	5.01	3.95	5.19	6.80	7.89	7.93	13.39
Na <sub>2</sub> O	3.92	4.38	4.19	4.60	4.01	4.24	3.04	2.73	3.32	3.94
K <sub>2</sub> O	1.82	1.97	1.13	1.39	1.06	1.45	2.20	1.89	1.37	1.45
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.35	0.33	0.15	0.15	0.13	0.16	0.24	0.17	0.37	0.40
Total	99.28	100.27	100.35	100.61	99.89	100.02	100.34	100.27	99.24	98.68

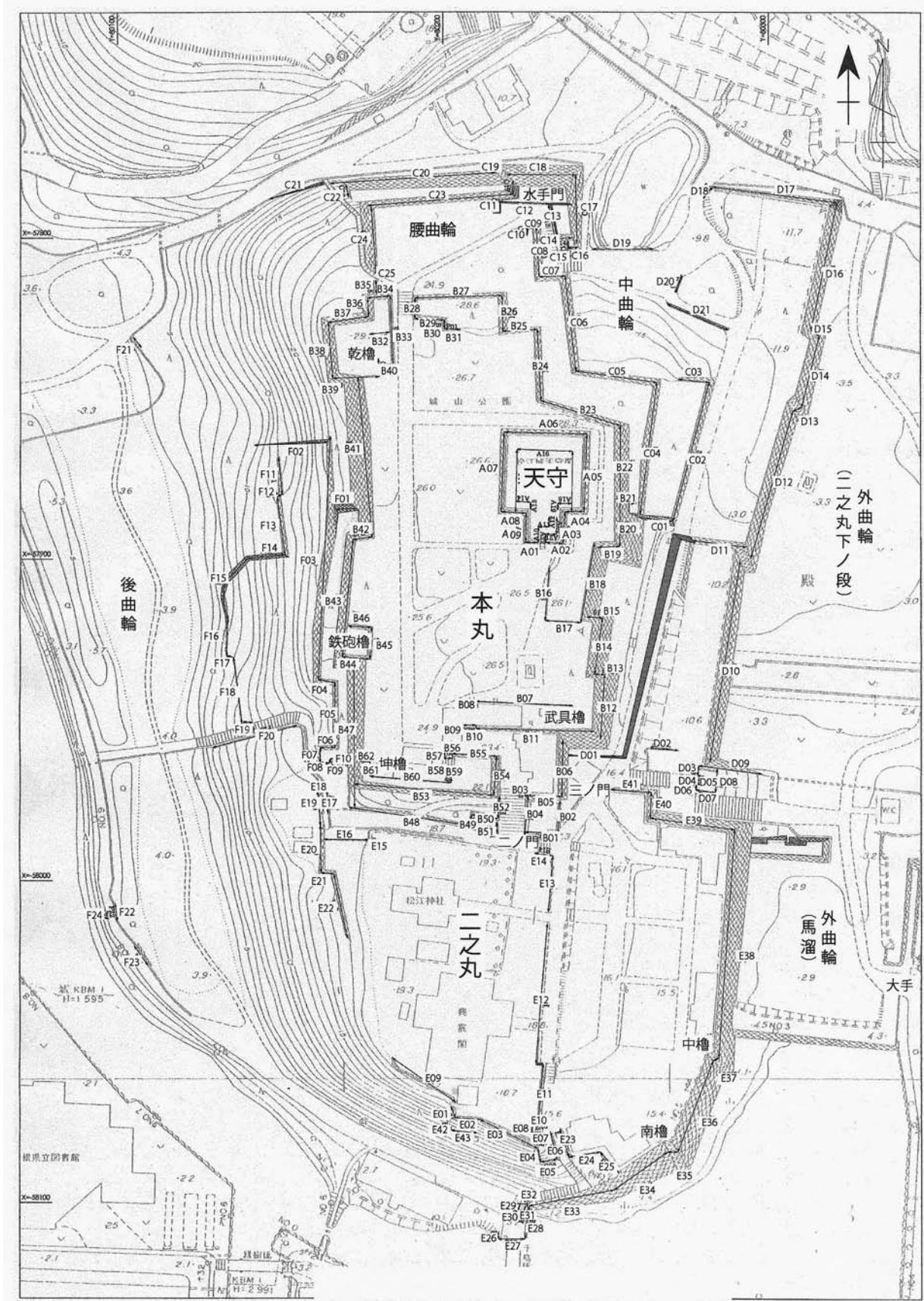


図9 松江城石垣A-Fの位置図。

### 3. 石垣の石材の判定

図9に示したA～Fのうち、崩落の危険性のある極一部（E09、E21、E22）を除く石垣について写真および平成24年～27年にかけて松江市によって実施された調査で作成された石垣の概要図とレーザーオルソ図に基づき岩石の種類を肉眼観察と帯磁率測定によって判定した。図10～13には天守台（A）についてはすべての石材の種類を示したが、紙数の関係から、他のBからFについては代表的な石垣について石の種類を識別した図を示した（図14～26）。天守台（A）に関しては高さ約3m程度のところまでは肉眼と帯磁率に基づく鑑定によって石の種類を決めた。数値は帯磁率（ $\times 10^{-3}$ SI）である。それより高い位置の岩石は双眼鏡を用いて判定した。BからFについては手の届く範囲で肉眼と帯磁率に基づく鑑定によって石の種類を決めた。

以下、A～Fの石垣の石について特徴を記載する。石垣B～Fにおける岩石種と産出頻度は表2～7に示した。

**A（天守台）** 地上からおよそ3～4mの高さまでは肉眼観察と帯磁率測定によって岩石の種類を同定した。間を埋めている石以外については帯磁率を測定し、その数値（ $\times 10^{-3}$ SI）を記載している。約3～4mより上については双眼鏡も用いて目視によって種類を判定した。A01～A09を構成する石について、最大長、長さ40cm以上の個数、帯磁率をまとめたものを表2に示した。

**[A01]** 大きなサイズの石はすべて矢田石である。矢田石の中には矢穴を持つものもある。矢田石は最大120cmである。間を充填する石には矢田石、大海崎石（44cm以下）や忌部安山岩（31cm以下）がある。長さが40cm以上の石は矢田石が26個、大海崎石が2個である。帯磁率は矢田石が $9.6 \sim 15.4 \times 10^{-3}$ SI、大海崎石が $1.5 \times 10^{-3}$ SI以下、忌部安山岩が $18.1 \sim 23.9 \times 10^{-3}$ SIである。

**[A02]** A01と同様、大きなサイズの石はすべて矢田石である。矢田石の中には矢穴を持つものもある。矢田石は最大130cmである。間を充填する石には矢田石、大海崎石（42cm以下）や忌部安山岩（44cm以下）がある。長さが40cm以上の石は矢田石が47個、大海崎石が2個、忌部安山岩が2個である。帯磁率は矢田石が $5.6 \sim 18.0 \times 10^{-3}$ SI、大海崎石が $0.63 \times 10^{-3}$ SI以下、忌部安山岩が $20.3 \sim 23.0 \times 10^{-3}$ SIである。

**[A03]** ほとんどが矢田石であるが、中段に34～60cmの比較的大きな大海崎石が見られる。矢田石は最大170cmである。大海崎石は最大60cmである。間を充填する石には矢田石、大海崎石の他、忌部安山岩（34cm以下）もある。長さが40cm以上の石は矢田石が64個、大海崎石が13個、忌部安山岩が3個である。帯磁率は矢田石が $8.1 \sim 17.5 \times 10^{-3}$ SI、大海崎石が $0.27 \sim 0.46 \times 10^{-3}$ SIの他、 $6.1 \times 10^{-3}$ SIの高い値を示すものある。忌部安山岩は $19.0 \sim 21.1 \times 10^{-3}$ SIである。

**[A04]** ほとんどが矢田石で、最大153cmである。比較的大きな大海崎石が2つ見られる（66cmと83cm）。79cmの忌部安山岩もある。間を充填する石は矢田石、大海崎石、忌部安山岩である。長さが40cm以上の石は矢田石が70個、大海崎石が2個、忌部安山岩が5個である。帯磁率は矢田石が $7.2 \sim 17.8 \times 10^{-3}$ SI、大海崎石が $3.0 \times 10^{-3}$ SI以下、 $6.1 \times 10^{-3}$ SI、忌部安山岩は $19.6 \sim 28.6 \times 10^{-3}$ SIである。

**[A05]** 矢田石が多く、最大144cmである。比較的大きな大海崎石が右最下部（88cm）と上部に2つ（121cmと88cm）見られる。忌部安山岩は60cm以下である。間を充填する石は矢田石、大海崎石、忌部安山岩であるが、左中段に花崗岩（48cm）と左端中段に森山石（28cm）が見られる。長さが40cm以上の石は矢田石が212個、大海崎石が17個、忌部安山岩が7個である。帯磁率は矢田石が $8.3 \sim 18.9 \times 10^{-3}$ SI、大海崎石が $6.8 \sim 8.6 \times 10^{-3}$ SIと高い値を示す。

**[A06]** 矢田石が多く、最大168cmである。比較的大きな大海崎石（135cm～86cm）が右側最上部と左中段、中央下段と左最下部上部に見られる。大海崎石は最上段に多い。忌部安山岩は少なく、左端下に60cmのものがある。間を充填する石は矢田石、大海崎石、忌部安山岩である。長さが40cm以上の石は矢田

石が261個、大海崎石が28個、忌部安山岩が1個である。帯磁率は矢田石が $8.13\sim18.5\times10^{-3}$ SIである。

[A07] ほとんどが矢田石で、最大174cmである。大海崎石が最上段に多く見られ、最大は158cmであるが、他は大きなものでも68cm～52cmである。忌部安山岩は最大で52cmである。間を充填する石は矢田石、大海崎石、忌部安山岩である。長さが40cm以上の石は矢田石が145個、大海崎石が22個、忌部安山岩が1個である。帯磁率は矢田石が $8.6\sim18.6\times10^{-3}$ SI、大海崎石が $2.0\times10^{-3}$ SI以下が多いが、 $8.8\times10^{-3}$ SIと高いものもある。

[A08] ほとんどが矢田石で、最大174cmである。大海崎石は137cm～119cmが3個ある。忌部安山岩は30cm以下である。間を充填する石は矢田石、大海崎石、忌部安山岩である。長さが40cm以上の石は矢田石が110個、大海崎石が11個である。帯磁率は矢田石が $7.1\sim18.0\times10^{-3}$ SI、大海崎石が $1.0\sim6.0\times10^{-3}$ SIである。

[A09] ほとんどが矢田石で、最大140cmである。大海崎石は大きなものは少なく47cm以下である。忌部安山岩は40cm以下である。間を充填する石は矢田石、大海崎石、忌部安山岩である。隠岐片麻岩が詰め物として見られるが、これはまったく新しいものである。長さが40cm以上の石は矢田石が68個、大海崎石が7個、忌部安山岩が1個である。帯磁率は矢田石が $9.2\sim15.4\times10^{-3}$ SI、大海崎石が $0.34\sim6.2\times10^{-3}$ SIである。

[A全体の特徴] 大きさが40cm以上の石の総計は1078個でそのうち954個が矢田石(88.5%)、104個が大海崎石(9.6%)、忌部安山岩が20個(1.9%)である。矢田石と大海崎石の割合はそれぞれ90.2%と9.8%である。大きな石のほとんどは割石である。他の城壁に用いられている矢田石は角がとれた亜円礫状の自然石が多いのに対し、天守台では割石が多く用いられている。これらの大きな石の間を埋める石は矢田石、大海崎石、忌部安山岩である。ごくまれに花崗岩や森山石の詰石が見られる(A05)。忌部安山岩や花崗岩、森山石は後世の補修によって使われたものであろう。

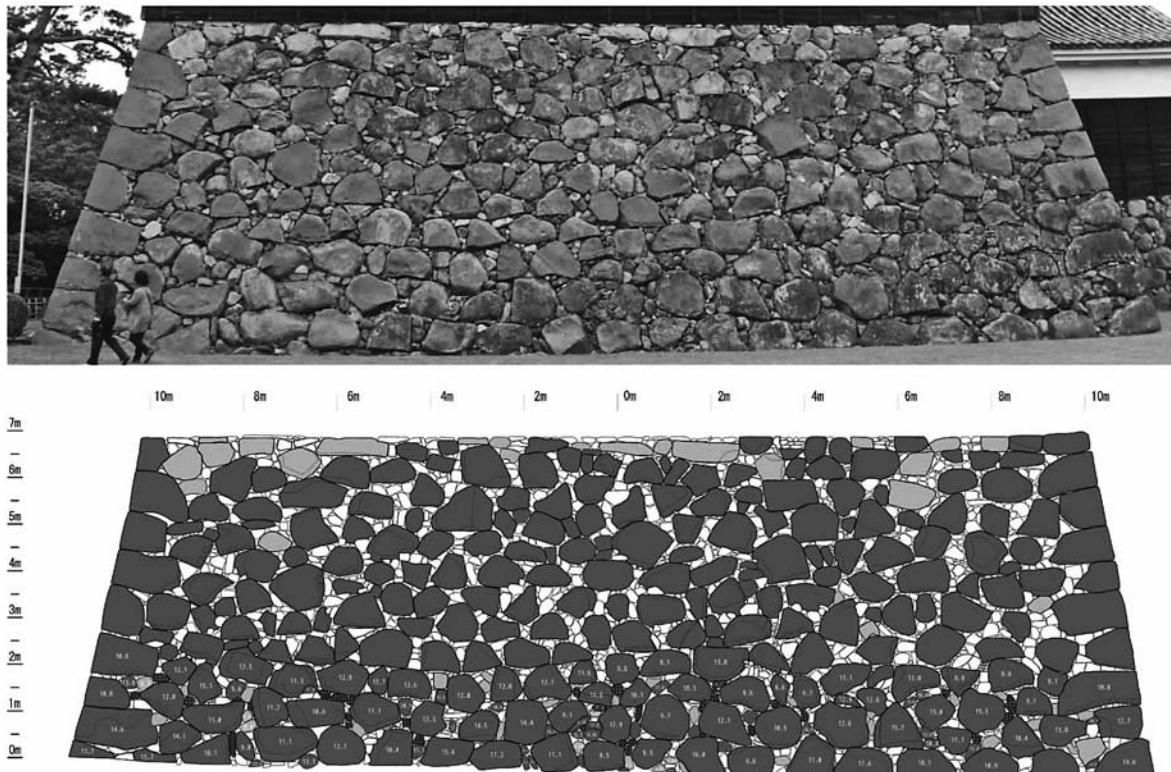


図10 天守台A07の写真と石材判別図。

ほとんどが矢田石であるが、最上位にわずかに大海崎石が見られる。凡例は図13に示した。

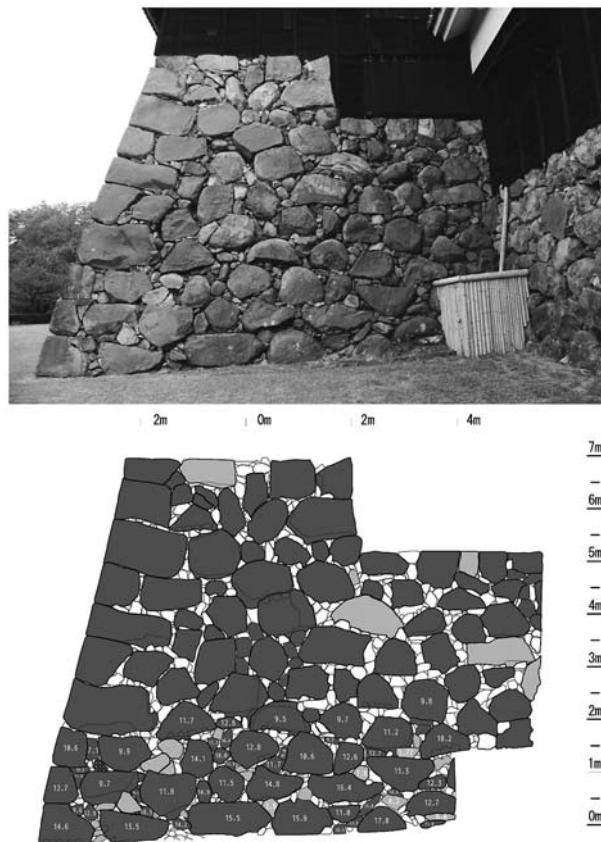


図11 天守台A08の写真と石材判別図。  
ほとんどが矢田石であるが、わずかに大海崎石も見られる。凡例は図13に示した。

表2 天守台Aの石の種類と産出頻度

	最大長(cm)			長さ>40cmの個数			帯磁率(x 10 <sup>-3</sup> SI)				
	矢田石	大海崎石	忌部安山岩	矢田石	大海崎石	忌部安山岩	矢田石	大海崎石	忌部安山岩	花崗岩	森山石
A01	120	44	31	26	2	0	9.6 - 15.4	0.15 - 1.54	18.1 - 23.9		
A02	130	42	44	47	2	2	5.6 - 18.0	0.35 - 0.63	20.3 - 23.0		
A03	170	60	45	60	13	3	8.1 - 17.5	0.27 - 6.1	19.0 - 21.1		
A04	153	83	76	66	2	5	7.2 - 17.8	3.0	19.6 - 28.6		
A05	144	121	60	204	17	7	8.3 - 18.9	6.8 - 8.6		18 x 48cm	23 x 28cm
A06	168	141	60	253	28	1	8.1 - 18.5				
A07	174	158	52	136	22	1	8.6 - 18.6	1.1 - 8.8			
A08	173	137	30	100	11	0	7.1 - 18.0	1.0 - 6.0			
A09	140	47	40	62	7	1	9.2 - 15.4	0.34 - 6.2			
			合計(個数)	954	104	20	1078				
			比率(1)	88.5%	9.6%	1.9%					
			比率(2)	90.2%	9.8%						

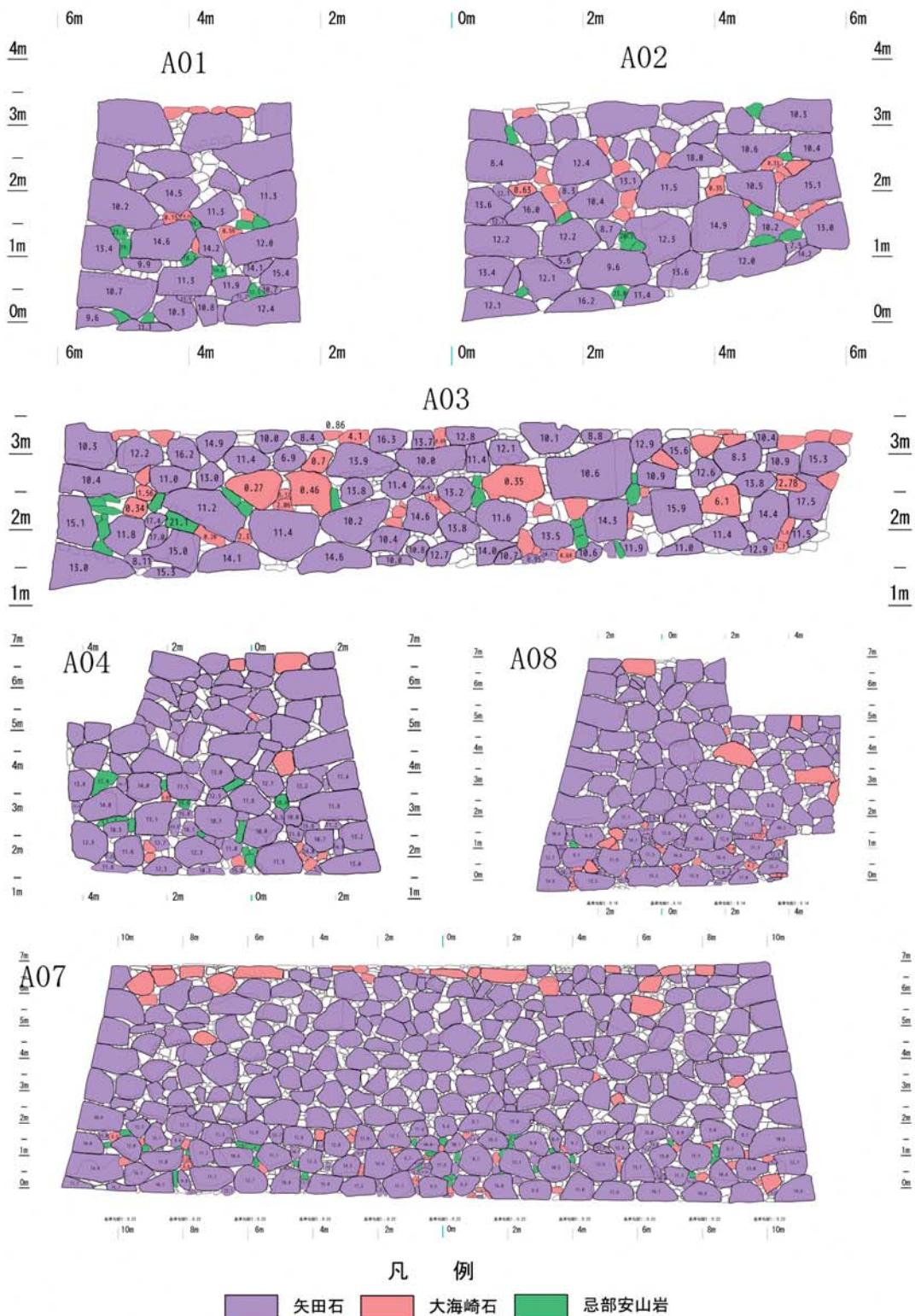


図12 天守台Aにおける石材判別図（1）。

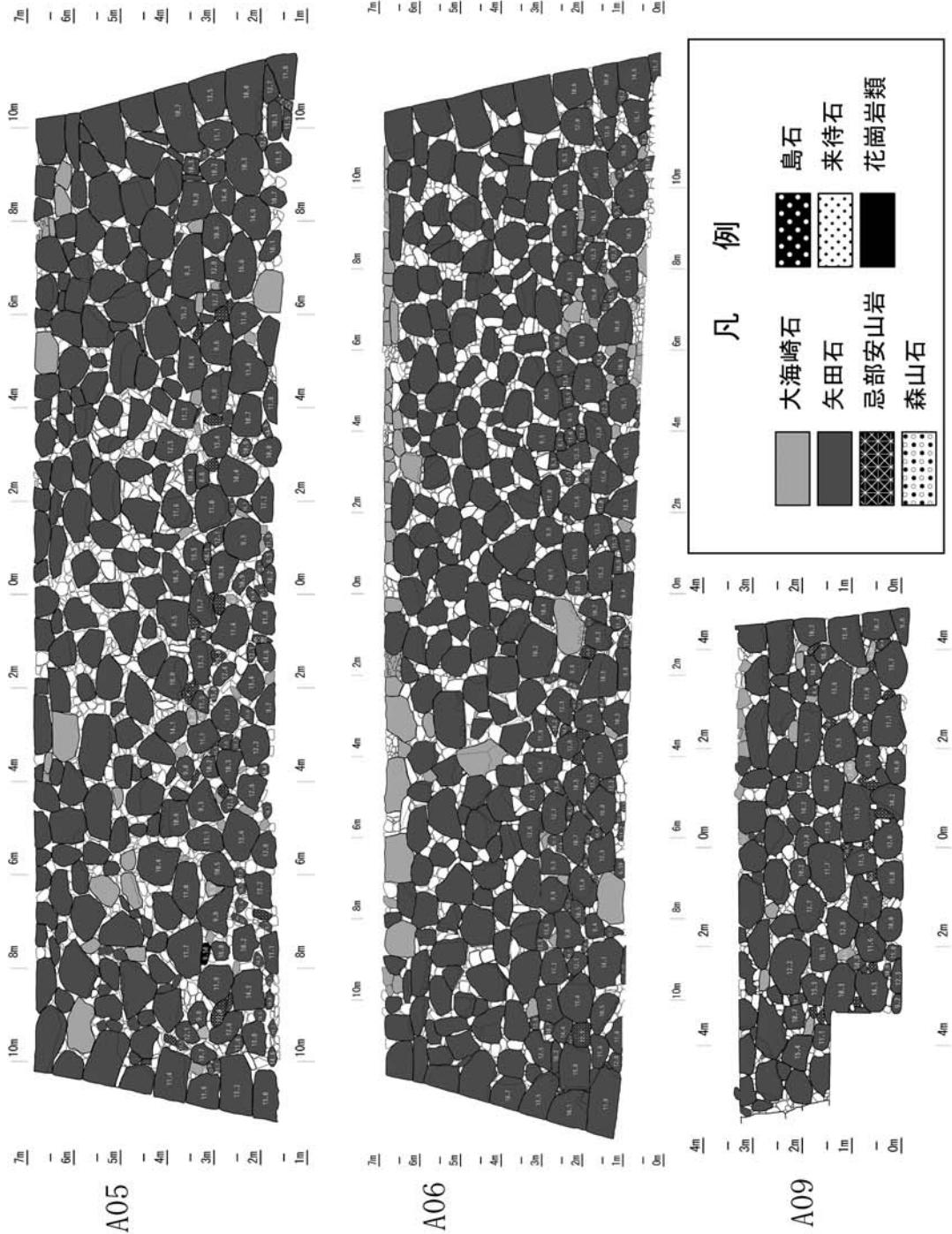


図13 天守台Aにおける石材判別図 (2)  
凡例は図14～図28に共通である。



図14 一ノ門B11における石材。  
大海崎石が多く使われており、中には長さが2mを超えるものもある。

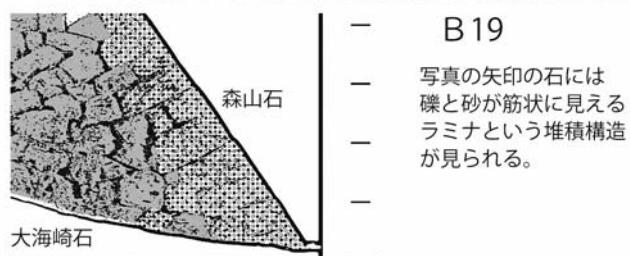
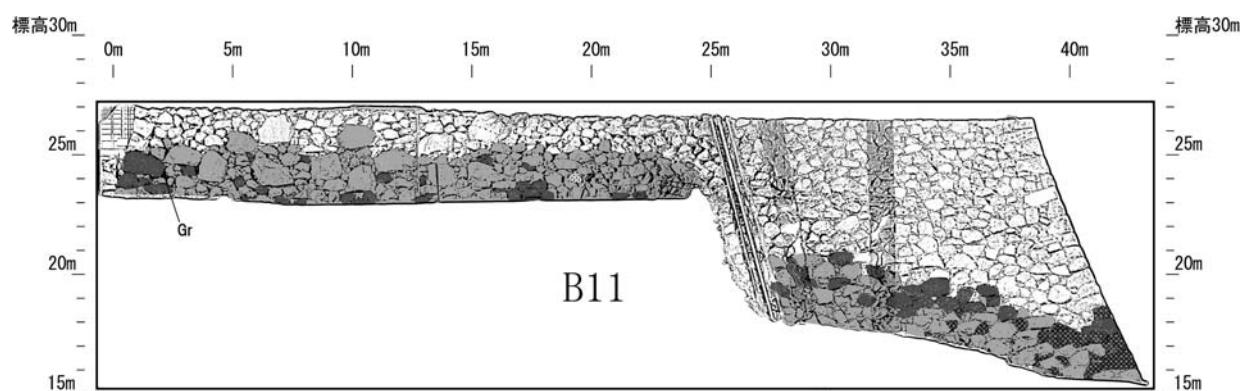
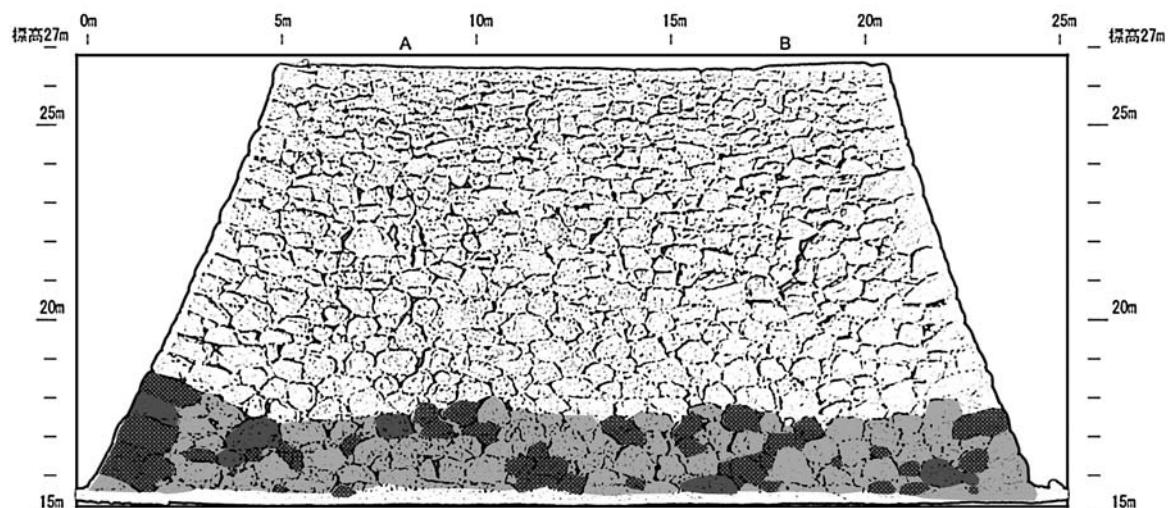


図15 石垣B19の角石に使われている森山石。  
左側（西側）は大海崎石である。



B11 立面図



B12 立面図

B12

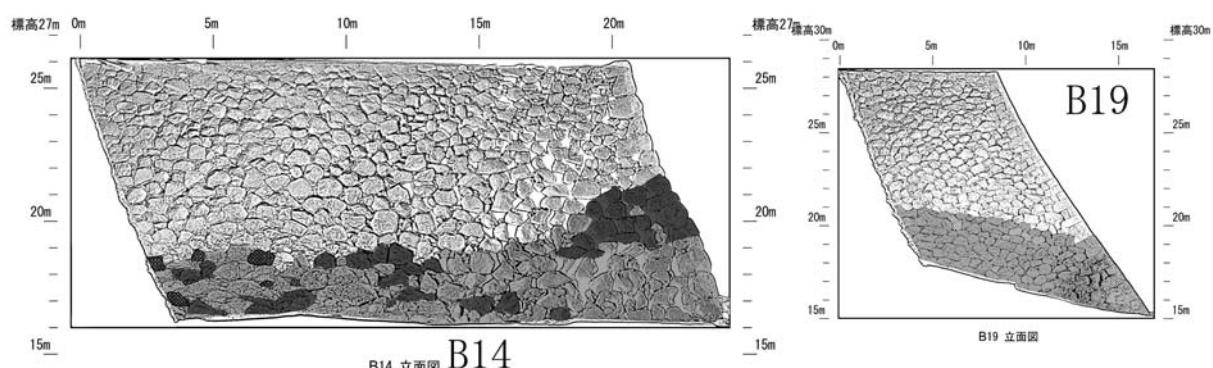


図16 石垣Bにおける石材判別図（1）

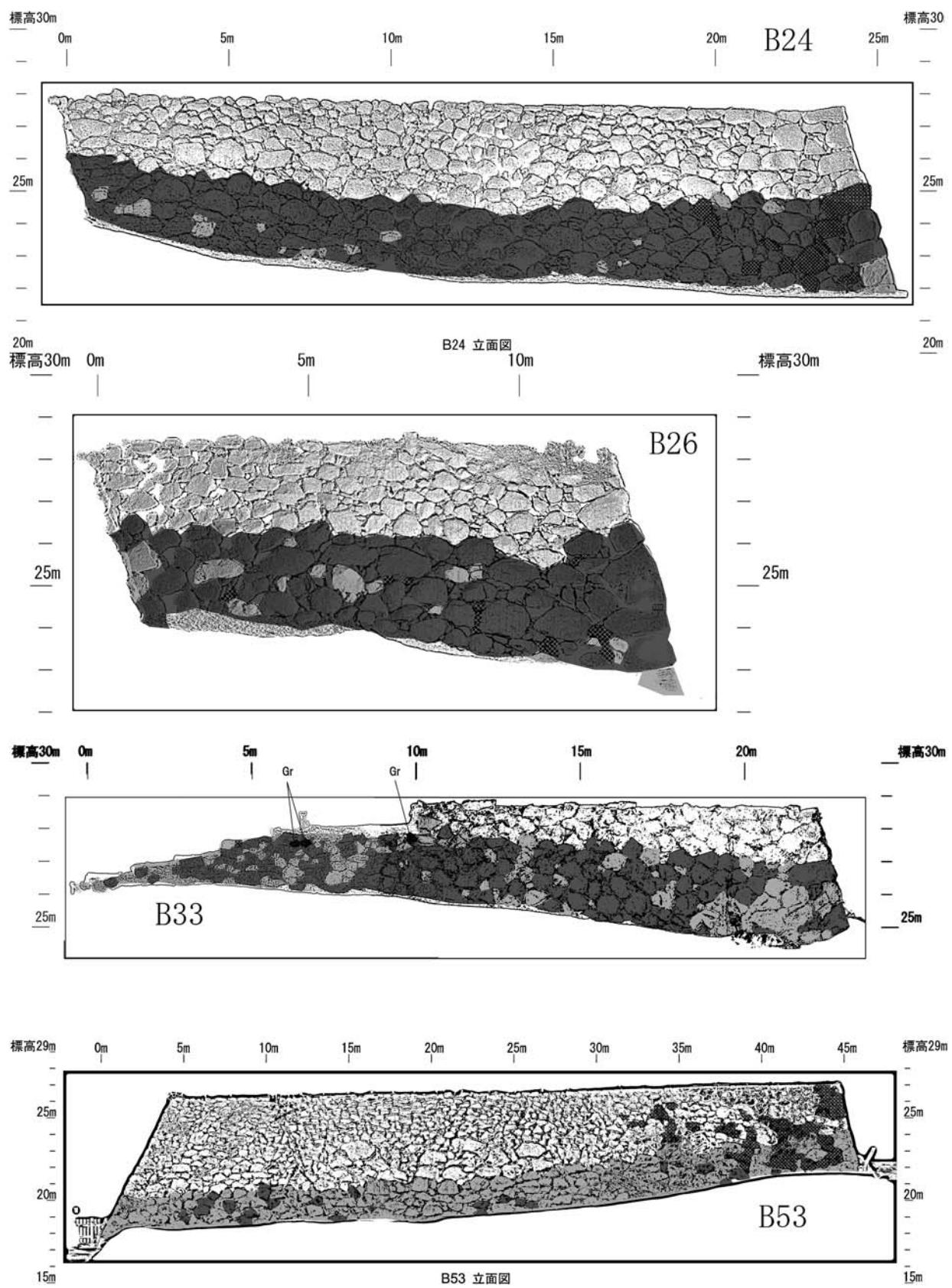


図17 石垣Bにおける石材判別図（2）

表3 石垣Bにおける長さ30cm以上の石についての岩石種と産出頻度。

\*1)「全体」は石垣中の長さ30cm以上の石材をすべて判別し、「部分」は地表から約3~4mの高さまでの石材を判別したことを示している。\*2) ( ) 内は個数を表す。\*1) と\*2) は表4から表7についても同様である。

	範囲 <sup>1)</sup>	大海崎石	矢田石	忌部安山岩	森山石	花崗岩類	島石	来待石
B01	全体	3	3	1 (2)				
B02	全体	3	4	1 (1)				
B03	全体	4	3					
B04	全体	3	3	1 (1)				2 (7)
B05	部分	5	2	1 (4)				
B06	部分	5	2	1 (2)				
B07	全体	3	3	1 (3)				
B08	全体	5	1 (1) <sup>2)</sup>	1 (1)				
B09	全体	3	4	2 (4)				
B10	全体	3	2					
B11	部分	4	3	3		1 (1)		
B12	部分	4	2	3				
B13	部分	3	1 (1)	2 (6)				
B14	部分	4	3	1 (4)				
	B14の忌部安山岩は平成15年、16年の修理の時のもの							
B15	部分	3	2					
B16	全体	4	2					
B17	全体	4	3	1 (1)	2 (5)	1 (2)		
B18	部分	4	2					
B19	部分	4			2 (23)			
B20	部分	4	2		2 (15)			
B21	全体	2	2					
B22	部分	2	5					
B23	部分	2	5					
B24	部分	2	5	2 (11)				
B25	部分	2	4	2 (12)				
B26	部分	2	4	2 (10)				
B27	部分	2	5	1 (1)				
	B22~B27は築城期の石							
B28	部分	2	3					
B29	部分	3	3					
B30	全体	2	2	1 (3)		1 (1)		
B31	全体	3	3	2 (8)				
B32	全体	3	2	1 (1)		1 (1)		
B33	部分	2	4			1 (3)		
B34	部分	3	3					
B35	全体	2	3	1 (1)				
B36	部分	4	2					
B37	部分	4	2					
B38	部分	4	2					
B39	部分	4	2					
B40	全体	4	3	1 (1)		1 (2)		
B41	部分	5	2					
B42	部分	3	2					
B43	部分	4	4					
B44	部分	4	2					
B45	全体	4	2					
B46	全体	4	2					
B47	部分	4	3	1 (1)				
B48	全体	4	3	1 (1)				
B49	全体	2	2	1 (2)				
B50	全体	3	2				1 (1)	1 (4)
B51	全体	2	1 (2)					2 (7)
B52	全体	3	2					2 (9)
B53	部分	4	2	2				
B54	部分	4	2	1 (2)				
B55	部分	4	2					

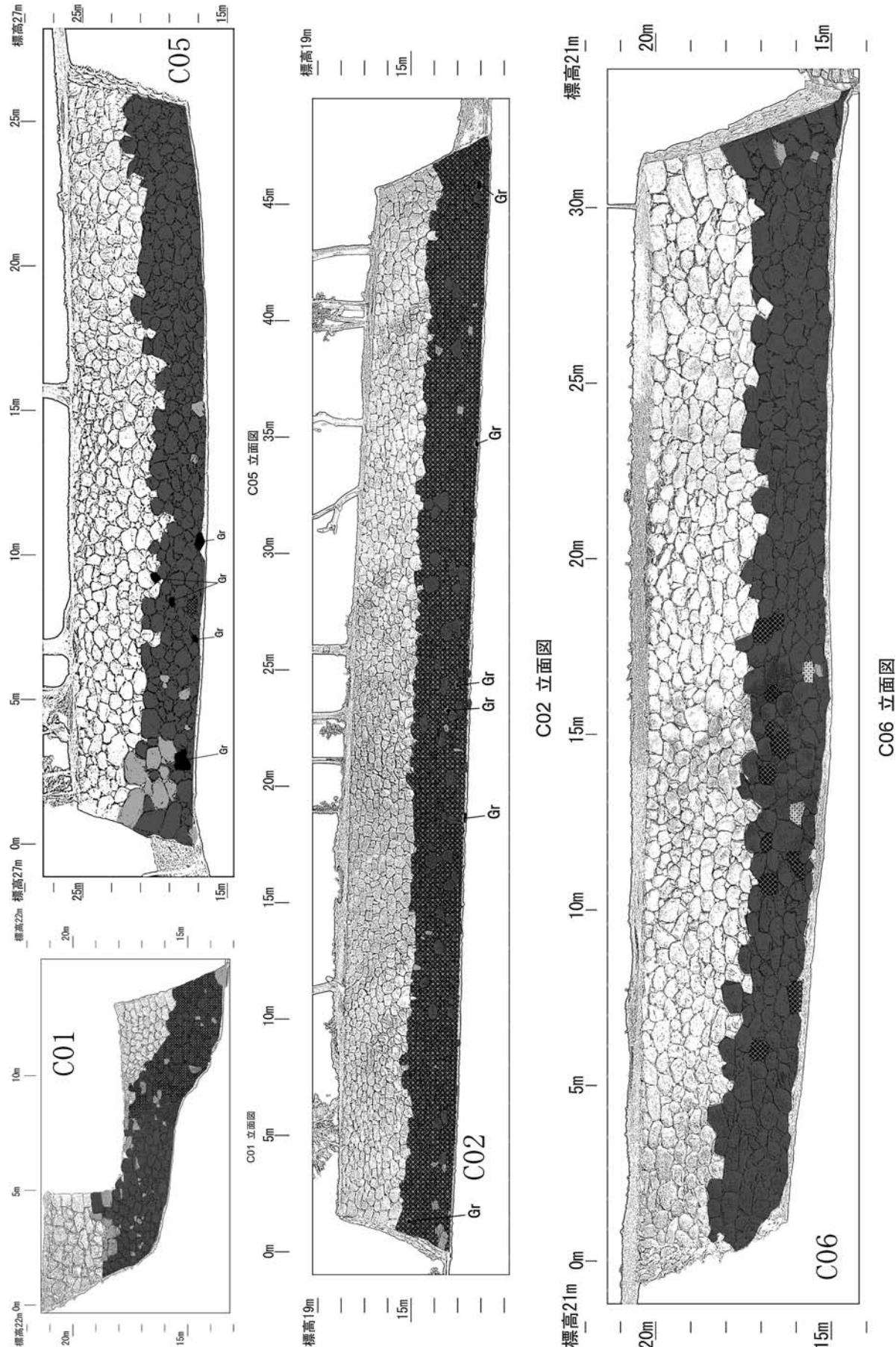
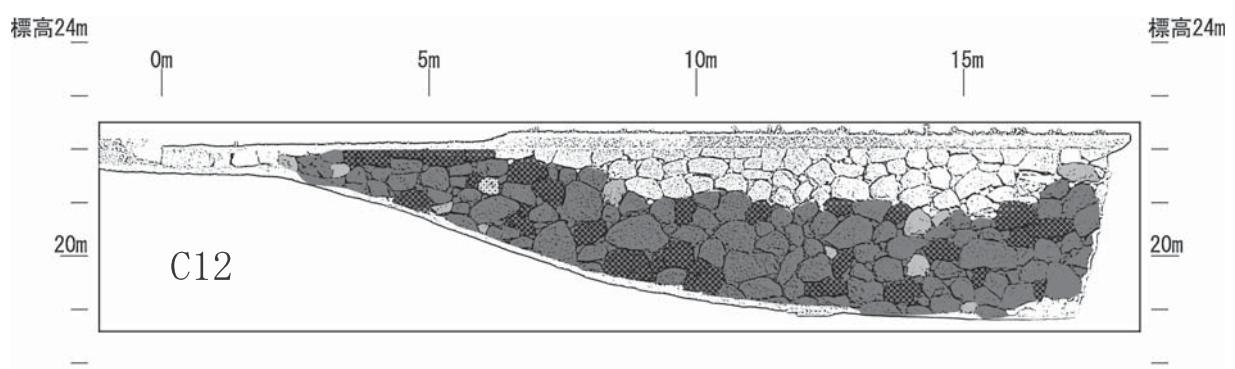
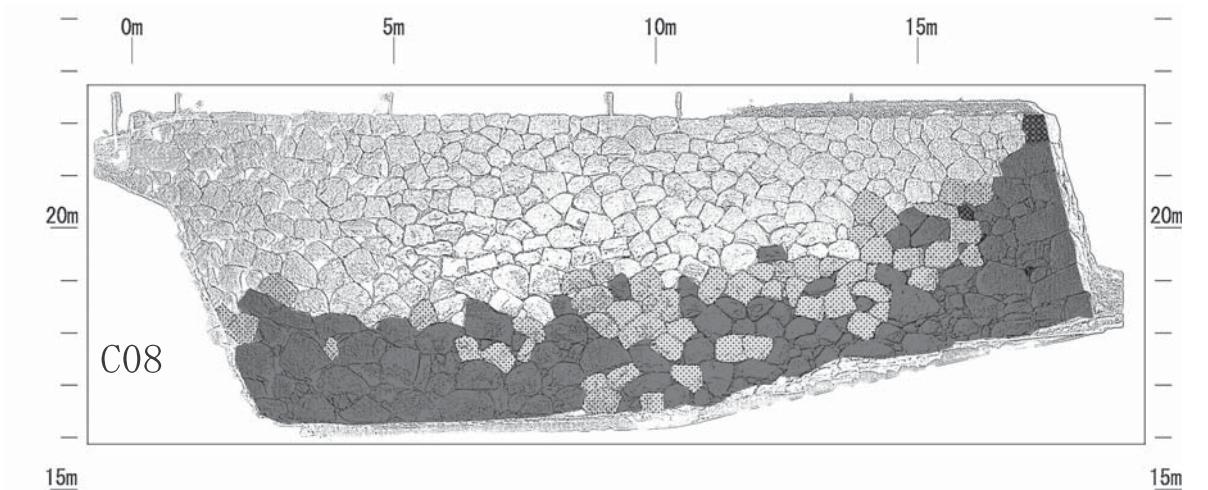
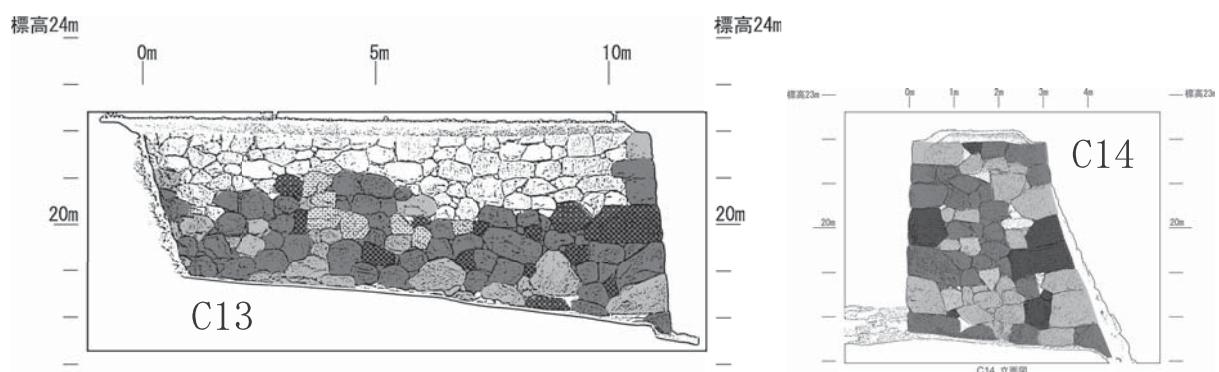


図18 石垣Cにおける石材判別図（1）



C12 立面図



C13 立面図

図19 石垣Cにおける石材判別図（2）

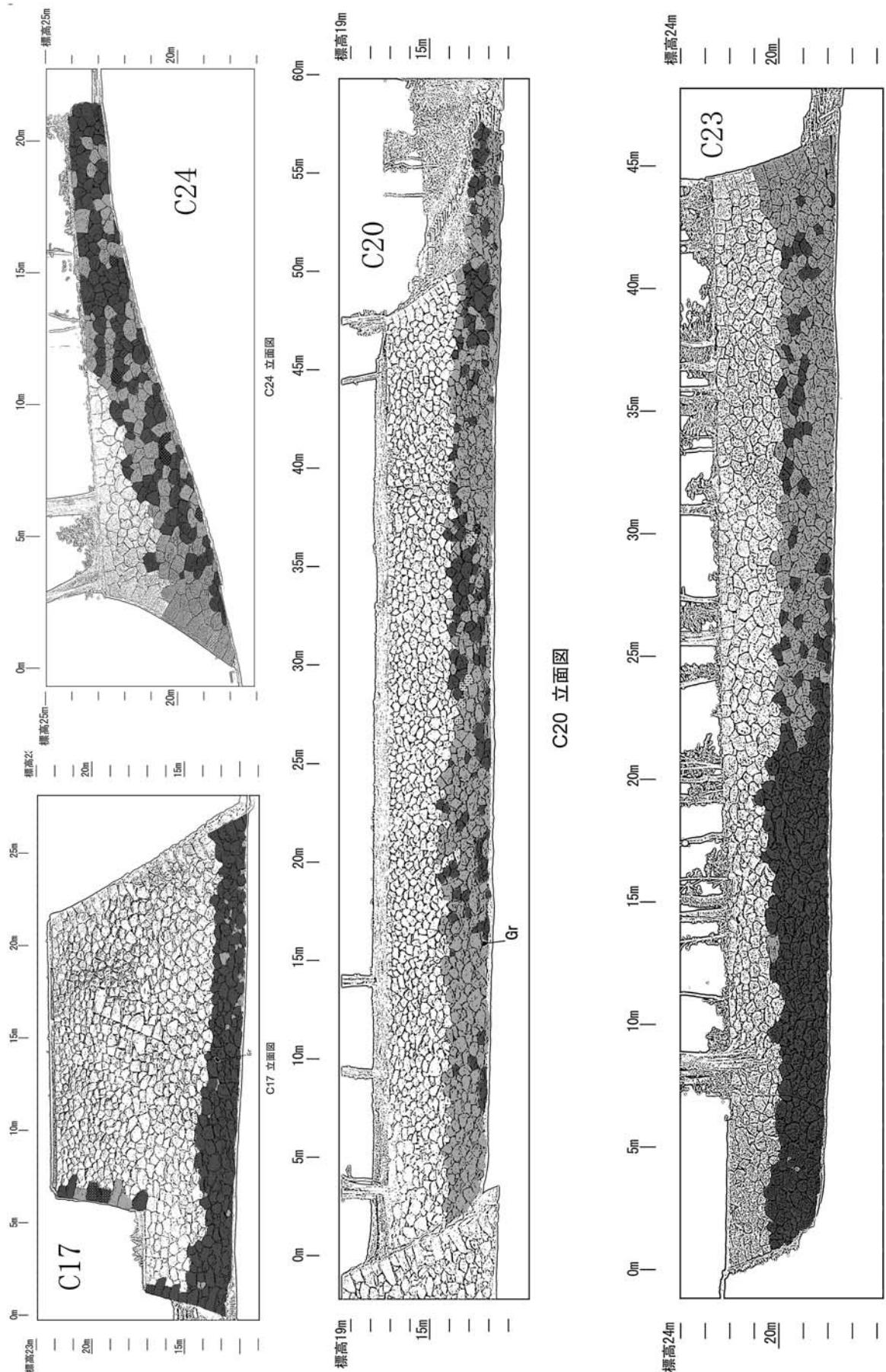


図20 石垣Cにおける石材判別図（3）

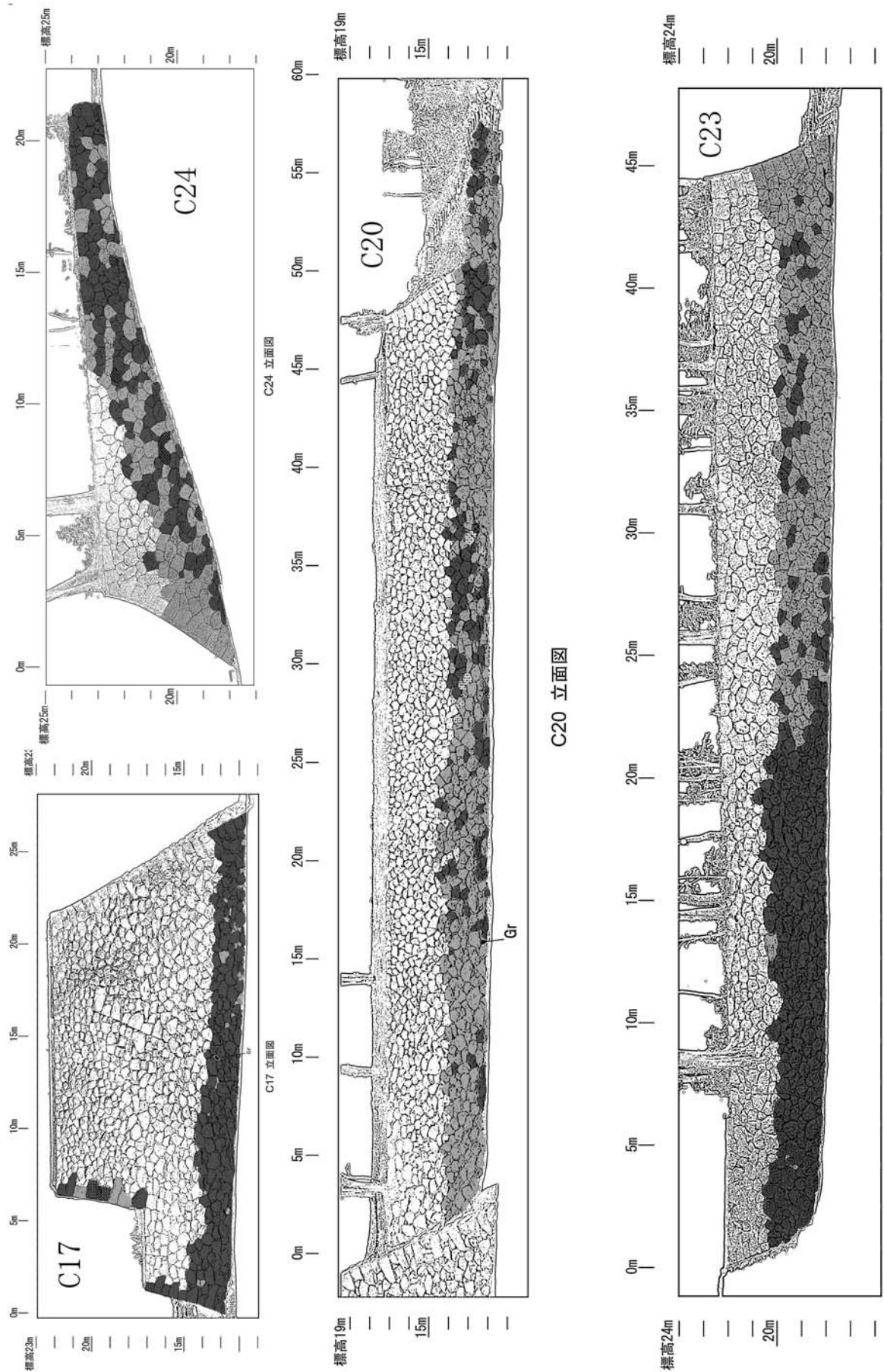


図21 石垣Dにおける石材判別図

表4 石垣Cにおける長さ30cm以上の石についての岩石種と産出頻度。

	範囲	大海崎石	矢田石	忌部安山岩	森山石	花崗岩類	島石	来待石
C01	部分	2	4	4				
C01の忌部安山岩には江戸期のものも見られる								
C02	部分	1 (8)	2	4		1 (6)		
C03	全体	2		4		1 (2)		
C04	全体	2	4	1 (4)				
C06の忌部安山岩には築城期のものも見られる								
C05	部分	2	5	1 (1)		2 (5)		
C06	部分	1 (2)	5	2	1 (2)			
C07	部分	1 (1)	5	1 (1)				
C08	部分		4	1 (1)	3 (50)			
C09	全体		3	2				
C10	全体		2	2				
C11			2	2				
C12	部分	2	4	2	1 (1)			
C13	部分	3	3	2	2 (7)			
C14	全体	3	3	2	2 (3)			
C15	全体		2	2				
C16	全体	1 (6)	3	2				
C10～C16は平成17年、18年の解体修理								
C17	部分	2	5	1 (2)		1 (1)		
C18	部分		5			1 (2)		
C19	部分	1 (2)	4	2				
C20	部分	4	3	1 (1)	2 (7)	1 (1)		
C17～C19の中位以下は築城期の石垣								
C21	全体	3	3					
C22	全体	2	4	1 (2)	2 (12)			
C23	部分	4	4					
C24	部分	4	4	2	1 (1)			
C25	全体	2	3	1 (1)				

表5 石垣Dにおける長さ30cm以上の石についての岩石種と産出頻度。

	範囲	大海崎石	矢田石	忌部安山岩	森山石	花崗岩類	島石	来待石
D01	全体	2	3				1 (1)	
D02	全体	3	2	1 (3)		1 (2)	1 (1)	2 (7)
D03	全体		2					
D04	全体		2					
D05	全体		1 (1)					
D06	全体		3					
D07	全体		4					
D08	全体		5					
D09	全体	1 (2)	5					
D10	部分	4	3					
D11	全体	4	2			1 (1)		
D12	部分	5						
D13	部分	3						
D14	部分	5		1 (1)			1 (1)	
D15	部分	3						
D16	部分	3		4		1 (1)		
D10～D16の中位以下は江戸期の石垣								
D17	部分	2	4	2			2 (9)	
D18	全体	2	3	1 (1)			2 (5)	1 (1)
D19	全体	1 (1)	3			1 (2)		
D20	全体	3	2	1 (3)			1 (1)	
D21	全体	4	3			1 (1)	1 (3)	1 (1)

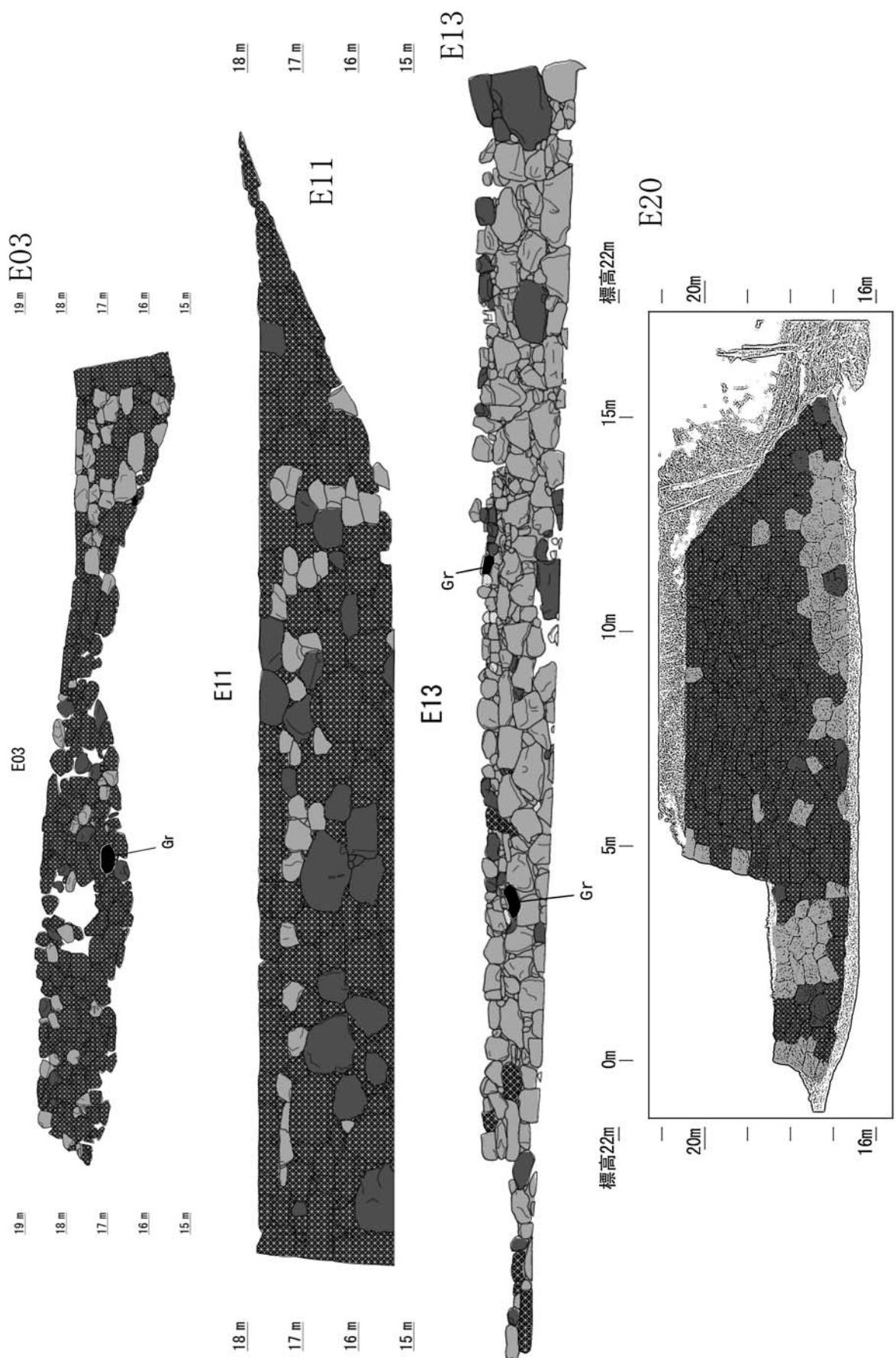


図22 石垣Eにおける石材判別図（1）

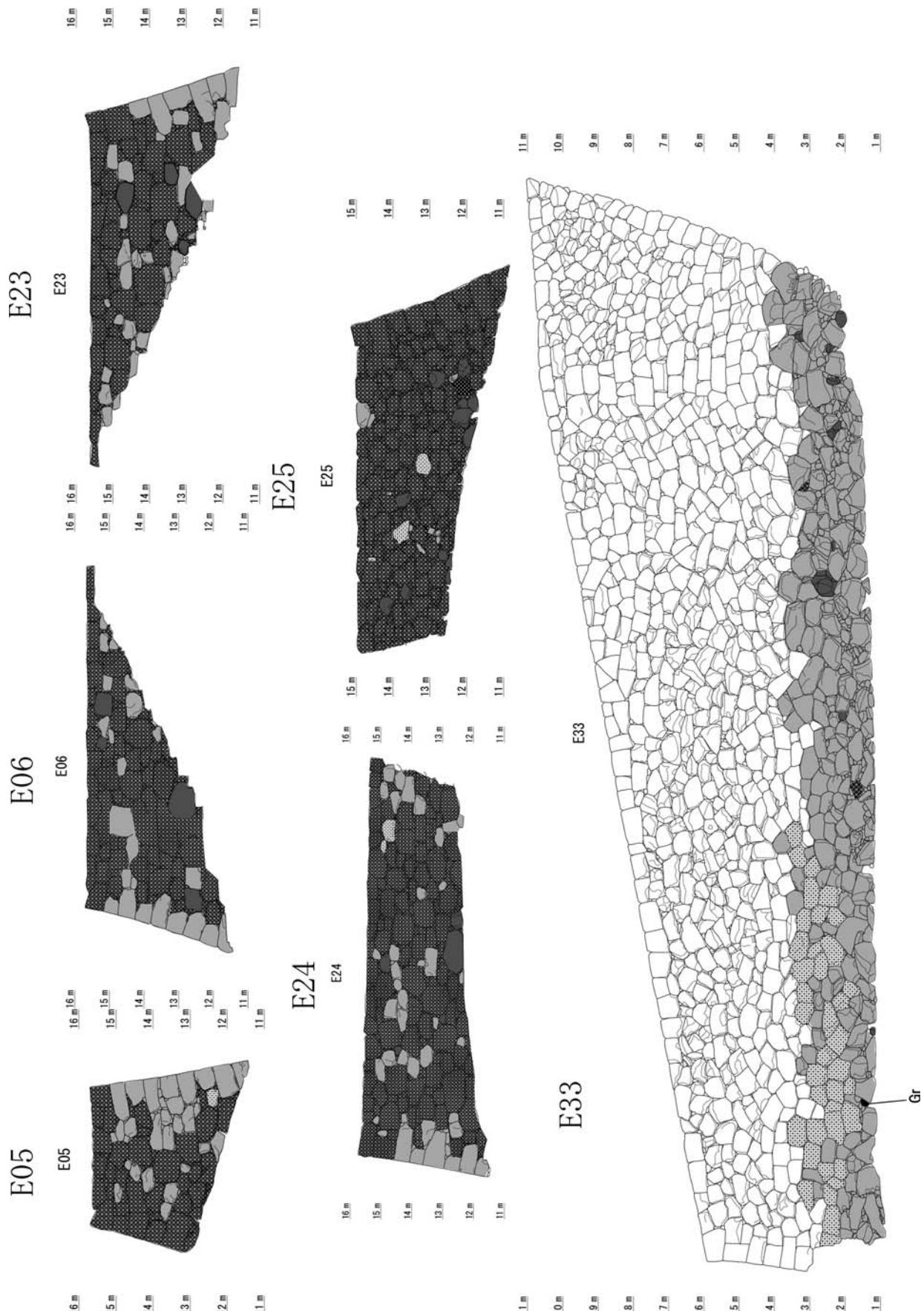


図23 石垣Eにおける石材判別図（2）

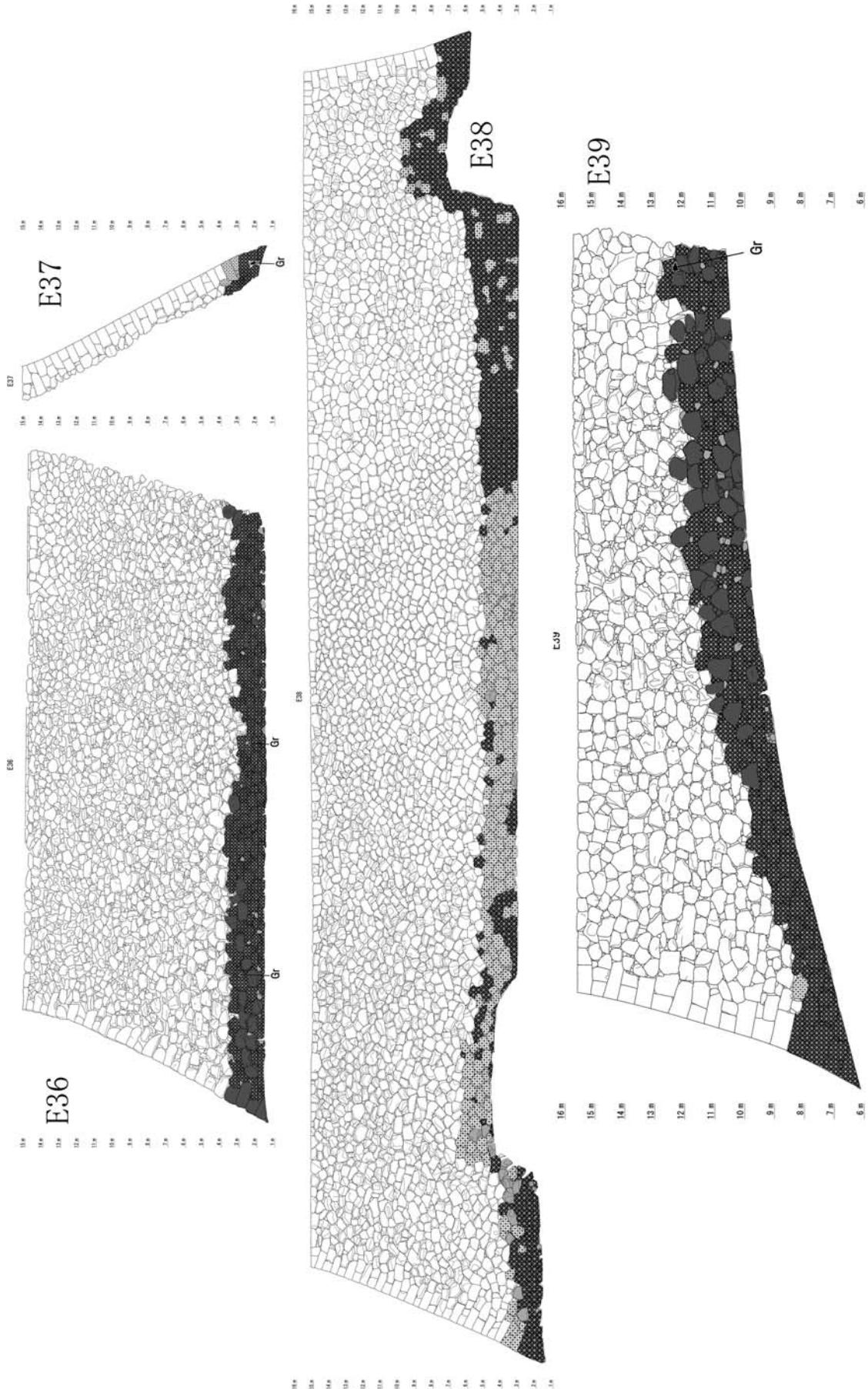
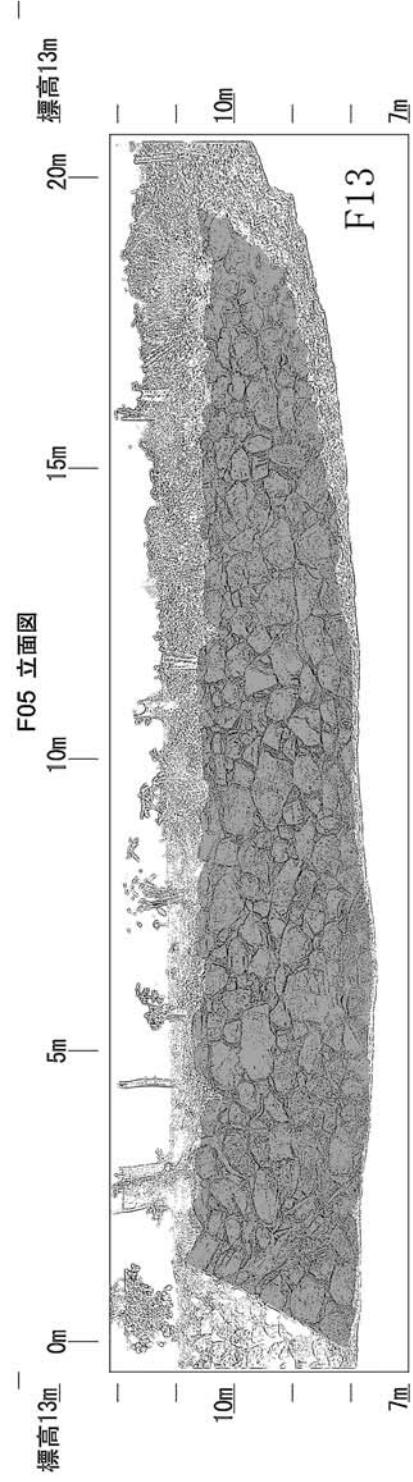
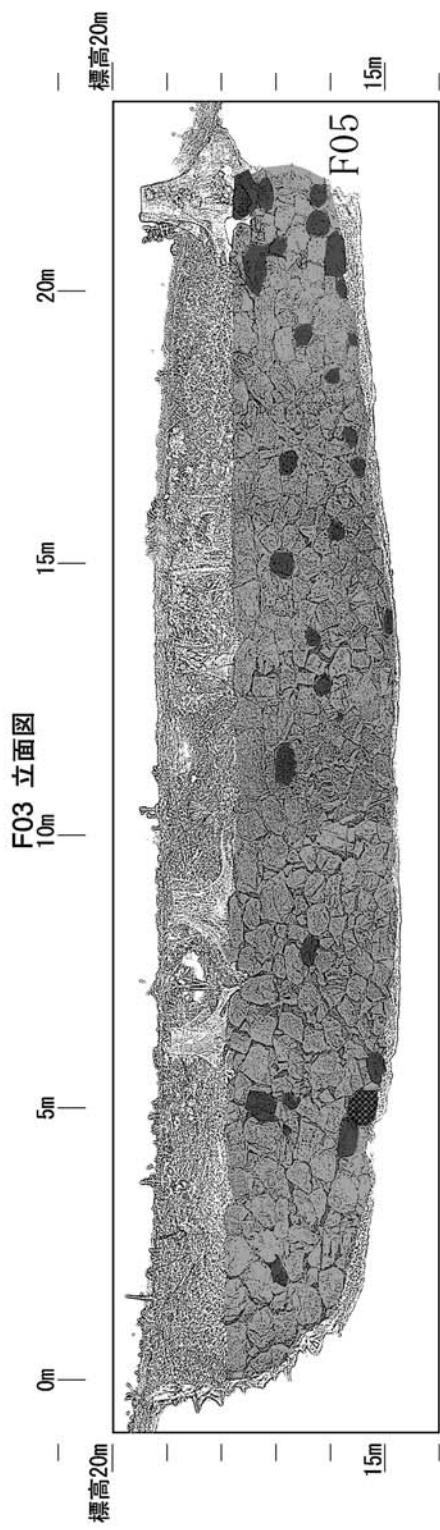
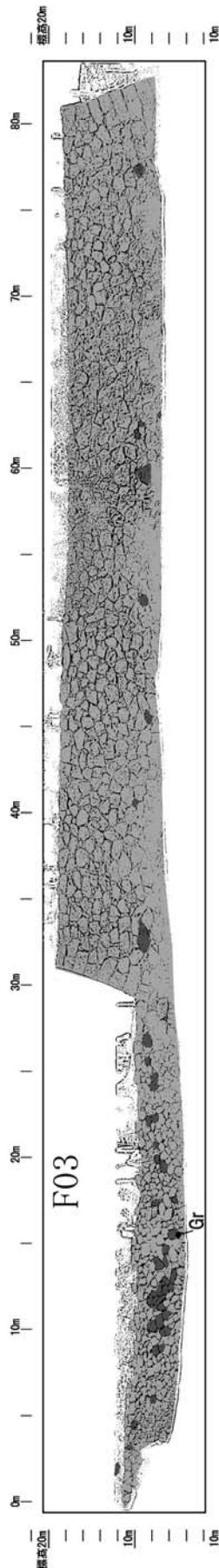


図24 石垣Eにおける石材判別図（3）



F13 立面図

図25 石垣Fにおける石材判別図（1）

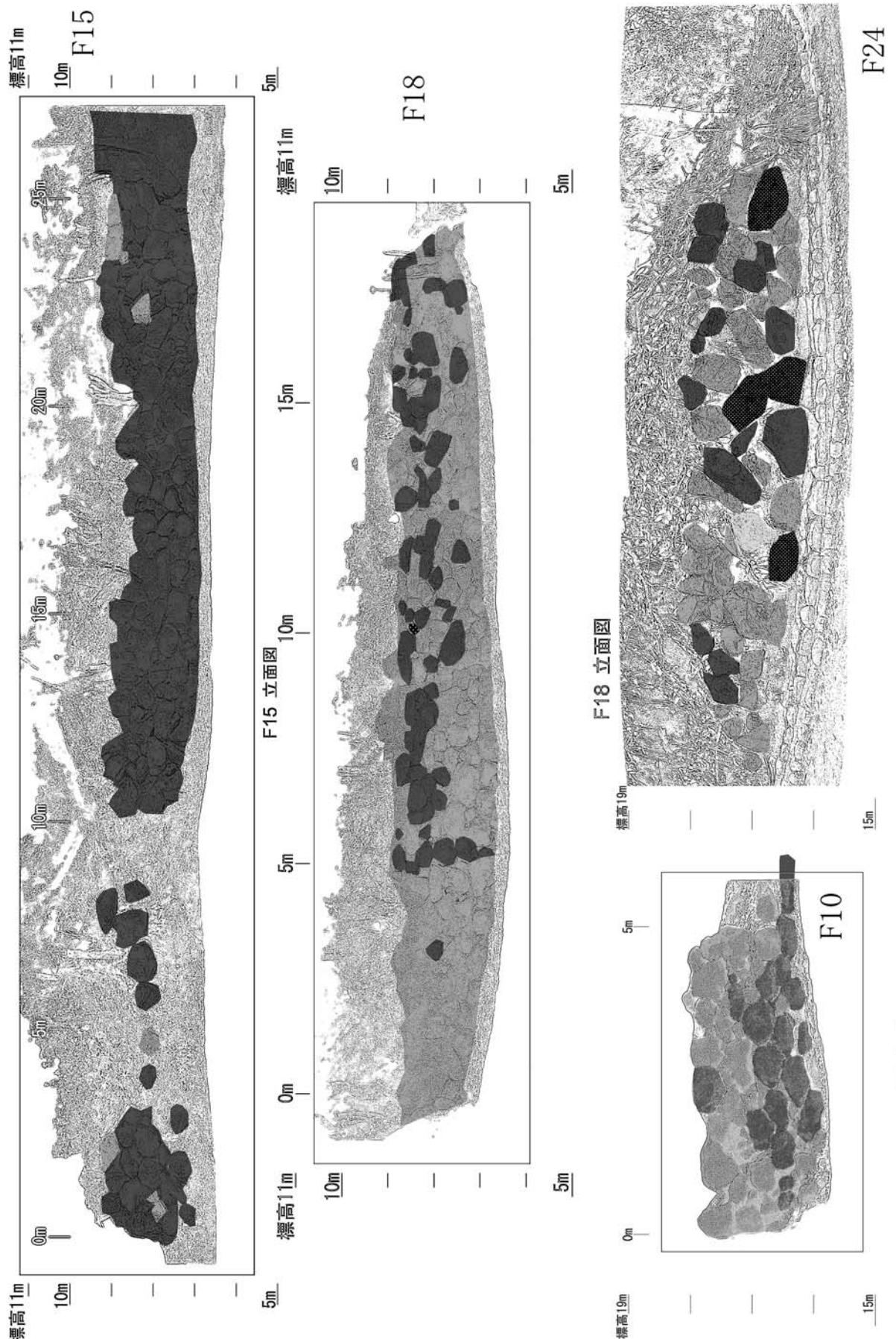


図26 石垣Fにおける石材判別図（2）

表6 石垣Eにおける長さ30cm以上の石についての岩石種と産出頻度。

	範囲	大海崎石	矢田石	忌部 安山岩	森山石	花崗岩類	島石	来待石
E01	全体	4	1 (1)	1 (1)	2 (17)			
E02	部分	4	2	2			2 (3)	
E03	全体	3	2	4		1 (2)		
E04	全体	1 (2)		2				
E05	全体	2		3	1 (1)			
E06	全体	3	2	4				
E07	全体	2		4		1 (1)		
E08	全体		2	4		1 (1)		
E09	未調査							
E10	全体	1 (2)	1 (3)	4				
E11	全体	2	2	4				
E12	全体							
E13	全体	4	2	1 (8)		1 (2)		1 (3)
E14	全体	3	3					
E15	全体	2	3	1 (1)				2 (3)
E16	全体	2	4	2		1 (1)		
E17	全体	2	3					
E18	全体	1 (1)	2					
E19	全体	2	4			1 (1)	1 (1)	2 (4)
E20	全体	3	2	4				
E21	未調査							
E22	未調査							
E23	全体	3	2	4				
E24	全体	3	2	4	1 (2)			
E25	全体	1 (1)	2	4	1 (2)			
E26	全体	3	1 (1)					
E27	部分	3						
E28	全体	5	1 (3)	1 (1)				
E29	全体							
E30	全体	2	2		1 (1)		1 (1)	
E31	全体	2	1 (2)	1 (2)				
E32	全体	2	2	2				
E33	部分	4	2	1 (1)	3 (20)	1 (1)		
E34	部分	2	3	4		1 (1)	1 (1)	
E35	部分		2	2				
E36	部分	1 (1)	3	4		1 (2)		
E37	部分		3	2	1 (1)			
E38	部分	2		4	4 (多数)	1 (1)		
E39	部分	2	3	4	1 (1)			
E40	部分	2	3	3		1 (1)		
E37～E40の忌部安山岩には江戸期のものも見られる								
E41	部分	2	3	3				
E42	全体	2	2	1 (1)				
E43	全体	2	2	1 (1)				

表7 石垣Fにおける長さ30cm以上の石についての岩石種と産出頻度。

	範囲	大海崎石	矢田石	忌部安山岩	森山石	花崗岩類	島石	来待石
F01	全体	5	2					
F02	全体	3	3					
F03	全体	5	2					
F04	全体	5	1 (1)					
F05	全体	5	3	1 (1)				
F06	全体	4	2					
F07	全体	3	3					
F08	全体	2	2					
F09	全体	3	2					
F10	全体	3	3		1 (1)			
F11	全体	2	5					
F12	全体	3						
F13	全体	5						
F14	全体	2	5					
F15	全体	2	5					
F16	全体	2	5					
F17	全体	1 (1)	4					
F18	全体	3	4				1 (1)	
F19	全体	3	3				1 (1)	2 (8)
F20	全体	4	3					
F21	全体	3	2				2 (4)	
F22	全体	3	2			1 (1)		
F23	全体	3	3		2 (5)			
F24	全体	4	3				2 (4)	1 (2)

表8 石垣に使用されている花崗岩と忌部安山岩の帯磁率、および忌部川河口付近に見られる花崗岩礫の帯磁率。

石垣	C02						C05				C04
	C02-G-1	C02-G-2	C02-G-3	C02-G-4	C02-G-5	C02-G-6	C05-G-1	C05-G-2	C05-G-3	C05-G-4	C05-In-1
	帯磁率 ( $\times 10^{-3}$ SI)						帯磁率 ( $\times 10^{-3}$ SI)				
1	0.10	0.11	0.08	0.57	0.14	0.10	0.03	2.84	2.47	0.76	26.90
2	0.07	0.08	0.05	0.08	0.14	0.13	0.02	3.15	2.14	0.78	25.10
3	0.05	0.07	0.07	0.07	0.10	0.13	0.05	2.73	2.71	0.80	21.50
4	0.06	0.20	0.28	0.08	0.14	0.10	0.05	1.70	2.39	0.70	22.90
5	0.08	0.06	0.30	0.18	0.13	0.20	0.02	2.57	2.19	0.76	22.30
6	0.12	0.10	0.06	0.32	0.12	0.09	0.07	2.14	2.76	0.85	20.50
7	0.08	0.10	0.07	0.14	0.15	0.09	0.04	2.85	2.47	0.65	19.90
8	0.08	0.15	0.51	0.24	0.20	0.08	0.02	1.46		0.76	21.40
9	0.21	0.17	0.07	0.34	0.14	0.30	0.02			0.79	22.70
10	0.20	0.26	0.26	0.20	0.15	0.19	0.07				
平均	0.11	0.13	0.18	0.22	0.14	0.14	0.04	2.43	2.45	0.76	22.58

G : 花崗岩 ; In : 忌部安山岩

忌部川河原の花崗岩礫		帯磁率
		( $\times 10^{-3}$ SI)
G1	アプライト質花崗岩	0.60
G2	中粒黒雲母花崗岩	3.79
G3	中粒黒雲母花崗岩	0.26
G4	中粒黒雲母花崗岩	8.03
G5	アプライト質花崗岩	0.04

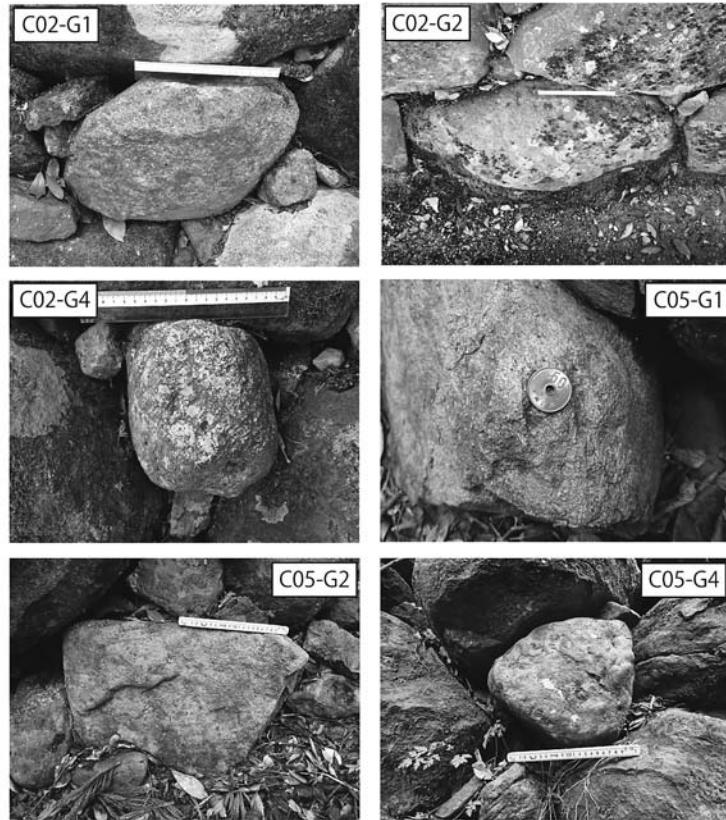


図27 石垣C02、C05に見られる中粒黒雲母花崗岩、アプライト質花崗岩。

#### B～Fの岩石種の特徴

石の間を充填している石（詰石）を除いた石をまとめたものを表2～7に示した。相対的に頻度の多い順に5～1に区分した。95～100%の頻度を5とし、1は数個以下を表す。全体の石が少ないものは占める割合が多くとも3～2とした。

**[B01～B55]（本丸周辺）** 大海崎石と矢田石が大半を占める。他に少しの忌部安山岩が見られる石垣も約半数存在するが、B24、B25、B26、B31で8～12個見られるもの以外は6個以下である。森山石はB17で5個、B19で19個、B20で15個存在する。B19とB20では角石として使われている。花崗岩類はB17、B30、B32、B33、B40で見られるが、その数は少なく2個以下である。B33の花崗岩は中粒黒雲母花崗岩の割り石で、近世に補修されたものである。来待石はB50で2個、B04、B51、B52で4～9個見られる。

**[C01～C25]（腰曲輪、中曲輪）** 矢田石がもっとも多い。次いで大海崎石が多いが、Bに比べ忌部安山岩も多い。森山石がC08では50個と多量に使われている。C22では角石として12個使われている。C13、C14、C20では3～7個含まれ、C06、C12、C24では1～2個使われている。花崗岩はC03で2個、C05で5個使われている。島石や来待石は見うけられない。

**[D01～D21]（外曲輪：二ノ丸下ノ段）** 矢田石と大海崎石を主とする。D03～D08では大半は矢田石であるが、大きさが30cm以上の大海崎石を欠く。忌部安山岩はD16では半数以上を占める。D17では20個近く見られる。D20では3個、D14とD18では1個見られるに過ぎず、他の石垣に比べ少ない。森山石は見られない。花崗岩類はD16、D19、D21で1～2個見られる。島石はD17で9個、D18で5個、D21で3個、D01、D02、D14、D20でそれぞれ1個見られる。来待石はD02で7個、D18とD21で1個見られる。

#### [E01～E43] (二ノ丸周辺、三ノ門、中櫓、南櫓、廊下橋、外曲輪：馬溜)

矢田石、大海崎石、忌部安山岩がほぼ等量見られる。森山石はE38ではほぼ半分を占めている。E01とE33では17～20の森山石が使われている。E05、E24、E25、E30、E37、E39では1個の森山石が見られる。花崗岩類は以下の石垣で使用されている。E13では4個、E33とE40では3個、E03では2個、E08、E16、E19、E38では1個使用されている。島石はE02で3個、E19、E30、E34で1個使われている。来待石はE19で4個、E13とE15でそれぞれ3個使用されている。

#### [F01～F24] (外曲輪、後曲輪)

ほとんどが大海崎石と矢田石からなる。忌部安山岩はF05で1個のみである。森山石はF23で5個、F10で1個見られる。花崗岩類はF22で1個含まれる。島石はF21とF24でそれぞれ4個見られ、F18とF19で1個含まれる。来待石はF19で8個、F24で2個見られる。

## 4. 築城時とその後の修理、改修の石垣

### 4-1. 築城時の石垣とその石材

松江城に残る石垣は、堀尾氏による築城時に積まれた石垣、江戸時代に改修や災害復旧などによって積み直された城郭石垣、近現代に文化財や公園施設などとして積み直されたり、付加された石垣に別けて考えることができる。

築城時の石垣は、角石に長方体に近い大きな石を選び、その長辺を一段ずつ交互に振り分ける算木積みを指向するが、整った長方体に加工したものではないし、長辺の左右への振り分けも、不徹底な部分を含んでいる。直線部の築石は乱積みされ、横メジ（横目地：水平方向に延びる石材間の阡線で工程の単位を示す）を通すものではない。矢穴を設けてクサビで割った痕跡を残す石材を含むが、その上幅は10～10数cmあり、幅の狭い後の時期に調達された石材との違いとなっている。角石を中心にノミによる面加工を施し面の平滑度を高めた石材も含まれ、天守台のものは最も加工度が高く、量も多いが、それでも切石の域には達していない。またノミで様々な図形を刻印した石材を含むのも大きな特徴である。江戸時代で、築城時以降に積まれた石垣と比べると、全体として石材の形や大きさの規格化が進んでおらず、角石や築石を積んだ後に隙間に充填される間詰石が多い。なお間詰石は石垣のメンテナンスで後の時代でも挿入可能があるので、石材種の時代変化を考える上では注意が必要である。

以下は築城時に積まれた構造を今も概ね保っているとみられる代表的な石垣の石材種を順に確認していく。

天守台：昭和25年から始まる天守の修理で解体を受けた部分もあるが、西面（A07）の大部分や附櫓台（A01～03）は当初の構造を温存しているとみられる。解体修理を受けた部分も、一部に新規調達石材が加えられているとみられるが、多くは元の石材で積み直している。天守台や附櫓台石垣は矢田石が圧倒し、肉眼観察からして上半部も矢田石がほとんどのようである。ただ、当初構造を温存しているとみられる部分の築石にも少数の大崎石が混じるし、横から嵌め込み式で入れられた大形の間詰石にも大崎石が散見できる。また小形の間詰石では忌部安山岩が目立つ。大崎石の一部と忌部安山岩は天守修理時ないしはその後の補充材の可能性がある。なお、北面（A06）の西寄り上部には肉眼観察で島石とみられる石材が確認できるが、後の補修で隙間に嵌め込まれたものであろう。

本丸：本丸東辺のB14の北半からB18は大崎石が多くを占め、矢田石も含まれる。B14南部に少量入る忌部安山岩は、平成15・16年度の解体修理時に補充されたものである。

本丸南辺石垣（B11）うちの西寄りで、一ノ門脇で視覚的な効果を狙って立石が多数組み込まれた部位は、立石の全部を含めて大崎石が主体を占め、少量の矢田石を交える。なお、その東方で石が小型

化し、積み方が乱れる個所には森山石が1石あり、後の積み直しを受けた個所であることを示唆する。北東部B22～27のうち近代の修理個所を除く範囲も間詰石を除けば築城期の構造を温存している可能性が強い。一帯は矢田石が圧倒し、少量の大崎石を交える。

腰曲輪：北東部の水の手門跡付近の石垣は平成17・18年度の解体修理を経ているが、東面や北面の高石垣（C17～19）の中位以下は築城期の構造を保っている。矢田石が圧倒し、間詰石を中心に少量の大崎石が混じる。間詰石には3つほど花崗岩も確認できた。

二之丸：南東部の高石垣（E34～36）では、忌部安山岩が凡そ8割を占め、残りが矢田石である。この状況は肉眼観察による限り頂部までほぼ同じである。一方で大形の石材が求められる角石は矢田石が同等もしくは優位で、恐らく産状や石の特性に起因する使い分けがあったものと判断できる。なお、北東部のE39の西半やE40は後の積み直しを受けた個所もあるが、矢田石と忌部安山岩があい半ばし、ともに矢穴上幅が10cmを越えて築城期に調達されたとみられる石材があるし、東部の江戸後期に積み直された石垣（E37～E38）で築城期の構造を温存するとみられる基底部にも忌部安山岩が用いられている。

中曲輪：南端部にあって堀尾氏家紋の分銅文刻印が多数ある石墨（D03～08の西部）は、昭和55年度の全面解体修理を経ているが、石材は当時のものである。ここは、全石材が矢田石である。

東辺のD10からD16の南半までも、一部の頂部付近を除いて築城期の構造を保つとみられる。先の石墨に近いD10の南半部は矢田石が圧倒するが、その他の部位では、肉眼観察による上方部も含めて全体がほぼ大崎石に統一されている。ただし、東西に延びるD11の曲輪内の低い位置の石垣では、矢田石が混じる。

#### 4-2. 江戸時代の改修石垣とその石材

江戸時代に改修を受けた石垣は、いったん崩れた石垣を元の石材で元通りに積み直したようなものもあるが、積み方を変えたり、加工度が高い新規調達材を交えるなど、築城期の石垣と構造的に大きく変わることがある。これらの石垣の石は、築城期に比べて角石が方形によく整って、ノミによる面加工が徹底している。また整った算木積みになっているものもある。直線部の築石も含めて石材の大きさ・形のうえでの規格化が進み、石材が精緻に組まれて、間詰石が少ないか、全く施さないものが多い。特に江戸後半期とみられる石垣の直線部の積み方は、下方の築石の間にできた谷部に次の築石の角を下にして置く、落とし積みになっているものが多く、矢穴幅も数cmしかない。また、こうした構造的な特徴と松江藩による文献記録や絵図との照合から、現に残る石垣が積まれた年代が特定できるものがある。

本丸：本丸西辺の西側を向く各石垣（B35～39・41～44・47など）、一段下がった後曲輪の石垣（F01・03～05など）は原型は築城期のものとみられるが、部分的に後の積み直しを受けている。特に一部の隅角部は角石が方形に整い、面を粗加工して整えている。これらの石垣は加工度の高い角石を含めて大崎石が卓越し、少量の矢田石が混ざる。ただしB43は角石は大崎石であるが、直線部の築石は両者が相半ばする。

本丸東の祈祷櫓台石垣（B19・B20の南部）は角石が長方体によく加工され、算木積みも徹底しているし、典型的な落とし積みで、江戸後期の石垣である。すぐ背後には古い櫓台石垣が埋め込まれているとみられる。角石は森山石で統一されている一方、直線部は大崎石が主体を占めながら、森山石も交える。

腰曲輪：北西部の下段（C20の西半・C22）の加工度の高い角石は最下段の1石が大崎石であるのを除いて森山石が圧倒する。またC22側の角脇石には忌部安山岩が混じる。C20側の直線部は矢田石と大崎石が混在するが、少量の森山石も混じる。

北西部の上段(C 23、24)も加工度の高い角石を配するが、その角石は大海崎石が多いが森山石も混じっている。直線部は矢田石も含み、C 24側は忌部安山岩も混じる。上下段とも江戸後期の石垣とみられる。

二之丸：東側高石垣（北部を除く E 38）は加工度が高く規格が整った築石を落とし積みにする構造と文献史料との対比から、天保 3 年（1832）に大掛かりに積み直された石垣と判断される（松江市史編纂委員会、2018発刊予定）。築城期の構造を残す基底は忌部安山岩であるが、その上に積まれた加工度の高い石材は角石を含めて森山石が卓越し、1～2割の忌部安山岩を混じえ、少量の大海崎石も含まれる。この状況は肉眼観察による限り、頂部まで同様である。

千鳥橋北詰東方の石垣（E 33）は構造や文献史料との対比から嘉永 4 年（1851年）に積まれたものである（松江市史編纂委員会、2018刊行予定）。下部は積み方や石材の加工度が上部と異り、古い時期の構造を保っている可能性がある部分で、大海崎石が卓越し、少量の忌部安山岩が混ざるが、その上方に積まれて嘉永年間の新規調達材と判断できるものは、頂部まで森山石が卓越する。

二之丸南部の月見櫓跡の石垣（E 01～02）は構造や絵図から判断し、天保11年(1840年)に積まれたものと推定される。整美に加工された角石を含めて大海崎石が主体で、少量の矢田石や忌部安山岩が混じる。こうした天保期とみられる構造に対して石垣上部には横メジが通り、高さ 1 m ほどが二次的に嵩上げされたとみられるが、その部位は E 01側に森山石、E 02側に島石を含み、近代の造作である可能性が高い。

#### 4-3. 近現代に積み直された石垣

昭和25年からの天守上屋の修理に付随する石垣修理はその内容が比較的明らかであるが、それ以前の明治・大正から戦後間もなくまでの石垣修理については、記録が乏しく部位や内容がよく判らない。最大のポイントは解体を経ているのか、間詰石の補充程度のものであったのか。また、解体を経たとしても、元からある石材だけを積んだのか、新規調達材があったのかである。

その後の昭和の修理（松江市教育委員会、1996； p 34）では、本丸北西の稻荷櫓周辺（B 34・36～39など）では昭和34・35年に修理が行なわれている。昭和38年には腰曲輪の南東（C 06～08）も修理されているが、一帯は構造的に築城期のままでするには違和感がある。江戸から近代の何時の時点かに積み直しを受けている可能性が高い。今回の調査では矢田石を主体にしながら、少量の忌部安山岩と森山石を含むことが判った。先行してあった石垣の石材の再利用を主としながら、昭和の修理で森山石が混じり込んだ可能性もある。腰曲輪東南部の下段石垣（C 01～03）も昭和35・36年度に修理が行われている。この石垣は忌部安山岩が主体を占め、矢田石、さらに少量の大海崎石などを含む。構造的にみると昭和の解体を経ている可能性が強いが、古材流用が優先して現組成が古い石垣の組成を反映するのか、修理時に忌部安山岩を大量に持ち込んだ結果であるかは断定できない。各石材は矢穴を残さない亜円礫状の自然石で、調達時期を特定しにくい。

少なくとも平成に入ってからの石垣の解体修理（松江市教育委員会、2007）では、新規調達材は忌部安山岩である。解体修理が行なわれた部位で忌部安山岩が占める割合は、修理対象となった元の石垣の石材の傷み具合に応じた歩留まり率によって左右される。もちろん二の丸を中心に元から忌部安山岩を含む石垣もあるが、新規調達の忌部安山岩は割れた面が新鮮で矢穴痕をもたないことなどによって、容易に判別できる。二の丸東高石垣（E 38）の北半部、中曲輪北東隅付近（D 16の北半・D 17の東部）、二の丸の南入口付近（E 04～07、11、23～25）、二の丸の東口付近（E 20）などで忌部安山岩が卓越するのは、近年の解体修理に伴う新規調達材が相当数入っているからである。一方、本丸南東の武具櫓台石垣（B 11東部～B 14南部）は現状では忌部安山岩は大海崎石より少なく、さらに少量の矢田石も混在するが、これは、先の修理石垣よりは古材の歩留まり率が高かったからである。本来、この石垣は解体修

理を受けていない以北のB18までと同じく、大海崎石を主体に、少量の矢田石を交えたものであった可能性が高い。同様に本丸南東石垣（B24・25）も隅角部付近に限って忌部安山岩を含むが、やはり解体修理された部位に相当し、本来は矢田石が主体で、少量の大崎石を含むものであった。

#### 4-4. 石材種の年代や部位による変化

松江城石垣の石材は様々なものがあり、一見無秩序に混在している様に見えるが、積まれた時期の判定を行いながら、確実性の高い部分に絞って検討すると、年代や部位によって変化があることが分かる。

築城期の石垣石材の基本は、矢田石、大海崎石、忌部安山岩であった。この3種は分布に偏りがあって、それぞれ主体を占める部位が指摘できる。後世に積み替えられた部位での古材とみられる石材も勘案しながら、概観すると次の様になる。

矢田石が主体を占めるのは天守台と、本丸及び腰曲輪の南東部である。また中曲輪南石垣でも独占状態であるし、その隣接地であるD09や中曲輪側D10の南部でも卓越し、石垣対面の二の丸側E39も多い。最重要の天守台や大手登城路に面して堀尾家家紋を誇示する石垣が矢田石であることは、最も重視された石材は矢田石で、最も精緻に積まれた石垣もこの石を用いているといえる。

大海崎石が主体を占めたとみられるのは、本丸・腰曲輪では北東部以外である。当初の石垣構造を保つとみられる南東部はもとより、南辺、東辺、北西部の現状での石材分布状況からすれば、築城期からそうであった可能性が高い。ただし、これらの部位の大崎石は少量の矢田石と混在する。次に、中曲輪東辺は南端部を除く全体が、また今回の調査対象外であるが、外曲輪（二之丸下ノ段）も南辺・東辺・北辺のほぼ全体が大海崎石の独占状態となる。いま県庁が建つ三之丸の石垣も多くはこの大海崎石である。つまり松江城の築城に最も大量に用いられた石材は大海崎石で、二之丸内でみて矢田石の3～4倍はあると見込まれるが、成形・面加工や積み方の上では緻密さに欠け、雑多な使われ方をしているともいえる。

忌部安山岩が主体を占めるのは二之丸である。大手道に面する北面部や江戸後期に積まれた石垣基部の状況からすれば、築城期の二之丸の少なくとも高石垣全体がこの石を主体にしながら、角石などを中心に矢田石を交えたものであった可能性が高い。二之丸石垣は高さ14mを越えて、忌部安山岩は少量の矢田石とあいまって城内で最も高い石垣を実現している。なお今回の調査対象ではないが、二之丸南東高石垣に接合する馬溜り南石垣の西寄りにも築城時からとみられる忌部安山岩の集中が確認できる。この石は築城期の状況を復元すると、二之丸内でみて矢田石と同等かやや少なかったとみられる。

その他、花崗岩は他の石材に比べ少なく、また近代に使用されたものが多いが、腰曲輪南東石垣（C05）などでは基底近くにあって、築城期から含まれていた可能性がある。

江戸前半期の石垣改修に新規調達材として持ち込まれた石材の状況は良く分からぬが、その可能性がある石材が分布する本丸西辺やその下方の石垣の状況からすると、大海崎石が主体であった可能性が考えられる。

江戸後半期の新規調達材には森山石と大海崎石があった。森山石の使用は遅くとも二之丸東石垣が改修された天保3年（1822）には始まっていたと判断できる。この石垣や千鳥橋北詰東方石垣では新規調達石材の多くがこの石材であった可能性が高いのに対し、本丸荒神櫓石垣では森山石は角石を中心に用いられてはいるが、他部は大海崎石主体で、石材種の使い分けが行なわれている。また腰曲輪南西の上下二段の隅角では、やはり角石を中心とした森山石が選択的に用いられていた。隅角部は頑丈さと精緻さ、そして美しさが求められ、加工が容易なこの石が選ばれたのであろう。二之丸東石垣と同じ天保年間の石垣でも、二之丸南の月見櫓跡石垣は大海崎石主体である。江戸後半期に忌部安山岩や矢田石が積極的

に用いられた形跡はなく、忌部安山岩の使用は築城期から途切れて近年に復活したといえる。

以上のほか、松江城全体としてごく少量認められる島石や来待石は、その設置部位などからして近現代に運び込まれたものと考えられる。



図28 石垣E38では右側（北側）に忌部安山岩（暗灰色の石）が多く見られ、左側（南側）は森山石（明灰色の石）が多く使われている。忌部安山岩は近代の補修によるものである。

## 5. 石垣をめぐる諸問題

### 5-1. 石垣の諸特徴

#### 1) 矢田石、大海崎石、森山石、忌部安山岩、忌部御影の諸特徴と使われ方

石垣に使われている岩石は天守台では矢田石が最も多く、88%に及ぶ。矢田石は緻密で硬いことから、他の石垣では整形していないものが多いが、天守台ではノミなどを使って整形しているものも多い。大きさは1m程度の石も使用されている。矢田石は石垣B、Cにおいても多用されているが、ここでは整形していない角がとれた亜円礫が多い。前述のように現在、矢田石の産地では露出している岩石は非常に少なく、また、東光台の団地が広く占めている（図5）。しかし、江戸時代にはこの丘付近で亜円礫状の自然石が多く産出していたものと推定される。

大海崎石も矢田石とともに多用されている。大海崎石は角がとれた自然石もあるが、矢田石に比べさほど堅牢ではないことから、整形されたものも多い。B11では2mを超えるような大きな大海崎石が使われている（図14）。

森山石はE25やE33で多用されている。B19では隅石として使われている。森山石のうち礫岩は塊状であるが、整形しやすいことから、角石として使われたのであろう。

上記の矢田石、大海崎石、森山石はいずれも水辺にあり、船で運ぶことが容易であった（図1）。

今回の調査で、識別できる範囲内でも、49個に及ぶ30cm程度の大きさの花崗岩が石材として使われていることがわかった。花崗岩のうち、例えばB32、B33、B40などで使われている中粒黒雲母花崗岩は割石であり、新鮮なことから最近の補修によって使われたものであろう。しかし、B11、B17、C02、C

03、C05、C17、D16、E02で使われている花崗岩は亜円礫であり、風化も進んでいる花崗岩が使われている。中には石垣の最下位に見られるものもあり、近年の修復に際して使われたものとは考えにくい。花崗岩は中粒の黒雲母花崗岩とアプライト質花崗岩からなる。忌部川河口付近には石垣に使用されているものとサイズ的に近い花崗岩礫が散在している（図30）。種類は中粒黒雲母花崗岩とアプライト質花崗岩であり、帶磁率も石垣のものと近い値を示す（表8）。忌部川沿いには忌部花崗岩が広く分布していることから、それらに由来するものと推察される。

忌部安山岩は近年の修復に多用されているが、今回の調査によって、江戸時代を特徴づける矢穴を持つ忌部安山岩がC01、C02やC06でも見つかっている（図29）。忌部花崗岩と同様に忌部川沿いには礫として多数見られることから（図30）、陸路を長距離運ばなくとも水路を利用して城にもちよることは可能である。

## 5-2. 表立った古い石垣に使われていない石：嫁ヶ島、来待石、島石

前述のように島根県学務島根県史編纂掛編（1930）「島根県史」によれば松江城の石垣の石材として嫁ヶ島を始めとして川津や大井の松江層の石、すなわち玄武岩が使われたとされている。しかし、島根県史（1930）の記述は伝聞によるもので、その信憑性については疑義も出されている。城壁に使われている松江層由来の石は矢田石であるが、これは緻密な粗面安山岩であり、玄武岩ではない。特に嫁ヶ島の玄武岩は発泡しており、矢田石とは明瞭に区別される。従って、少なくとも石垣として表立って見える範囲には江戸時代に使われたと推定される嫁ヶ島や他地域の松江層の玄武岩は使用されていない。同様に島石（大根島・江島の玄武岩）も使われてはいない。来待石は、近年、水路や階段に使用されているものや、石垣としてはごく新しい時代の補修に使われているものの、古くは表立った石垣には使用されていない。しかし、これらの石は石垣より奥にバラス（裏込石）として使われている可能性は否定できない。松江城は亀田山を整備して築かれたが、例えば本丸南東側では石垣の内部に松江層堆積岩の欠損部があり、そこは裏込石で埋め立てている可能性もあり、それらの物質についても調べる必要がある。

## 5-3. 今回の調査で明らかになった新知見

### 1) 古い時代の花崗岩の使用

松江城の石垣において花崗岩はごく最近の補修でB32やB40などで中粒黒雲母花崗岩が使用されているものの、古い時代における使用例は報告されていない。しかし、今回の調査によってC02、C03、C05、C20、D16、E03、E33、E34、E36、E38、E40で中粒～細粒黒雲母花崗岩やアプライト質花崗岩が確認されたが、それらは大きさが数10cm程度の亜円礫状の自然石で、いずれも石垣の下位に存在し、後世の修復で使われたとは考えづらい。帶磁率はC02では $0.11\sim0.22 \times 10^{-3}$ SIと著しく低いアプライト質花崗岩であった（表8）。C05では中粒～細粒黒雲母花崗岩が $1.5\sim3.2 \times 10^{-3}$ SIで、アプライト質花崗岩が $0.65\sim0.85 \times 10^{-3}$ SIと $0.02\sim0.07 \times 10^{-3}$ SIであった。忌部川河口付近の転石の中には松江城の石垣に見られるような角がとれた直径数10cmの亜円礫が分布している（図30）。これらの中には $2.4\sim5.1 \times 10^{-3}$ SIの帶磁率を示す中粒黒雲母花崗岩があり、また、風化した中粒黒雲母花崗岩の帶磁率は $0.20\sim0.35 \times 10^{-3}$ SIであった。アプライト質花崗岩は $0.22\sim1.4 \times 10^{-3}$ SIや $0.09 \times 10^{-3}$ SI以下の低い帶磁率を示すものもあることから、これらの花崗岩（忌部花崗岩）礫が石垣として利用された可能性は大きい。

### 2) 江戸時代に使用された古い矢穴をもつ忌部安山岩

忌部安山岩は明治時代以降の石垣の補修には多量に使われているが、今回の調査で江戸時代のものと推定される矢穴を持つ忌部安山岩がC01、C02、C06、E34～36、E39～41などで発見された（図29）。

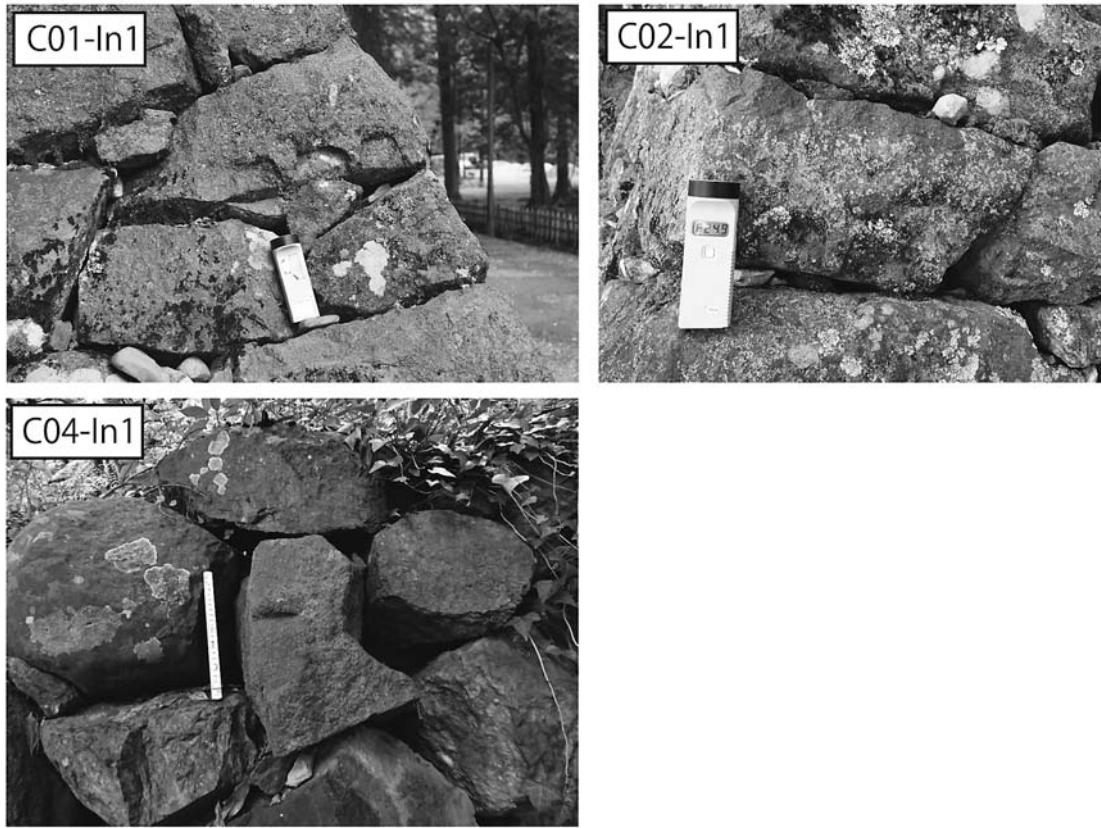


図29 C01、C02、C04で見られる松江城築城期に使用された矢穴を示す忌部安山岩。

## 6. ま と め

(1) 昭和25年から30年にかけて実施された松江城天守の解体修理の際に採取された天守台の岩石（矢田石と大海崎石）と偏光顕微鏡観察用の岩石薄片（プレパラート）40個（いわゆる山口鎌次標本）が松江歴史館に保存されていることがわかった。それらの岩石について肉眼で観察するとともに、岩石薄片の記載を行った。結果は山口鎌次教授が1955年に報告した内容と基本的に同じであった。本報告で岩石標本と代表的な岩石の偏光顕微鏡の写真を掲載した。

(2) 松江城石垣に使われている主要な岩石である矢田石、大海崎石、忌部安山岩、森山石について産地に出向き、帶磁率測定を行い、岩石を採取し、顕微鏡記載、岩石の化学組成分析を行った。

矢田石は約1200万年前の松江層中の斑状单斜輝石－普通角閃石粗面安山岩溶岩である。大海崎石は嵩山や和久羅山を構成する約600万年前に形成されたドーム状溶岩として産する無斑晶質デイサイトである。忌部安山岩は約1450万年前の大森層中に産する斑状斜方輝石・单斜輝石安山岩溶岩である。なお、「忌部石」とされるものには花崗岩や花崗閃緑岩もあり、混乱を招くことから忌部周辺に分布する安山岩を「忌部安山岩」、花崗岩を「忌部花崗岩」と呼ぶことを提案した。森山石は島根半島に産する約1900万年前の古浦層の礫岩・砂岩である。現地では「海石」と呼ぶ人もいるが、ここでは地名を付した方が良いとの判断で「森山石」とした。

(3) 肉眼観察と帶磁率測定によって天守、本丸、二ノ丸における石垣に用いられている石材を判定した。天守台に関しては帶磁率測定のほか、高所では双眼鏡を用いて判定した。その結果、大きさが40cm以上の石材については矢田石（88.5%）、大海崎石（9.6%）、忌部安山岩（1.9%）であった。忌部安山岩は近代における補修石材と考えられるので、築城時の石材としての矢田石と大海崎石の比率は前者が

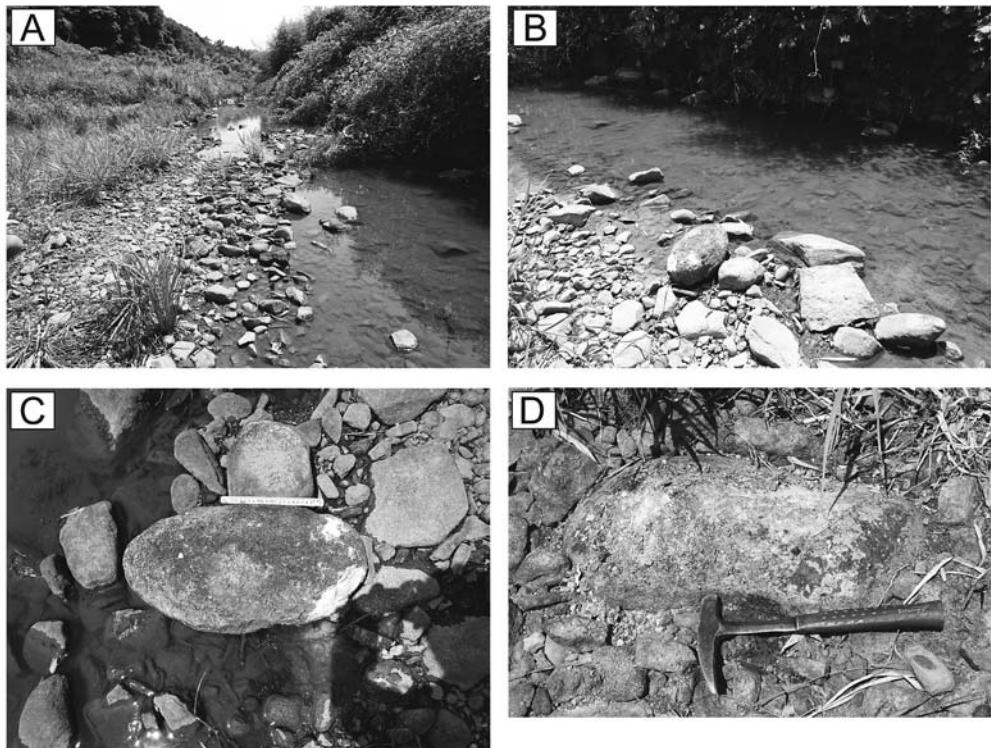


図30 忌部川河口付近の河原に多数分布する礫（A、B）。ほとんどが忌部安山岩であるが、花崗岩礫も含まれる（C、D）。忌部安山岩は亜円礫が多いが角張ったものもある（B）。花崗岩礫のほとんどは亜円礫であるが（C）、亜角礫状のものも見受けられる（D）。

9割、後者が1割ということになる。

B～Fに関しては地表からおよそ3～4mの高さまでの石材を判定した。詰石を除いて使用されている石材は大海崎石が最も多く、ついで矢田石である。忌部安山岩も多用されている。一部で築城期の矢穴を持つ忌部安山岩も見られる一方、近代の補修、改修の際に用いられたものも多い。これらの他に、森山石、花崗岩、来待石、島石が見受けられる。使用場所からみて来待石や島石は近代の補修に用いられたものと考えられる。

(4) 今回の現地調査の結果、石垣の構造上の特徴や幅に広い矢穴から築城期に用いられたと推察される忌部安山岩があることが判明した（図29）。また、近代の補修によって使われたと考えられる中粒黒雲母花崗岩の他に、江戸時代、あるいは築城時に使われたと考えられる花崗岩（中粒黒雲母花崗岩とアプライト質花崗岩）が発見された。花崗岩は直径が数10cmの角がとれた亜円礫状のものである。忌部川の河口付近には多量の忌部安山岩とともに、上流に広く分布する忌部花崗岩由来の亜円礫の転石が散在する（図30）ことから、これらが用いられた可能性が高い。1930年刊行の島根県学務島根県史編纂掛編「島根県史」に石垣に使用されていると書かれている嫁ヶ島や宍道湖北側から川津にかけて分布する松江層の玄武岩は石垣の表立ったところには使われていないが、裏込石として使われた可能性は否定できない。

(5) 松江城の石垣で江戸時代に用いられたと推定される主な石材は大海崎石、矢田石、森山石である。これらはすべて船で運ぶことが可能な地域である。矢田石の分布地である東光台は現在は団地となり、江戸時代の面影はないが、当時は矢田石が広く分布していたものと推察される。矢田石は天守台では割石が多く用いられているが、他の石垣ではほとんどが角がとれた亜円礫状の自然石である。これらは転石として矢田周辺に多数存在していたのであろう。忌部安山岩や古い時代に用いられた花崗岩は矢田川

の河原由来と推察される。

## 7. 謝　　辞

松江市歴史まちづくり部史料編纂課の稻田　信課長には松江城の石垣調査にあたってさまざまな便宜をはかっていただいた。岡崎雄二郎氏には石垣調査にご同行して頂き、石垣についてご教示頂いた。松江歴史館の木下　誠氏には歴史館に保存されている松江城天守の岩石（山口鎌次標本）の肉眼や顕微鏡観察にあたり、便宜をはかっていただいた。松江市歴史まちづくり部まちづくり文化財課の飯塚康行室長には石垣オルソ図と石垣図面の使用にあたってお世話になった。株式会社藤井基礎設計事務所および同所員の永海飛鳥氏にはドローンによる東光台の空撮を行っていただいた。帯磁率計の使用にあたっては島根大学総合理工学部の亀井淳志教授にお世話になった。栃木県立博物館の河野重範博士には森山石の採石場跡地の写真を提供して頂いた。以上の方々に感謝します。

### 引用文献

- 鹿野和彦・竹内圭史・高安克己・松浦浩久（1991）今市地域の地質. 地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）. 地質調査所. 30p.
- 鹿野和彦・山内靖喜・高安克己・松浦浩久・豊　遙秋（1994）松江地域の地質. 地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）. 地質調査所. 126p.
- 川井直人・広岡公夫（1966）西南日本新生代火成岩類若干についての年代測定結果. 地質学会等4学会学術大会総合討論会資料「年代測定結果を中心としてみた日本の酸性岩類の形成期」. 5.
- 松江市（2012～2015）石垣の概要図とレーザーオルソ図.
- 松江市教育委員会（1983）史跡松江城（昭和57年度保存修理事業報告書）. 31p.
- 松江市教育委員会（1996）石垣調査報告書－史跡松江城－. 156p.
- 松江市教育委員会（2001）史跡松江城整備事業報告書. 松江市文化財調査報告書、第88集、199p.
- 松江市教育委員会（2007）史跡松江城石垣修理報告書. 松江市文化財調査報告書、第111集、199p.
- 松江市史編纂委員会（2018刊行予定）『松江市史』別編1「松江城」
- 松江城天守修理事務所（1955）重要文化財松江城天守修理工事布告書. 71p.
- 松尾　寿（2008）城下町松江の誕生と町のしくみ. 松江市ふるさと文庫、5、122p.
- 乗岡　実（2014）松江城石垣の構造と年代. 松江市史研究、第5号、51-70.
- 乗岡　実（2017）石垣と瓦から読み解く松江城. 松江市ふるさと文庫、19、104p.
- 岡崎雄二郎・飯塚康行（2007）松江城の石垣と産地. 日引、10、54-61、石造物研究会.
- 沢田順弘（2000）顕微鏡で覗いた来待石. 来待ストーン研究、2、15-42.
- 沢田順弘・門脇和也・藤代祥子・今井雅浩・兵頭政幸（2009）大山・大根島：山陰地方中部の対照的な第四紀火山. 地質学雑誌、第115巻、補遺、51-70.
- 島根県学務島根県史編纂掛編（1930）島根県史9、島根県、611p.
- 新編島根県地質図編集委員会（1997）新編島根県地質図.
- 新宮敦弘（2016）松江城の石垣の石材とその起源. 島根大学地球資源環境学研究報告、34、105-115.
- 山根正明（2009）堀尾吉晴－松江城への道. 松江市ふるさと文庫、6、118p.

(しんぐう　あつひろ　藤井基礎設計事務所)  
(さわだ　よしひろ　松江市文化財保護審議会委員)  
(ふるかわ　ひろこ　来待ストーン・ミュージアム)  
(のりおか　みのる　岡山市教育委員会文化財課課長)

# 〈史料紹介〉明治8年以前の城郭施設を描いた「旧松江城図面」と類似の絵画資料

和田嘉宥・岡崎雄二郎・稻田 信

## 1. はじめに

『島根縣史』に「明治八年五月広島鎮台は工兵大尉斎藤直演を派出し千鳥城の諸建造物並に三ノ丸殿を入れ札払とし之を取去らしめんとす、(中略)元出雲郡の豪農勝部本右衛門藩士高城権八等と相議り落札高の金を納めて天守閣破壊は辛ふじて免れたるも其他の建造物は日ならずして解き払はれ荒涼たる廃墟を現出せり」と記されたように<sup>(1)</sup>、今日、松江城天守を除き、松江城の城郭建物は残っていない。また、明治8年(1875)以前に撮影され、松江城天守と、本丸、二之丸、三之丸に所在した城郭建物の一部が写る古写真は、現在確認出来る限りわずか5枚である<sup>(2)</sup>。さらに、現在、松江城下絵図は216点、松江城郭図は26点、城郭建物図は36点が確認されているが<sup>(3)</sup>、松江城の城郭建物の姿はほとんど分かっていない。このような中で、松江歴史館に所蔵される「旧松江城図面」は明治42年(1909)頃に作成された絵画資料ではあるものの、松江城本丸、二之丸、三之丸と、建ち並ぶ松江城城郭建物の姿を南東上空から俯瞰して描いており、明治8年以前の城郭建物の実態を彷彿させるものとして知られている。ここでは、「旧松江城図面」と、類似の絵画資料について紹介する。

## 2. 「旧松江城図面」(松江歴史館蔵)について

松江歴史館に所蔵される「旧松江城図面」(写真1)は、資料台帳によれば平成10年(1998)2月16日に松江市内の金川美術店から松江郷土館収蔵資料として購入され、松江歴史館の設置に伴い同館に移管された。其箱があり、軸装されてはいないが「三の丸御殿見取図」も軸に巻かれる形で収められていた。

画は厚手の和紙に描かれ、軸装されている。画の寸法は縦60.2cm、横127.0cm、巻物の寸法は縦64.1cm、横180.5cmである。城郭建物は、鳥口、或いは竹ペン、細筆のような製図用の筆記用具を用いたのであろう、定規を使ったりして細い墨の線で細密に描かれている。石垣は、建物を描いたと同じような筆記用具を用い、薄墨で描かれている。松の葉や草などは筆を用い、墨、薄墨で描写されている。

画に署名、落款は無いが、其箱蓋の表面には「旧松江城図面」、裏面には「明治四十二年十二月 安立房次郎ヨリ献上」と墨書されている(写真2)。箱書きから、本画の名称は「旧松江城図面」であり、明治42(1909)年12月に安立房次郎から「献上」されたものと分かる<sup>(4)</sup>。軸には「旧松江城之図」と墨書された題箋が張り付けられており、題名や書きぶりが箱書きと異なることから、房次郎が献上時に付した題箋、或いは後に補われた後題箋などが考えられる。

安立房次郎であるが、歴史館所蔵史料に馬場豊春著「番匠秘書」がある。これは、松江藩御作事所に勤めていた11代馬場佐々右衛門豊春が書き記したものである。馬場佐々右衛門豊春は松江藩の御大工であったが、明治2年(1869)10月28日には藩の番匠指南役になり、明治4年(1871)の廢藩置県後は松江県に勤め、宮繕関係の仕事を行い、明治15年まで島根県に籍をおいていた人物である。この「番匠秘書」の中には、「一四ツ足門 山村唯一郎 一同 上村基一 一正殿造 児玉仲太郎 一同 山村和一郎(中略) 一正殿造 安達房次郎(後略)」と、建物名とそれを担当した人物17名の氏名が記されている。これらの人物は多くが、松江藩御作事所の大工であったと推察できる。安立房次郎は、明治42年の田中昌蔵の書簡(資料1)には「老年」とあり、幕末から明治初期には、松江藩に勤め、馬場佐々右

衛門の下で作事に関わる仕事に携わっていた大工「安達房次郎」と同一人物と思われる。

ところで、房次郎が「旧松江城図面」を「献上」した相手は誰であろうか。「安立房次郎ヨリ献上」という表現を用いていること、房次郎の末裔・安立昌平家に松平家家扶田中昌蔵からの明治42年12月22日付書簡（礼状）が伝わること（写真7、資料1）、さらに書簡の文中には箱書と同じ「松江城図面」の表記があることから、房次郎が「献上」した相手は、旧松江藩主家の松平家（当時の当主は松平直亮伯爵）と考えられる<sup>(5)</sup>。また、房次郎が描いたという出雲大社千家国造家鳥瞰図と学校らしき建物鳥瞰図が安立昌平家に伝わっており（写真6）、描写技法の共通性から、「旧松江城図面」は房次郎本人が描いたものと推定できる。

安立昌平家に伝わる過去帳によれば、房次郎は大正12年（1923）1月24日に享年86歳で亡くなっていること、山村平蔵の次男で、7歳の時に安立家に入ったことが分かる。このことから逆算すると、房次郎は天保9年（1838）生まれで、廃藩置県の明治4年は34歳の時、天守を残して他の城郭建物が取り壊された明治8年は38歳の時、松平家に画を献上した明治42年は72歳の時である。房次郎は38歳という壮年期まで、松江城の城郭建物を実際に見ることができ、72歳という「老年」になってから、記憶を頼りに描いた「旧松江城図面」を旧藩主家の松平家に献上したことになる。

本画は、全体に横長で本丸、二之丸、三之丸と三之丸前の道路を隔てて御厨、御作事所が城郭の南東斜め上から見下ろす角度で描かれた鳥瞰図である。本画の左下には「松江亀田千鳥城 明治八年五月廃城」と記されているところから、廃城前の松江城の姿を描いた絵画資料であることが分かる。

本丸には天守の他には石垣に沿って多門、櫓、瓦堀が描かれている。二之丸には、奥（西）に月見櫓と御広間、北に長局、手前（東）に書院、御玄関、高石垣の上には南櫓、中櫓、太鼓櫓が描かれている。外曲輪（二之丸下ノ段）には南惣門に入ったところに天守鍵預の居宅と、米蔵が建ち並んでいる。その北側は2棟の長屋で囲まれた空き地で「荻田長屋」と記されている。空き地には鳥居が描かれているが、ここに荻田稻荷社があったことを示している。手前には北惣門がある。三之丸は、表門を入れると玄関、その奥は中ノ口、御用所、台所は総二階建てになっている。玄関の南には広間、書院があり、その奥に、囲炉裏ノ間、対面所、その奥が居間及び寝所の建物である。北西部の建物はいずれも「局」とある。三之丸は堀に囲まれてほぼ方形で、北側、西側、南側に御廊下橋が描かれており、それぞれ二之丸、御花畠、御鷹部屋に連絡する。北西端には助次橋があり、その手前には二階建ての門が描かれている。

しかし、細部を観察すると、天守附櫓の屋根が二重であったり、二之丸の中櫓と南櫓の間に存在しない櫓が描かれるなど、実際の城郭建物とは異なる箇所も見られ、記憶による描写の限界も確認できる。

### 3. 類似の絵図について

現在、松江歴史館所蔵の「旧松江城図面」に類似する絵図が3点確認されている。安立昌平氏所蔵の「松江城郭図」、松江歴史館所蔵の「松江亀田千鳥城図」、兵庫県立歴史博物館所蔵の「出雲国松江城図」である。

#### （1）「松江城郭図」（安立昌平氏蔵）

「旧松江城図面」（松江歴史館蔵）と類似する「松江城郭図」（写真3）は、安立房次郎の末裔・安立昌平家に伝わった<sup>(6)</sup>。安立家には、前述の通り松平家家扶田中昌蔵からの明治42年（1909）12月22日付書状（礼状）と、房次郎が描いたという出雲大社千家国造家鳥瞰図と学校らしき建物鳥瞰図が伝わっており、「旧松江城図面」、「松江城郭図」は房次郎本人が描いたものと推定できる。

画はやや厚手の和紙に描かれ、軸装されている。画の寸法は縦60cm、横124.3cm、巻物の寸法は縦

62.6cm、横157.9cmである。描写技法は「旧松江城図面」(松江歴史館蔵)と同様である。

堀が薄い紺色で塗られているだけで、描写内容、描写範囲は「旧松江城図面」とほぼ同じであるが、左下に「明治八年の千鳥城」と題し、「慶長十六年に建設せられ風餐雨沐幾世か雲州人士を護れるもの。時なるかな時勢は遂に明治八年五月十九日を以て天守閣のみを残して他を取去るべく余儀なくしたるなり頃日連載せる『千鳥城』の稿を閉づるに当りて当時の写真に依り茲に掲出して往年の惨景を偲ばんとするなり」と記す新聞記事が貼られている<sup>(7)</sup>。記事は松陽新報に明治39年(1906)4~5月頃掲載されたものである。このことからも、「松江城郭図」は「旧松江城図面」と近い時期に描かれた図であろう。

### (2) 松江亀田千鳥城図(松江歴史館蔵)

「松江亀田千鳥城図」(写真4)は、松江城本丸内の復元多門櫓内に所蔵されていた資料で<sup>(8)</sup>、松江歴史館開館に伴い昭和25~30年解体修理時の関連資料などとともに、松江歴史館に移管された。本丸復元多門櫓内収蔵資料の資料台帳「重要文化財・松江城資料台帳」(松江歴史館蔵)によれば、昭和35年(1960)2月10日に郷土史家であった曾根研三から松江市に寄贈されたことが分かる。しかし、本図作成のいきさつや、曾根がどのような経緯で入手し、松江市に寄贈したかは不明である。

画は丁寧に裏打ちされており、軸装はされていない。寸法は縦74.3cm、横151.0cmである。紙質は前述の、松江歴史館所蔵の「旧松江城図面」、安立昌平氏所蔵の「松江城郭図」とは異なり、薄葉紙3枚(縦74.3cm×横48cm、横54cm、横49.5cm)をつないで描かれている。なお、画が描かれた薄葉紙は画の右側に欠損が多く認められることから、もともと薄葉紙に描いた状態で保存され、痛みが生じた後に裏打ちされたのではないだろうか。描写技法や描写内容、描写範囲は「旧松江城図面」、「松江城郭図」と同様で、この画も明治42年頃に安立房次郎が描いたものではなかろうか。

### (3) 「出雲国松江城図」(兵庫県立歴史博物館蔵)

「出雲国松江城図」(写真5)は、御花畠や御鷹部屋を加え、さらに彩色した図である。画の寸法は縦77.5cm、横218cmである。御花畠の南には庭園に囲まれた御殿が描かれ、その一部に「観山御殿」と記されている。この建物が描かれている位置は南方御殿であるが、或いは「観山御殿」の姿を表現しているのかもしれない。三之丸の、堀を挟んで南には新御殿、御金蔵が描かれている。右下に「一磨写」と記されているが、これは版画家・織田一磨(1882~1956)と思われる。織田一磨は大正11年、心臓病を患った後、家族の離散もあり、単身山陰地方へ漂白の旅にてた。一磨が松江に仮寓したのは大正11年(1922)11月から大正14年(1925)11月までの3か年である。この図は「旧松江城図面」、「松江城郭図」など、安立房次郎が描いた松江城の鳥瞰図のいずれかを基に、この頃に描かれたものと思われる。

## 4. おわりに

松江藩御作事所の大工であったと推察できる安立房次郎は、役柄松江城の旧觀をよく知る人物であったと考えられる。松江歴史館所蔵の「旧松江城図面」を旧藩主家に献上するにあたって、城郭内にあった建物などを記憶の範囲で忠実に描こうとしたのだろう。

類似の「松江城郭図」(安立昌平氏蔵)、松江亀田千鳥城図(松江歴史館蔵)と比べると、「旧松江城図面」はより丁寧に描かれている印象を持つ。察するに、これらの図面は、房次郎が明治四十年頃に松平家から依頼されて何枚か制作し、内一枚(旧松江城図面)を献上図として松平家に納め、「松江城郭図」を記念、あるいは控えとして手元に置きとどめたのであろう。これらは記憶を頼りに描かれているためか、実際にあったものとは異なるところもあるが、厚手の和紙やトレーシングペーパー、そして鳥口など近代的な画具を用いて、精密に、丁寧に、松江城の全体像が分りやすく描かれている。

## 注

- (1) 野津左馬之助1930『島根縣史』九「藩政時代下 明治維新期」島根県
- (2) 稲田信、福井将介「松江城天守古写真考－「明治初年」とされてきた荒廃した松江城天守古写真について－」『松江市歴史叢書』9 松江市
- (3) 大矢幸雄、和田嘉宥「松江市域の絵図・地図目録（中間報告）」『松江市歴史叢書』9 松江市
- (4) 展示の折にでも松江郷土館によって作成されたのであろうか、「旧松江城図面」の共箱には2枚の題箋が入っており、題箋には「松江城俯瞰図 明治8年 安立房次郎（元松江藩大工棟梁）監修」、「松江龜田山千鳥城図 1875年（明治8年）、松江城廃城直前の様子を元松江藩の大工棟梁であった安立房次郎の監修のもと描かれたとされている。」と記されている。題箋に記された内容の根拠は分からぬが、購入頃の何らかの伝承あるいは推測を反映したものであろうか。
- (5) 安部吉弘氏からは、明治42年頃に「献上」という表現を使うのは、旧藩主（家）への「献上」以外考えにくくご教示をいただいた。書簡（資料1）によれば、安立房次郎は東京四谷区の松平邸を訪れ、田中昌蔵と面会しており、「旧松江城図面」作成のきっかけは、房次郎からの提案、或いは松平家側からの依頼という両面が考えられる。いずれにしろ、図面を旧主家に献上するにあたって、松江城の旧観を知る房次郎は、城郭内にあった建物などを記憶の範囲で忠実に描こうとしたのだろう。「旧松江城図面」がどのような経緯で献上先より流出したかは明らかではない。また、「旧松江城図面」の共箱に収められた「三の丸御殿見取図」と同様の絵図が足立昌平家にも伝来しており、「旧松江城図面」に付して献上されたとも考えられ、興味深い。
- (6) 島田成矩1975「松江城の城郭について」『島根県文化財調査報告』第10集島根県教育委員会、史跡松江城整備検討委員会1993『史跡松江城環境整備指針』松江市に紹介。島田は、松平家家扶田中昌蔵から安立房次郎に宛てた明治42年12月22付書簡を紹介するとともに、房次郎と本図について、「当主（安立明平氏）に聞くと、房次郎氏は当主の祖父にあたる人であって、幕末から明治初年にかけて松江城の御大工であったという。したがつて建造物についての知識は深いものがあったわけで、本図の各所に専門的な作風がみられるのである。そのような意味で建造物の姿は高く評価できる」とする。
- (7) 郷土史家奥原碧雲が作成した新聞切抜帳（スクラップブック）には、岡田射雁が明治39年（1906）4～5月頃に松陽新報に連載した「維新時代のはなし 千鳥城と其城下」が切抜かれており、連載記事の最終頁に「明治八年の千鳥城」と題したこの記事が貼付けられている。この記事には署名はないが、碧雲による記事切抜・貼付（スクラップ）状況と、「稿を閉ざるに当りて当時の写真に依り茲に掲出して往年の惨景を偲ばんとするなり」と記されることから、射雁による記事と考えてよいだろう。「明治八年五月十九日を以て天守閣のみを残して他を取去るべく…」という日付は、射雁の連載記事を信頼すれば、松江城城郭施設取り払いのための入札日だったようである。射雁の「維新時代のはなし 千鳥城と其城下」は、野津左馬之助による『島根県史』や後の刊行物の記述に大きな影響を与えたが、昭和8年（1933）刊行の『郷土資料 島根叢書第1篇』（島根県教育会）に「千鳥城の築造とその城下」として再録されるにあたり、記事欠落の具合から編者奥原碧雲が自身の新聞切抜帳を基に再録原稿を編集した可能性が考えられる。
- (8) 島田成矩1975「松江城の城郭について」『島根県文化財調査報告』第10集 島根県教育委員会

[明治8年以前の松江城の城郭建物の姿はほとんど分かっていない。本稿は、松江歴史館に所蔵される「旧松江城図面」と、類似の絵画資料について、明治8年以前の松江城の城郭建物の実態を正確に描こうとしたものとして史料紹介するものである。稿作成にあたり、安立昌平氏には「松江城郭図」と安立房次郎氏について貴重なご教示を、堀田浩之氏には「出雲国松江城図」（兵庫県立歴史博物館蔵）に関する情報提供を、伊藤孝一氏には資料の撮影を、新庄正典氏には松江歴史館所蔵資料調査への便宜を、小山祥子氏には田中昌蔵から房次郎への書簡（安立昌平氏蔵）の翻刻をいただいた。記して感謝いたします。]

（わだ よしひろ 米子工業高等専門学校名誉教授）

（おかざき ゆうじろう 松江城部会専門委員）

（いなた まこと 松江市歴史まちづくり部史料編纂課課長）

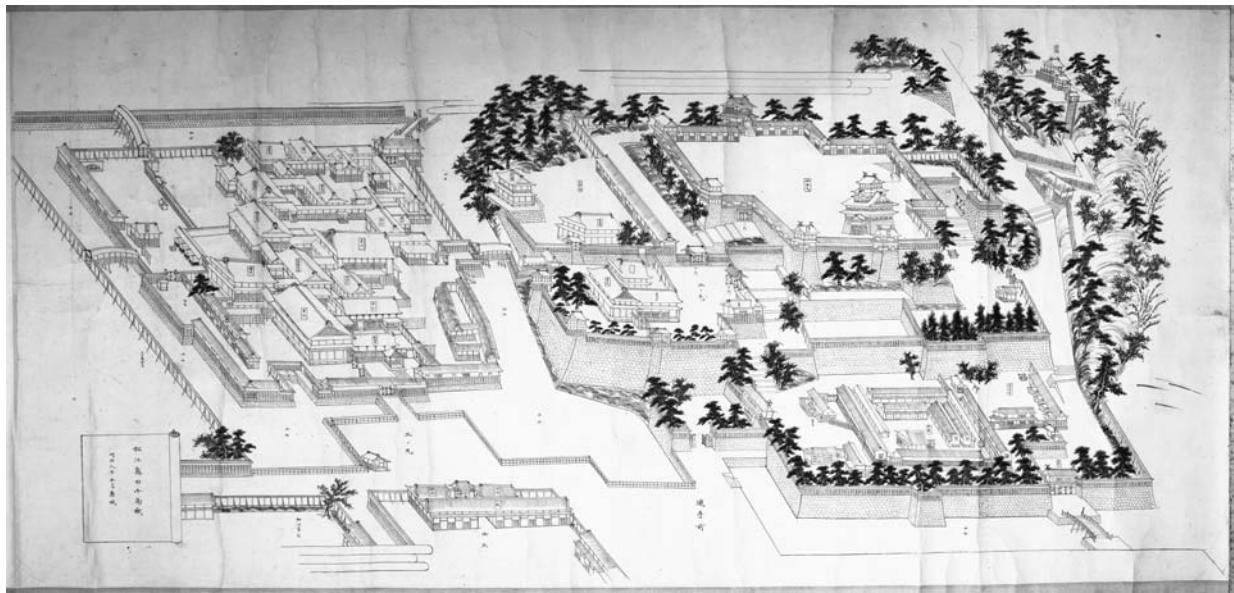


写真1 旧松江城図面（松江歴史館蔵）

参考 現在の松江城城郭施設



（本丸・二之丸・外曲輪など：平成28年3月、松江センチュリービル屋上より撮影）



（三之丸など：平成28年3月、松江センチュリービル屋上より撮影）

舊松江城圖面

2-1

明治四十二年十一月  
安立房次郎一松山

2-2

舊松江城之圖

2-3

写真2 旧松江城図面の共箱（上：蓋表、中：蓋裏、下：旧松江城図面、松江歴史館蔵）

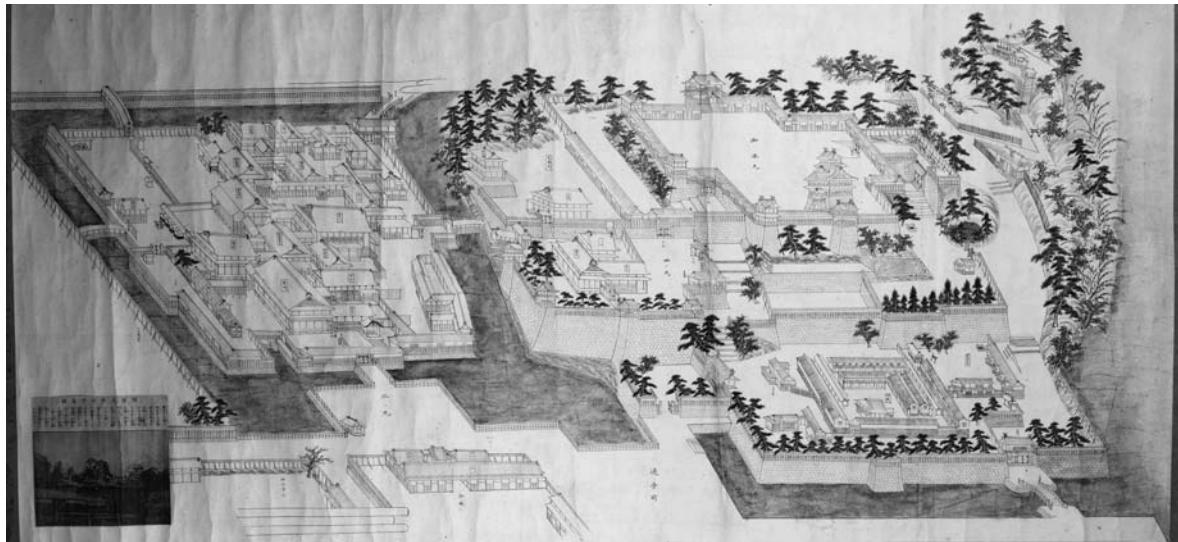


写真3 松江城郭図（安立昌平氏蔵）

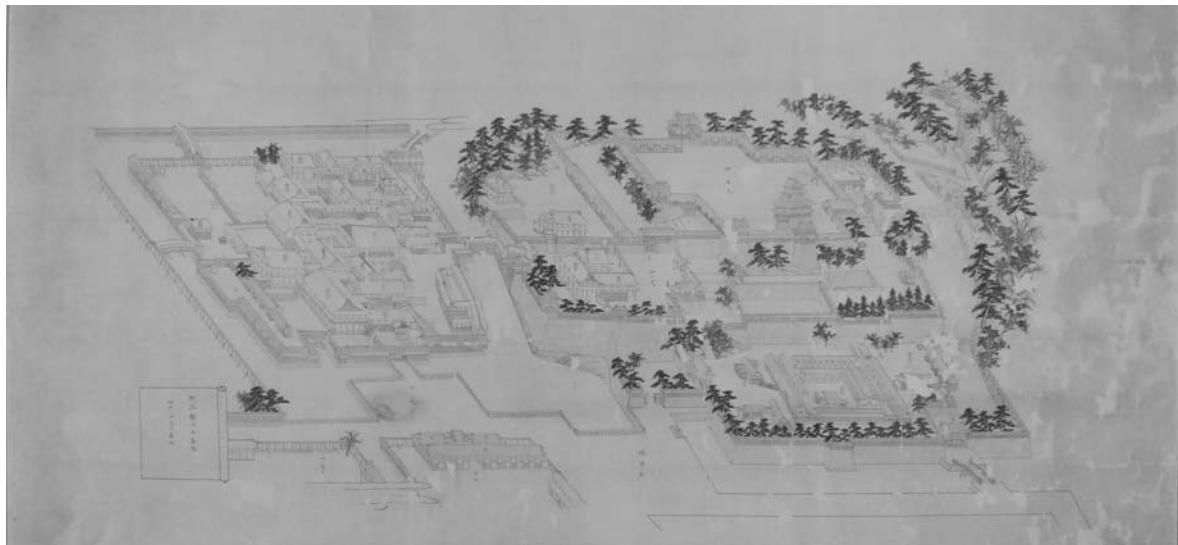


写真4 松江亀田千鳥城図（松江歴史館蔵）

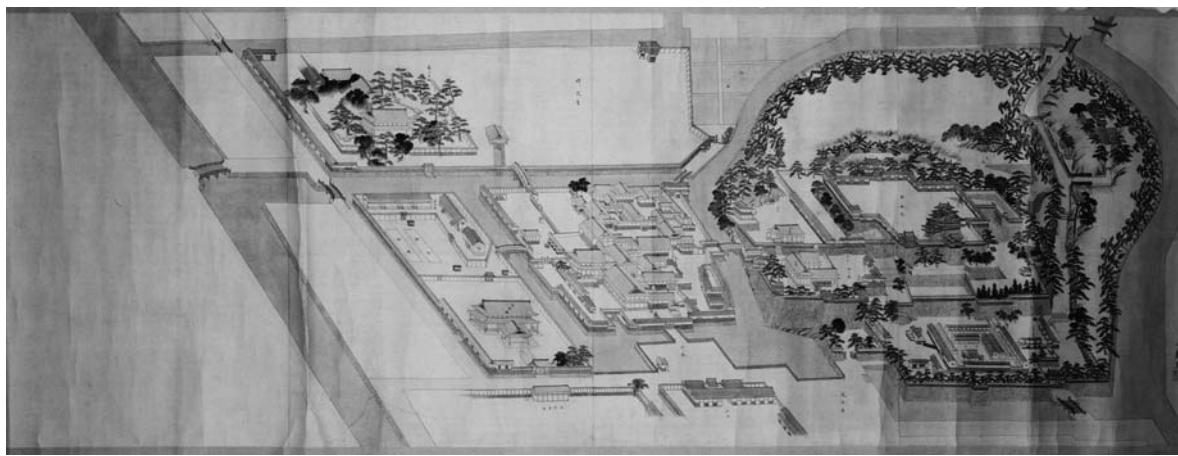


写真5 出雲国松江城図（兵庫県立歴史博物館蔵）

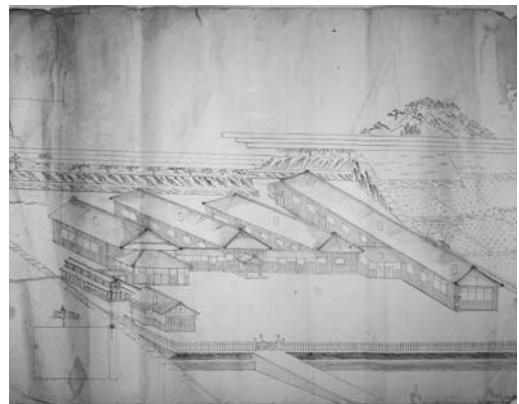


写真6 安立房次郎が描いた出雲大社千家国造家鳥瞰図(左)と学校らしき建物鳥瞰図(右)(安立昌平氏蔵)

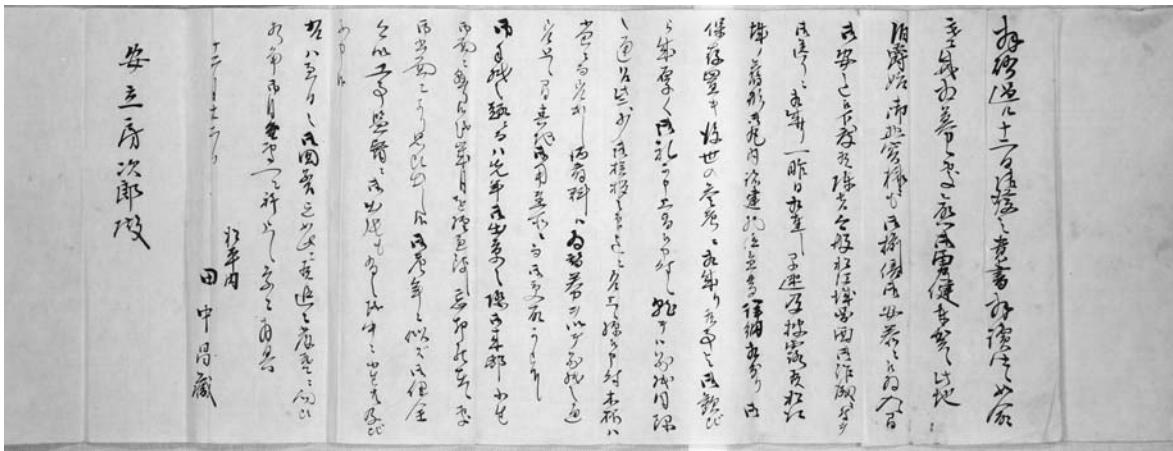


写真7 安立房次郎宛の田中昌蔵（松平家家扶）書簡

（封筒表）

島根県松江市灘町拾参番地 安立房次郎 殿

（封筒裏）

東京市四谷区元鮫河橋町五拾八番地

松平家家扶 田中 昌蔵

十二月廿二日

（本文）

拝啓過ル十二日御発之貴書拝読仕候如命

寒威相募候処愈御勇健奉賀候、此地

伯爵始御惣客様（のぶねは）二も御揃（ますます）倍 御安泰二被為入候間、

御安意被下度候、陳者今般松江城岡面御作成ニ付テ

御送りニ相成り一昨日相達し早速及披露候、松江

城ノ舊形御丸内諸建物位置等詳細相分り、御

保存置キ後世の参考ニ相成り候事与御歎び

被成、厚く御礼可申上旨御申付候、就テハ別紙目録

之通乍少御挨拶之印迄ニ差上候様被申付、木杯ハ

小包ニ而差出し、酒肴料ハ為替券ヲ以テ別紙之通

差上候間、其地御用達所ニ而御受取可被下候、

御手紙之趣ニ而ハ先年御出京之際御来邸小生

今以工事監督ニ御出張も有之儀、中々小生共及び

不申候

右ハ過日之御回答迄如此ニ候、追々嚴冬ニ向ひ

折角御自重第一ニ祈上候、草々敬具

安立房次郎殿

田中昌蔵

十二月廿二日

安立房次郎殿

田中昌蔵

資料1 安立房次郎宛の田中昌蔵書簡（翻刻）

# 松江市史編纂日誌

松江市史編纂における主な活動状況【平成20年度～平成29年度】（H29.9.30まで）

## 平成28年

期 日	内 容	備 考
10月 6 日	編纂委員会	
10月10日	松江城査読検討会	
10月19日～22日	松江城石垣調査	澤田順弘委員
10月22日	松江市史講座	「写真でたどる松江城とその周辺」 講師 和田嘉有委員・伊藤孝一委員（松江城部会）
11月 3 日	考古部会小部会	
11月 7 日・8日	近世史部会史料調査	沢山美果子委員
11月19日	松江市史講座	「近世の海運と松江」 講師 中安恵一委員（近世史部会）
11月20日	松江城査読検討会	
11月29日・30日	近世・近現代史料調査	桑原家史料調査（環境センター）
12月 3 日・4日	近世史部会史料調査	岸本委員
12月10日・11日	近世史部会	
12月13日	近現代史部会	
12月13日	自然環境部会	
12月13日～15日	自然環境部会 松江城石垣調査	澤田委員
12月17日	松江市史講座	「財政運営と行政組織からみる松江市のあゆみ」 講師 関耕平委員（近現代史部会）
12月18日	松江城査読検討会	
12月19日・20日	近世・近現代史料調査	米村家史料調査（環境センター）
12月20日	松江城部会小部会	
12月24日	松江城査読検討会	

## 平成29年

期 日	内 容	備 考
1月13日	松江城部会執筆原稿協議	岡崎委員、松尾委員
1月14日～16日	松江城石垣調査	澤田委員
1月14日・15日	松江城石垣調査	乗岡委員
1月14日～16日	近世史部会史料調査	岸本委員
1月15日	松江城査読検討会	
1月18日	松江城部会小部会	
1月21日	松江市史講座	「松江市域の自由民権運動とその時代」 講師 竹永三男委員（近現代史部会）
1月20日	ふるさと文庫18発行	『古墳時代史からみる古代出雲成立の起源』 池淵俊一氏
2月4日～6日	近世史部会史料調査	岸本委員
2月7日	松江城部会小部会	
2月11日～13日	近世史部会史料調査	岸本委員
2月13日	考古部会小部会	
2月18日	松江市史講座	「松江城を掘る—地下に眠る松江城の歴史—」 講師 岡崎雄二郎委員（松江城部会）
2月19日	松江城部会	
3月1日	ふるさと文庫19発行	『石垣と瓦から読み解く松江城』 乗岡 実委員
3月4日・5日	近世史部会	
3月5日～8日	松江城石垣調査	澤田委員
3月6日	自然環境小部会	高安委員、澤田委員、横田委員
3月9日	近現代史部会	
3月13日・14日	近世史部会史料調査	東谷委員

期日	内 容	備 考
3月14日・15日	史料調査	菅田庵史料（環境センター）
3月16日	部会長会	
3月18日	松江市史講座	「松江市史から古代の出雲を考える」 講師 吉松大志委員（原始・古代史部会）
3月22日	公文書館・文書管理に関する意見交換会	井上編集委員長、竹永部会長、吉山副市長、三島総務部長、黒田総務次長、藤原歴史まちづくり部長、永島次長、花形歴史館事務局長、稻田課長
3月25日	考古部会小部会	
3月26日	松江城石垣調査	乗岡委員、先山委員
3月27日	絵図調査	島根大学堀尾期松江城下町絵図調査
3月28日	『松江市史』発刊（第12弾）	史料編9「近現代I」
4月2日～4日	近世史料調査	東谷委員
4月8日	松江市史講座	「堀尾期松江城下町の新たな知見～G I S分析による家臣団と雜賀衆・伊賀衆の配置～」 講師 大矢幸雄委員（絵図・地図部会長）
4月14日・15日	松江城石垣調査	澤田委員
4月18日	別編「松江城」第9章検討会	
4月18日・19日	近世史料調査	米村家史料調査（環境センター）
4月20日	近世史料調査	多久田委員
5月18日・19日	松江城石垣調査	澤田委員
5月20日	松江市史講座	「玉造温泉の近世」 講師 渡辺浩一委員（近世史部会）
5月20日・21日	近世史部会	○原稿完成後のスケジュール ○執筆原稿の検討 ○近世II「節・項・見出し」内容等詳細案の検討
5月21日	平成29年度松江市史編集委員会	〔議題〕 ①編纂体制、出版計画 ②平成28年度事業報告、平成29年度事業計画 ③各部会の報告（事業報告、事業計画、調査・執筆・編集状況） ④『松江市』通史編について ⑤松江市史編纂基本計画の実施状況と今後の課題 その他（松江市史研究執筆応募状況ほか）
5月22日	近世史料調査	東谷委員
6月10日～12日	近世史料調査	東谷委員
6月14日	松江城査読検討会	1. 進捗状況 2. 校正原稿の査読について 3. 第1回松江城部会の議題について 4. 岡崎先生提案のブックレットシリーズについて
6月17日	松江市史講座	「松江商工会議所と商工業」 講師 伊藤康宏委員
6月20日・21日	米村家・酒井家史料調査	
6月23日	松江城石垣調査	澤田委員
6月24日～26日	近世史料調査	東谷委員
7月13日～14日	史料調査	野津家史料調査（環境センター）
7月15日	松江市史講座	「初期松江城天守の形態と千鳥破風」 講師 和田嘉有委員、稻田信課長
7月16日	松江城部会	2. 別編「松江城」配布資料について 3. 各G会からの報告 4. 入校・初校の進捗状況と今後の校正スケジュールについて 5. 協議事項（口絵・序章第1節・用語解説） 6. 今後のスケジュールについて
7月25日～26日	松江城石垣調査	澤田委員
7月25日	自然環境部会	1. 編纂スケジュールの確認 旅費の変更について 2. 部門進捗説明 3. 版組・口絵カラー割り付けなど 4. 参考文献 5. 第2章6 半島における風の名称

期 日	内 容	備 考
7月29日・30日	近世Ⅱ小部会	・通史編スケジュール ・「通史編Ⅱ」執筆原稿の検討 ・その他
8月7日～8日	近世部会史料調査	石田委員
8月9日	松江城小部会	
8月19日	松江市史講座	「原始・古代から見る松江成立の基盤」 講師 丹羽野裕委員
8月21日	史料調査	山口薬局
9月4日～29日	インターンシップ受け入れ	
9月4～5日	松江城石垣調査	澤田委員
9月6～7日	近世史料調査	東谷委員
9月7～8日	史料調査	野津家史料調査（環境センター）
9月8日	松江市史編集委員会部会長会議	
9月11～15日	史料調査	鬼嶋委員
9月12～15日	史料調査	能川委員
9月13日	松江市史近現代史部会	
9月16日	松江市史講座	「特色ある松江市内中世城館」 講師 山根正明氏
9月23日～25日	史料調査	東谷委員
9月27日～29日	堀尾公共同研究観察	
9月30日	松江市ふるさと文庫20発行	『松平不昧の茶室』 和田嘉宥委員

## これまでに刊行した松江市ふるさと文庫

平成30年2月現在

No.	タイトル	著者	発行年月	頁数
1	お殿様の御成り－近世松江藩主と本陣－	小林准士	平成18年2月	60頁
2	大根島のおいたちと洞窟生物	澤田順弘、新部一太郎、星川和夫	平成19年3月	51頁
3	松江藩の財政危機を救え－二つの藩政改革とその後の松江藩－	乾 隆明	平成20年2月	63頁
4	堀尾吉晴と忠氏－松江開府を成しとげた武将たち－	佐々木倫朗	平成20年3月	40頁
5	城下町松江の誕生と町のしくみ－近世大名堀尾氏の描いた都市デザイン－	松尾 寿	平成20年11月	120頁
6	堀尾吉晴－松江城への道－浜松、富田、松江城普請の軌跡－	山根正明	平成21年1月	118頁
7	松江市の指定文化財－未来へ伝える松江の文化遺産250－	「松江市の指定文化財」編集委員会	平成22年3月	246頁
8	京極忠高の出雲国・松江	西島太郎	平成22年2月	124頁
9	松江城下に生きる－新屋太助の日記を読み解く－	松原祥子	平成22年3月	63頁
10	松江市史への序章－松江の歴史像を探る－	井上寛司他18名	平成22年3月	138頁
11	松江藩校の変遷と役割	梶谷光弘	平成22年6月	104頁
12	決定版 見立番付を楽しむ	乾隆明、下房俊一	平成22年10月	115頁
13	雲陽秘事記と松江藩の人々	田中則雄	平成23年3月	86頁
14	松江掃苔録－松江藩を支えた家と人－	青山侑市	平成24年3月	104頁
15	中世水運と松江－城下町形成の前史を探る－	長谷川博史	平成25年1月	90頁
16	松江城再発見－天守、城、そして城下町－	西 和夫	平成26年8月	124頁
17	松江の碑－碑が語る松江の歴史－	安部 登	平成27年7月	98頁
18	古墳時代史からみる古代出雲成立の起源	池淵俊一	平成29年1月	112頁
19	石垣と瓦から読み解く松江城	乗岡 実	平成29年3月	104頁
20	松平不昧の茶室	和田嘉宥	平成29年9月	104頁

## これまでに刊行した松江市歴史叢書

平成29年10月現在

No.	テーマ	タイトル	著者	発行年月	頁数
1	京都・妙心寺派春光院（堀尾氏菩提寺）－堀尾氏関連の文献・石造物調査－	春光院に所在する来侍石製石塔群について	岡崎雄二郎、西尾克己、稻田信、樋口英行、佐々木倫朗、松原祥子	平成19年12月	102頁
		春光院所蔵の堀尾氏関連文献史料について	佐々木倫朗、和田美幸、松原祥子、狩野真由、福井将介、樋口英行		
2	松江市史研究1号	新『松江市史』編纂の意義	井上寛司	平成22年3月	159頁
		第一次桂太郎内閣下の府県廃合計画と福岡世徳・松江市長の上京活動	竹永三男		
		島根県における鉄道敷設運動の出発	沼本 龍		
		堀尾吉晴・忠氏父子に関する基礎的考察	福井将介		
		松江藩主の居所と行動－京極・松平期－	西島太郎		
		松江東照宮と圓流寺伝来の石造物について－松江神社、圓流寺、鰐淵寺等に所在する石造物－	岡崎雄二郎、西尾克己、稻田信、椿真治、木下誠、松尾充晶、高屋茂男		
		將軍家を祀った東照宮と圓流寺	山根克彦		
3	松江市の近代化遺産（興雲閣特集I）	堀尾氏関係史料目録	福井将介	平成22年3月	106頁
		興雲閣の魅力	堀 勇良		
		建築史からみた興雲閣の位置づけ	足立正智		
		興雲閣の沿革	新庄正典		
		興雲閣貴賓室壁紙について	安部己団枝		
		興雲閣貴賓室壁紙の下張りについて	沼本 龍		
4	松江市史研究2号	資料 興雲閣の一部解体調査報告	松江市教育委員会文化財課	平成23年3月	106頁
		応仁・文明の亂と尼子氏－文書の声を聴く－	原 慶三		
		島根県民俗学関連雑誌等目次総覧	山崎 亮		
		松江市史編纂日誌	史料編纂室		
		附 松江市史編纂基本計画	松江市史編纂検討委員会		
5	松江市史研究3号	宗教施設と宗教者身分からみた近世出雲の特徴－松江市域を中心に－	小林准士	平成24年3月	135頁
		絵図と測量図に見る大橋川の歴史	徳岡隆夫、高安克己、大矢幸雄		
		2000年代に島根半島沿岸域の定置網で漁獲された魚介類の季節変動および年変動	勢村 均		
		松江市沿岸海域の魚類	越川敏樹		
		島根県の弥生時代鉄器集成	池淵俊一		
		出雲の子持壺集成	池淵俊一		
		出雲国司補任表（稿）大宝元年～保元元年	大日方克己		
		島根県立図書館所蔵「桃家資料」－解題と目録－	宇野田尚哉		
		寛永期に2度作成された中国筋国絵図－寛永10、15年出雲国絵図の比較－	川村博忠		
		松江市史編纂日誌	史料編纂室		
		松平直政論－西国における政治的位置－	三宅正浩		

No.	テ　ー　マ	タ　イ　ト　ル	著　者	発行年月	頁数
6	松江市史研究4号	政府に報告された市内発見の古墳－『埋蔵物録』にみる松江の近代考古学－	渡辺貞幸	平成25年3月	118頁
		松江市域の横穴墓－意宇型横穴墓を中心として－	西尾克己、稲田信		
		「松江城及城下古図」の特徴とその表現内容	渡辺理絵、大矢幸雄		
		明治初年出雲地域における郡別産物の特徴	鳥谷智文		
		日本新八景の選定をめぐる諸運動と松江市	長尾隼		
		松江市史編纂日誌	史料編纂室		
		松江における米騒動に関する史料紹介	能川泰治		
7	松江市史研究5号	松江藩財政に関する覚書	伊藤昭弘	平成26年3月	137頁
		白潟町屋の商人と町人地の変容－「松江白潟町絵図」の分析を中心として－	大矢幸雄、渡辺理絵		
		明治期における伝染病の大流行と民間信仰	喜多村理子		
		松江市所在の五輪塔・宝篋印塔一覧表（稿）	松江石造物研究会		
		松江城の石垣の構造と年代	乗岡実		
		三ノ丸の特色とその推移について	和田嘉宥		
		松江平野の古環境(3)－県道城山北公園線（大手前通り）発掘調査に関連して(3)－	渡辺正巳、瀬戸浩二		
		松江市史編纂日誌	史料編纂室		
		尼子氏による出雲国成敗権の掌握	川岡勉		
		『土工記』にみる河川の維持管理と松江藩の藩政改革	東谷智		
8	松江市史研究6号	19世紀中頃における松江・北堀町新橋の住人と空間構成	大矢幸雄、渡辺理絵	平成27年3月	128頁
		史跡松江城の発掘調査(1)－外曲輪（二之丸下ノ段）－	岡崎雄二郎		
		大崎下屋敷の拡張・整備と建築に関する考察	和田嘉宥、安高尚毅		
		松江城の屋根瓦－山陰で活躍した瓦工人と城郭整備－	乗岡実		
		遺跡から見た出雲府中	西尾克己、廣江耕二		
		松江平野北部の平野発達史と古環境変遷史	瀬戸浩二、渡辺正巳、山田和芳、高安克己		
		松江の中世石塔訪問	狭川真一		
9	松江市史研究7号	松江市史編纂日誌	史料編纂室	平成28年3月	128頁
		堀尾氏の出雲支配における支城について(3)－亀嵩城と三沢城－	中井均		
		文献史料から見た松江城築城物語	佐々木倫朗、福井将介		
		松江城および周辺遺跡出土瓦の胎土分析について	白石純		
		松江市域の絵図目録（中間報告）	大矢幸雄		
		松江城下町遺跡における陶磁器の様相と編年について－17世紀代の資料を中心に－	小山泰生		
		史跡松江城の発掘調査(2)－北懸門橋、御廊下橋跡－	岡崎雄二郎		
		松江平野北部の平野発達史と古環境変遷史(2)－花粉分析から推定される古植生－	渡辺正己		
		松江城城郭呼称について	松江城部会		
		松江城天守古写真考	稲田信、福井将介		
10	松江市史研究8号	〈史料紹介〉「高城権八家過去帳」に見る高城権八家の系譜	稲田信、内田文恵、小山祥子	平成29年3月	122頁
		松江市史編纂日誌	史料編纂室		
		初期松江城天守の形態に関する試論－絵図、文献史料、天守に残された痕跡を通して－	和田嘉宥、稲田信		
		「正保城絵図」と「出雲国松江城絵図」に関する考察	和田嘉宥、稲田信		
		出雲における中近世の瓦と松江城築城期の瓦	花谷浩		
		松江平野北部の平野発達史と古環境変遷史－法吉坡の形成と周辺の古植生－	渡辺正己、瀬戸浩二、奥中亮太		
		〈史料紹介〉「出雲名物番付」	鳥谷智文		

## これまでに刊行した松江城研究

		タ　イ　ト　ル	著　者		
		基調報告「松江城研究の最前線」	山根正明		
		分野別報告「松江城の縄張りについて」	山上雅弘		
		分野別報告「松江城天守と城郭施設について」	和田嘉宥		
		分野別報告「松江城下町遺跡の構造と町割り」	松尾信裕		
		堀尾氏の出雲支配における支城について(1)－三刀屋尾崎城－	中井均		
		松江平野の古環境(1)－県道城山北公園線発掘調査に関連して(1)－	渡辺正己、瀬戸浩二		
		【史料翻刻・解題】『(竹内右兵衛書つけ)』	和田嘉宥		
		松江城天守創建に関わる祈祷札について	稲田信、内田文恵、居石由樹子		
		松江城祈祷札の樹種同定及びウイグルマッチングによる年代測定	渡辺正己		

「奉転読大般若經六百部武運長久処」祈禱札付着の紙片について	安部己団枝
松江城下町絵図と城下町の建設	水田義一
松江城下町遺跡の土質試験	河原莊一郎
松江平野の古環境(2) -県道城山北公園線(大手前通り)発掘調査に関連して(2)-	渡辺正巳、瀬戸浩二
「武家屋敷」創建時の姿を探る	足立正智
松江城城郭施設の推移について	和田嘉宥
堀尾氏の出雲支配における支城について(2) -赤名瀬戸山城-	中井 均
満願寺城跡の発掘調査について	岡崎雄二郎
尼子家復興戦における佐陀江と満願寺城	山根正明
松江城の空間構成をめぐる研究視点の提言	堀田浩之
【史料翻刻・考察】『御城内忽間数』	和田嘉宥

### これまでに刊行した松江城研究収録

No.	テ　ー　マ	タ　イ　ト　ル	著　者	発行年月	頁数
1	第1回松江城調査報告会	報告1 天守祈禱札の概要について	稻田 信	平成25年12月	62頁
		報告2 文献資料上の祈禱札について	和田嘉宥		
		報告3 祈禱札の釘付け位置について	ト部吉博		
		報告4 天守調査と祈禱札のもつ意義について	西 和夫		
		パネルディスカッション記録	コーディネーター亀井信雄、パネリスト西和夫・和田嘉宥・稻田信・ト部吉博		
		天守祈禱札の類例調査について-丸亀城天守木札-	松江城国宝化推進室		
2	第2回松江城調査報告会	報告1 文献史料からみる「松江城・松江城下町」	石塚晶子	平成27年2月	68頁
		報告2 松江城天守創建時の祈禱	ト部吉博		
		報告3 鎮宅祈禱札の世界	狭川真一		
		報告4 富田城の破却行為	舟木 聰		
		報告5 松江城研究の現在	西 和夫		
		資料 松江城鎮宅きとうふだ実測図 江戸時代出雲地方の風水害と地震	松江城国宝化推進室 松尾 寿		
3	第3回松江城調査報告会 報告集 松江城天守国宝指定記念シンポジウム基調講演	報告1 昭和25~30年の松江城関連の史料調査と須田主殿	福井将介	平成28年3月	52頁
		報告2 史跡富田城跡の千畳平発掘調査	舟木 聰		
		報告3 島根の中世瓦と松江城	花谷 浩		
		講演1 松江城天守 国宝への道	上野勝久		
		講演2 松江城天守の調査研究とその成果	亀井伸雄		
		講演3 松江城天守 その価値と特徴 江戸時代出雲地方の風水害と地震 補遺	横田修一郎 松尾 寿		
4		松江城天守雛形について	山田由香里	平成29年3月	58頁
		国宝松江城天守附鎮物の「玉石」の岩石とその原産地推定	澤田順弘、太郷周平、古川寛子、徳岡隆夫、ト部吉博		
		松江城天守の鎮物に用いられた「玉石」の原石状態と加工に関する地質学的検討	横田修一郎		
		松江城天守の用材樹種調査1 (階段)	渡邊正巳、吉野 毅		

### これまでに刊行した松江歴史館研究紀要

No.	テ　ー　マ	タ　イ　ト　ル	著　者	発行年月	頁数
1	松江歴史館研究紀要第1号	創刊にあたって	藤岡大拙	平成23年3月	196頁
		「伝利休茶室」序論 一関係資料の確認と由緒に関する検討一	和田嘉宥		
		伝利休茶室の復原内容決定の過程について	高見保志		
		模型をつくる 一立案から完成まで一	岡崎雄二郎		
		京極忠高の出生 一女侍於崎の懷妊をめぐる高次・初・マリア・龍子一	西島太郎		
		京極期松江城下町図と分限帳 一諸本の比較検討一	西島太郎		
		松江新橋町絵図について	新庄正典		
		松江城下の町人の食事 一新屋太助の日記から一	松原祥子		
		羽柴秀次宿老としての堀尾吉晴 一近江における宿老衆の役割・家臣団の形成一	福井将介		
		松江藩土雨森家の残した文書群 一「雨森文書」調査概要と文書目録一	西島太郎編		
2	松江歴史館研究紀要第2号	白華山養源寺(東京都千駄木)に所在する近世大名堀尾忠晴石塔について	西尾克己、稲田 信、佐々木倫朗		
		松江藩松平家の墓所移転について 一「御墓所整理ニ関スル一途」から一	西島太郎		
		渡部舞の復権と周辺の人間模様	閑 和彦	平成24年3月	88頁

		「松平斎貴上京行列図」に見る大名列の構造 幕末の松江渡海場—「御用留 船目代六衛門」をよむ— 松江城下町遺跡出土の桔梗紋の瓦を使用した家について 島根県初の私立和洋画学校「方圓学舎」入門者一覧 松江藩領全域をおおう「輪切絵図」—安定的な年貢確保を目的に— 松江藩で利用された花崗岩類	松原祥子 多久田友秀 新庄正典 西島太郎 上杉和央、大矢幸雄、石倉舞美 朽津信明、西尾克己、稻田信	
3	松江歴史館研究紀要第3号	城下町松江研究の現状と課題 松平斎貴の上洛道中記録に見る旅の姿—「御上京一途」を参考として— 松江藩儒黒澤石斎の研究（一） 二人の甫庵一小瀬甫庵と山岡甫庵— 堀傑山・市郎父子に関する新知見—展覧会開催後の調査より— 資料紹介 安達家文章目録・翻刻（一） 「三谷家住宅」調査報告書 高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について—近世大名墓と堀尾家の宗教的背景— 松江歴史館整備事業で生じた問題とその整理 平成24年企画展「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。」展の記録と分析	西島太郎 小山祥子 西島太郎 福井将介 西島太郎 新庄正典 足立正智 西尾克己、稻田信、木下誠 大塚享義 西島太郎	平成25年3月 160頁
		松江藩医北尾家の系譜について 「写真の開拓者」堀市郎の研究—在外史料を中心として— 資料紹介 安達家文書目録・翻刻（二） 松江歴史館における中・近世考古関係の展示について 江戸幕府収納の出雲国絵図に記された「古城」について	梶谷光弘 西島太郎 新庄正典 岡崎雄二郎 西尾克己、稻田信、福井将介	
		松江城天守の特徴に関する考察—通し柱・包板・帶鉄及び修理に関する検討を通して— 武家屋敷の中の松江—松江の「個性」を考える— 松平不昧の茶室 昭和十二年に行われた松江城調査とその報道—城戸久氏の実測図面と新聞報道を通して— 松江歴史館の造園譚 新発見の「大坂 真田丸」絵図の学術的価値について	和田嘉宥 西島太郎 和田嘉宥 新庄正典 角隆司、大塚享義、高見保志 千田嘉博	
5	松江歴史館研究紀要第5号			平成28年11月 78頁

## 松江市史講座一覧〔開催年度・講座番号・講師・演題〕

(平成30年3月現在)

(H23年度) 1	上杉和央	絵図に見る水の都・松江	60	松尾信裕	近世城下町の変遷と松江城下町
2	山根正明	宍道湖畔に築かれた松江城	61	西田友広	知行国制度と出雲国
3	多久田友秀	近世水運と松江	62	安高尚毅	松江城下町の空間設計と武家地・町人地の空間について
4	長谷川博史	中世水運と松江	63	竹永三男	「模範村」とその時代
5	丹羽野 裕	水運が支えた古代出雲の須恵器生産	64	澤田順弘	石が語る出雲国
6	伊藤康宏	宍道湖の恵みと宍道湖漁業	65	原 慶三	勝部宿祢一族と朝山日乗
7	品川知彦	海の民俗	66	山田康弘	お墓にみる縄文時代から弥生時代への移行
8	高安克己	宍道湖の誕生と治水・災害	67	大矢幸雄・長谷川博史・河原	基調報告
9	大日方克己(基調報告)	古代律令制下の出雲をめぐる国際関係	68	莊一郎・渡辺正巳・西尾克己	シンポジウム:城下町形成期の景観復元
10	井上寛司ほか	シンポジウム:世界に開かれた町・松江	69	川岡 勉	中世後期の出雲と地域権力
(H24年度) 11	田坂郁夫	気象災害からみる松江の気候	70	大日方克己	松江古代史の魅力
12	小林准士	神社における都市住民の信仰と芸能	71	伊藤昭弘	松江藩の財政について
13	野々村安浩	『出雲国風土記』と松江地域	72	喜多村理子	伝染病の大流行と信仰
14	西田友広	中世の松江市域と橋	73	長谷川博史	中世の経済と社会
15	佐藤仁志	松江市の動物たち・過去～現在～未来	74	阿部志朗	各種地図の変遷からみる松江の近代化
16	竹永三男	松江の外の松江-同郷会と同郷人雑誌-	75	能川泰治	まぼろしの神国博
17	佐藤 信	律令国家と出雲	76	足立正智	松江の建造物
18	渡辺理絵	絵図の世界へ誘うー松江城下町絵図ー	77	的野克之	松江の古寺と仏像
19	丹羽野 裕	松江に人が住み始めた頃	78	三瓶良和	中海・宍道湖の自然環境
20	川岡 勉	室町時代の出雲守護と分国支配	79	和田嘉宥	松江城城郭施設の特色とその推移
21	大日方克己	平安時代の出雲受領	80	常松隆嗣	江戸時代の農村
22	喜多村 正	松江市南部農村部のムラ	81	井上寛司	中世の寺院と神社
23	森田喜久男	出雲神話の神々と松江	82	鬼島 淳	戦後松江の公民館と新生活運動
24	鬼島 淳	戦前松江の医療と福祉	(H27年度) 83	岸本 覚	幕末松江藩と雨森謙三郎(精翁)
25	山田康弘	山陰地方の縄文時代	84	高安克己・澤田順弘・田坂郁夫・佐藤仁志	シンポジウム:市民と語る松江の自然
26	三宅正浩	松平直政書状を読む	85	居石正和	松江裁判所 事始め
27	枚村喜則	松江市の植物	86	池淵俊一	出雲世界のルーツ
28	足立正智	江戸時代の松江の建造物	87	中井 均	城郭から見た堀尾氏の出雲支配
29	平石 充	出雲国の成立ー意宇郡と出雲国ー	88	森田喜久男	「神々の国、出雲」を再考する
30	原 慶三	系図の利用と活用一行間を読むー	89	石田 俊	松江藩松平家の女性たち
31	松本岩雄	松江の弥生時代	90	中野賢治	尼子氏の滅亡と「御一家再興」戦争
32	宇野田尚哉	松江藩の儒学者たち	91	竹永三男	明治維新後の松江市域
33	西尾克己	王家の谷ー山代・大庭古墳群と横穴墓	92	上杉和央	地図から読み解く近世の松江市域
34	能川泰治	歩兵第63連隊の創設と松江の都市社会	93	山上雅弘	堀尾氏の城郭普請
(H25年度) 35	越川敏樹	宍道湖・中海における魚介類の現状	94	永井 猛	松江の芸能ー神楽と盆踊りー
36	東谷 智	『土工記』にみる河川の維持管理と藩政改革	(H28年度) 95	小暮哲也	松江市の海岸地形
37	池淵俊一	邪馬台国と前方後円墳時代のはじまり	96	井上寛司・長谷川博史・原慶三	シンポジウム:新しい松江の中世史像
38	居石正和	松江市の誕生	97	三宅正浩	松江藩政と家老
39	森田喜久男	出雲国風土記に見える神社と村落	98	佐々木倫朗	堀尾氏の出雲・隱岐支配
40	川村博忠	いわゆる「慶長日本総図」の誤認を解く	99	堀田浩之	近世城郭と城下の空間設計を考える
41	井上寛司	中世出雲神話の世界と意宇六社	100	工藤泰子	戦後復興期における松江の観光振興
42	乗岡 実	石垣から松江城を考える	101	和田嘉宥・伊藤孝一	写真でたどる松江城とその周辺
43	入月俊明	出雲地方の地質と化石	102	中安恵一	近世の海運と松江
44	酒井董美	民話(鈍(なた)盗られ物語ほか)	103	閑 耕平	財政運営と行政組織からみる松江市のあゆみ
45	松尾充晶	“ブレ出雲国”成立の背景	104	竹永三男	自由民権運動とその時代
46	渡辺浩一	水の都の恩恵と脅威ー松江と江戸	105	岡崎雄二郎	松江城を掘るー地下に眠る松江城の歴史
47	佐藤 信	出雲国府の実像	106	吉松大志	松江市史から古代の出雲を考える
48	伊藤康宏	八束郡の外海漁業と漁業組合	(H29年度) 107	大矢幸雄	堀尾期松江城下町の新たな知見
49	長谷川博史	戦国時代の松江地域	108	渡辺浩一	玉造温泉の近世
50	大矢幸雄	絵図に見る白潟三町屋の実態と動向	109	伊藤康宏	松江商業会議所と商工業
51	西田良平	出雲地方の地震	110	和田嘉宥・稻田信	初期松江城天守の形態と千鳥破風
52	浅沼政誌	松江市近辺の民具の保存状況	111	丹羽野 裕	原始/古代から見る松江成立の基盤
53	平石 充	出雲の人制・部民制	112	山根正明	特色ある松江市内中世城館
54	渡邊正巳	科学が明かす松江平野の歴史	113	谷永 守	島根県(松江)の気象特性について
55	勝部 昭	古代出雲の交通	114	喜多村 正	松江市域の集落名称一本郷と口一
56	沢山美果子	松江城下『おぼえ日記』にみる町人の『家』と男女子供	115	清家 泰	宍道湖/中海の水環境
57	西田友広	「武者的世界」の始まりと出雲国	116	小林准士	仏と神から見た近世
58	廣瀬清志	近現代の松江市的人口の推移とその特徴	117	鬼島 淳	敗戦直後松江地域の暮らし
(H26年度) 59	鳥谷智文	出雲地域における産物の特徴について	118	西尾克己ほか	松江城をめぐる諸問題と今後の展望

# 松江城天守築城鎮宅の祈祷について

大北哲也

## 一、はじめに

松江城天守は現存十二天守の一つとして親まれている。昭和二十五年（一九五〇）に「文化財保護法」が制定され、従来の「国宝保存法」による「国宝」から、「文化財保護法」による「重要文化財」への指定名称の変更は、多くの市民の間で「格下げ」になったような感情が生まれていた。そのような中、戦火に会わなかつた天守も、長い年月を経て傷みも激しく、昭和二十五～三十年に解体修理が行われた。この解体修理工事の際、地階より出土した「鎮物」と思われるいくつかの出土品の一つに、「丸い石」があつた。修理に併せて行われた調査の中で、「丸い石」は築城時の地鎮祭に用いられた鎮物の一つ、「玉石」と判明し、石材は当地方特産の「来待石製」と理解された（『重要文化財松江城天守修理工事報告書』）。

「玉石」は「来待石製」であるという理解に対し、近年、島根大学名誉教授澤田順弘氏（松江市文化財保護審議会委員）が、地質学の専門的立場から「玉石」の風化剥落片を化学組成分析なされ、「玉石」の岩石は「閃緑岩ないし斑レイ岩」であり「来待石製」ではないこと、産出地は島根半島三坂山周辺、と結論付けられた（澤田順弘ほか2017「国宝松江城天守附鎮物の「玉石」の岩石とその原産地推定」『松江城調査研究収録』4 松江市）。ちなみに、三坂山は古刹華藏寺のある枕木山とは尾根続きである。華藏寺は堀尾氏祈願所とも伝えられており、寺と「玉石」産出地が近いこともあり、両者に

は関わりを感じられた。

「玉石」の構成鉱物の科学的分析に併せ、澤田氏からは、当地で墓石等の用材に使われ「大芦御影」と呼称されている深成岩を大芦地区のものと限定せず、島根半島を構成する中期中新世の深成岩の呼称と理解し、「玉石」の岩石は「閃緑岩ないし斑レイ岩（大芦御影製）」と表記することを提案された。

そして、澤田氏に千手院墓地にある出所がはつきりとした大芦御影製の墓碑を紹介したところ、一度機会を得て観察に行きたいとのことで、平成二十九年三月初旬、澤田氏の来山をいただいた。

澤田氏の観察とお話を伺い、私自身も門外漢ながら深く納得することが出来、特に鎮宅祈祷の鎮物として、自然に存する玉石の球形は貴重なものとして用いられたであろうことは当を得ていると思い澤田氏に伝えた。（澤田氏の分析や解説につき、火山岩石学に疎い私が理解できたのは、高校時代地学を教えてくださった故岩成虎夫先生のお導きと感謝の他ありません。特に島根半島の岩石に関して休日などに現地へつれていって下さった日々を懐かしく思い出し、ここに記し感謝申上げます。）

澤田氏の千手院の墓石調査に同行案内申上げた折、「松江城築城の祈祷と鎮物につき是非とも見解を書いてほしいのです」と勧められた。私は研究者でもないし、また松江市史研究（松江城研究）での論文、報告にふさわしい一文を記す力量にも悖るので辞退申上げたのだが、「松江城研究を進めるうえ

で、学術的な調査研究報告書に宗教分野の視点で書かれた論考は少ないので、是非書いていただきたい」との力強いお勧めを再度いただいた。公式な調査研究報告の一頁に、かかわり深い千手院に居る者として拙い一文を記すことをお許しいただき、研究の発表ではなく、宗教的にできるだけ正確を期して、

築城時の状況に即して「鎮宅地鎮」の様子を再現してみたいと思う。

## 一、鎮宅地鎮祭の背景

昭和の解体大修理時は戦後間もない時だったが、文化財としての天守への関心は高く、正確な記録を残しつつ、徹底的な史料調査が行われ、学術的な知見に基づき工事は進捗した。

後に調査報告書等に記された遺物等の発見があり、今日、国宝松江城天守の「附」指定を受けた「鎮宅祈祷札」や「玉石」、「檜」などの鎮物などが発見され、保存された。

さて、天守の解体が終わり、地階石垣の内側の調査、整備が終了し、いよいよ再建への「立柱式」を行う時となつた。その折り、「どの様な形式で行うか」を、どのように検討されたか詳らかではないが、天守修理事務所に居られた須田主殿氏、古文書調査に当たられた曾根研三氏（共に寺社にご縁のある方々）が、「立柱地鎮式は古式に則るべき」として、仏式を提案された。かねてより、千手院二十八世澄円上人も、発見された四枚の祈祷札は真言宗の鎮宅祈祷のものであり、その解説に当たられた高野山大学教授酒井真典博士の解説をもって仏式で執行されるよう申し出していたことから、「立柱式」は県下全真言宗寺院出仕して行われることとなつた。

ことに曾根氏は社家にある方だが、「鰐渕寺文書の研究」で知られるように、当時の学術的知見の中で仏教関係に造詣深く、松江城築城と真言宗の関

係を指摘しておられ、現今的研究解明の先駆的行事となつたと思われる。なお、この時の「地鎮立柱式」の記録は、数枚の写真と共に松江歴史館で大切に保管されている。

## 三、鎮宅祈祷の実際

出土した鎮物や四枚の祈祷札（鎮宅祈祷札）については、近年いくつかの研究報告がなされるようになった。ことに「鎮宅祈祷札」は、元興寺文化財研究所の狭川真一氏により詳しい研究報告がなされ（狭川二〇一五「鎮宅祈祷札の世界」『松江城調査研究集録』2）、真言宗の作法に則ったものであることが明らかになり、多くの納得する処となつた。また、狭川氏の報告のはじめに、「松江城の昭和の解体修理のときに工事関係者がこの祈祷札を研究された小さい冊子がありましたので、……」と述べておられるのは、おそらく前述の千手院先住澄円上人と酒井真典氏の報告に基いて工事関係者によって残されたものであろう。真言宗の僧侶によって鎮宅祈祷がなされたことは、その後、『雲陽誌』の記載と、平賀隆顕が元禄時代に記した「尊照山記」の記述とも合致し、まず間違いないところと言つて良いだらう。

それではどのように鎮宅祈祷がなされたのかを考察する。

先ず、慶長年間という時代を考えれば、真言、天台を始め、仏教各宗派は組織として確立しており、教派の各勢力は個別に団体として安定していたと考えられる。為政者から見れば統御し易い組織であり、松江城の場合、堀尾氏が真言宗に鎮宅を命じても、他宗からの異存が出ることは考えられず、真言宗へ祈祷が命じられたのだろう。『雲陽誌』「千手院」の項に、「慶長十三年堀尾帶刀吉晴富田の城をうつし松江の城を築きたまふ時、長海上人に仰て地

たと考えて間違いないと思われる。

真言宗では、松江城築城の頃には既に鎮宅（地鎮を含めて）の法として「土公供作法」が成立し、「安鎮法」としてその行法が伝えられ、「最も祕密のこと故、輕々にこれを授けるべからず」と大僧都・元海が記した長寛二年（一一六四）九月一日の文書が高野山に伝えられている。この「土公供作法」はいくつかの異本が伝えられ、「元海本」は現在、伝えられる中では最も古いと考えられる（完本として）。

私は「土公供」について昭和四十二年八月に高野山中院御坊、前官傳燈大阿闍梨寛嚴僧正より伝授を受けた。真言宗では、出家得度の後、修行をして師の指導の下で四度加行という、基本的修行を経て、伝法灌頂を受けて一応正式の僧侶と認められる。それから自分自身の修行につとめ、他人のために勤め（利他行）を行うことが宗派の中ではかなり広い範囲で成立していたと考えられる。真言宗ではこのような法要の形式が「師資相承」（しじそくじゅう）として、師から弟子へ授受され「法式」が厳格に守り伝えられ、今日に至ってなお、古式が伝え続けられている。作法集を見ると、松江城築城の頃も厳格に伝えられた「作法」に従つて、執行されたことであろう。

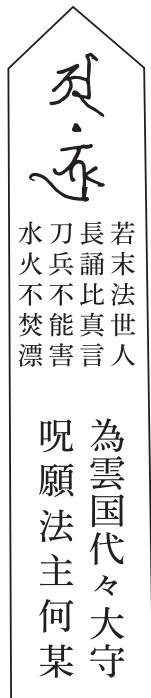
『雲陽誌』の記述にも、「委は秘密のことなればしらず」と書かれており、最近の研究成果と新史料の発見などにより、真言宗により鎮宅の祈祷がなされたことは間違いのない事実であろう。加えて、築城年代確定と国宝指定の決め手ともなった一枚の祈祷札の再発見については、詳細な歴史学的諸手法によって調査がなされ、特に『松江城研究』2（松江市教育委員会）（〇一三）に詳しいので、ここでは宗教的側面、殊に真言宗の立場から少し述べておく。再発見された一枚の祈祷札は鎮宅祈祷とは全く関係なく、また一般に知られる「棟札」でもない。一枚共、新しく建立成った城に対する新年を祝ぐ最

高の礼儀として届けられた祝意であろうと思われる。

大山寺銘のある「奉轉讀大般若經六百部武運長久」の札も、「奉讀誦如意珠經長榮處」の札も、天台宗、真言宗の書式に則った型式で作製されている。両宗派に限らず、十七世紀に入つたこの時代には、宗派毎に札の作り方など、型式、書式はほぼ確立していたと考えることは、現存する祈祷札や棟札、或是々の祈祷札（諸祈願）、お守り等から推察して、さしつかえないと思われる。

いま少し考察をしてみると、「奉轉讀大般若經六百部武運長久」の札の梵字は<sup>波羅蜜多</sup>（dharma-māṇī）で、天台宗と真言宗の大般若転読の札の作製時に書かれ、他派では、曹洞宗で<sup>波羅蜜多</sup>（jīva）が書かれる以外、ほとんど他の梵字は書かれないとと思われる。したがつて書式に則つた札といえるから、「武運長久」の部分が、願意、施主側の依頼で書き替えられるのが一般通例のものである。大きさから思うに、大山寺から僧が複数人、大部な経巻の入つた大箱を運んでの大般若会を執行したにしては祈祷札が少々貧弱に思えてならない。

もう少し大きく厚い札で、表はそのままで裏一面は左のように書かれてもよいと思う。



「奉讀誦如意珠經長榮處」の札は明らかに真言宗の書式に則つたものである。それ以前の鎮宅祈祷の流れと一体をなす祈願と考えると、大般若法要と異り、鬼門を封じるために建立された千手院と言つてもまだ小さなお堂と考

えられるので、山主と役僧、開府以前からの在存の真言宗寺院の山主住侶の幾人かが祈祷法会を行い、届けたのではないかと考えたい。

築城の大事業を執行中であり、堀の掘削や町の整備も進行中であり、多くの寺院も広瀬から移転中と考えるべきで、従来からの松江府在の寺が集まつての行事だったのかもしれない。真言宗寺院には、千手院の他に名分の本淨坊（現薬師院）、持田の小倉寺、本庄の大通寺、玉理寺、秋鹿の高祖寺、上意東乗光寺があり、「如意珠經誦誦」とすればこれら寺院の真言僧と考えられ、少人数の法要と思われる。参考祈禱の法体にとつては、出雲国の大天守落慶を祝う晴の法要に深く感動してのご祈祷だったと思われる。

#### 四、鎮宅祈禱法要

真言宗の作法次第に従つて、松江城築城時に行われたであろう祈祷を再現し、今後何らかの時、松江城保全修理での発掘調査とか、千手院での発掘調査等がなされるような時、参考の一助になればと思う。例えば『雲陽誌』の記述にある、「城中の土一簣を此山（千手院の山）におさめ、善惡の土となし、不二清浄の土となし、祭の道具などをもおさめ、先此院を建立して鬼門を封て後に本丸を築くことなり」と記されているが、昭和大修理の時には天守地下から「槍」、「玉石」などが出土しているので、千手院の堂宇の地中に、記述の祭具や千手院山とは異質の土など発見があれば、古記録の検証確認に役立つと思う。

時系列に添つて築城時に行われたであろう祈祷の再現を試みるが、水辺の寒村の赴き深い松江（島根郡、意宇郡等）で真言寺院も少なく、藩としての行政組織もまだ整っていないと思われるの中での行事ということを念頭に、地方的実情を加えて、概略を記すこととする。

#### 松江城築城時に行われたであろう祈祷の再現

・城地が極楽寺山（亀田山とも）に決定され、工事の準備がはじまり、現天守の場所が整地され、堀尾吉晴の命を受けた真言僧長海は、今後建てられる本丸中心部を結界（まさ竹、しめ縄、幣串（印串））五本淨水一桶散米等用意、中央穴を堀り、掘出した土を山状に盛り、四角、中央（頂上）に幣を立てる。

・北（玄武）に向かって祈祷、時間的には短いと考えられる。藩重役、関係者の散米を供え、出入の時間で多少の延伸もありうる。

・終つてこの盛り上げた土を同じく準備しておいた千手院山（呼称は後）へ運び同様な作法でもつて祈祷、本丸からの土を納め、掘り上げておいた土を本丸の穴へ納める。

・改めて本丸予定地で（当日続けてか、翌日かは不詳）、近在真言宗寺院出仕して、土公供作法次第により厳格に執行された、と思われる。

仕度は

- 一、アタラシキ小鍋一口附杓子一つ チリトリ一つ
- 一、新鋤一口、壹間許リ クイ一本
- 一、新桶三口、一ハ酒、一ハ水、一ハ粥 各杓有
- 一、土器五ヶ（切花、抹香、沈香、白檀、薰陸）
- 一、五穀 米、麦、大豆、胡麻（麦ハ大麦、小麦也）
- 一、栗 カチ栗
- 一、長机二脚
- 一、幣串 十二本
- 一、アツ紙（銀錢ヲ作る）
- 一、タイ松 五杷但ローソク二丁

# 一、酒、米（酒三升、米五合と記しても有）

## 一、新しきこも一枚

す。

一、松江城研究 一〇二

一、松江城調査研究集録 一〇四

一、松江市歴史叢書 一〇一〇

一、松江城再発見 西 和夫 ふるさと文庫一六

一、松江城三ノ丸物語 中原健次

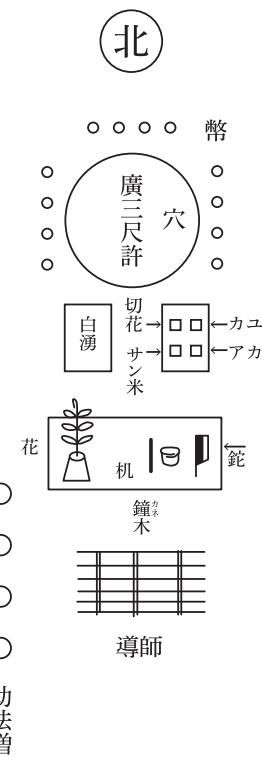
一、松江藩格式と職制 中原健次

一、眞言宗法儀解説 大山公淳

一、高野山学修灌頂並勸学会記 大山公淳

一、土公供作法 中院

一、加持祈祷集成 稲谷祐宜



・導師阿闍梨着座作法がなされる間、助法の僧は梵唱を唱え、如意珠經を読

誦、小鍋は長机の前に置かれカユ、散米等が入れられ後穴に納められる。

・穴の中央には玉石が奉安されている。

・現地での鎮宅祈祷はおおむね六十分～七十分程度で終り、導師が整え持つ

ていた鎮物を用人へ渡し各々方角の位置へ埋納され全て終了となる。息災護摩、文殊祈祷等は、工事の間千手院で祈祷が続けられる。昭和大修理の時も、毎日千手院で工事安全祈願と共に祈祷が続けられ、完成時に札は大工棟梁が受領に来山された。

昭和解体修理時の地鎮立柱祈祷会写真（6頁上段）の護摩壇は、現在も使用されており、裏には正徳二年（一七二二）壬辰八月吉日、寺社奉行佐々、仙田の署名花押があり、築城時も工事中は完成までの間、千手院で祈祷が続けられたことであろう。

以上

（おおきた てつや 千手院名誉住職）

最後に、参考とさせていただいた諸先生の文献を記して、厚く御礼申上げま

乾隆明氏の『松江藩の時代』正・続も全体像を知りおく上で大変参考になりました。また、千手院に伝わる古文書類の詳細な調査研究の必要性を痛感させていただき、よい機会を与えてくださった稻田信松江市史料編纂課長他、皆様に厚く御礼申上げます。



昭和の解体修理工事の際の地鎮立柱祈祷会（両側の柱が地～1階の通し柱、導師（中央）の護摩壇には正徳二年八月吉日の銘あり）（松江歴史館蔵）



# 松平宣維室天岳院の立場と役割

石田俊

## はじめに

近世の武家社会では表向と奥向の分離が進み、妻（正室）は奥向の主人としてその統括を担つた。奥向の主な役割としては、世継ぎを初めとする子女の出産と養育、他家との贈答儀礼を中心とする交際、法事の執行<sup>(1)</sup>などが挙げられており、政治・軍事などを担う表向に対し、家の再生産を中心として担当したということができる。

その中でも研究史上注目されているのが、他家や家中との贈答儀礼を中心とする交際である。将軍家に由緒を持つ正室が江戸城大奥に派遣できた女使は、その家と将軍家との関係を象徴する使いとして権威性を帶び、奥向の交渉ルートとしても機能したことが指摘されている<sup>(2)</sup>。一方、正室は儀礼の場合において、表向の上層家臣からも御目見や進物をうけるなど、家臣にとって大名と並んで奉公の対象であった<sup>(3)</sup>。このように、正室は儀礼を通じて将軍一家一大名家、大名家一家中の主従関係の確認や、大名家同士のネットワークの形成・維持にも寄与しており、その意味で表向の領域とも無縁ではなかつた。

こうした日常的な儀礼行為を前提として、大名家の正室は、藩主不在時あるいは幼少時に、家を代表する立場として意思決定の中心となることがあつた。これまで福岡藩黒田家圭光院<sup>(4)</sup>、鳥取藩池田家芳心院・桂香院<sup>(5)</sup>、仙台藩

伊達家觀心院<sup>(6)</sup>などの事例が報告されており、大名家の繼嗣問題や幼少藩主の養育などを主導したことが明らかになっている。特に觀心院の場合は、親類大名との協議のうえで幼少藩主の補佐体制づくりを行い、さらには家中を説諭し、家結集の要としての役割をも果たしたとされ、その影響力は極めて大きかったという。

しかし、正室が表向に関与することは、表向・奥向という近世武家社会におけるジェンダー領域を「侵犯」するものにほかならず、その権限が無限定なものであったとは考えられない<sup>(7)</sup>。藩主幼少時には、親類大名が藩政を後見し、国元へ幕府から監察役の国目付が派遣されるなど、表向においても家をつつがなく存続させるための体制がとられた。非常時において、正室にはどのような役割が期待され、何が許されなかったのか。改めて分析する必要がある。

本稿は以上のような問題関心のもと、藩主幼少時における正室（後家）の役割について、表向とあわせた全体構造のなかで明らかにすることを課題とする。今回検討するのは、松江藩五代藩主松平宣維室で、宣維没後に幼少の幸千代（六代藩主宗衍）を養育した天岳院（岩宮、伏見宮家出身）の事例である。

なお、宣維と岩宮の婚姻は、公武婚の一事例としても位置づけられる。武家は公武婚によって自家の貴種化・権威化をはかつたとするのが通説的見

解<sup>(8)</sup>であり、本事例もこれまで朝廷との関係で言及されてきた<sup>(9)</sup>。しかし、いうまでもなく縁組にいたる経緯や意図は多様であり、全てをそれに収斂させることはできない。本稿では、この婚姻に関する事実関係を明らかにし、近世の公武婚についての個別事例を積み重ねることをもう一つの目的とする。

## 第一章 岩宮の婚姻と江戸下向

岩宮は元禄十二年（一六九九）九月十四日、伏見宮邦永親王の娘として京都に誕生した。母は靈元院皇女綾宮<sup>(10)</sup>。この時、邦永親王は既に二男一女を儲けていたが、正室綾宮からの出産は初めてであった。同年十一月三日、唐橋在廉の勘進により岩宮<sup>(11)</sup>と名付けられた。系譜上では光子とも称される。翌元禄十三年十月十四日に髪置、元禄十六年十一月十二日に深曾木、宝永四年（一七〇七）三月二十三日に紐直と人生儀礼を消化し、正徳元年（一七一）十一月十四日には十三才で歯黒目始を行っている。

一方、松平宣維<sup>(12)</sup>は元禄十一年五月十八日、江戸にて産まれた<sup>(13)</sup>。幼名は庄五郎。父は松平近憲（のち吉透）、母はその正室の松岡藩主松平昌勝女清寿院。この時の松江藩主は近憲兄の綱近で、近憲は一万俵を受け取る部屋住みの身であった。元禄十四年、近憲は松江藩領のうち一万石を分知されて分家したが、宝永元年二月に嫡子のいない綱近の養子となり、同年五月、綱近の隠居により松江藩十八万六千石を嗣ぎ、吉透を名乗った。正室の産である宣維は、この時から松江藩の嫡子として遇されたと考えられる。そして吉透が翌宝永二年に没したため、宣維はわずか八才で松江藩主の地位につくことになった。とはいっても、本稿で主に検討する宗衍幼少期と違い、この時は先々代藩主の綱近が国元で存命であったため、綱近を後見として藩を運営することが可能であった。宝永六年、宣維十二才の時に綱近が没すると、翌年に国目

付がはじめて派遣されている。正徳二年、宣維は十五才で元服し、同四年には松江への初国入りを済ませた。

この間、宝永五年には宣維と久保田藩佐竹義処女幻体院（順）との縁組が成立している。それまで松江藩歴代藩主は同じ越前松平一門や久松松平家といつた徳川家と関係の深い大名より正室を迎えており、いわゆる外様大名からの正室は初である。とはいっても、娘は久留米藩有馬氏や萩藩毛利氏（ただし婚礼前に没）といった国持大名に嫁がせており、久保田藩とも佐竹義処正室宝明院が松江藩初代藩主直政女という関係にあった。正徳二年の結納以後、婚礼の交渉と準備が進められ、幻体院の賄料として婚家松江藩から高五千石を用意し、女中の禄をはじめ諸事その内でおさめること、久保田藩より士分十人・軽輩一人を付け、その禄は久保田藩が負担することなどが定められた<sup>(14)</sup>。宣維と幻体院の婚礼は享保五年（一七二〇）九月二十一日に執り行われたが、翌年五月十四日、幻体院は十九才で亡くなつた。この時、宣維は二十四才である。

宣維と岩宮の縁組は、幻体院の没直後に動き出していた。まずはこの縁組に至る経緯を確認していきたい。

### 【史料1】『宣維年譜』（島根県立図書館蔵）

秋七月四日、戸田山城守忠貞語松平中務大輔昌平<sup>(15)</sup>（（松平昌平）後改宗昌、國侯之叔父謂、出羽守<sup>(16)</sup>（（松平宣維））  
少壯而無妻、若有再娶幸有京師伏見中務卿邦永親王之女、將軍亦將有

預、請伝此言告出羽守

同月二十一日、致飛書于中務大輔奉謝蒙恩命  
（松平昌平）  
閏七月四日、中務大輔懷侯之報章往附山城守<sup>(17)</sup>（（戸田忠貞）

（中略）

同月二十二日、飛書自江府來、中務大輔承山城守之旨謂、秘婚娶之命敢

勿謝

秋八月十一日、使中務大輔請山城守、比年国用不給、少欲緩婚

【史料2】「伏見宮日記」<sup>15)</sup> 享保七年九月十一日条

一、松平伊賀守殿へ甲斐守參、昨日從案内也、対面、被申渡趣、岩宮御方松平出羽守殿へ御縁組被成度思召候、於出羽守方存所も無之候哉、中条大和守承合候様ニ被仰遣可然存候由也、尤兼而御内々御縁組之事御城向江御願被仰入候与存候由被申

『年譜』は松江藩で代々書き続けられてきたもので、藩の公的歴史書にあたる。その意味では扱いにやや注意を要するが、事実関係の面からみれば基本的に誤りの無いものと考えられる。これによると、老中戸田忠貞が松岡藩松平昌平を通じて、宣維と伏見宮邦永親王女との縁組を持ち出してきたのは享保六年七月四日であった。幻体院の四十九日直後というタイミングである。宣維はこの時、国元松江にいた。以後、詳細な交渉過程は『年譜』に記載されていないが、松江藩ではこの縁組を承諾した。その上で戸田は、しばらく縁組を秘して幕府への御札をしないよう告げ、一方松江藩側は、領内の窮乏を理由に婚礼時期を延ばすよう願い出ている。

吉宗や伏見宮家がこれほどまでに交渉を急いだ理由としては、岩宮の年齢が挙げられるであろう。享保六年時点で岩宮は既に二十三才、婚礼を挙げた享保九年には二十六才に達しており、初婚年齢としてはかなり遅い<sup>16)</sup>。それまで伏見宮家子女が武家に嫁ぐ場合、相手は将軍家か紀伊徳川家に限られており、松江藩は格下の部類に入る。しかし、伏見宮家としては、これ以上結婚を遅らせるることはできなかつたと考えられる。

次に【史料2】は伏見宮家側の史料である。享保七年九月十一日、伏見宮家諸大夫津田方宗が所司代松平忠周に呼ばれ、岩宮と宣維との縁組を実現したいという将軍吉宗の意向を告げられた。忠周からはあわせて、伏見宮の方から中条信実（高家）を通じて宣維の意向を確認するように申し渡されている。とはいえる忠周が、この縁組は伏見宮から「御城向」へかねてより内々に願い出していることと述べているように、この段階では既に伏見宮・松江藩とも内々の合意はとれており、あくまで手続きの一環と解すことができる。

【史料3】「伏見宮日記」享保八年十月二十三日条

この両史料から縁組が実現する経緯をまとめると、以下のようになろう。

すなわち、以前より伏見宮家から將軍吉宗に対し、岩宮の縁組について依頼するところがあった。吉宗の正室真宮は伏見宮家出身で、岩宮叔母にあたる（既に没）。世嗣家重にも、岩宮妹比宮との縁談が吉宗將軍就任以前から持ち上がっていた<sup>17)</sup>。当時徳川將軍家と伏見宮は極めて密接な関係にあり、伏見宮家はこのような関係性を前提として、吉宗に岩宮の相手探しを依頼したのであるう。吉宗は宣維が正室を亡くしたのを好機とし、その忌明け直後に老中を通じて宣維に話をもつてきた。そして宣維の要請をうけて縁組を延ばし、翌享保七年九月になって、將軍吉宗の意向として改めて伏見宮家に伝達し、伏見宮家から松江藩の了解を得るという形をとったのである。以後、松江藩から將軍へ、伏見宮家から天皇へ正式の縁組の願書が提出され、それぞれ同年十月二十日・二十五日に許可がおりて縁組が正式に成立した<sup>18)</sup>。翌享保八年八月二十五日には結納が行われている。

一、玉虫左兵衛（茂喜、京都代官）ム使手代吉田伝左衛門、金三千両持参也、是昨日於松平伊賀守殿被申

渡候從閔東被進候金子也、田中大舎人対話請取之、請取之証文渡之、追而伊賀守殿裏印之証文と引替可申段承合、右之使罷帰ル

請取申金子之事

金合三千両

右是者岩宮御方松平出羽守殿江御縁組被在之候付為御用途被進之、請取申處如件

享保八年酉十月

玉虫左兵衛殿

【史料4】『兼香公記』（東京大学史料編纂所蔵謄写本）享保九年十月十日条

一、昨日伏見宮姫宮（岩宮）首途事有之於今宮也、人数繁多、内々自大樹（徳川吉宗）公有内縁之故為用意料金子三千両之外ニキクマキ（菊紋）対のはさみ箇・クロマキエ（菊紋）長刀・

ナシ、菊紋中ハホウライサン貝桶・輿（クロヌリニ菊紋）云々

『同』享保九年十月二十二日条

岩宮今日閔東發足、大津泊云々、仍為嘉義伏見殿父子以使令之了

（中略）

是松平出雲守（宣維）為婚礼云々岩宮閔東下向行列大略（安住分一両他）

長井太右衛門先挾先払、貝桶（是自大樹公、被送之由也）、挟箇（私ニ出来）、長刀、徒十人、刀筒、徒

目付二人、輿（其腋十人斗、少々候後）、挟箇（是自大樹公、被送之云々）、茶弁道以下坊主、替輿、用事長持、桐油

箇、惣供（伏見家諸大夫）三木筑後守・伏見家僕丹波勘ヶ由・同山内右近・同石井左忠

太、其外自彼方來武士七八人、惣押小野舍人（大野泰常）舍人（千右取）巨細不及具注、其路今

出川通東行、京極大路東折至大津云々、前閔白父子・兵部卿宮内室等被出寺町邊見舞、其外見舞繁多云々

享保八年十月、伏見宮家は將軍吉宗より婚礼の用意として三千両をうけ

とった。これをもとにほぼ一年かけて婚礼準備が行われ、翌享保九年十月二十二日、岩宮は京都を発ち、十一月五日江戸に到着して松江藩の赤坂上屋敷に入り、同十一日に婚礼が執り行われた。當時内大臣をつとめていた一条兼香によると、吉宗からは三千両のほかに貝桶をはじめ輿や長刀、挟箱と

いった主要な婚礼道具も贈られており、江戸下向時には、それらを先頭として伏見宮家・松江藩双方の家臣が供をし、盛大な婚礼行列が組まれた。行列の総勢は四百人ばかりに及んだという。公家の三室戸共英（資方）が吉宗の「媒」による婚礼と記した。よう、吉宗の影響が強い婚礼であったといふことができる。

江戸下向後の岩宮の賄料については定かではない。伏見宮家にそれを負担する経済力はないことから、基本的には松江藩側で負担したものと思われるが、やはり幕府から一定の援助があったようである。

【史料5】『女中帳』（国立公文書館内閣文庫蔵）

天岳院様旧冬御居宅焼失被成候ニ付例年二月御拝領被成候御合力金取越

今月御拝領被成度と御願被成候間、何卒今月相渡候様致度候、以上

（元文三年正月）

豊岡八嶋

付札

取越金之儀願之通御申達しあるへく候、尤御勘定奉行江申渡し候

右之通付札調、正月八日伊豆守殿上ル、則御留守居江御渡し、但御勘定奉行者伊豆守殿御扣江奉り御取被成済

前

本史料は婚礼から十四年経過した元文三年（一七三八）のものである。前

年に松江藩赤坂上屋敷が焼失したことをうけて、幕府から毎年支給される合  
力金を通常より早期に拝領したいとの願いで、その通りに許可されている。  
始期や額などは明確ではないものの、岩宮には毎年幕府から合力金が支給さ  
れていたことが分かる。岩宮には女使の派遣も許可されており<sup>6)</sup>、江戸下向  
後も将軍家とのつながりを保った。

婚姻の翌享保十年には、将軍世嗣家重と妹比宮との縁組が公表され、同十  
六年、比宮は江戸に下向した。これによって、岩宮は将軍家の一族という立  
場を確固たるものとした。この間、享保十四年に岩宮は幸千代（宗衍）を産  
んでいる。吉宗はそれを祝って年寄外山を赤坂上屋敷に派遣し、幸千代に縮  
緬と鯛を贈った<sup>7)</sup>。

以上、本章では宣維と岩宮の縁組・婚礼の過程を明らかにした。この縁組  
は伏見宮家から依頼をうけた吉宗の意向によるもので、婚礼にあたっては幕  
府より多額の援助が行われ、江戸下向後も岩宮は将軍家と密接な関係を保つ  
た。一方、松江藩にとってはイレギュラーな縁組であり、そこに朝廷を利用  
する意思を読みとることは困難といえよう。

## 第二章 幸千代幼少時における天岳院の立場と役割

享保十六年八月二十七日、松平宣維が三十四才で亡くなり、岩宮は剃髪し  
て天岳院と名乗った。跡を継いだ幸千代はわずか三才である。吉透没時と異  
しかいなかった。この事態に対して、表向と奥向はどのように対応したので  
あるうか。

【史料6】「雲州松江秘事」（松江市史 史料編6近世II）  
一、同<sup>（享保）</sup>十六辛亥年

九月五日宮様江御朦氣為御尋上使外山殿御出之節殿様江茂上意有之、  
姫宮様より御雛小人形被遣之、十月十三日御家督無相違被仰付之旨  
松平左近將監殿御宅ニ而被仰渡之、御名代松志摩守様、十月十五日  
松兵部大輔様・松左兵衛督様・松大和守様御登城之処、御用之儀候間御  
居残被成候様ニ与被仰出、于時大和守様御不快御礼廻無御登城

右御兩人様へ御老中御列座、左近將監殿被仰渡候趣如左  
松平幸千代幼年之儀ニ候間何茂被申合諸事仕置等之事も可被附心候、重  
キ仕置等之儀者何茂被致承知候上申付候様ニ有之可然候、天岳院訳も有  
之付而旁以申達候

### 【史料7】『宗衍年譜』

十九日、天岳太夫人応台請將升金城、大將軍使阿監外山來迎之（中略）  
大將軍謂曰、不待今日宜囊請駕、為事所擾乃至疎遠、今者比宮亦此來、  
自今以後其數臨焉、又召見上薦（有馬氏者、名於縫、廣橋中納言第某子也、  
中納言爲女、者伏見親王乞爲上臘願呈岩宮）、局・園原親喰  
云、謹事天岳宮保護勿怠、幸千代幼冲、其篤奉而長之、繼而中蘿扈從皆  
賜見

宣維の死にあたって、吉宗は年寄外山を天岳院に送つて慰め、幸千代にも  
「上意」を伝えた。十月十三日には幸千代の家督相続が許され、母里藩（松  
江藩支藩）の松平直員が名代としてこれを請けた。十五日には、越前松平家  
一門の松平宗矩（福井藩）・松平直常（明石藩）・松平義知（白河藩）の三人  
が登城後めしとどめられ、病氣の義知を除いた二人に対し、幸千代幼少中は  
松江藩の仕置に心を配り、重要な仕置は三人了承の上で申しつけるようにと  
命じられた。藩主の幼少中、親類大名を中心とした後見体制がとられること  
自体は通例であるが、今回の場合は「天岳院訳も有之」と吉宗と天岳院の由緒

を明示し、老中列座の上で申し渡されたことが特徴といえる。国元松江には、幕府より国目付として堀直好・土屋安直が派遣され、幸千代の成人まで家老が先例に則り政務を処理していくこととなつた<sup>60</sup>。

その翌月十九日、天岳院は江戸城に初めて登城した。いうまでもなく、これも将軍家一族としての特権である。吉宗は、今後もたびたび登城するようとに伝えた上で、上臈・局・園原の天岳院女中三人を召し、直々に天岳院によく仕え幸千代を養育するようにと命じ、供をした中臈にも御目見えを許している。嫡男を含め大名の子女は幼少期奥向で育てられたのであり<sup>61</sup>、天岳院および奥女中は吉宗の命により幸千代の養育に責任を負つたのである。

次の史料には、奥向における養育の一端がかいまみえる。

#### 【史料8】「天岳院遺言書」（『松江市史 史料編8近世IV』）

一、われ／＼めしつかい候者とも、京より召つれ候年寄共はしめ、それ／＼と御／＼ひんかりたのミ申候、その原初たのミ申候、さかた事ハ／＼家中の者にて子とももあり、すへのきつかいなく候、たミの事われ／＼京よりめしつれ候者にて、子ともあつかいかうしや、そもそもたんしやうよりつけおき申候、われ／＼めかねのとおり、そもそもよくもりそたてせい人めされ候、八才よりて手習／＼物よミせいニ入そたて申候、そもそも事すべれたる生つきゆへ、もん／＼もなきやうニかくもん心かけ申され候やうニいたしたきとて、きけんとりせいニ入申候、すいふん／＼かくもんニ御心をよせられ、古人のおしへを御まなひ、国家を御おさめ候へく候、ぢふんのりはつばかりにては國家のせいとうハまいらぬ御事ときゝおよひ候、たミの事わけてたのミ申候、にやわじきやうし御申つけ、としより候てすへらく御させ給候へく候

本史料は、天岳院が没した元文三年の作成と推定されるもので、天岳院が奥女中に筆記させ、幸千代（当時十才）にあてた長大な遺言書の一部である。これによると、奥向で幸千代の養育を主に担当したのは民野という京都出身の女中であった。乳をあげたかどうかは不明だが、幸千代の誕生時からつけられ、八才からは手習の講師もつとめた。この民野と坂田は後に幸千代の老女としてその名がみえる<sup>62</sup>。十八世紀半ばには、民野は天岳院の願い通りに養子をとることも許され、田染家として幕末まで存続している<sup>63</sup>。

本遺言書において、天岳院の注意は側妾の選び方から食生活にまで及んでおり<sup>64</sup>、天岳院自身も幸千代の養育に主体的に関わったことが明らかである。奥向の第一の役割は幼少藩主の養育であり、前代正室（後家）の統括のもと、奥女中が実務を担つていたことを確認することができる。

このように、表向では親類大名の後見および国目付の監察のもとで家老たちが先例に則つた形で政務を処理し、奥向では前代正室（後家）を中心に幼少藩主を恙なく養育するというのが、藩主幼少期における表向と奥向の基本的な役割分担であった。本事例の特徴は、【史料6】【史料7】に見えるように、将軍吉宗が天岳院との関係に基づき、直々に表向・奥向双方へそれぞれの役割の精勤を命じたことであろう。天岳院自身はこれについて、以下のように認識している。

#### 【史料9】「天岳院遺言書」

われ／＼きふんも久しき事ほんふくのほとおほつかなくおもひ候ニ付、心付申候事ほつ／＼と高野ニかゝせ申候、そもそもまたおさなく候ゆへ、一入／＼いのちもおしく、せめて二十ばかりまでもわれ／＼ながらへい申候ハ、家のためそもそもひ候へとも、ろうしやうふしやうのならひなれハ、せひニおよはぬ事、もしほんふく

いたし候ハ、此文火中致候ハんとねられぬなくさみ事にかきつけさせ申候、もし又われ／＼なくなり候ハ、両御丸よりの御ひかりもなくなり、一もん方(門)はしめかちうのもの共までおもひ入もけふとハちかひ候ハんとこれのミ心にかゝり申候、われ／＼へ御(懇意)故此家の事も御ひ(晶夙)きのおほしめしニ候、もしわれ／＼なくなり候とも相かわらす右のおほしめしかわらぬ様ニ致度、その原へも申ふくめ申候、されともかうへんの事ハばかりかたく候

#### 【史料9】

【史料9】は【史料8】の冒頭部分にあたる。天岳院は、遺言書を筆記させるに至った事情を述べた上で、自身の死後における最大の心配事として「御ひかり」の消失を挙げる。天岳院は、吉宗や家重の威光（「御ひかり」）が自身を通じて幼い幸千代にまで降り注いでおり、親類大名や松江藩家中もそれによつて自身や幸千代を重んじていると考えていた。上述したような吉宗の口添えは、まさに「御ひかり」のあらわれであつたといえよう。そして、将軍家の威光は、将軍家と天岳院との個人的な交流（「御こんゐ」）が松江松平家への援助（「御ひゝき」）へつながつたものであり、天岳院が亡くなれば消える可能性があつた。天岳院は文字通り将軍家の威光を背負つていたのであり、その発言は格段の重みを有したと考えることができる。

このため、天岳院は奥向本来の役割である幼少藩主の養育のみならず、表向に対しても自身の意思を表明する機会が少なくなかった。その中でも、家中統制に関わる次の事例は興味深い。

【史料10】「享保十七年松江藩江戸御用状留」（島根県立図書館所蔵御徒文書）  
一、同廿二日松兵部太輔様・松大和守様御出被成、宮様へ初而御対顔被成候、尤小書院ノ中ノ間通り、鈴之間ラ御奥へ御通り被成候、鈴之間口内

ら高岡勘大夫御迎ニ罷出鈴之間外之方ニハ御目附一人相詰申候、追而小書院へ御出被成上ニ而御料理御茶菓子等ニ而追付御立被成候由

#### 一、同日梅式膳被申聞候ハ、黒川一学儀唯今御廣座敷従

宮様被為召、御家老中列座ニ而蘭原を以被仰渡候ハ、御仕置添役御免被成候様ニと先頃段々願之趣達御聴候、大切之勤柄相願候義尤ニ被思召候得共、先暫ク唯今迄之通相勤候様ニと段々御懇意を以御差留被成候由、此段為相知候由式膳被申聞候旨

#### 【史料11】「天岳院遺言書」

一、黒川弥税事、おやから年久しく当地ニつめ、われら下向の時分も道中までむかいにも下され候、御留主年ハおやから一人にてつとめ、われく事せわになり、女(房)ほうへもあい、そもしのちつけもたのミ申候、今やからいまたわかく候へとも、よくつとめ、しおきまでつとめ申候所に、中間のもの共とあひ申さぬやうすにミヘ、やく義を御めんねかい申候、此そんし入ハしおき御めんかうむり、そもしのそははなれすもりたて申度心入にて候へとも、かくしきおもき者ハそはにかしらたちつとめぬせんれいと申事故、われ／＼たつてとも申かたく、その通ニいたしおき候、やからおもひ入ニハ御せんたいニハかるう共(氣毒)これ／＼も御心になわす御うたかいつよく、かるう共との御間きのとく成事共にて候故、さやうになきやうに、かるうはしめかちう共ニ御しひ御めくミふかくちうしんはけミ相つとめたてまつり候やうニ致度との心入、われ／＼よくそんしおり候へとも、おもて向の事しまの守殿・かるう共(相談)もいたし候事、女のさし出かましき事ハ申されす、ちせつも候ハんと存候て、ねかいのせつもとめ申さす、その通に致おき候、人のついしやうけいはくきらいの者一すし成心入の者とわれ／＼ハそんし候

まゝ、そもそも（成）い人の後やからも年かましくなり申候まゝ、心やすく万事用事御申つけ、そうたんのあいてにもめされ候へかしとそんし候、そもし事大ミやうの事何ニふそくもあるましく候へとも、なき物ハ（忠臣）ちうしんの人にて候、からうのよきか家のたからにて候、よく／＼人を御らん候へく候

黒川弥税という藩士の処遇に関する史料である。黒川弥税は知行千石で江戸定府。父も弥税を名乗って岩宮縁組を差配し、岩宮下向時には川崎まで迎えとして出向き、その妻は幸千代の乳付役をも勤めた（史料11）の「おややから」。享保十六年隠居し、同十九年没。その養子弥税（初名一学）は享保十六年八月八日に仕置添役に任じられ、同年十月十三日より幸千代の守頭を兼勤した。享保二十一年正月には幸千代の側役を兼勤したままで仕置役となつたが、同年（元文元年）十一月、病気と不勝手を理由に全ての役職の辞任を願い、側役のみ辞職を許可された。元文三年三月には仕置役の辞職も許され、同年九月に江戸より松江に戻った<sup>24</sup>。黒川家は、二代にわたって天岳院の信頼厚い重臣であった。

その二代目弥税（一学）が享保十七年五月二十二日、仕置添役の辞職を願い引き留められた時の様子が【史料10】である。天岳院に呼ばれた黒川は家老列座の上、天岳院付奥女中園原が天岳院の意向を伝える形で懇ろに慰留をうけた。幸千代の守頭を兼任していたとはいえ、仕置添役という表向の役職の慰留がこのようになされたことは注目されよう。天岳院は意思表示のできない幼い藩主の代行的役割を果たし、家結集の核となつたのである。

とはいえる、こうした家中統制は本来表向に属する事柄であった。そのため、天岳院が関わる際には、表向の承認が前提であつた点には注意が必要で

ある。黒川の慰留が行われた当日、表向の後見役である松平宗矩・松平義知の二人が松江藩赤坂上屋敷に入り、天岳院とはじめて対面している。これは黒川の処遇について二人の同意を得たことを示唆する。慰留の席に家老が列座したことと同様の意味を持つものであろう。

【史料11】は「天岳院遺言書」の一部であるが、その中で天岳院は黒川父子の功績をたたえた後、黒川弥税が諸職の辞任を願った際の様子をふりかえっている。時期はおそらく、元文元年十一月のことと推定される。前述のように、この時黒川は幸千代側役と仕置役を兼任しており、側役の辞職を許されている。しかし天岳院によると、黒川本人は仕置役の辞職を望んでいたが、格式の重い者は側役の長とならない先例であったという。そのため天岳院は、表向は母里藩松平直員や家老たちが相談することであり、「女のさしが、格式の重い者は側役の長とならない先例であった」と述懐している。表向の承認が得られない以上、天岳院は発言を控えざるを得ないことに注意したい。

次に、天岳院と領国支配との関わりについてみよう。享保十七年、西日本を享保の飢饉が襲つた。松江藩は幼少藩主を抱えるなかで大きな危機を迎えたこととなるが、この事態に対し、国元の仕置役は天岳院の権威によって家中の動揺を抑えようとした。

【史料12】「家中僕約につき天岳院より御尋ね」（『松江市史 史料編8近世IV』）

御たつねのおもむき

宮様御たつねあそハされ候ハ、去年御国虫つき候付御（支配）しほい御さしつとい大かたならせられす候ゆへ、御家中の御手（當）あてあそハされかたく、それに付御国（仕置）しおき御家老・おもて御家老申あわせ、そ（相談）うたんのうへ宮様御聞あそはし御くろふに覺しめし候、上にも至極の御けん（僕約）やく

あそハされ候間、御家中末々まで何とぞ来秋迄とりつゝき候やうにとの儀仰つけられ候よし、御家中へ御仕置のめん／＼より申渡し候よしくわしく書付差出し御らんあそハされ候、もつともなる義にも覺し召候へとも、かねて極人・高田九郎兵衛乙部うけ給候とおり、御本丸より上意のおもむきも候ゆへ何事によらず御おもて向御表構かまいあそハされざる御心にて御さなされ候所ニ、一おううか応窓ひもなく申渡し候事楚忽そこつ千万なる儀ニ覺し召候、殿様御ためハもちろん、御かちう家中ためにあいなり候ハ、いかやうにも申わたしよろしき事ニ候へとも、万々一御本丸へ相きこへ候へは宮様ことの外なる御めいわく仰わけられも御さなき事共ニ覺しめし候、

さ候へハ殿様の御ためにもよろしからず、何から何までしこく御心くる

しく覚しめし候、さためてきわめ・高田極人九郎兵衛方よりおと昨年し上意の段ハ御国へも申つかはすへき事に思召候、又ハ申しつかハさす候や、此段御ふしんに覚しめし候、それ故兩人へ御尋あそハされ候間、いさゐを申上へきとの御意に御さ候、ことさら御國御目附も御入候へハ一入／＼宮様御難儀なんきいか斗に思召候、かれこれもつて右之御たつねに御さ候、以上

正月

瀬山  
その原

右御書付正月十五日右両人より受取之

本史料は天岳院女中瀬山・園原が天岳院の意を奉じて発給したもので、年未詳だが内容からして享保十八年のものと考えられる。代々家老をつとめた乙部家所蔵であることから、両女中から在江戸仕置役高田極人・乙部九郎兵衛に渡されたものを乙部が写し取ったと推定できよう。本史料によると、

飢饉により財政困難に陥った国元の仕置家老は、表家老30と相談の上、家中に對して天岳院の「仰」を伝えた。それは、国元の状況を天岳院が苦労に思っていること、そして天岳院や幸千代も僕約につとめるので、家中も来年の秋まで何とか凌ぐようにという内容であった。しかしそれを知った天岳院は不快感を示した。すなわち、一年前に吉宗より表向には関わらないようとに釘を刺されており、天岳院自身も注意しているのに、このようなことが吉宗に聞こえてしまっては弁解しようがなく、幸千代にとつても良くないことになる。吉宗の意向は国元にも伝えたはずだがどうなっているのか、と強い口調で仕置役二人を詰問する内容となっている。

国元の家老たちは、危機的状況にあたって家中の引き締めをはかるため、天岳院を登場させたと考えることができる。その意味では表向の承認といいう前提は満たしているといえる。にもかかわらず天岳院が自身の関与を全面的に否定せざるを得ないのは、これが在国全藩士に關係する大事であり、さらには領国統治に大きく関わる問題であつたためと考えられよう。この範囲の問題は、家老が一門大名の助言をうけて処理すべきものであり、表向の承認如何によらず、奥向が口を出すべきではなかつたといえよう。

以上、本章では幸千代幼少時における天岳院の役割を検討した。天岳院の第一の役割は奥向において幸千代を養育することであつたが、將軍家の威光を背負うだけにその存在は大きく、表向の家中統制にも参画して家結集の核ともなつた。しかし、それは表向の承認を前提として行われるものであり、また領国計営には参与しないよう、吉宗により明確に線引きがなされたものであった。天岳院は、自身が表向・奥向の境界を踏み越えていることをわきまえ、絶えず抑制的に振る舞わなければならなかつたといえよう。

## おわりに

藩主幼少期においては、奥向では正室を中心には奥女中たちが幼少藩主を養育する責任を負つた。一方、表向では家老が親類大名の助言と承認、そして国目付の監察をうけた上で領国を運営する。そして表向のなかでも、家中統制に関わる部分は正室が表向の承認のもとで部分的に参与し、主従関係の要としての役割を果たした。その際、正室の発言力は、自身の性格や力量、実家（天岳院の場合は將軍家）の家格、藩主の成長具合といった諸要素によって伸縮するものであつたろう。正室は表向からの期待に応えつつ、一方で自身が表向・奥向の境界を踏み越えていることを自覚し、絶えず自制する必要があつた。このような形で、表向・奥向が総力をあげて家を存続させるための体制を築き、藩主の成長を待つたのである。松江藩の場合は、正室天岳院が將軍家の一族であった関係上、吉宗の強力なバックアップによって上記の体制が強化され、その威光をうけた天岳院の発言力は極めて強いものとなつた<sup>④9</sup>。

とはいっても、この表向・奥向の境界は固定的であつたわけではない。むしろ、近世武家社会が家という権力体による統治という形態をとる以上、この境界は実態として曖昧で、流動的なものにならざるを得ない。だからこそ、國元仕置役と天岳院との認識のズレも生じたし、吉宗も天岳院に明確に釘をささなければならなかつたといえよう。もちろん、時期や各家の家風によつてもこの境界は動き得たであろう<sup>⑤0</sup>し、今後とも事例を積み重ね、正室の政治的役割やその変動を明らかにする必要がある。

最後に、宣維と岩宮の婚姻を公武婚の一事例として捉えるとどのようなことがいえるであろうか。松江藩は岩宮との婚姻によつて天皇・朝廷との関係を強化し、貴種化・権威化を目指したわけではない。伏見宮家との縁組を通じて徳川将軍家とつながることに意味があつたのであり、結果的にそれが松江藩の存続に重大な影響を与えた。天岳院の没後も松江藩と伏見宮家との交流は続いたが、寛政三年（一七九一）に伏見宮家から縁談が持ち込まれた際、当時の藩主治郷は断る姿勢をみせており<sup>⑤1</sup>、公家社会と一定の距離を保持続けている。そもそも徳川将軍家や御三家・御三卿は、近世を通じて撰家・親王家と縁組を繰り返している。この点から考えれば、天皇・朝廷に直接結びつくというより、将軍家や他大名家と関係を深めるための公武婚というのが、特に国持大名クラスの公武婚の一類型として想定しうるのではないだろうか<sup>⑤2</sup>。近世の公武婚についてはまだまだ事例の蓄積が不足しており<sup>⑤3</sup>、早急に朝廷権威に結びつけることは慎重であるべきであろう。

なお、天岳院は繫行列がその嫁入りを契機にはじまつたという伝承<sup>⑤4</sup>があるように、現在の松江市民にも親しまれている人物である。ほかにも松江大橋の擬宝珠は彼女が京都より持参した嫁入り道具ともされ、松江市京店通りは嫁入りした天岳院を慰めるために京橋三条通に模して庇を長くしたのが由来ともいわれる<sup>⑤5</sup>。天岳院が松江の地を踏んだことは一度もないため、いずれの伝承も事実とは考えがたいが、松江藩と朝廷との結びつきを強調する文脈で語られている点は注目される。成立段階では将軍家とのつながりが重要視されていた婚姻が、朝廷との由縁へと捉え直される過程についても今後検討しなければならないであろう。

## 付記

本稿は、二〇一六年（二〇一九年度）科学芸術研究費補助金（若手研究B）「近世公武婚の総合的研究」（課題番号16K16905）による研究成果の一部である。

(1) 柳谷慶子「武家のジェンダー」（大口勇次郎他編『新体系日本史9 ジェンダー』山川出版社、二〇一四年）。

(2) 松崎瑠美「大名家の正室の役割と奥向の儀礼」（『歴史評論』七四七号、二〇一二年）、柳谷慶子「大名家「女使」の任務」（総合女性史学会編『女性官僚の歴史』吉川弘文館、二〇一三年）など。

(3) 柳谷慶子「武家権力と女性」（藪田貫・柳谷慶子編『江戸の人と身分4 身分のなかの女性』吉川弘文館、二〇一〇年）。

(4) 大森映子「大名相続における女性」（『歴史評論』七四七号、二〇一二年）。

(5) 谷口啓子「武家の女性・村の女性」（鳥取県史ブックレット14、二〇一四年）。

(6) 柳谷前掲「武家権力と女性」。

(7) 百姓身分におけるジェンダー領域の「侵犯」については、長野ひろ子「近世村落とジェンダー・ヒエラルキー」（同著『日本近世ジェンダー論』吉川弘文館、二〇〇三年）参照。長野によると、村落において「家」経営体の維持のため女性がジエンダー領域を超える場合はあったが、その際には、男性性の利益を損なわないよう印づけがなされ、かえって女性自身にアイデンティティの不安をもたらしたという。

(8) 松澤克行「公武の交流と上昇願望」（堀新・深谷克己編『江戸の人と身分3 権威と上昇願望』吉川弘文館、二〇一〇年）。

(9) 例えば、松平家編輯部編『松平不昧伝』中巻（筑文社、一九一七年）において、松平治郷は祖母にあたる天岳院の庭訓を受け、「朝廷を尊奉すべき所以」を学んだとする。

(10) 『伏見宮実録第九巻 邦永親王実録』（ゆまに書房、二〇一五年）。以下、岩宮の略歴は同書による。ただし岩宮の誕生日はのちに十月十六日に改められている。

(11) 現在の松江市では「岩姫」の名で知られているが、同時代史料でその呼称は確認できない。

(12) 享保四年までは宣澄を名乗ったが、以下宣維に統一する。

(13) 以下、宣維の経歴は「雲州松平家系譜」（『松江市史 史料編7 近世III』二〇一五年）および『松江市史 通史編3 近世I』（二〇一八年刊行予定）による。

(14) 高橋博「近世中期における大名婚礼交渉の一侧面」（『論集きんせい』一六、一

九九四年）。なお、高橋は幻体院賄料を久保田藩より支出したと捉えているが、引用されている諸史料を読む限り、松江藩の負担と考えるべきであろう。

(15) 前掲『伏見宮実録第九巻 邦永親王実録』。

(16) 「伏見宮日記」享保十年正月二十七日条。

(17) 「柳營日次記」（国立公文書館内閣文庫蔵、一六四一〇〇一八）享保七年十月二十日条、「伏見宮日記」享保七年十月二十五日条。

(18) このためか、婚礼のため京都から江戸へ下る際には、表向には十八才と唱え、年齢を取り繕ろう処置がとられた（『兼香公記』享保九年十月十九日条）。

(19) このような援助をうけたのは岩宮だけではない。同時期に成立した妹基宮と今出川公詮の縁組においては、伏見宮家へ幕府より千両、夫方の今出川家へ金二百両が贈られている（『伏見宮日記』享保七年十月二十七日条、『公詮卿記』（東京大学史料編纂所蔵謄写本）享保七年十一月二十七日条）。このことからすると、岩宮の縁組についても、夫方の松江藩にも三千両とは別に扶助があった可能性もある。

(20) 「後中内記」（宮内庁書陵部蔵）享保九年十月二十二日条。

(21) 「資方朝臣記」（宮内庁書陵部蔵）享保九年十月二十二日条に「今日伏見邦永親王姫<sup>君音</sup>関東へ御下向、松平出羽守宣澄<sup>マツタケ</sup>へ婚礼之故也、当將軍吉宗公之媒也云々」とある。

(22) 『宣維年譜』享保九年十二月三日条など。

(23) 『宗衍年譜』（島根県立図書館蔵）享保十四年六月五日条。

(24) 『松江市史 通史編3 近世I』。

(25) 『享保十六年松江藩御用状留』（島根県立図書館所蔵御徒文書）十月二十二日付用状に「齋藤丹下被申聞候ハ、殿様御幼年被成御座候付唯今之内奥ニ被為入候」とある。同じく「享保十七年松江藩御用状留」七月晦日付用状には「前廉ハ御表へ御出被遊候儀折々ニ候處、近キ頃者日々終日御表被成御座候」とあり、幸千代は四才ごろからは表向へ頻繁にでていったようだが、【史料8】にみられる通り、養育の基盤はなおも奥向にあった。なお、大名家の成育儀礼については大藤修

「秋田藩佐竹家子女の人生儀礼と名前」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一四一号、二〇〇八年）が佐竹氏の事例について検討している。

(26) 『松江市史 通史編3 近世I』。

(27) 『松江藩列士録』三（島根県立図書館、二〇〇五年）。

(28) 例えば「そもそもしおさなき時分よりわれ／＼かたくせいとういたし候、つるニ  
しよくもたれ一度もなく丈ふ〔夫〕二十才までそたち候ハ、ミナ／＼しよくやうしやう  
よきゆへにて候」ともあり、天岳院が幸千代の食生活を管理していたことがみえ  
る。

(29) 『松江藩列士録』四。

(30) 家老のうち、仕置役についていない者をさす（『松江市史 通史編3近世I』）。

(31) 吉宗の意向は示された時期は定かでないが、享保十六年十一月十九日、天岳院  
の初登城の際（前掲【史料7】）の可能性が高いのではないか。吉宗は、天岳院と  
奥女中に幸千代の養育を任せると同時に領国支配への関与を明示的に禁止し、そ  
の権限の及ぶ範囲を規定したと考えることができよう。

(32) 寛保元年（一七四一）、松江藩では藩政の現状に不満を抱いた国元の表家老が、  
出府の許可を求めて訴訟を起こしている（『松江市史 通史編3近世I』）。この事  
件の詳細は定かではないが、天岳院没後に家中で混乱が発生した事実は、天岳院  
の存在の大さを物語るものといえるかもしれない。

(33) 徳川吉宗は、表向と奥向の区別に厳格であったといわれる（松尾美恵子「將軍  
御台所近衛熙子（天英院）の立場と行動」（歴史評論）七四七号、一〇二一年）。  
本稿で検討した時期は、正室の表向への関与にとりわけ敏感であった可能性はあ  
る。

(34) 「好宮縁談につき松平治郷書状」（『松江市史 史料編8近世IV』）。寛政四年のも  
のとすべきである。なお、同書で本文書の翻刻と年代比定は石田が担当したが、  
これを「文政九年カ」と比定したのは明らかに誤りであり、訂正したい。

(35) この点については、既に千葉拓真が加賀藩前田家を事例とし、外様大藩や御三  
家・御三卿との縁戚関係を有する撰家との縁組が有力大名家同士の関係構築・深  
化につながること、特に十九世紀の鷹司家は将来的に大奥や将軍への回路が期待  
できる存在であったとし、加賀藩前田家が鷹司家と縁戚関係を強化させる一因と  
なったと指摘する（千葉拓真「近世後期の加賀藩前田家と撰家」（朝幕研究会編  
『近世の天皇・朝廷研究 第3回大会成果報告集』学習院大学人文科学研究所、二  
〇一〇年）。

(36) 例ええば、元禄十五年に成立した萩藩毛利吉広と鷹司輔信女養心院の縁組におい  
ても、萩藩は水戸家との関係、そして綱吉御台所鷹司信子との関係を縁組受諾の

理由に挙げている（山口県文書館蔵毛利家文庫「小石君様御縁組御結納一巻」）。

(37) 『日本歴史地名大系33 島根県の地名』平凡社、一九九五年。

(38) 『松江市誌』（松江市、一九四一年）一三九頁。

（いしだ しゅん 山口大学人文学部講師）

# 近世後期、松江藩領における小型廻船の活動

中安恵一

## はじめに

近世の日本海運においては、菱垣廻船が衰退し始め、また諸国で新興海運勢力が登場する宝暦～天明期頃を幕藩制的市場構造の転換期とする通説的理解がある<sup>①</sup>。多様な市場圏の形成が進んだ地方各地では、それにともない廻船数増加や廻船規模の二極化といった傾向が見られた。そのうち買積形式によつて大型化した廻船の代表的存在が北前船や内海船であり、彼らは旧来の輸送勢力に対抗する新興海運勢力として評された。

そうした新興海運勢力に対する研究が著しく進展したいっぽうで、多数化した小型廻船については、近世後期に二〇〇石積以下の廻船が圧倒的多数を占めるに至っていた状況は早くから示されていた<sup>②</sup>が、その具体像は史料的な制約もあって限られた成果にとどまっていた。この点について実証的な研究を行つた斎藤善之は、明治初年の新潟から酒田にかけて活動した天渡船について検討し、天渡船は限られた地域市場圏における商品流通の担い手として北前船全国的市場圏とは交わらない重層的な関係にあつたとし、両市場圏の密接な関係とともにあつた完全な機能分化を指摘した<sup>③</sup>。

いっぽう、深井甚三は化政期における越中廻船について検討する中で、酒田・飛島へ訪れる多くが二・三人乗の小型廻船であることを突き止め、その広範な航海圏を指摘した。また、天保期に活動した小型船主の多くが明治初年にはその姿が見られないことから、彼らの経営発展の難しさを指摘した<sup>④</sup>。

筆者もこれらの議論を受け、石見国銀山附幕領を事例に小型廻船の存在形態について検討した<sup>⑤</sup>。そして、彼らの大坂から北国にわたる中大規模廻船同様の広範な航海圏を明らかにし、また零細家族経営による多様な稼業形態と柔軟な経営対応を指摘し、彼らの持つ低リスク経営の志向性や、ときに廻船業が生業選択肢のひとつに過ぎなかつた側面を明らかにしたつもりである。本稿でもこうした視角を引継ぎ、廻船活動を生業の観点から捉え直すことで浮彫になる小型廻船の存在形態について、さらなる検討を加えたい。

本稿では、出雲国東部に位置する島根郡・秋鹿郡の沿岸部および松江城下町を主な対象とし、近世後期における松江藩領下の廻船活動について検討を加える。出雲国内の廻船活動に対するこれまでの研究は、同国第一の特産物であった鉄の商品流通の問題として取り上げられ、鉄山経営の観点から産鉄の販売先や流通経路、流通構造の変容などが検討された<sup>⑥</sup>。しかし、同国の流通機構そのものを中心に据えた研究は乏しく<sup>⑦</sup>、また鉄以外の商品流通についての研究も見られない。したがつて流通機構の全体像はいまだ不明な点が多く、更なる検討の余地を残している。

以上を踏まえ、本稿ではまずは前提として当該地域の全体的な廻船活動の動向を検討し、それを踏まえて小型廻船の稼業形態や経営志向、廻船業への参入や経営の特徴について分析を進めたい。そして、近世後期における小型廻船の歴史的意義に関する見通しを得ることとしたい。

# 第一章 回船規模と遠隔地交易

## 第一節 回船の分布

当該地域においては、松江城下に形成された三三町（以下、町方とする<sup>(8)</sup>）、および日本海に面する諸浦（以下、外浦とする）と宍道湖・中海に面する内潟（以下、内浦とする）からなる浦方において回船活動が展開した（図1参照）。まずはその全体像を概観するため、回船の分布状況を見ておこう。明治九（一八七六）年一月調べの各郡村誌によれば、表1の通り五〇石積未満の荷船が全域で圧倒的多数を占めている。五〇石積以上について見ると、町方では二〇〇石積未満が一二艘、一〇〇～五〇〇石積が九艘存在している。一方、浦方については一〇〇石積未満が九艘で、その内訳は加賀浦八艘、美保関一艘と、外浦の一部の浦に偏在している。当時、浦方で舟掛けのよい港湾機能を有した浦は美保関・雲津浦・笠浦・加賀浦の四浦<sup>(9)</sup>とされ、回船もそうした浦を中心に展開している。おおよそ諸国への遠隔地交易が可能であった五〇石積以上の回船<sup>(10)</sup>は、以上のように白潟本町などの町方を中心とし、浦方では外浦の加賀浦に一定程度存在していたといえる。

次いで、表2は文政～弘化期に確認できる浦方回船<sup>(11)</sup>とその規模を示している。史料的な制約からやや断片的ではあるが、浦方においては三〇～一五〇石積（二～四人乗）の小型回船の活動が見え、表1の明治前期の傾向と同様であるといえよう。また、加賀浦以外の浦方回船もここで散見される。残念ながら町方については史料がなく明らかにならない。

## 第二節 遠隔地交易と商品流通

先行研究によれば、雲州第一の特産物であった鉄の商品流通は、一九世紀以前においては多くが大坂売であったが、それ以降は北国や九州筋などへの



図1 回船活動が行われた主な浦方

販売増加が見られるという<sup>13</sup>。ここでは、以上を念頭に大坂・北国・九州を中心とした遠隔地交易の状況について、船籍、廻船規模、積荷に注目して見ていただきたい。

まず瀬戸内・大坂方面については、廻船規模の把握できる記録はあまり多く見ないが、寛政九（一七九七）年に出雲鉄二八五束を地元鉄山師から積受け大坂へ移送途中に讃岐国直島で難船した松江（町方）の森山屋吉郎右衛門船四人乗が確認できる<sup>14</sup>。また、安政大地震の折、難波嶋の船宿大和田屋への碇泊客として一三〇～四〇〇石積のこれも松江船が五船見える<sup>15</sup>。瀬戸内方面は、化政期～明治一〇年までの入津記録が残る安芸国忠海の羽白・荒木両家の客船帳<sup>16</sup>から見ておこう。出雲国全域からの入津が見られ、そのうち町方については七九艘、浦方は三三艘が確認できる。その積荷は、判明分三六件のうち干鰯二七件・米七件と続き、ほとんどが干鰯販売である。町方・浦方双方の廻船活動が見て取れよう。

北国筋については、能登国福浦、越後国出雲崎に残る客船帳<sup>17</sup>から知ることができる。寛政～明治後期にわたる両記録には、町方廻船一四四艘、外浦廻船一九艘、内浦廻船一一艘が見え、町方廻船を中心とした活動がうかがえる。表3では、そのうち廻船規模や積荷が明らかなものを掲げている。町方は一二〇一八反帆（一五〇～五〇〇石積程度<sup>18</sup>）の船が見られるが、多くが一五反帆（二五〇石積程度）以下である。積荷は特産物の鉄や木綿をはじめ、塩・石材・陶磁器・素麺・太白（砂糖）など多様である。これに対し浦方については、塩・木綿・錫を積荷とした宍道（内浦）木屋の一五反帆廻船と、魚瀬浦（外浦）屋敷の一三反帆（一五〇石積程度）廻船が確認できる。次に、文久二（一八六二）年、越後国出雲崎における雲州商人七名の取引記

録<sup>19</sup>には、松江天神町（米田屋）慶助、同魚町（松屋）喜右衛門、同（玉造

表2 文政～弘化期に見える浦方廻船

郡	村浦	内外浦の別	船種	石積	人乗	年代
島根	本庄村	内	廻船	110		弘化4
	森山村	内	渡海船	45		弘化4
	三保関	外	廻船	65		弘化4
	三保関	外	廻船	90		弘化4
	稻積浦	外	渡海船	35		弘化4
	笠浦	外	廻船	70		弘化4
	加賀浦	外	-	80		天保5
	加賀浦	外	-	84		天保5
	加賀浦	外	-	70		天保5
	加賀浦	外	-	84		天保5
	加賀浦	外	-	150		天保5
秋鹿	片句村	外	廻船	2		文政13～天保6
	手結村	外	廻船	2		文政13～天保2
	手結村	外	廻船	2		天保3～天保9
	魚瀬浦	外	廻船	120	3→4	文政12～天保8
	魚瀬浦	外	廻船	4		天保9
	東長江村	内	廻船	2		文政12～天保5
	下伊野村	内	渡海船	65		文政12
	下伊野村	内	渡海船	50		文政12
	大野村	内	渡海船	30		文政12
	大垣村	内	渡海船	56	2	文政12～天保8
	大垣村	内	渡海船	75	2	文政12～天保9
	大垣村	内	渡海船	43		文政12
	大垣村	内	渡海船	40		文政12
	大垣村	内	渡海船	38		文政12
	大垣村	内	渡海船	38		文政12
	秋鹿町	内	渡海船	47		文政12
	秋鹿町	内	渡海船	50		文政12

出典)「東組村々戌納船役銀御差紙写」(寺本家文書41)、  
「諸願御用留」(池尻家文書1637)、『島根町誌』286-289頁。

表1 明治九年、松江廻船の船数と石積数

単位:艘

浦／町	郡名	漁船	荷船（石積：未満以上）		
			～50	50～200	200～500
浦方	秋鹿郡	674	195	0	0
	島根郡	1,346	1,222	9	0
	加賀浦	145	0	8	0
	美保関	135	116	1	0
	小計	2,020	1,417	9	0
島根郡	103	759	1	0	
	末次町	0	21	1	0
町方	意宇郡	0	293	11	9
	本町	0	2	2	4
	八軒屋町	0	11	2	0
	和田見町	0	131	4	0
	寺町	0	8	0	0
	天神町	0	7	1	0
	魚町	0	17	1	3
	灘町	0	22	0	0
	豊町	0	45	1	1
	横浜町	0	15	0	1
	雜賀町	0	35	0	0
小計			1,052	12	9
合計			2,123	2,469	21

出典) 各郡『郡村誌』。

注1) 各郡の内訳は、50石積以上の廻船を有する町村浦のみ表記しているため、50石未満の船、漁船の内訳の和は必ずしも郡の合計数と一致しない。

屋) 平三郎の三名の松江町方の商人が見える。それぞれの廻船規模は、慶助

船一四反帆(二〇〇石積程度)、喜右衛門船一四、五反帆(二〇〇～二五〇石積程度)、平三郎船一八反帆(五〇〇石積程度)であった<sup>④</sup>。売荷について見ると、慶助は身欠鮓・小豆・細和布・鋼、喜右衛門は空豆・駒犬・木綿古手・鉄、平三郎は鉄・木綿・木綿古手・呉座・出雲蘿・鋼・瀬戸物・火鉢・但馬苧・鋼となつており、ここでも同様に鉄・木綿の販売が中心でありながらその他多様な商品も販売している。また慶助の売荷には松前產物の登り荷である身欠鮓<sup>⑤</sup>も見え、西廻り航路を広く活動し諸国產物を取り扱う買積船

地域	船主	反帆	積荷(累積)	入津期間
町方	綿屋	鉄		文政6～安政4
町方	吉田屋	18		天保11～慶応元
町方	松屋	14～15	太白・鉄・板石・五六石・甘茶	弘化3～文久元
町方	因幡屋	鉄		弘化5
町方	伊野屋	15		嘉永3～安政3
町方	玉造屋	12～18	木綿・鉄・からつ	安政2～7
町方	赤木屋	12		安政3～文久元
町方	米田屋	14		安政3～6
町方	久保田	13～14	木綿・古手・鉄・板石・鉄・太白	文久2～元治2
町方	木幡屋		米子綿・木綿	文久3
町方	のりや	15	さらし木綿・鉄・染物	文久4
町方	塩原屋		鉄・木綿	慶応3
町方	住吉屋	12	木綿・米子綿・素麺・針金・板石	慶応4
外浦	屋敷	13		嘉永5
内浦	木屋	15	三ツ切塩・木綿・鉄	安政4～明治3

出典)『能登国福浦港佐渡屋 諸国御客船帳』、『出雲崎町史 海運資料編3』。

としての活動も指摘できる。

最後に九州筋への活動について、ここでは肥前国伊万里津の動向からその一端をみよう。というのも、雲州商人は越後商人とともに日本海筋への伊万里焼流通の主な担い手であったためである。天保六(一八三五)年の伊万里津における国別積出高を見ると、筑前二〇万俵、紀州六万俵に続く存在として伊予・出雲・下関・越後商人が確認でき、また同津における特定の国を相手とした下宿数は筑前一〇、紀州四、越後一、周防一、伊予一、出雲一軒であり、これら国々の商人が中心となつた流通網が展開していた<sup>⑥</sup>。表3の安政二(一八五五)年の玉造屋の積荷に見える「からつ」(唐津陶磁器)も、九州筋での買入とその北国壳を示唆している。陶磁器の買入は鉄や木綿の販売<sup>⑦</sup>とともに九州筋の主要取引であったといえよう。

以上のように、町方・浦方の遠隔地交易では一三〇～五〇〇石積程度の中型廻船による活動が見られた。中には、買積船として松前交易を行う二〇〇石積程度の小型廻船もあった。船籍別では、船数の傾向と同じく町方廻船が中心であったが、相対的には少ないながらも浦方廻船による活動もあつた。

## 第二章 浦方小型廻船の活動

### 第一節 年間の活動

本章では、浦方に展開していた小型廻船の活動についてより詳細に検討を加えたい。松江藩は三〇石積以上の廻船に対し他国出入の届出を毎月義務づけ、藩内廻船の活動の把握に努めており、したがってその記述から各廻船の出帆日・帰帆日・交易先を知ることができる。表4は、秋鹿郡の文政一二(一八二九)年八月から天保八(一八三七)年の届出記録をまとめたもので

表4 秋鹿郡30石以上廻船の年間活動状況

	年	二十四節氣																					
		立春	雨水	啓蟄	春分	清明	穀雨	立夏	小滿	芒種	夏至	小暑	大暑	立秋	处暑	白露	秋分	寒露	霜降	立冬	小雪	大雪	冬至
長五郎 (魚瀬浦:外/ 120石積)	文政12																長州				尾道		
	〃13	—尾道—								-若狭-				大坂									
	天保2		—尾道—					-尾道-				-若狭-			兵庫						—隱岐—		
	〃3	—隱岐—							-尾道-			-大坂-		-若狭-									
	〃4		-尾道-					—尾道—				-若狭-			—尾道—								
	〃5							—尾道—			-尾道-				—尾道—								
	〃6							???						—尾道—									
	〃7							—尾道—		-長州-				—長州—							—大坂—		
	〃8								—長州—			-長州-							-尾道-				
喜右衛門 (手結村:外/ 2人乗)	文政12									—若狭—			—若狭—					—隱岐—					
	〃13									—石見—			—若狭—					—隱岐—					
	天保2																	—隱岐—					
猶兵衛 (手結村:外/ 2人乗)	天保3																	—隱岐—					
	〃4																	—隱岐—					
	〃5																	—隱岐—					
	〃6																	—隱岐—					
	〃7																	—隱岐—					
善助 (片句村:外/ 2人乗)	文政13									—因幡—			—因幡—										
	天保2												—隱岐—					—隱岐—					
	〃3												—若狭—										
	〃4																	—若狭—					
	〃6																	—石見—					
理助 (大垣村:内/ 75石積)	文政12	■隱岐																					
	〃13																						
	天保2																						
	〃3																						
	〃4																						
	〃5																						
	〃6																						
	〃7																						
	〃8																						
理三郎 (大垣村:内/ 75石積)	文政12	■隱岐																					
	〃13																						
	天保2																						
	〃3																						
	〃4																						
	〃5																						
	〃6																						
	〃7																						
	〃8																						
理藏 (東長江村:内/ 2人乗)	文政12	■石見																					
	〃13																						
	天保5																						

出典) 「御用留」(池尻家文書1623~1632)。

注1) 点線は出帆・帰帆日不明を示す。

ある。外浦四艘、内浦三艘の廻船活動が認められる（船籍地については図1参照）が、内外浦で廻船規模に大差はなく、また魚瀬浦（外浦）長五郎船（一二〇石積、三〇四人乗）が最大であった。順に見ていく。長五郎船は若狭・尾道・大坂を中心とした広範な航海圏を持ち、多くの年で下り（若狭）と登り（大坂・尾道・長州）を年一航海ずつ行っている。また手結村（外浦）の喜右衛門・猶兵衛も若狭と隱岐を年一航海ずつ訪れる様子が見て取れる。次に片町村（外浦）善助は年によって行先が異なり、年に一～二度因幡・若狭・隱岐・石見へ向かっている。一方、内浦については、大垣村の理助・理三郎船は隱岐のみを交易先とし年間三～四回往復している。同じく東長江村の理蔵は石見のみ訪れている。このように、交易先としては若狭・因幡・隱岐・石見・長門・尾道・兵庫・大坂が確認でき、とりわけ理蔵を除く六人が行っている隱岐交易は、一つの顕著な特徴として指摘できる。

活動期間については、長五郎・理助・理三郎のように全九年間継続して廻船活動を行っている者もいるが、善助や理蔵のように断続的な者も見える。

なお、喜右衛門と猶兵衛はともに五年以内の活動であるが、船籍や航海圏が同じであることから引き継がれた可能性がある。

## 第二節 取扱商品と稼方

次に、彼らの積荷と稼方について検討したいが、結論から述べると、それは隱岐産物や外浦産物の運賃積が中心であったと思われる。

まず遠隔地交易についてみよう。やや遡るが寛文一二（一六七二）年の松江藩より美保関番所へ出した制札には「隱岐国并北浦方より、薪、材木、肴、海藻等の商い物、他国へ不出、松江へ入来候様ニ可被申付候」<sup>20</sup>とある。この制札は松江藩による流通統制の一つであるが、薪や材木、海産物が隱岐

と北浦（外浦）共通の他国売產物であったことが知れる。ここでは、そうした產物廻送のあり方について隱岐廻船の動向からみておこう。

隱岐において廻船業が主要な稼方として定着したのは明和・安永期とされ、それ以降、隱岐產物の薪、木材、海產物（鰯・鮒・塩鯖・干鰐など）を中心に、また廻船数の増加にともない対岸出雲・伯耆の商品をも積受けて大坂・瀬戸内・下関・若狭辺りへ主に運賃積稼を行ったという<sup>21</sup>。その交易地は、前節で見た外浦の長五郎船（若狭・尾道・大坂）や喜右衛門・猶兵衛（若狭・隱岐）のそれとも共通しており、隱岐と外浦の產物の共通性も踏まえると外浦廻船も同様の活動を行っていたことが推測される。

続いて地廻り輸送についてみていく。

### 【史料一】<sup>22</sup>（傍線は筆者）

隱州より渡り牛馬鞭先五ヶ年平均受鞭先願差出し控

文政二卯年

奉願口上之覚

隱州より北浦之内稻積へ渡り牛馬、手角より伯州へ渡し牛馬共、鞭先銀壹疋ニ付裏判銀五分充、右両所ニ而毎歳年行司相立、多古・手角両所詰米留御役人中御改を以取立來ニ御座候、然處右伯州渡し之儀者十二月入候而も牽出候様之儀も有之、小物成取極差支之訛も御座候間、當年より鞭先年々平均ヲ以御極メ被下置候様奉願候、依之去ル戌年より去寅年迄五ヶ年平均、稻積分銀式拾四匁四分、手角分銀拾七匁式分ニ相当り申候間、両村共請鞭先ニ御極メ被下置、年々上納被仰付被下置候様奉願候、左候得者是迄仕来之通り両所詰米留中御改を受取取扱可仕候、猶又鞭先銀之儀ハ年々両村小物成ニ結、急度取立上納可仕候間、偏ニ御許容之程宣布被仰上可被下奉願候、以上

文政二年卯十月

島根郡手角村

年寄政太

庄屋友兵衛

同郡北浦

年寄儀左衛門

同 祐三郎

庄屋孫三郎

右史料からは、文政二（一八一九）年以前から北浦稻積（外浦）と手角村

（内浦）において出入牛馬に対する小物成上納が行われていたことがわかる。

隱岐では、文政六（一八二三）年に牛馬冥加銀が小物成に加わるなど牛馬の商品化を盛んにする趨勢にあり、当時の年間移出高は二五〇頭に及んでいた。

さて、史料一によれば、鞭先銀は一疋あたり〇・五匁であり、北浦の上納銀高は実績値平均から年二四・四匁となっているので、概算すると北浦

では隱岐から年平均五〇頭前後の移入があったことになり、これは隱岐の年間移出高の約二割に相当する。そして、浦方廻船はこれら牛馬の廻送を担っていた。じじつ、翌文政三（一八二〇）年の船往来願には北浦稻積の商人九名の馬口労商売のための渡海願<sup>26</sup>が見られ、外浦廻船による廻送実態を知ることができる。

隱岐廻船による外浦での活動も見ておく。加賀浦の船問屋福田屋の「大福客船入津留帳」<sup>27</sup>には、弘化年間以降に福田屋がおもに客船とした因幡・隱岐廻船の取引が記録されており、隱岐廻船については安政二（一八五五）年まで計四五件確認できる。積荷が判明する三四件の内訳は、多方から杉板類一九件・牛馬六件・鳥賊五件・瓦二件・米一件・炭一件となつており隱岐

產物の廻送が中心である。また廻船規模は判明する限り二人乗二〇艘、三人乗一艘、四人乗二艘、五人乗一艘とほとんどが二人乗の小型廻船となつていて、前節でみた理助・理三郎船もおおよそこうした稼方をしていたと思われる。

最後に、よりローカルな流通構造についても見ておこう。

### 【史料一】

（嘉永三）九月十七日入津

隱州嶋後那久村要藏船

水主共式人乗り

荷物牛八つ馬壹疋

稻積行賃

一錢三百三十八文 半兵衛

同四百三十式文 太助

此所金式朱壱ツ

八百七十文渡

このり百文 半兵衛戻し儀定

百文 御番所

廿四文 役錢

五百四十文 米留

ノ如<sup>ママ</sup>此受取

右は、「大福客船入津留帳」に記された隱岐廻船による牛馬の取引記録である。「稻積行賃」とは牛馬を加賀浦より北浦稻積へ積廻す際の運賃であり半兵衛へ三三八文、太助へ四三三文、都合七七〇文となつてている。また御番所

への上銭一〇〇文や役銭二四文とともに米留五四〇文が見える。「米留」とは、史料一に見える「多古・手角両所詰米留御役人中」が稻積で取り立てる鞭先銀と考えられる。すなわち、北浦稻積は隠岐牛馬の集荷地として機能したが、十分な港湾機能を有していなかつたため、

加賀浦とその船問屋がその仲介を果たしていた。

隠岐廻船や浦方廻が隠岐—加賀浦間廻送を主に担い、加賀浦より北浦までは半兵衛・太助のような地元の伝渡船らが継ぎ送りを担うという分業関係がうかがわれる。

以上のように一九世紀以降の浦方においては、中大型廻船による活動は見受けられず、小型廻船による活動が中心であった。彼らは隠岐・外浦産物を取り扱い、遠隔地交易と地廻り輸送双方を稼業としていた。この稼業は、第三章でも触れるが隠岐廻船同様に一八世紀後半頃から活発になると思われる。ここでは、若干の史料からその歴史的変遷について補足しておきたい。

表5は、第一章でも取り上げた直島の難船史料のうち一八世紀前半の雲州廻船の記録<sup>④</sup>である。難船の積荷は松江・鳥取藩の大坂御廻米廻船であり、とりわけ注目されるのが四艘いずれもが七〇八人乗の雲津浦（外浦）船である<sup>⑤</sup>。当時、同浦では中型廻船による廻米輸送が展開していたことがわかる。以上から、外浦では一八世紀

中葉を境とした廻船稼業の質的变化、つまりこの間ににおける中型から小型廻船への転換などが推測される。

### 第三章 廻船業への参入と選択をめぐって

#### 第一節 町方廻船の沖船頭

本章では、外浦の加賀浦を取り上げ、浦方における廻船業への参入や選択、廻船活動の継続性について検討を加えた。

第一章で取り上げた能登国福浦の客船帳によれば、表6の通り町方廻船の沖船頭あるいは方船（同じ船主の他の廻船）船頭として他村浦方籍の者が多く確認できる。そして、船頭名が確認できる一七件のうち一六件が加賀浦、一件が宍道町の人物と、加賀浦が突出している。多くが天保期以降に見られ、町方では幕末にかけて外部の沖船頭を雇傭した船主や、方船を持ち複数所持化した船主が多く存在していた。またその雇傭形態について見ると、雇傭された沖船頭は、五兵衛（弘化四年松屋→嘉永三年伊野屋）、福重（天保八弘化二年古津屋→嘉永四年綿屋）、久兵衛（天保九年竹内屋→天保二三年佐渡屋）と、特定の船主ではなく複数船主の沖船頭として流動的に活動している様子がみてとれる。このほかにも、加賀浦・伊右衛門なる人物が大坂御廻米を担った松江町方の桑屋太助船栄徳丸（三〇反帆一七人乗）の沖船頭を数年勤めたのち船頭頭取となる事例<sup>⑥</sup>も確認でき、松江藩御手船の沖船頭として活動する者も見られる。

表1が示すように明治初頭の加賀浦廻船はすべて二〇〇石積以下、船数八艘と、近世後期から船数・廻船規模とも変化が見られず、継続して小型のおそらく直乗船頭による廻船経営が行われていたと考えられる。その一方で加賀浦では、とりわけ天保期以降、町方廻船の船頭・水主として廻船業へ従事

表5 近世中期、松江廻船の瀬戸内海での難船記録

年月	西暦	積荷	積入地	行先	船籍・船頭	人乗	その他
享保16年8月	(1731)	不明	出雲国雲津浦	大坂	雲津浦与次兵衛	7	内上乗1人
享保20年5月	(1735)	鳥取藩米648俵	伯耆国由良	大坂	雲津浦長兵衛	7	
享保21年3月	(1736)	松江藩米	出雲国大江(井)村	大坂	雲津浦儀左衛門	8	
延享2年4月	(1745)	松江藩米750俵	出雲国安来	大坂	雲津浦安三郎	8	

出典) 讃岐国香川郡御料直島三宅家文書(瀬戸内海歴史民俗資料館蔵) 94,102,104,115。

する人々が一定程度存在していた。中には加賀浦での船主経営をやめて町方廻船の沖船頭として従事する場合も少なからずあったと推測される。このように、町方廻船は外浦廻船業者の労働力の受け皿として機能していた側面があつた。なお、こうした雇傭形態は近代以降も一定程度引き継がれたと考え、明治二〇（一八八七）年時点では活動していた島根県内の蒸気船三艘のうち、松江町方船籍の秋津丸の船長は加賀浦の人物となっている<sup>⑥</sup>。

表6 北国交易を行う町方廻船の沖船頭・方船船頭

年次	船主	反帆	沖船頭	方船船頭
文化3（1805）	肥後屋			不明（2艘で入津）
文化5（1808）	肥後屋			加賀浦・藤五郎
天保4（1833）	古津屋		加賀浦・亀四郎	
天保8（1837）	古津屋		加賀浦・福重	
天保9（1838）	竹内屋		加賀浦・久兵衛	
天保11（1840）	吉田屋	18	宍道町・平助惣	
天保13（1842）	佐渡屋		加賀浦・久兵衛	
弘化2（1845）	古津屋		加賀浦・福重	
弘化4（1847）	松屋	14~15	加賀浦・五兵衛	
嘉永3（1850）	伊野屋	15	加賀浦・五兵衛	
嘉永4（1851）	綿屋		加賀浦・福重	
嘉永5（1852）	綿屋		加賀浦・紋四郎	
嘉永5（1852）	綿屋			加賀浦・権兵衛
慶応元（1865）	吉田屋	18	加賀浦・恵三八	
明治2（1869）	嶋村屋		加賀浦・与七	
明治4（1871）	奥屋		加賀浦・太助	
（近世）	森脇屋		加賀浦・磯右衛門	

出典)『能登国福浦港佐渡屋 諸国御客船帳』。

## 第二節 福田屋定五郎と廻船業

最後に、廻船業への参入をめぐって加賀浦の廻船主であった福田屋定五郎の事例を取り上げよう。福田屋については第二章で幕末期の船問屋業としての性格に触れたが、同家はそれ以前の寛政期から廻船業を営んでいた。定五郎は天明期に分家独立して、福田屋の屋号を構え、天明～文化期にかけて廻船および船問屋株を所有した<sup>⑦</sup>。彼は「天明元歳丑十二月書印置」「八十式才一通書印置事」<sup>⑧</sup>なる自身の履歴書を残しており、前者は寛政九（一七九七）年、後者は天保二（一八三二）年までの経歴が記されている。加えて、天明二（一七八二）年より田畠山林・船・株などの購入、寺社への寄進、家屋小屋普請といった大口の入用記録を年々書き記した「財宝繁栄田畠求大福坪付覚留帳」<sup>⑨</sup>によって、福田屋の資産状況もうかがうことができる。ここでは以上の三史料から、福田屋の家業・資本の推移について検討し、同家における廻船業の位置づけについて明らかにしてみたい。

定五郎は天明元（一七八一）年、二八歳で本家から田畠七ヶ所と家居屋敷を譲り受け分家した。また、その際に本家が持つ豆腐座を本家と共同所持した。以後は、豆腐・酒・酢・醤油・米・大小豆・麦・糀などの万小商を行つたという。

定五郎が廻船業に乗り出したのは寛政二（一七九〇）年になる。当時、佐田川の開削によって日本海と宍道湖が結ばれ、外浦諸地域は松江城下へ入る際に美保関を迂回する必要がなくなり交通の利便性が増した。定五郎は「其節佐田川江角浦江切通シ御普受御上ミラ出来、夫レラ小船を思立」<sup>⑩</sup>と、この切通しを機に廻船業参入を決意したようである。定五郎は隣浦（野波浦）から三〇石積の中古船を購入し松江城下への薪の運賃積廻送を始めた。この商売は「相應之利も有之、是商売之元手成」<sup>⑪</sup>と定五郎の廻船活動の元手と

なったようで、三年後の寛政五（一七九三）年には次いで六〇石積の中古船を購入し、浦方の干鰯を仕入れ大坂・瀬戸内へ積登ったという。これは第一章でみた遠隔地交易の特徴とも一致している。

さて、その後も商売は順調だったようで、定五郎は寛政八（一七九六）年に室座一軒、その翌年には船問屋株を、また寛政一二（一八〇〇）年には醤油桶道具を購入している。もつとも、船問屋株の購入については御番所からの仰せ付けによるものであつたが、とかく諸商売を手広く行っていた様子をうかがい知れる。そして文化元（一八〇四）年、定五郎五一歳のとき、中古船二艘を手放し一〇〇石積の廻船を新造した。この新造船での活動内容は明記されていないものの、それ以後も干鰯の仕入記録が見えることから、継続して干鰯販売を行っていたものと見られる。

それ以降、定五郎は船問屋株を買求めるることはあっても（文化一四年）、廻船活動については増船や増石などによつて経営拡大を図ることはなかつた。その一方で、この時期においては顕著な土地集積が見られる。表7では、当時の福田屋の土地買入歴を示している。天明元（一七八一）年の分家時に譲り受けた田畠は六畝余（田方三畝、畠方三畝三分）であった。それ以降は僅かながら田畠山林の購入が見られるが、文化期以降になると田方を中心とした購入が顕著になる。それは、文化元～五年に七反二畝余（錢一五〇〇貫文）、同六～一〇年に一反余（錢三五〇貫文）、また文化一一～文政元年に三反四畝余（錢七六〇貫文）に及んでいる。これらの元手となつたのが廻船業や船問屋業を含む万小商であったことは想像に難くない。なお、定五郎の廻船購入費は、中古三〇石積船が錢三〇貫文、同六〇石積が一六〇貫文、新造一〇〇石積が一七〇貫文<sup>10</sup>である。つまり、当時五〇歳を迎えた定五郎は船主として増船や増石といった廻船経営拡大について資本的には可能

であったが、その道を選択しなかつたといえる。

加賀浦では寛政二（一七九〇）年に定五郎が購入した三〇石積船が「當浦小船之初ル也」であったようで、当時は廻船活動は盛んでなかつたことがうかがわれる。そんな中、定五郎は多種多様な万小商を行い、家業を模索する中で佐陀川開削という交通路の変化に反応し廻船業に参入した。そして、薪の地廻り輸送によつて日々に資本を蓄積し、瀬戸内・大坂への干鰯販売と活動範囲を広げ最大一〇〇石積の廻船主となつた。次の史料は、定五郎が分家

表7 福田屋定五郎の土地買入

年次	買入地		その他主な入用（錢） (貫文)
	反別	錢高	
天明元 (1781)	6	貫文	
天明4～天明8 (1784～1788)	10	67	小屋普請(20), 土蔵建(70)
寛政元～寛政5 (1789～1793)	1	13	30石積中古廻船(30), 70石積中古廻船(160)
寛政6～寛政10 (1794～1798)	10	130	室座1軒(120), 船問屋株(110), 小屋土蔵再建(70)
寛政11～享和3 (1799～1803)	6	330	寄進(20), 醬油桶道具(14)
文化元～文化5 (1804～1808)	72	1,500	100石積新造廻船(170), 寄進(28.5)
文化6～文化10 (1809～1813)	10	350	小屋再建(100), 寄進(27), 土蔵再建(250)
文化11～文政元 (1814～1818)	34	760	還暦祝物入(200), 船問屋株(不明)
文政2～文政5 (1819～1823)	1	350	

出典)「天明元歳丑十二月書印置」「八十式才一通書印置事」「財宝繁栄田畠求大福坪付覚留帳」  
(島根町誌史料1-41)。

注) 買入地・金額は表示単位以下は切り捨て。

し親より田畠屋敷を譲り受けた頃の回想録である。

### 【史料三】<sup>(4)</sup>

(・・) 何卒不孝仕候而者不相成与心得意、諸商売ニ心懸候得共思付無御座候故、南無氏神八幡宮天満宮へ氣願を掛、百姓第一色々豆腐・酒・酢・醤油・米・大小豆・麦・糀、品々商売仕候得者、神仏両親之御恵有之候哉、又者我が運歟 (・・)

分家して間もなかつた定五郎は、家業を得るために廻船業を含めた諸商売を模索したが、それはあくまでも「百姓第一」の元で行う複業であった。こうした経営の志向性は後年の資本投下の有り様にも特徴としてよく表れているといえよう。

### おわりに

本稿では近世後期における松江藩領下の浦方廻船について、その特徴であつた小型廻船の活動に注目し検討した。まず、航海圏については地廻り輸送はもとより二～三人乗廻船による遠隔地交易の実態を確認した。その交易先と積荷は、おおよそ、町方廻船が国産物（鉄・木綿）販売や諸国産物の買積を行つたのに対し、浦方廻船は若狭・瀬戸内・大坂方面を中心に薪や干鰯などの隠岐・浦方産物を主に運賃積によつて移出した。この点は町方廻船との大きな違いといえよう。また地廻り輸送については隠岐牛馬廻送の実態を見た。さらに、外浦では、こうした稼業がおおよそ一八世紀後半頃から見られ始めることが明らかにした。廻船活動は断続的に行う者も多く、彼らの廻船経営における経営拡大や経営維持の強い志向性はうかがえず、むしろ兼業の一貫としての性格の側面が強かった。加えて、浦方では町方廻船に従事する者が一定程度いたことを確認し、町方廻船が外浦廻船業者の労働力の受け皿

として機能していた点を指摘した。こうした選択性の中にあつた廻船業の存在形態については以前に論じた<sup>(4)</sup>ところもあるが、本稿においてもまた確認することとなつた。

最後に、松江藩の小型廻船をめぐつていくつかの論点を提示し、その検討を今後の課題としたい。本稿でみた浦方における廻船業の展開は近国の浦方に比べ、船数の増加は相対的に低い水準であった<sup>(4)</sup>。その社会的・政治的背景として如何なる点が考えられるだろうか。

まず想定されるのが渡海場の存在である。松江藩領下の渡海場仲間は公務負担を果たす代わりに、宍道湖・中海圏内の定められた範囲で運賃積を独占的に行えた。また一八世紀後半以降、各渡海場は船座を設立し特権的な集団と化した<sup>(4)</sup>。こうした船座の存在は、座員外による内浦での運賃積稼の機会を限定的にし<sup>(4)</sup>、それはたとえば福田屋の事例にみたような地廻り輸送から諸国稼へと経営展開する道を阻む障害に十分なり得たと思われる。このことは、浦方廻船の稼業と共に高かつた隠岐廻船が、松江藩の流通統制（上銭・指定問屋への水揚など）を避け伯耆境・米子との交易を盛んにしたという指摘<sup>(4)</sup>とも関連しよう。加賀浦廻船らの取扱商品が、町方問屋との関わりの深い国産物の鉄や木綿よりもむしろ、外浦・隠岐産物の干鰯・薪・牛馬であつたこともそれを傍証している。つまり、彼らは、船座の特権が及ばない地域や稼方、すなわち松江城下を経由しない商品や流通統制の及んでいない商品廻送に活路を見出したのではないか。彼らの活動はこれらに限定されるものではないであろうが、外浦廻船の大きな特徴と考えてよいだろう。

もう一点は、松江町方の問屋商人の存在、すなわち諸国からの移入商品を一手に担つた八軒問屋や、近世後期に鉄山師と緊密にあつた鉄問屋に代表される特產物を扱う問屋商人らである。たとえば鉄の場合、櫻井・絲原家ら山

方鉄山師は、産鉄の多くを複数の問屋を経由して松江まで継ぎ送り、販売や販売委託をしたが、松江の鉄問屋は船持である場合も多かったようで、実際に沖船頭を雇いそれらの諸国売を行っていた事例も確認できる<sup>①</sup>。町方廻船の動向は不明な点がまだ多いが、こうした問屋の船持商人としての性格も想定し把握していく必要がある。浦方の人々が沖船頭や水主として町方廻船に雇傭されていたことも、彼らとの関係性の中で追及していく必要があるだろう。

本稿では十分に解明しえなかつた町方廻船の実態解明については今後の課題となるが、こうした松江藩の封建的な流通統制、すなわち渡海場仲間や特權的城下町商人と領国市場の関係を踏まえて分析することが肝要であろう。

- (1) 斎藤善之「近世的物流構造の解体」（『日本史講座 第七巻』東京大学出版会、二〇〇五年）。
- (2) 石井謙治「近世の水上交通 第六節 海洋技術」（『交通史』第四章、山川出版社、一九七〇年、四三五頁）などを参照。
- (3) 斎藤善之「流通勢力の交代と市場構造の変容」（『新しい近世史3 市場と民間社会』新人物往来社、一九九六年）。
- (4) 深井甚三「近世中後期、飛島・酒田入津の越中廻船の動向と小廻船經營」（『富山大学教育学部紀要』五六、一〇〇一年）。
- (5) 中安恵一「近世後期の小型廻船と生業・村落社会」（『社会経済史学』八一（一）、二〇一五年）。
- (6) 武井博明『近世製鉄史論』（三一書房、一九七一年）、高見誠司「幕末・維新期における鉄山経営——出雲国仁多郡ト藏家を中心に——」（『島根史学会会報』三五、一九九九年）、仲野義久「田儀櫻井家の産鉄流通について」（『田儀櫻井家のたら清鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会、二〇〇四年）、同「鉄宿史料から見る櫻井家の鉄流通の諸相」（『櫻井家たらの研究と文書目録——櫻井家文書

悉皆調査報告書』島根県奥出雲町教育委員会、二〇〇六年）。

- (7) 出雲国内の廻船活動について取り上げたものとしては、奥村翔「近世後期北海上に於ける出雲船の航跡」（『山陰史談』二一、一九八五年）、同『諸国客船帳』にみる出雲の廻船」（『山陰史談』二五、一九九二年）、勝部眞人「幕末・維新时期における出雲・大社地域廻船の交易空間——大社町・藤間家文書仕切状から」（頼祺一『『近代』社会の形成と時間・空間・生活』一九九九—二〇〇一年度科学的研究費補助金研究成果報告書、二〇〇二年）などがある。

- (8) 島根郡一一町、意宇郡二二町で構成される松江城下町も内潟に含まれるが、他内潟とは異なる城下町としての性格を考慮し、議論を明確にするため本稿では町方として区別する。

- (9) なお、五〇石積未満の荷船については、前者は一四一七艘、後者は一〇五二艘となっている。
- (10) 「雲陽郷方古今覚書」（『新修島根県史』史料編2近世上、島根県、一九六五年、四九八頁所収）。なお、このうち番所が設置されていたのは美保関・加賀浦の二浦であった。

- (11) 前掲中安二〇一五。

- (12) 近世、松江藩では三〇石積以上他国出入廻船についてその届出を義務づけたが、そこに登場するのは廻船と渡海船に限られ、また両者の活動や船の規模については本稿でも検討するが明確な違いは認められない。したがって本稿における廻船とは、他国出入を行っていた廻船・渡海船の総称を指す。なお、松江藩内にはこのほかにも艤船・伝間船・伝渡船・艤戸船・手安船などがあつたが、渡海船も含めこれらの具体的な用途については判然としない点が多い。船の新造願の際に記される用途の文言を見ると、渡海船の場合は運賃積用、伝渡船の場合は運賃積や漁業用、伝間船の場合には漁業用などの文言が確認できる（池尻家文書一六三七、一六三八「諸願御用留」、島根県立図書館蔵）。その一方で、渡海船による自分荷物の勝手売や肥料廻送を行う伝間船の存在も見られるなど（『宍道町史』下巻、一七八頁）、様々な用途に用いられたのが実態であり用途別に船種を分類することは困難と思われる。なお、役銀の賦課形態から船の規模を推測すると、廻船・渡海船・大伝渡船は一〇石あたり判銀一匁と石積あたりの算出であるのに対し、伝渡船は一艘あたり同二・五匁、手安船・弓反古船・伝間船・小艤船・艤戸船は同二

々となつており（寺本家文書四一「東組村々戌納船役銀御差紙写」島根大学附属図書館蔵）、石積換算の廻船・渡海船・大伝渡船が他種よりも大きい船種と思われ、伝渡船がそれに続くと推測される。

- (13) 山方鉄山師の櫻井家の場合、一八世紀中期頃においては大坂への出荷量が七割弱を占めていたが、文政・天保期になると松江鉄問屋の成長を背景に同地が中継地として機能し松江壳が中心となつた点、幕末・明治期にかけては三国へ販売集中するなど短期的な販売先の変化があつた点などが指摘されている（前掲仲野二〇〇六）。また田部家の場合も化政期にかけては多くが松江壳であったとされ、一部は手船によつて大坂・北陸・九州へと販売されたという（前掲武井一九七一、二五二頁）。いっぽう浦方鉄山師の田儀櫻井家の場合、相対的に北国筋への比重が大きく手船や地元廻船らによつて産鉄のほかその他特産物を販売していたという（前掲仲野一〇〇四）。
- (14) 贊岐国香川郡御料直島三宅家文書（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）一七七。
- (15) 「震動記」（東京大学地震研究所蔵、武者金吉『日本地震史料』毎日新聞社、一九五一年所収）。
- (16) 広島県立文書館蔵、P九八〇一・P九八〇一。
- (17) 泊屋「御客入船帳」（『出雲崎町史』海運資料集三、出雲崎町、一九九七年所収）、敦賀屋「御客船帳」（同）、能登国福浦港佐渡屋「諸国客船帳」（『富来町誌』続資料編、富来町、一九七六年所収）。
- (18) 本稿における廻船の反帆と石積高の相関関係については、石井謙治『和船 I ものと人間の文化史76—1』（法政大学出版局、一九九五年）一六八頁を参照。
- (19) 「雲州松江天神町慶助外七人差引書写并荷品壳立取調書上帳」（『新潟県史』資料編10（新潟県、一九八四年）、九四〇一〇〇頁所収）。
- (20) 前掲泊屋「御客入船帳」、敦賀屋「御客船帳」より特定。
- (21) 身欠鮒は松前・江差より出雲崎へ年間およそ四・五万本移入される主要商品の一つであった（『新潟県史』資料編7（新潟県、一九八一年）、八〇五〇八〇六頁）。
- (22) 『伊万里市史』陶磁器編 古伊万里（伊万里市史編さん委員会、二〇〇二年）二一五〇二七頁を参照。
- (23) 鉄・木綿販売の返り荷として伊万里焼を購入している雲州廻船の事例が指摘さ

れている（前掲『伊万里町史』五一六頁）。

- (24) 「従松江被仰出御制札写」（前掲『新修島根県史』史料編2 近世上、五七〇頁所収）。
- (25) もつとも、これ以外にも長崎表への俵物輸送や、一部は買積船として西廻り航路を航海しているものもいた（『西郷町誌』上 第三章第十一節（西郷町誌編さん委員会編、一九七五年）、九〇八頁、九五〇～九五六頁などを参照）。
- (26) 『松江市史』史料編8近世IV（松江市史編集委員会、二〇一六年）、四五二頁。
- (27) 田中豊治『隱岐島の歴史地理学的研究』（古今書院、一九七九年）一六一～一六二頁参照。
- (28) 島根町誌史料一一三一（松江市史編纂室蔵）。
- (29) 島根町誌史料一一六五。
- (30) 前掲三宅家文書九四、一〇一、一〇四、一一五。
- (31) 鳥取藩米の御廻米輸送は、寛文～享保期にかけては他国船の雇い入れによつて行っていたといふ。また、廻米輸送における上乗の派遣事例が指摘されている（以上、山中寿夫「鳥取藩における廻米輸送政策と海運の発達」（福尾猛市郎編『内海産業と水運の史的研究』吉川弘文館、一九六六年、一二六頁）。
- (32) 柚木学『諸国御客船帳』下巻（清文堂、一九七七年）五一五頁を参照。
- (33) 前掲奥村一九九一。
- (34) 明治一九年「汽船表」「帆船表」「海員調査表」（海軍省艦政局海運課）。なお本史料の使用にあたっては、渡辺英夫・小野寺淳作成「明治中期における船舶データベース」を活用した。
- (35) 福田屋定五郎については『島根町誌』（島根町教育委員会、一九八七年）でも概要が触れられている。
- (36) 島根町誌史料一一四一。
- (37) 同前掲註(36)。
- (38) 同前掲註(38)。
- (39) 同前掲註(38)。
- (40) それまでの中古廻船の費用に比べると割安であるが、この時にはそれら中古廻船二艘を売り払っているので、その差引額である可能性が高い。
- (41) 同前掲註(38)。

(42) 前掲中安二〇一五。

(43) (42) 時代は下るが、明治一九年「日本形船舶表」（海軍省艦政局海運課、前掲「明治中期における船舶データベース」を利用）によれば、島根県内の廻船の約六割近くが一〇〇石積未満、三〇〇石未満となると九七%を占め、県内全域にわたって多数の小型廻船が存在していた。ただし地域別に見ると、旧出雲国船は計八二艘（約一万四百石積）で、島根県内全四五艘の一七・七%に過ぎない。二二〇艘（約二万二千七百石積）の旧石見国、一六二艘（約一万九千三百石積）の旧隱岐国と比べるとその数は半数以下である。

(44) 松江藩領下の渡海場、船座については、『宍道町史』通史編下巻 第四章第五節（宍道町、一二〇〇四年）、多久田友秀「幕末の松江渡海場 一 「御用留 船目代六右衛門」を読む」『松江歴史館研究紀要』二（松江歴史館、二〇一二年）などを参考照。

(45) 座員外の者でも、臥座と呼ばれる株の貸借制度によって活動する余地はあった（前掲『宍道町史』を参照）。

(46) 田中豊治「近世末期隱岐島水産物商品化の展開過程と流通形態」（内藤正中編『近代島根の展開構造』名著出版、一九七七年）を参照。

(47) 文政期の記録では、松江鉄宿の吉田文助は取り次いだ櫻井家産鉄五六一駄のうち四三八駄を大坂へ手船で廻送している。また安政三年には、三国行二一八〇〇束・大坂行六〇〇束を櫻井家から取り次ぎ請け負っている（前掲仲野一〇〇六）。また、前掲の能登国福浦「諸国客船帳」には、松江鉄問屋であった吉田屋文助船（沖船頭は宍道町平助）幸栄丸の入津記録がある。

# 新出の商家文書紹介——両替商・桑原家と「志儀」——

村角紀子

## はじめに

松江藩の財政史料は、現存するものが少ないながらも松平家に伝わった「出入捷覧」がよく知られ、安澤秀一氏によつて詳細な分析のうえ翻刻されている<sup>(1)</sup>。また、近年では伊藤昭弘氏がこれに松江藩藏元・鴻池屋（山中）栄三郎家等の史料をあわせて検討を加え、近世後期の松江藩の財政史を考察する上で問題点を整理している<sup>(2)</sup>。

本稿では、以上のように公的な面から検討されてきた松江藩財政史を足元から補完する史料として、新出の「桑原家（茶町）文書」を紹介する。

本史料の目録作成作業は松江市史料編纂課が担当したが<sup>(3)</sup>、ここから浮かび上がる金融ネットワークは非常に入り組んでおり、当初は文書間の前後関係や脈絡もつかめず、五里霧中という印象だった。全体の見通しを立てる手がかりとなつたのは、後述する桑原家八代・羊次郎の評伝に記された僅かな同家来歴と、本史料から発見された初代～五代経歴書上（【史料1】）、そして既刊の『松江市史』史料編5～8（近世I～IV）だった。

以下、一・で本史料の全体像を確認し、二・でこれまであまり注目されることのなかつた松江藩御用商人・桑原家の存在を見直し、三・で近世後期に領内で普及していた資金調達システムとしての「志儀」について概観し、最後に桑原家が藩の資産運用上果たした役割について試論を示したい。

## 一・新出の商家文書について

「桑原家（茶町）文書」は、松江歴史館が平成二十八年度に購入した商家文書である。「古証文入」と楷書で中央に墨書きされた木製の櫃（縦三七・〇×横六九・六×高さ三四・〇cm）【挿図1】に収められ、櫃側面にはこれと別の筆跡で「雲州松江／森脇屋嘉右衛門様」「大坂／勘原屋庄右衛門」とある【挿図2】。



【挿図1】「桑原家（茶町）文書」櫃  
松江歴史館蔵



【挿図2】同上 側面

聞録として知られる『浮世の有様』第六冊に名が見える<sup>(4)</sup>。これに拠れば、天保八年（一八三七）六月、類焼と米価高騰に困窮した町人へ加島・住友・鴻池といった

富商が施行をした際、「三十貫文」を出資した商家の一人として名を連ねている<sup>(5)</sup>。その額から、勘原屋は中規模程度の商家だったと想定される。一方、受取人の「森脇屋嘉右衛門」は、廻船業で栄えた白潟の大商人「森脇甚右衛門」の分家で、通称「西森」で知られた。文政期には白潟の大年寄を務めている<sup>(6)</sup>。櫃は森脇屋宛だが、史料自体の宛名・取次人名等の大部分は「桑屋」「桑原」となっており、詳しい経緯は不明ながら、近世後期に大坂から輸送用に使われた櫃を桑屋が証文類の保管箱に転用したと推測される。

さて、収められた史料の総数は全五一三件、一〇四七点。このうち年記の明確なものが約四五〇点あり、年代は寛政三年（一七九一）～明治七年（一八七四）の約八〇年間にわたる。全体に虫損が激しく、開封できないものもある。

内容については、明確な区分が難しいものもあるが、概ね以下①～⑤のように大別できる。各分類の典型的な史料例を【表1】にまとめた。

① 志儀に関する文書（覚・質物証文・廻状・人別帳・志儀帳等）

宛先や取次人名等に「桑屋」「桑原」（太助・権平・為市・岩三

郎・愛之助・為五郎・藤兵衛・類之助等）を含むものが大半である

が、他家宛の証文も散見される。なお、桑屋の肩書に「御手船方御用聞」とあるものが非常に多数見られ、中には僅かだが「御勝手方御用聞」「廻米方御用聞」「御足米方御用聞」「志儀方」と記す例もある。

志儀の親（発起人）や連中（参加者）には、商人のみならず

藩士・寺社・藩役所の名前が見え、親が複数いる「組合志儀」もある。志儀連中が何十人もいると満了までに数年～十数年かかり、途中で錢の懸戻しが難しくなった者が証文を書き替えたり、引受人が

替わったりすることもよくあった。その都度、廻状で連中全員に伝達したようである。志儀の詳細については三・で紹介したい。

② 個別の銀銭借入、両替等に関する文書（覚・質物証文・書状等）

依頼主は大工等町人や近隣の農民、商人に加え、寺社、藩士に広がっている。借主は領内に限らず、「備後尾道屋寿四郎、忠三郎」（目録番号148、199）等の名も見られる。なお、要職者が入用の場合、証文は本人名義とせず取次人が複数介在している。また、桑屋の肩書には「御手船方御用聞」のほか、「御勝手方御用聞」とある銀借入証文、逆に桑屋から「御勝手方御役人衆」宛の錢借入証文も見られる。

③ 御用米・御払米・残米売捌に関する文書（受取書・目録・控等）

桑屋が御用米を商人に貸し付けていた証文類や、残米売捌目録等がある。

④ 大坂為替銀運送に関する文書（証文）

数は少ないが、桑屋が御勝手方から銀子を預かり大坂蔵屋敷へ上納する仕事を仲介していた様子がうかがわれる。

⑤ その他（業務上の通知・御触書・経歴書上・書状等）

桑屋が代替わりの際等に藩役所へ提出したと見られる文書の控、大目代等からの御触書、維新後の大政官・政庁・民政局からの通知等が見られる。

表1 「桑原家（茶町）文書」の概要分類

分類	史料例（数字は目録番号）
①志儀に関する文書	A. 桑屋本人が受人・取次・宛先のもの 1・2・6～8「加納喜平様御仕立志儀御懸戻人別書出帳」（吉田屋裕左衛門取扱名前桑原愛三郎、1851～56年）ほか
	B. 桑屋の肩書に「～方御用聞」とあるもの 112-3「志儀書替証文（志儀満に付明質書替）」（伊野屋甚兵衛→御手船方御用聞 桑原愛三郎・御札座御用聞 若狭屋豊十郎・寺社修理方御用聞 森脇屋嘉衛門、1856年） 201-4「借用申錢之事（錢200貫文 御手舟方志儀御場置錢桑屋引受錢借用書）」（本人小西屋次左衛門・受人吉田屋栄蔵→御手船方御用聞 桑屋為市、1811年）【史料2】 208「大谷村市郎兵衛添証文戊四月切 添証文」（→御手船方御用聞 桑屋為市、1813年） 185「清田村太兵衛証文 請合申上一札之事」（清田村本人太平→廻米方御用聞 桑屋太助、1840年） 325-3-1「拝借申上銀之事」（新屋重市郎兵衛、弥三郎→御足米方御用聞 桑屋太助、1827年） 334「（組合仕立志儀人別控帳）」（桑原氏志儀方、1863年）
	C. 他家宛 34「覚（北島様御台所仕立志儀懸錢預かり証文）」（本人菱根屋和蔵・受人山崎屋多三郎・勝部伝之進・御札座御用聞 犬山屋惣右衛門→藤間屋清三郎、1812年）ほか
	A. 桑屋本人が受人・取次・宛先のもの ・藩士 197-2「覚（錢500貫文 千助〔朝日〕様御入用に付借用、志儀集錢に内を以返弁後証為覚）」（玉木久蔵・澤田宇左衛門→桑屋太助、1842年） 209-2「覚（錢300貫文也 赤木文左衛門要用付）」（赤木文左衛門支配人飛驒与兵衛・証判石飛宅右衛門・天野所兵衛→桑屋権平・加見屋又兵衛、1809年） 446「（米・銀両替依頼状）」（葛西義左衛門→桑原太助、年不詳）ほか ・寺社 294「覚（白銀壹枚御寄付）」（弘法寺役察→桑原愛三郎、1855）ほか ・町人・富農 468-1「十ヶ年切永代壳渡申山林之事」（売主権右衛門・組親利三郎→桑原愛三郎、1846年）ほか
	B. 桑屋の肩書に「～方御用聞」とあるもの 239「借用申銀之事」（本人石倉屋善七・請人石倉屋助十ほか3名→御手船御用聞 桑屋権平、1801年）ほか 300「拝借申上錢之事 錢千百貫文也」（桑原愛三郎→御勝手方御役人衆中、1848年） 332-10「拝借申上銀子之事（銀式拾七貫壹貫匁也 御勝手方御用銀之内より拝借）」（沢屋五左衛門・片句屋長右衛門→御勝手方御用聞 桑屋為市、1815年）
	C. 他家宛 191「丑暮より卯暮迄借用申錢之事（錢650貫文 洞光寺入用錢を住職に代り洞光寺借家家守油屋長三郎が借用）」（本人油屋長三郎・請人平野屋民助→野津屋□之助取次、1829年）ほか
	御用米・御払米・残米壳捌に関する文書 ※肩書なし 217-1「卯納御用米引受控」（桑屋、年不詳） 229-2「添証文之事（午納御用米式百表拝借）」（本人白枝屋官三郎・請人和泉屋助右衛門→桑屋権平、1810年） 439-2「子納荒木川方残米壳捌目録」（宇屋忠兵衛、1815年）ほか
	大坂為替銀運送に関する文書 205「覚（新屋藤九郎大阪為替証文、銀七貫目也 御勝手方より銀子を預かり大坂蔵屋敷へ上納）」（本人新屋藤九郎・受人桑屋為五郎→御勝手方御役人衆中、1808年） 332-3「拝借申上銀子之事（銀三貫目也 大阪為替銀代り拝借）」（新屋市郎兵衛・新屋善兵衛→桑屋岩三郎、1821年）
	その他（業務上の通達・御触書・経歴書上・書状等） 133「（初代～五代経歴）」（桑屋岩三郎、1822年）【史料1】、501「請合申一札之事」（岩三郎→常平方御役人衆、1819年） 465「（大目代豊十郎御触書、賛銀流布に関して）」（岩井屋祖一右衛門・三好屋久左衛門→金沢屋伝十他15名、年不詳）ほか

## 二・桑原家について

近世後期の松江城下の富商としては、白瀬の森脇家、末次の新屋（瀧川家）、茶町の小豆沢家等がよく知られているが、桑原家が近世史の表舞台に登場する機会はこれまでの史料ではそれほど多くない。むしろ、近代における桑原羊次郎（一八六八～一九五五）の文化活動の方が有名であろう。松江市名誉市民ともなった羊次郎の経歴については本誌別稿で詳述するが、馬場純一氏のまとめた評伝<sup>(7)</sup>に拠れば、桑原家は「楯縫郡の出で、代々藩の金銀両替商として京店で営業していた」。羊次郎は六代愛三郎・セツの第四子として末次本町「百十二番屋敷」で誕生。長兄・猪太郎が七代を相続して「太助」を襲名したが早逝し、嗣子が幼少であったため、羊次郎が家督を継ぎ八代となつたとある。

桑原愛三郎については、『松江市誌』（一九四一年）所収の「弘化四年未九月就御上京両町寸志銀別」<sup>(8)</sup>に名が見える。これは松江藩が将軍より命じられた弘化四年（一八四七）の孝明天皇即位式費用を富商に割り当てたリストだが、その筆頭は、森脇甚右衛門の「金千両」を押さえて、桑原愛三郎の「金千三百両」——現代の感覚で換算すれば約四億円<sup>(9)</sup>——となつてゐる。近世末期の桑原家が、今日の想像を遥かに超えた富商であったことが分かる。

この桑原家の初代から五代の経歴について、今回、「桑原家（茶町）文書」

133【挿図3】・同翻刻【史料1】が見つかった。文面から、同家五代岩三郎が文政五年（一八二三）正月に松江藩役所、おそらくは御勝手方に提出した経歴書上の控と推測される。末尾に「荒々ニ御座候」とある通り、全てが正確な記述とは考えにくいが、同家の来歴を示す重要な史料である。

### 【史料1】桑原家（茶町）文書 133 翻刻

（桑屋初代～五代経歴書上、封ナシ、継紙一枚）

一 宝暦十三年（一七五二・五三）頃 御勝手方御用聞被仰付候様相見申上候

一 明和元年（一七六四）閏十二月三日 衆人を抽テ格別之寸志申出候  
ニ付御目見町人被仰付候

一 銀弐枚 十月十六日

一 同拾五枚 十一月十六日

一 同五枚 九月十八日

右御勝手方御用向格別深切ニ相勤候ニ付、為御褒美被下置候

一 明和四亥（一七六七）六月 御勝手合候□<sub>〔出張〕</sub>御内々被仰付早速大坂九州越前江船を遣し正錢壹万貫文手合仕、尤私井肥後屋喜衛門兩人より差<sub>〔出張〕</sub>申上候

一 同年十一月廿六日 私肥後屋喜衛門兩人江御運送銀七百貫目儀ニ手合仕候様被仰付、早速手合差出候ニ付十二月三日立之御議定之所同朔日之御運送相成格別相勵候段御称美被為遊候

二代目 沢屋太助

一 明和八卯年（一七七二） 御買上ヶ御用被仰付候

一 安永八亥年（一七七九） 御用銀五貫目被仰付調達仕候

一 天明二寅（一七八二） 正月十三日御勝手方御用聞御米捌被仰付候

一 同七未年（一七八七） 御用銀五貫目被仰付調達仕候

一 寛政三亥（一七九二）十二月廿三日 年來御勝手方御用出精相勤候

ニ付永々御目見被仰付候

以上から、桑屋歴代の名前が

一 同六寅〔一七九四〕 御用銀六貫五百目被仰付調達仕候

〔初代 沢屋太助カ〕

二代目 沢屋太助

三代目 桑屋権平

一 寛政九巳〔一七九七〕六月 御勝手方御用聞御米捌被仰付候

四代目 桑屋権平

一 文化三寅年〔一八〇六〕 御用銀七貫五百目被仰付調達仕候

五代目 桑屋岩三郎

一 文化八未〔一八一一〕九月 御勝手方御用聞御米捌被仕付候

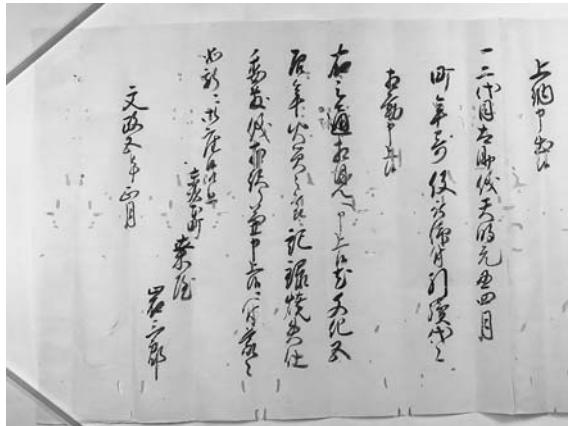
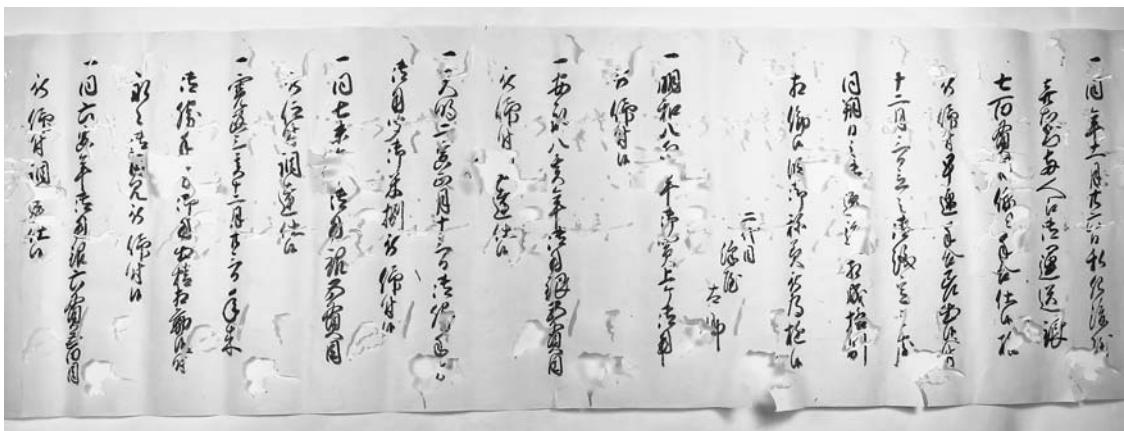
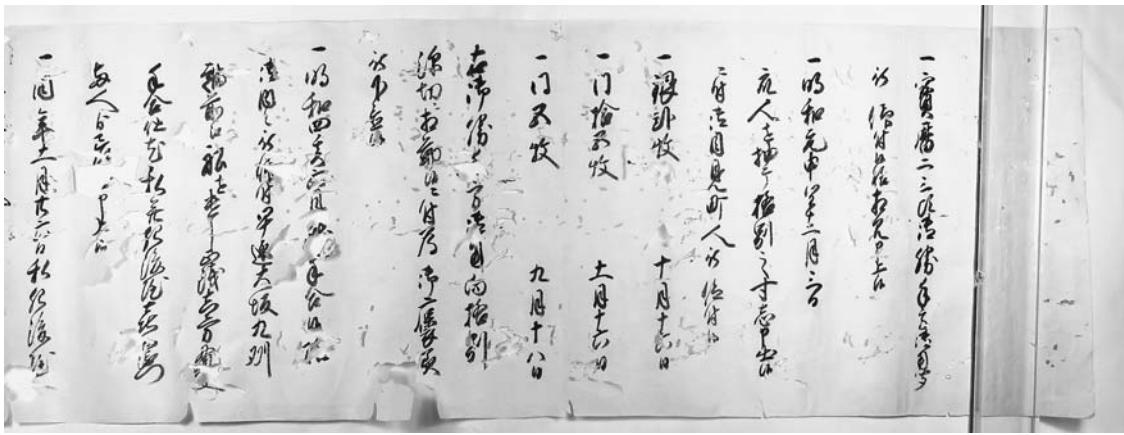
であつたことが明確となつた。これが本家で、他の同史料に登場する「為五郎」「藤兵衛」「類之助」等は分家筋であろう。そして本家は初代より藩の財政担当である御勝手方の御用聞を務めたこと、ただし二代までは「沢屋」を名乗つていてることが分かる。「沢屋」については、元禄年間作成の「松江末次本町絵図」の京店周辺に、「沢屋五郎右衛門屋敷」と「沢屋五左衛門」の貸家が記載されることから、当時の大店のひとつと見られる<sup>⑪</sup>。すなわち、

一 文政元寅〔一八一八〕八月 御勝手方御用聞御米捌被仰付候  
一 同四巳年〔一八二二〕 御公役被為蒙仰候ニ付銀拾五貫目寸志上納  
申出候  
一 二代目太助儀天明元丑〔一七八一〕四月 町年寄役被仰付引続代々  
相勤申上候

右之通相見ヘ申上候、尤文化五辰年〔一八〇八〕火災ノ節記録類消失  
仕、委敷儀相訛り兼申上候ニ付荒々ニ御座候以上  
末次本町 桑屋岩三郎  
文政五年〔一八二三〕正月

となり、三代から「桑屋」に屋号を代えたと推測される。前述の本史料①②証文類には借主や宛名に「沢屋」とあるものも散見され、両家のつながりは桑屋独立後も続いていたようだ。その他の屋号宛の証文が含まれる理由はよく分からず、今後さらに本史料の精読と検討を要する<sup>⑫</sup>。

さて、【史料1】で特に注目されるのは、初代が明和四年（一七六七）六月、「内々」の御用で肥後屋喜衛門（白潟魚町の商家・三島家）と共に廻船業で「正銭壹万貫文手合」したとある点である。これはちょうど朝日丹波郷保の「御立派改革」着手の年にあたり、何らかの関連がうかがわれる。郷保の子・恒重は「秘書」に改革中一六年間のエピソードの一つとして、「御米捌申付候町人沢や・肥後や兩人之宅」を毀そうとした町方を町奉行が制止した騒動を記していることから<sup>⑬</sup>、沢屋・肥後屋は守るべき御用商人であった



【挿図3】  
桑原家（茶町）文書133  
(桑屋初代～五代経歴書上)  
松江歴史館蔵

ことが分かる。なお、【史料1】からは二代が御米捌を命じられたのは天明二年（一七八二）正月が最初のようすに読めるが、「松江渡海場之訳」<sup>13)</sup>に拠れば、明和六年（一七六九）には既に沢屋太助と肥後屋が尾道廻米を手がけている。

ちなみに、【史料1】には「御勝手方」以外の役所名が記されていないが、

前述の通り、「桑原家（茶町）史料」全体においては、桑屋の肩書として最も多く記されているのは「御手船方御用聞」である。この御手船方とのつながりは、桑屋自身が廻船を手がけていたことと深く関連したものであろう。

さらに、文化十四年（一八一七）五月、四代為市が「御懸屋」を命じられたとある。御懸屋とは「民業にして金銀の両替、賃貸をなす所」（『雲藩職制』）であり、現代の銀行のような役割を果たしていた。岩三郎は常平方宛「請合申一札之事」（文政二年、501）に「文化八未年亡父為市御役所御用錢預相務候節」と記し、また、【表1】②Bに挙げた「御勝手方御用聞桑屋為市」宛の銀借用証文（文化十二年、332—10）には、「御勝手方御用銀之内より拵借」とある。数年の開きはあるものの、文化年間の後半には桑屋は「御懸屋」の仕事を任されていたと見て間違いない。

### 三・資金調達システムとしての「志儀」

次に、本史料に関連証文類が最も多く見られる「志儀」について検討していきたい。これは一般的には「頼母子」「無尽」と言われるもので、「親」と

呼ばれる発起人が「講中」（志儀では連中）と呼ばれる数人（数十人の仲間）を募集して講をつくり、一定の給付すべき金品を予定して、定期にそれぞれ引き受けた口数に応じて金品の掛けこみ（懸行）を行い、くじ引き・入札などの方法で順次金品の給付を受ける仕組み、とされる<sup>14)</sup>。

先行研究に拠れば、「無尽」「頼母子」の語の使用例は鎌倉時代にまで遡り、記録上の初見は、「無尽」が建長七年（一二五五）の「御成敗式目」追加法、「頼母子」が建治元年（一二七五）の高野山文書中の請文という<sup>15)</sup>。関西では主に「頼母子」を用い、関東では「無尽」を用いるという大略の区別も指摘されている。

中世では、一般庶民の相互扶助、貧困者救済の傾向が強いが、利用度が増した近世においては、寺社が財政の維持や参拝費用調達を目的として主宰するもの、参勤交代の経費調達のような臨時の財政救済を目的とした藩當のもの、都市の商人衆が経営資金調達のために組織したものなどがある<sup>16)</sup>。また、領主が発起して最初の掛け金をとり、その後の掛け返しをしない、いわゆる「殿様無尽」や、家臣・御用商人が運営する「領主的金融講」の事例も各地で多数報告されており<sup>17)</sup>、実態は多様化していく。

「頼母子」「無尽」の方言的用語として、福岡の「用会」、宮崎・鹿児島・沖縄の「模合」（催合・舫）があり、島根県下では「志儀（志義・志議）」の語が昭和期まで使われてきた。

「志儀」の語が松江地域でいつから用いられたかは不明だが、試みに既刊の『松江市史』史料編から「無尽」「頼母志」「志儀」の語句をピックアップしてみたところ、「古代（中世）」「中世II」「近世I」にはいずれも用例がなく、「近世II」以下のような用例が見られた（傍線引用者）。

- ・「国令農中」「郷射」（近世II<sup>139</sup>、457）

一、頼母志合力一円無用之事、但組頭相談ヲ以百姓為取立頼母志合力ハ各別之事（延宝二（一六七四）甲寅十二月十九日）

・「国令 工商 下」「町御」(近世II<sup>206</sup>、561)

一、町同心共へ町人ヨリ音物・頼母志不及申、至振舞等迄堅制禁事（貞享三〔一六八六〕寅十一月十六日）

・「国令 後編 農中」(近世II<sup>891</sup>)

一、己カ贋負之者取立ノタメ志義・頼母志等相催、且又瞽女・座頭、官金ト申掛取立候事（宝永八〔一七一二〕卯七月）

・「享保元申年請免請捨被仰付候時御条目」(近世II<sup>73</sup>)

一、年来雜穀留差出候儀ハ請ニ成候上者、此已後右之役人不及差出、御年貢不濟内志儀・頼母志・借米返弁・諸勸進ニ至迄、一円ニ取遣仕間敷候：（享保元年〔一七一六〕七月二日）

すなわち、十七世紀後半より「頼母志」の語が浸透していったようである。

「無尽」を金融講の意味で用いた例は見られなかった。「志儀」の初出は宝永八年（一七一一）で、「志義・頼母志」と並列で使用されており、享保元年（一七一六）にも同例が見られる。そして以降は「志儀」が単独で用いられ（近世IV<sup>54</sup>「志儀帳」寛政十二年〔一八〇〇〕閏四月など）、十九世紀の史料に「頼母志」の語は現れない。ごく大雑把に言えば、中世に西日本で広く用いられていた「頼母子（志）」の語とシステムは、十七世紀以前に松江地域にも普及したが、十八世紀初頭までに何らかの理由で「志儀」と「頼母志」に分離し、やがて「志儀」に一本化していったと捉えることが出来るだろう。

十九世紀に入り民間に広く親しまれていた「志儀」については、『東出雲

町誌』の一節「志儀帳にうかがえるもの」が参考になる。<sup>55</sup>ここには文化九年（一八〇四）十二月に下意東村新右衛門を親として成立した志儀帳が紹介されている。特に注目されるのは、懸銭や利率、質物等に関する約条の末尾にある「一、コレ以後、御上様ヨリ如何様ノ新規、仰出サレ候トモ、コノ志儀ハ構ハズ、末々マデ相違ナク取遣ハシ仕ルベキコト」という取決めである。同書編者はこれを「朝日丹波のお立派の改革時、発せられた「闕年の令」など一連の藩の財政策を指したもので、藩政への不信が尾を引いている実態をまざまざと見せてくれる」と意味づけている。この指摘は、「志儀」が庶民の金融手段として定着した理由を考える上でも示唆に富む。また、『島根県大百科事典』「志儀」の項にも、「金銭や米麦を出し合って融通する相互扶助的講」<sup>56</sup>とある。このように「志儀」の語には、「御上様」に何事かが起こっても貸借関係の破棄されることのない、庶民による庶民のための融通講、というイメージが現代ではあるようだ。

しかし、ここで「桑原家（茶町）文書」に目を戻すと、全く異なる「志儀」のかたちが見えてくる。

【表1】①Aのように、桑原が商人や藩士の仕立てた志儀を引き受けている史料もあるが、興味深いのは、同①Bに挙げた201-4【挿図4】・同翻刻【史料2】のように、御手船方等の藩役所が元銭を出資し、「御用聞」の商人がそれを引き受け、「△方志儀」を仕立て富裕町人を「連中」として運営していた、もしくは、この「△方志儀場置銭」自体を個々の町人に貸付け運用していたとみられる史料がはるかに多く存在することである。現代の感覚で言えば、公金を預けた証券会社や信託銀行が投資を行い、出資者である役所は対外的・事務的な苦労を負うことなく配当金や利息を受け取れるシステム、と解釈できる。

引不埒之訳も御座候ハ、本人ハ不及申上ニ受人方へ如何様ニも御折檻可被成候、其時一言御断申間敷候為後日仍而如件

文化八年〔一八一二〕未十二月

本人 小西屋次左衛門印

受人 吉田屋栄藏印

御手船方御用聞

桑屋為市殿

なお、ここまで桑屋のみを取り上げてきただが、当然のことながら、松江藩の御用商人は同家だけではない。本史料には他にも以下のように、「△方御用聞」と肩書が付された商人の名が実に多く見出される（括弧内は文書の年記と目録番号）。すなわち、藩の各役所にはそれぞれ別個に御用聞の商家がついており、しかもその担当は時折入れ替わっていたと考えられる。



【挿図4】桑原家（茶町）文書201-4  
「借用申錢之事」  
松江歴史館蔵

【史料2】桑原家（茶町）文書201-4 翻刻

「借用申錢之事」（一枚、201-1～5の五点組で封入り、封表「借用証文四

通入 高四百貫文 吉田や栄藏より被取候証文）

借用申錢之事

当末十二月元末申

錢武百貫文也 但十一月廿日切利入月

八朱五厘ニシテ

右御手舟方志儀場置錢、貴殿御引受之内慥ニ借用申處實正ニ御座候、然

上者御議定之通、來ル申之十一月廿日切元利急度返済可申候、若本人不  
埒之義も御座候ハ、受人より元利速に返済可申候、万此上ニも切月延

- ・御札座御用聞 犬山屋惣右衛門（文化七年、36-1）
- ・常平方御用聞 加見屋又兵衛（文政十三年、59-1）
- ・修理方御用聞 森脇屋嘉衛門（文政九年、80）
- ・御軍用方御用聞 小豆沢屋拾藏（天保二年、338-3-4）
- ・足米方御用聞 森脇甚右衛門（天保十年、321-3-4）
- ・御軍用方御用聞 京屋万五郎（年不詳、31）
- ・御札座御用聞 岡崎屋運兵衛（年不詳、31）
- ・御札座御用聞 若狭屋豊十郎（年不詳、112-3）
- ・寺社修理方御用聞 森脇屋嘉衛門（年不詳、112-3）
- ・寺社修理方御用聞 新屋庄兵衛（年不詳、310）

・常平方御用聞	新屋伝右衛門	(年不詳、311—2)
・御札座御用聞	古浦屋利左衛門	(年不詳、319—1)
・常平方御用聞	新屋寿市郎	(年不詳、498—1)
・修理方御用聞	木屋与三左衛門	(年不詳、498—1)

これらの商家は、それが①Bの桑屋と同様に藩役所代理人として志儀に参加しており、蜘蛛の巣のように複雑な収益ネットワークが張りめぐらされていた様子がうかがわれる。

嘉永四・五年（一八五一年・五二）の松江藩諸役所保有金銀・債権等の書上にあたる「諸役所御有物頭書」<sup>20</sup>には、「御用聞預」として「二万五千五百四十四両」、「志儀懸行」として「一万七千七百十三両」が挙げられている。これらはそれぞれ、「△方御用聞」商人への委託金と、「△方志儀場」への出資金や掛金の総額と考えられるのではないだろうか。

右のような半官半民の藩営志儀のあり方を松江藩の特色とまで言ってよいのは、まだまだ多くの検証が必要である。比較すべき他藩の例には乏しいが、例えば加賀藩では藩法で武士の頼母子講に町人が加わることを禁じていた<sup>21</sup>。その一方、前述の通り、領主が発起して家臣や御用商人が運営する「領主的金融講」の事例も近世後期に各地で報告されている。

松江藩においては、延享と明和の二度の藩政改革を経験し、とりわけ明和四年（一七六七）の御立派の改革で行われた「闕年」によって藩の債務破棄を断行して領民の困窮を招いていた<sup>22</sup>。このため、領民の不信を再び招かぬよう、既に民間で人気のあった「志儀」を相互に利益がある継続可能な資産運用システムとして取り入れ、洗練させていったのではないか、というのが現段階での推測である。

## むすびに

本史料は、近世後期～末期の松江地域にどのような金融ネットワークが存在していたかを具体的に示すとともに、史料に乏しく実態の見えにくかった松江藩財政の一端をも示している。伊藤昭弘氏は前掲の論考で、「松江藩は領内外の様々な相手に対し、様々な手段によって融資していた事が判明した。注目すべきは家臣・領民など領内向け融資であり、藩のもとに蓄積された資金の多くは、多様な手段によって領内に環流し、藩財政と藩領経済を一体化させる資金循環構造を形成していたのである」と結論づけているが、本史料から見える共存共榮型の藩営志儀は、ここで考察された松江藩資産運用の「多様な手段」を部分的ながら立証するものといえる。

そして、その運用にあたって重要な役割を担っていた一軒が桑屋だった。

同家は現代で言う証券会社や信託銀行の役割を果たし、松江藩の資産運用の一翼を担った。同家にとっては「御米捌」や「御懸屋」をも任せられるなどメリットも大きかったが、反面、莫大な寸志銀を割り当てるなど、負担も大きかった。また、藩との結びつきが強い分、維新後に被った損失も小さくはなかつただろう。明治期の同家の動向について本誌別稿（45頁）で述べたい。

なお、桑屋と松江藩蔵元との関係についても触れておきたい。松江藩の有力な蔵元としては、十八世紀半頃から大坂の両替商・鴻池（山中）栄三郎家、天王寺屋等の存在が知られる<sup>33</sup>。【表1】④に紹介した史料（205、332―3）からは、桑屋が御勝手方から銀子を預かり大坂蔵屋敷へ上納する仕事を新屋へ仲介していた様子がうかがえる。

また近年、尾道商人の史料調査が進んでいるが、森本幾子氏が翻刻紹介した嘉永七年（一八五四）の「雲州廻勤節日記」<sup>34</sup>には、「桑原灘座敷」が当時、藩役人や来松した蔵元らを接待する場のひとつであったことが示されている。

前述の桑原家八代・羊次郎は、明治三十四年（一九〇一）十二月、鴻池銀行神戸支店長という要職に就く。開港地である神戸で外国人に人気のあった浮世絵研究と蒐集を開始し、その大家となることから、彼の美術研究上のキヤリアにおいてこの神戸赴任は重要な転機と言えるのだが、近代の史料のみを研究対象としていたのでは、この就任はかなり唐突なものとして映る。しかし、以上のような十八世紀以来の桑原家の生業と松江藩、さらに蔵元・鴻池家との関係を視野に入れることで、逆に極めて自然な延長線上にある出来事として理解することができる。本史料群は、まさしく松江市史の近世と近代を結びつけるという点でも重要である。

#### 注

- (1) 安澤秀一編一九九九『松江藩出入捷覽 松平不昧伝「別冊」』原書房、同二〇〇二「松江藩出入捷覽と明治三年藩歳入歳出比較」『松平不昧と茶の湯』不昧流大円会事務局  
(2) 伊藤昭弘一〇一四「松江藩財政に関する覚書」『松江市歴史叢書七』（松江市史研究五）

- (3) 調査担当者・内田文恵・北村久美子・和田美幸・村角紀子、協力者・大谷令子・岡本久美子  
(4) 谷川健一ほか編一九七〇『日本庶民生活史料集成十一世相一』所収、三一書房、三八五頁  
(5) 「勘原屋」の読みは「あざはらや」か。なお、前掲(4)同書三七七頁にある「四軒町」の「前原屋庄右衛門」も同家のことと推測される。同町は大坂の商業中心地・船場の一部  
(6) 山陰日日新聞島根支社編刊一九五五『松江八百八町内物語白潟の巻』  
(7) 馬場純一・一九六八「桑原羊次郎」『明治百年島根の百傑』島根県教育委員会。  
なお、桑原弘道氏のご教示に拠れば、六代愛三郎の長男は一歳で夭折しており、羊次郎は戸籍上、三男という。  
(8) 上野富太郎・野津靜一郎編一九四一『松江市誌』松江市庁、一六三八～一六四五頁  
(9) 日本銀行金融研究所貨幣博物館ホームページでは、仮に大工の日当を基準とした場合、一両の価値は約三三万二〇〇〇円としている。  
(10) 沢屋については大矢幸雄氏のご教示に拠る。なお、本稿脱稿後の桑原弘道氏のご教示に拠れば、初代太助は廻船業をしており、西代村の兄の綿屋平兵衛の木綿などを松江まで運んで売り、松江の品物を仕入れて平田で売っていたとのこと。  
また、四代目は三代目の弟で、「太助」ではなくそのまま為市を名乗っていたという。歴代の詳細については今後も調査を継続したい。  
(11) 証文自体が「預かり書」のように利用されたことなどが推測されるが、今のところ実態は不明である。「預かり書」については、伊藤昭弘氏が『松江市史』通史編近世I「松江藩財政政策の展開」で触れる予定である。  
(12) 『松江市史』史料編5「近世I」一五八頁  
(13) 『松江市史』史料編8「近世IV」五一九頁  
(14) 鈴木敦子一九八八「頬母子」『国史大辞典』九、吉川弘文館  
(15) 三浦周行一九一九「頬母子の起源とその語源」『法制史の研究』岩波書店、原島陽一・一九五九「頬母子と無尽」『講座日本風俗史』八、雄山閣  
(16) 前掲註14、鈴木一九八八  
(17) 岩橋勝一九六七「大和郡山における領主的金融講—江州領浅井神崎両郡を中心

として」宮本又次編『史的研究—金融機構と商業經營』清文堂出版

(18) 東出雲町誌編さん委員会編一九七八『東出雲町誌』、四五四～四五七頁

(19) 原宏一九八二「志儀」島根県大百科事典編集委員会・山陰中央新報社開発局編『島根県大百科事典』

(20) 『松江市史』史料編8「近世IV」第一章72

(21) 磯田道史一〇〇三『武士の家計簿「加賀藩御算用者」の幕末維新』新潮新書、五九頁

(22) 原傳一九三四「第六章 松江藩の闕年」「松江藩経済史の研究」日本評論社、乾隆明二〇一一『増補改訂版 松江藩の財政危機を救え—ふたつの藩政改革とその後の松江藩』松江市教育委員会

(23) 中川すがね一九九〇「近世大坂の大名貸商人—鴻池栄三郎家の場合」『日本史研究』三二九

(24) 森本幾子二〇〇八「雲州廻米と尾道商人—松江城下廻勤御用と出雲藩屋敷御料理仕出御用—」『関西大学博物館紀要』一四。なお、同史料には他にも「虎屋灘座敷」の名が重要な接待の場として記されている。

## 謝辞

史料読解と翻刻にあたり、松江市史料編纂課の内田文恵・北村久美子・和田美幸（当時）、および小林准士氏よりご助力を得た。また、桑原家歴代の事跡に関して桑原弘道氏よりご教示を得た。記して感謝の意を申し上げる。

（むらかど のりこ 松江市史料編纂課専門調査員、

桑原羊次郎・相見香雨研究会代表）

# 桑原羊次郎とその美術工芸研究 —附『歐米美術行脚』目次翻刻—

村角紀子

## はじめに

桑原羊次郎（号双蛙、一八六八～一九五五）は、明治後期から昭和前期にかけて活躍した松江市出身の美術工芸研究家である。没後、昭和三十三年（一九五八）に松江市名誉市民の称号を贈られた。美術研究史上では肉筆浮世絵の大コレクター、装剣金工研究の大家として名を残している。その一方、郷土における活動は文化面のみならず政治・経済・福祉と多方面に渡つており、彼の肩書や業績を一言で言い表すのは難しい。

本稿では、羊次郎の経歴と活動の全体像を概観した上で、それらが彼の研究歴に及ぼした影響を検証し、今日的な位置づけを試みたい。現段階では、史料による裏付けを得られていない試論や検討を重ねるべき事項も多々残されているが、それらも含めて提示し、今後研究を進めるための問題点を整理したい。



【挿図1】  
桑原羊次郎肖像写真  
桑原家蔵

期の卒業生であったことから、近年、同学による追跡調査が行われた<sup>(2)</sup>。美術史分野においては残念ながら羊次郎を中心に取り上げた論考は見られず、日英博覧会委員を務めたことから日英美術交流史の文脈で言及される<sup>(3)</sup>、あるいは浮世絵研究史における一挙話として事跡が部分的に取り上げられている<sup>(4)</sup>。

関連史料は現在、島根県内各所に分散しており、旧蔵の絵図・書籍・自筆原稿・書簡類は島根大学附属図書館「桑原文庫」に、旧蔵浮世絵の一部および『双蛙亭漫録』（稿本、存一八冊）は新庄二郎氏から旧県立博物館を経て島根県立美術館に、旧蔵墨跡は同じく旧県立博物館を経て島根県立出雲歴史博物館に、近世後期の桑原家古証文類は本誌別稿の通り松江歴史館に収蔵されている。また、その他の私的なものは桑原家に保管されている。

以下、桑原双蛙著『蛙のたはこと』（私家版、一九三七年）等に収められた一連の回想録と自筆履歴書（島根大学附属図書館蔵）<sup>(5)</sup>を軸とし、彼の著作物および各館所蔵史料を参照しながら考察を進めたい。

先行研究としては、『明治百年島根の百傑』に收められた馬場純一氏による評伝<sup>(1)</sup>が最も事実と要点を押さえ全体像を簡潔にまとめている。また、後述するように羊次郎が中央大学草創

替商を務めた「桑屋太助」本家の六代・愛三郎の次男（第四子）として生ま

## 一・明治初年の桑原家周辺

### （一）松江における桑原家

桑原羊次郎は慶應四年／明治元年（一八六八）四月十八日、代々松江藩両

れた。近世後期における同家の隆盛と藩との密接な関わりについては本誌別稿（33頁）にまとめたのであわせて参照されたい。

両替商を家業としてきた桑原家にとって、この年五月の銀目廃止、続く四年七月の廃藩置県にともなう藩債処分など、羊次郎誕生の前後は激動の時代だったと推測される。近年、『松江市史』に翻刻が収められた「島根県歴史」（国立公文書館蔵）に拠れば、官藩紙幣交換を担当する懸所（掛所）は佐藤金之介（後の喜八郎）に任されるところとなり<sup>(6)</sup>、さらに六年一月これを廢止し新設された県の為換方（為替方）出納事務は小野組に、その倒産後は三井組に、と大資本を持つ東京の富商に命じられた<sup>(7)</sup>。維新後、桑原家が官金取扱に関与できた形跡はない。

とは言え、明治十三年（一八八〇）十月調査の「富豪人名 島根県管内地価壱万円以上所有者取調表」<sup>(8)</sup>に拠れば、桑原太助の所有地は県内二〇番目の五六町七反二畝一九歩（約一七万坪）、地価二万七八三七円七九錢五厘となっている<sup>(9)</sup>。同家は明治期に入つてからも大地主として経済的に安定していた様子がうかがえる。

家族の動静も、同じく「島根県歴史」から拾うことができる。父・愛三郎は明治九年一月、本町小学校への学資寄附によって県より褒詞を授かり<sup>(10)</sup>、羊次郎の七歳上の兄で同家七代を継ぐ猪太郎も、八年三月に小学校下等全科を卒業し「本県ニ在テ平民大試験ヲ受ケシ噶矢」<sup>(11)</sup>として褒賞を受けた。十二年三月には松江中学校を第一期生として卒業<sup>(12)</sup>。長じて二十二年四月に行われた松江市議会初回選挙で三級選出議員の一人となり、同年五月十日の第一回議会では会議細則起草委員五名の一人に選ばれた<sup>(13)</sup>。父兄とも地域の名望家として期待を集める存在だったと言えよう。

## （二）外祖父・山口巻石

また、羊次郎の母セツ方の祖父に、山口巻石がいた。後述する羊次郎著『島根県画人伝』（一九三五年）に拠れば、通称五郎兵衛、諱は季弘、字は叔多、はじめ拳石、後に巻石と改号。桃花流水村舎または棲碧樓主人と号した。松江市外中原の商家に生まれ、屋号は「木屋」といった。古書籍と詩书画を愛し、貫名海屋等文人墨客が来松した際には別荘棲碧樓を宿とし親しく交遊したという。明治三年八月十九日、六六歳で没した<sup>(14)</sup>。

著名な儒者・内村友輔（鱸香）は巻石の長年の友人であり、羊次郎は後年、六〇〇通に上る鱸香筆巻石宛書簡<sup>(15)</sup>を精読して『勤王儒者内村鱸香先生』（鱸香先生顕彰会、一九三七年）を編んでいる。また、巻石は藏書家で知られたが、その一部は桑原家に引き継がれており、昭和三十四年（一九五九）に島根大学附属図書館に収蔵された第一次「桑原文庫」には、自写本『棲碧樓叢書』（前編八六冊、後編八冊）をはじめ、山口巻石蔵の奥書の附された稀覯書が含まれている<sup>(16)</sup>。

巻石は北尾次郎の祖父にもあたり、その教養の素地を作ったとされる。羊次郎もまた「私は私の外祖父が書画骨董嗜でありました為めか、自然幼少より美術品なれば何んでもかんでも嗜な方でした」<sup>(17)</sup>と回顧しており、巻石の旧蔵書画や書籍、あるいは人的ネットワークから受けた影響については、近世史料を含めて今後更に調査すべきだろう。また、桑原家にも家伝の書画や道具類が多数存在していたことが、『珍藏書画目録』（明治二十七年十月記）・『家藏珍書記』（明治二十八年二月記）・『中道具目録』（年代不詳）といつた同家目録（島根大学附属図書館蔵）から分かる。

## 二・桑原羊次郎の経歴と活動—政治・経済・福祉

### (一) 相長舎・松江中学校から英吉利法律学校・ミシガン大学へ

明治九年（一八七六）、羊次郎は内村鱸香が西茶町に開いた私塾「相長舎」（明治七年開塾）に通うようになった。十四年五月本町小学校上等科卒業、同年九月松江中学校（明治十七年、島根県第一中学校と改称）に入学<sup>20</sup>。鱸香は同校教師でもあったことから、羊次郎は卒業までその教授を得た。在籍当時の松江中学校長は渡辺譲、初等中学科での同級生には桂田猪熊・林玉之助・小倉寛一郎・成相伴之丞・森田龍次郎がいた<sup>21</sup>。当時の羊次郎は病弱で年中風邪と胃腸病に苦しめられ、親戚の医師・松村寛蔵には三〇歳位より長命は難しいと診断されていたという。

明治十八年（一八八五）七月中学卒業後、上京して神田錦町に新設された英吉利法律学校（明治二十三年に東京法学院、三十八年に中央大学と改称）に入学。同校での様子は羊次郎の「懐旧録（中央大学五十年記念）」<sup>22</sup>に詳しい。在籍当時の校長は創立者の一人である増島六一郎、講師には菊池武夫・岡村輝彦・奥田義人・土方寧・平沼麒一郎・馬場應治らがいた。また、後に外務大臣となる小村寿太郎が「英國法律」を講義していた。二十二年九月、英語法学科の第一期生として特別認可部を卒業。

この間の教科書は英文原書で、一時、築地のミッション・スクール東京一致英和学校（明治二十年、明治学院に統合）にも通ったという<sup>23</sup>。また、在京の同郷人・若槻礼次郎や岸清一らとの交友も進んだ。

その一方で、郷里の桑原家に大きな変化があった。まず愛三郎が明治十七（一八八四）に没し、猪太郎が七代目を相続し太助を襲名。しかし松江市議となつて間もない二十二年（一八八九）九月五日、二七歳で病死した<sup>24</sup>。父兄の相次ぐ死により、羊次郎は「外に兄弟なき私、勢ひ父祖伝来の耕地と家

作を監督し、家兄の遺児を教育すべき境遇に陥り」<sup>25</sup>、急速松江に帰郷、二歳にして桑原本家八代目の家督を相続することになった。

当時の松江には、羊次郎より一年前に英吉利法律学校を卒業した佐々木佐吉郎と諏訪部彥次郎があり、それぞれ弁護士、松江銀行支配人として活動していた。明治二十三

年、羊次郎は二人とともに母校「英吉利法律学校の分身とも見るべき」<sup>26</sup>私立松江法律学校を殿町に創立。支持を仰いだ岡崎運兵衛が名誉校長、羊次郎が校主兼講師となり、松江裁判所の判事にも講師を頼んだという。また、この年十一月三日、津久井春子と結婚、のち一男三女をもうける。滑り出しは順調だった松江法律学校だが、翌年、羊次郎が渡米の意志を持つて再び上京。同校はこの留守中に廃校となつた。

明治二十四年、上京した羊次郎は東京法学院院長となつた菊池武夫を訪問。また、外務省翻訳局長となつた小村寿太郎宅を訪問し、アメリカ留学について具体的な航路等の助言を得た。同年十月一日、横浜港からエンプレックス・オブ・インデア号で出港。同郷の若槻礼次郎・矢田長之助・山本邦之助らが見送つたという。ミシガン大学では「菊池先生の紹介状を以てエンゼル



【挿図2】ミシガン大学マスター・オブ・ロース修了生記念写真（下段中央に桑原羊次郎） 1892年 島根大学附属図書館蔵

教授に面会し、ノルトン教授の試験を受けて<sup>(5)</sup> 同校卒業生並の待遇で大学院に入学。明治二十五年（一八九二）六月三十日「マスター・オブ・ロー」（Master of Laws 法学修士）の学位を得た。これは成績優秀による特別進級だったという<sup>(6)</sup>。

### （一）地域経済への寄与～松江商業会議所、松江電灯株式会社

再び松江に帰郷した羊次郎は、明治二十七年（一八九四）八月十九日、松江商業会議所の特別会員に当選。同会議所は同年三月十六日付で農商務大臣の設立認可を得て本格的に活動を開始していた。翌年六月発行の『松江商業会議所報告』第一号に拠れば、同時に特別会員となつたのは佐藤喜八郎（松江市会議長）と岡本金太郎（山陰新聞主筆記者）で、羊次郎の肩書はカナのまま「マスター・オブ・ロー」と表記されている。同誌に掲載された論説「商業会議所ノ由来ヲ述フ」は、現在確認できる羊次郎の最初の雑誌発表文である。内容はほぼ「歐米における商業会議所の発達」と題すべきもので、「抑モ商業会議所トハ」と十四世紀初頭イギリスから一八八〇年代アメリカの状況までをまとめ、アメリカ留学帰りの強い自負をよく示している。

報』一九五五年十月二十八日）

続いて明治二十八年十月には織原万次郎・山本誠兵衛・清原宗太郎とともに松江電灯株式会社発電所を殿町に設立。前後して山陰山陽を結ぶ両山鉄道会社設立も企図したが、こちらは実現を見ずに終わった<sup>(7)</sup>。二十九年一月には園山伊助・木佐徳三郎とともに松江銀行監査役に当選、就任した<sup>(8)</sup>。

以上のように、羊次郎は松江における近代産業勃興の場に当事者として居合わせた訳だが、結論から言えば、成果は芳しくなかった。後年の大正九年（一九二〇）一月、前年十二月に没した岡崎運兵衛の補欠として衆議院議員に当選し憲政会に所属したが、次の選挙では落選して一期のみに終わった。

その経緯も踏まえて、郷人による羊次郎追憶談には以下のように政治経済分野における厳しい評価が共通して見られる。〈桑原家八代〉に地域が求めたものと、青年〈桑原羊次郎〉の理想の間には、容易に埋めがたい隔たりがあつたと思われる。

桑原さんは松江に電灯会社をつくることに手をつけたり代議士にもなつたがついに政治や実業の方では大成しなかつた。先べんをつけながら美しいところは皆人にとられている。先覚者で理想家だから、清濁併せのむ政界や実業界には向かなかつたわけだろう。（木幡吹月談、田部長右衛門・太田直行・高井敏正ほか「座談会 桑原雙蛙翁を偲ぶ」『山陰新報』一九五五年十月二十八日）

翁の政治、経済に関する天分は、失礼ながら余り豊かであつたとは想えぬ。現に政治面では地方における憲政系の大長老であつたにも拘らず、子分らしい者など全くなく、また経済面においても、旧藩以来地方屈指の門閥（旧藩時代には城下で屈指の町人、現在でも市内第一の不動産所持者）として、各種の会社及び企画に発起人となり、また社長に推戴されたが、それ等は殆ど例外なく失敗に終わったので、俗に「桑原会社」の悪評をさえ買ったほどである。（太田直行「（桑原雙蛙先生追悼録）雙蛙亭素描」『日本美術工芸』一二〇六号、一九五五年十一月）

### （二）出郷～鴻池銀行神戸支店長時代

明治三十一年（一八九九）、羊次郎は三度目の上京をなし、東京での就職の道を模索する。この間、芝の紅葉館で貴族院議長の近衛篤磨公爵に陪侍し、その撰号「双蛙」を用いるようになる<sup>(9)</sup>。同年六月十九日付大浦兼武筆

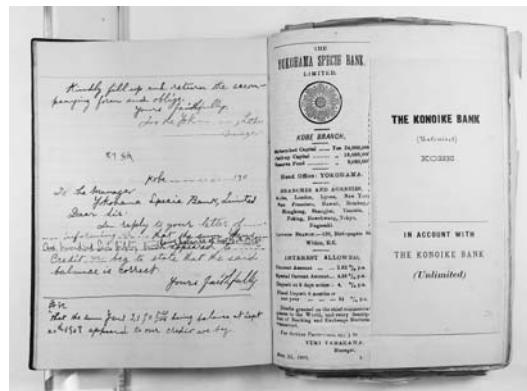
羊次郎宛書簡<sup>(30)</sup>に拠れば、羊次郎は、明治二十六年三月～二十八年三月に第九代島根県知事を務め當時は警視総監となつて大浦に就職の斡旋を依頼。大浦は財界の元老格である蔵相・井上馨に相談し、井上から腹心の三井物産取締役・益田孝へ話を進めて同社入社の段取りをつけた。これは當時隆盛だった薩長闇への接近と言えるだろう。

前掲の羊次郎自筆履歴書に拠れば、明治三十三年六月、三井物産会社に入社し営業課次席を命じられる。しかし同年八月、香港支店詰めを命じられ、「家事の都合」により退社。詳細は不明だが、香港は前年七月にイギリスの租借地となつたばかりであり、おそらく語学力を買われての配属だったものの、家督相続者の身で在外勤務は困難と判断したと解釈される。

続いて同履歴書に拠れば、明治三十四年（一九〇一）十二月、合名会社鴻池銀行神戸支店長に就任。同行の沿革については廣山謙介氏の詳細な論考がある<sup>(31)</sup>。これに拠れば、同行はもと鴻池善右衛門（幸富）が明治十年五月に大阪第十三国立銀行として個人資金で開業。国立と言つても鴻池家・山中家が株式の八割以上を所有する、実質的には同族経営の銀行だった。国立銀行営業期間満期を前に三十年三月解散、個人名義の鴻池銀行となつて営業を継承し、三十三年十二月、善右衛門の弟・新十郎の經營する和泉町銀行を合併して合名会社鴻池銀行となつた。

この間、同行は明治三十二年十二月に井上馨の斡旋で外務官僚・島村久を理事に招き、初めて外部経営者の導入に踏み切つた。島村はニューヨーク総領事の経験もある改革派で、從来、東京・京都のみだった同行支店を拡充し、三十三年末に中之島・上町・西（以上、大阪市内）・神戸、三十四年上期に名古屋・金沢・岡山を新設した<sup>(32)</sup>。

神戸支店は明治三十三年十二月十五日、栄町通三丁目旧三菱跡に開設（後



【挿図3】桑原羊次郎作成「英文雛形集」  
1899～1906年頃 筆者蔵

に栄町二丁目四二一番地へ移転）、初代支店長は奥村忠三郎だった<sup>(33)</sup>。前述の通り、三十四年十二月に羊次郎が同支店長に就任、三十六年に新設された兵庫出張所長も兼務した<sup>(34)</sup>。

羊次郎の入行背景については史料を欠くが、再び井上馨等の有力者が仲介した可能性、そして桑原家代々の家業が金融業であり、松江藩が鴻池（山中）家から大名貸料を受けたなど同家との親和性が高かつたことが理由として考えられる。また、留学経験を持つ羊次郎は、鴻池分家・別宅筋の古参経営陣を一掃しようとした島村新理事の改革方針と開港地神戸での業務にもかなう人材だったと言える。

この入行前後に羊次郎が作成した「英文雛形集」【挿図3】が現存している。ハードカバーの横罫洋紙ノートに英文の銀行関係文書を貼込み整理したもので、各文書の日付は一八九九～一九〇六年となつていて。これは題目通り、銀行業務に必要な英文書式の「雛形」として収集・活用したものだろう。冒頭には、ニューヨークのNational Park Bankの例を参考に「受取係 Receiving Feller」「手形係 Note Feller」「取立係 Collection Department」といった職名の和英表記がペン書され、以下、当座入金票・手形裏書保証印・委任状・利息勘定書・税関小切手等の英文写し、顧客から

神戸支店という場所で羊次郎が具体的にどのような役割を求められたか、換言すれば、近世以来の両替商が近代的な銀行家に移行する為にどのような翻訳作業が必要だったかがありありと示されている。

なお、島村の激しい経営改革は間もなく反発を招き、明治三十五年に井上自身が鴻池本家・分家および銀行の監督となり、さらに同年十二月に原田二郎を銀行理事に据え、四十年以降は原田が専務理事となつて保守的傾向を再び顕著にする<sup>⑨</sup>。四十一年一月発行の『日本紳士録』（交詢社）では、鴻池家別宅筋の伏田午三郎が神戸支店「臨時支店長心得」となつており、羊次郎は四〇年末までに同行を辞職したと考えられる。その後、同支店は大正六年十二月三十一日廃止。本体は大正八年に株式会社鴻池銀行となり、昭和八年に株式会社三和銀行に合流、という経緯をたどる<sup>⑩</sup>。

鴻池家の経営方針に左右された羊次郎の神戸時代は、実業面では順風満帆と言いにくいものだった。しかし、開港地である同地で欧米人の浮世絵熱を目の当たりにし、また肉筆浮世絵蒐集家として著名な兵庫県知事・服部一三に師事して蒐集と研究を深める。明治四十三年の日英博覧会はじめ数々の海外博覧会委員就任はその延長上にあり、羊次郎にとって神戸赴任は美術工芸研究上のキャリアの重要な転換点となつた。この点については三（二）で詳しく検討したい。

#### （四）帰郷～山陰盲唚保護会と第一次「八雲会」

##### ・山陰盲唚保護会

大正二年（一九一三）三月、羊次郎は三年一ヶ月にわたる欧米滞在を終えて帰国した。詳細は後述するが、以後約二年間東京の九段坂下に居住し、大正四年一月頃松江に帰郷。その後の活動は出郷以前と異なり、福祉と文化分

野への方向性を示すようになる。

大正四年五月、羊次郎は「山陰盲唚保護会」理事長に就任。これは帰郷後最初の公的活動である。『島根県立盲唚学校三十周年記念誌』（一九三五年）

および『財団法人山陰盲唚保護会規程』（小冊子、発行年不明）に拠れば、

同会は、明治四十年五月の皇太子山陰道行啓の折、同月二十三日に松江盲唚学校へ侍従差遣のあつたことを記念して同校創立者・福田与志が児童の学資援助と教育設備充実のため企図した「山陰盲唚教育保護会」に端を発する。

四十二年六月に組織化され、四十四年九月二十七日に同校運営母体となつた。羊次郎は大正六年（一九一七）一月二十四日、松江盲唚学校校長にも就任。その尽力もあり、同校の運営は十二年四月一日付で県立に移管されたが、山陰盲唚保護会は児童の学資援助と卒業者後援のため存続され、大正十

五年／昭和元年（一九二六）十二月二十七日に財団法人化された。前掲『財団法人山陰盲唚保護会規程』に拠れば、この時の構成員は以下の通りである（以下（ ）は原文、〔 〕は引用者補注）。

理事長 桑原羊次郎

理事 山内佐助〔眞服商〕、四方文吉〔歯科医〕

評議員 佐藤喜八郎、野呂貞承〔元県立松江病院長〕、

瀧川福之助、福田平治、生松詮一

幹事 福田玉吉〔盲唚学校鍼灸科教師、校長補佐〕

顧問 別府總太郎〔島根県知事〕、間宮龍真〔県学務課長〕、

中村茂〔県庶務課長〕、高橋節雄〔松江市長〕、

山口泰平〔盲唚学校長〕、三島佐次右衛門、

福岡世徳〔初代市長〕、高橋義比〔二代市長〕、並河理二郎、青山泰石

右のメンバーのうち、山内・佐藤・瀧川・三島・並河は桑原家と同様、近世の富裕商家や地主に端を発する松江の名望家である。

羊次郎が山陰盲啞保護会理事長を引き受けた理由は二つ考えられる。第一は、与志の兄で社会事業家の福田平治が「竹馬の畏友」<sup>⑨</sup>であったこと。二

歳違いの平治と羊次郎は幼少期ともに内村鱸香および南画家・天野漱石門下

だった。第二は、明治元年生まれで結成した「明元会」の知友・四方文吉が先立って松江盲啞学校理事として関わっていたこと<sup>⑩</sup>。四方は「私と桑原さんはいきおい寄附金募集係というところで、山内さんが会計という役でやりました」<sup>⑪</sup>と回想している。第三は、羊次郎の妻・春子が神戸時代に開始した社会奉仕活動である。春子は大正三年四月十九日、四二歳で病没した。そして二者のいずれもが、キリスト教信仰という点で同校創立者・福田与志の

精神と深く結びついている。

思想的背景については今後更に慎重に検討すべきだが、同校創立前後の運営を実質的に支えた人物は、与志、平治、それに司祭・永野武二郎の妻チクなど日本聖公会松江基督教会周辺の信仰者が中心である。

帰郷後の羊次郎は、キリスト教への理解と近世以来の桑

原家の人的ネットワークをもって松江の伝統的富裕層を



【挿図4】 松江盲啞学校の福田女史記念会で講演する桑原羊次郎、撮影日不詳、桑原家蔵

障害者福祉の場に結び付ける旗振り役となり、盲啞学校に財政的安定を与えたと言えるだろう。後の昭和九年九月二十二日には島根県社会事業連盟理事长に選任された。

#### ・第一次「八雲会」の設立

山陰盲啞保護会理事長就任から間もない大正四年（一九一五）六月二十五日、羊次郎はラフカディオ・ハーンの功績をたたえ後世に伝える「八雲会」を松江商工会議所で発会創立した。発起人は羊次郎のほか、米村信敬・太田台之丞・根岸磐井・富田太平・野津静一郎。創立当時の趣意書や帳簿類は現在残念ながら見つかっていない<sup>⑫</sup>。設立の動機について、羊次郎は後年以下のように記している。

予は大正四年病を獲て帰省中、予が外遊中、八雲先生の文名が、海外に喧伝せられて、寧ろ我邦人に閑却せらるゝを慨嘆せしことありしを想起し、小泉先生に縁故の最厚き松江は之を閑却すべからずとなし、二三の同志を募りて初めて八雲会を松江に創立した。（「岸博士と八雲会」『島根評論』一二巻二号、一九三四年二月）

ハーン来松の明治二十三年は羊次郎も松江に帰住しており、松江中学校時代の師・西田千太郎とハーンが市内を歩く姿にも遭遇していた。しかし、目礼をなす程度で直接交渉は持たなかつたという<sup>⑬</sup>。すなわち、彼のハーンへの関心は個人的思慕や著作への傾倒に基づくものではなく、純粹に海外における高評価を逆輸入したものと言える。

八雲会はハーンの命日にあたる大正四年九月二十六日、第一回総会を太田台之丞が館長を務める私立松江図書館で開催。農政事情視察のため来松中だった柳田国男（当時貴族院書記官長）とロバートソン・スコットも演壇に

立ち、ハーンの教え子である大谷正信・落合貞二郎から寄せられた感想の代読、白築某（松陽新報記者）・山本庫次郎による講演が行わされた。この時、羊次郎は「記念図書館設立及び外国に於けるヘルンの勢力」を講演している<sup>33</sup>。

また、羊次郎はハーン旧居保存と記念館設立にあたっても尽力し、昭和五年（一九三〇）五月には資金援助を乞うため上京し岸清一を説得、総費用の半額五〇〇〇円の寄附をとりつけた<sup>34</sup>。

さらに昭和十四年（一九三九）九月二十六日、松江中学校でハーンを偲ぶ座談会が行われ、卒業生会長であった羊次郎が座長を務めた。座談会の速記録は『旧師小泉八雲先生を語る』として翌年五月に刊行されている。また、これがきっかけとなつたものか、羊次郎はこの前後から従来のハーン評伝書にあつた矛盾や誤伝をただそつと試み、小泉家の女中だつた高木八百、ハーンが来松当初滞在した富田旅館で世話にあたつた旅館主妻ツネといつた生存者に聞き取りを行つてゐる。これは昭和十五年六月に脱稿し、ハーン生誕一〇〇年にあたる昭和二十五年六月に『松江に於ける八雲の私的生活』（島根新聞社）として刊行した。

なお、余り知られていないエピソードとして、大正十一年（一九二二）五月十三日、著名なアメリカ人写真家バートン・ホーリーズ（Burton Holmes, 1870—1958）がホートン・ミフリン社版ハーン全集 *The Writings of Lafadio Hearn, 16 vols.* Boston: Houghton Mifflin, 1922—23. の挿図写真撮影のため、ハーンの長男・小泉一雄とともに来松。この際、羊次郎はバートン所望の松江城山や和田見新地、社寺など市内各所を案内した。同全集五・六巻所収 *Glimpses of Unfamiliar Japan*（邦題「知られぬ日本の面影」）を飾る寺町の家並・松江城・嫁ヶ島の夕陽・天神町界隈・月照寺・

ハーン旧居ほか、各巻隨所に添えられた松江の生き生きとした写真はこの時に撮影されたものだろう。羊次郎は後の八雲五十年忌に際し、バートンとの珍道中や彼の最新式の撮影機材への驚きを「八雲先生離松後の30年」（『山陰新報』一九五四年十月三日）として寄稿している。

### 三・美術工芸分野での事跡

#### （一）アメリカ留学と装劍金工研究の自覚め

羊次郎の多岐にわたる美術工芸研究の中でも最も早く開始されたのは、〈装劍金工〉すなわち刀剣を装飾する目貫・小柄・縁頭等の金工研究である。これは一五歳から八七歳で亡くなる直前まで六十年余にわたつて継続され、没後もこの分野で最も認められた<sup>35</sup>。研究のきっかけについて、羊次郎は以下のように記している。

明治廿四五年予が米国遊学中、既に米国に於ては日本の刀剣に附屬せる鍔縁頭小柄并目貫等を蒐集して居た人も少なくなつた。けれども予輩は當時此点には極めて無嗜味であつたにより、一向何等の感想もなかつたのである。明治廿六年予は一時松江に帰住し居たりしが、偶然の事にて刀剣商より柳川直政、一宮長常〔とともに江戸中期の彫金師〕あたりの縁頭を数点買求めて、真贋は勿論解からないが、兎に角赤銅〔銅・金の合金〕や四分一地〔銅・銀の合金〕に高肉極彩色とも云ふべく、金銀が鏤刻してあるのに僅か一円や一円半であるのは勿体ない気がして居たのである。

当時雲国出身の米原雲海君が、東京美術学校の助教か何かをして居た関係上、同校教授加納夏雄翁を知つて居て、米原氏より予に同翁が近代稀に見る彫金の大家であると同時に、装劍金工品の鑑定に詳しいから、

予が蒐集せし金工品の鑑定を受けてはどうかと云ふことを話されたので、予の蒐集品を当時下谷徒士町二丁目の青石横丁の邸に居られたる加納翁に送つて、其鑑定を乞ふた事がある。是が予の金工品鑑定と申す事に留意せし最初であつた。（「装劍小道具に就き」一九二九年二月稿、桑原羊次郎一九三〇『増補装劍金工談』津久井書店）

すなわち、羊次郎はミシガン大学留学中に刀装具コレクターの存在に気付き、帰松中に自らもこれを購入、同郷の彫刻家・米原雲海の仲介で加納夏雄【挿図5】に鑑定を乞い、以後師事するようになつた。加納から学んだのは鑑定技術ばかりでなく、明治九年（一八七六）の廢刀令以前、身近に存在していた〈装劍金工〉の豊穣な世界だったと思われる。ただし、加納は明治三十一年二月三日に六九歳で没しており、その後どのように金工研究を進めたかは今後の調査課題である。

「装劍小道具に就き」後半では、欧米人による日本の装劍金工研究の動機を、異なる金属を組み合わせる「多色金」の特殊性と魅力から解説しているが、これは前掲部分の赤銅と四分一地の描写とも重なり、むしろ羊次郎自身の動機として



【挿図5】 加納夏雄（中央）、1894年5月撮影  
『双蛙亭漫録』のうち「装劍金工写真帖」所収  
島根県立美術館蔵

の家に生まれ育つた彼は、造形性以前に、物質としての金銀そのものに魅了されていたようにも思われる。また、廢刀令以後、売却された刀剣・刀装具が海外へ大量に流出し、明治三十年代には来日外国人の方が日本人よりこの分野で高い知見を持つ状況が生じており、その焦りも蒐集と研究を後押しした<sup>109</sup>。

明治二十三年八月、靖国神社遊就館長で刀剣研究家の今村長賀の提唱により、「中央刀剣会」が東京で発足、犬養毅・西郷従道・田中光顯等三八名が発起人となり、遊就館内に本部事務所が置かれた。羊次郎は同年九月より同本部審査員となり（昭和二十年の閉会まで在任）、以後、同会発行『刀剣会誌』および日本美術院発行『日本美術』に金工研究論考を多数発表した。三十七年三月、これらを著書『装劍金工談』にまとめ品川仁三郎から刊行<sup>110</sup>。また、両誌に連載した「彫金工生死年月考」を四十二年八月に『彫金家年表』として日本美術社より刊行した。この序文は今村長賀が執筆している。さらに、後述する明治四十三年（大正二年にかけての『欧米美術行脚』）の期間、羊次郎は現地で多くの装劍金工コレクターと直接接することとなつた。中でも、日本美術書 *Legend in Japanese Art*, 1908. の著者であるアンリ・ジョリー（Henri Louis Joly, 1876—1920）の膨大なコレクションと系統的な研究方法には大きな衝撃を受けている。羊次郎は明治三十年頃より彫金師の人名辞典編纂を企てており、訪問の際、既に二〇〇〇名超の名前を集めたり得意気に話したところ、ジョリーは三〇〇〇名超のカード式に整理された原稿を示したという。これに恥入り発奮した羊次郎は、以後、国内外で新工作劍金工一覧』を大正三年（一九一四）十一月に編纂した。実際の刊行は十一年十月までずれこんだが、同書の序には右の経緯とジョリーへの献辞が記

されている。

以上の著作の内容を見ておくと、『装劍金工談』とその増補版は雑誌掲載論考を発表順に集成したやや隨筆的なものであり、『彫金家年表』『古今装劍金工一覧』も和綴の装幀から明らかなる通り、情報量を除けば近世以来の名寄せ帳の枠内にあるものと言つてよい。これらに対し、昭和十六年（一九四一）十月、七三歳になつた羊次郎が荻原星文館より上梓した『日本装劍金工史』は、彼の一連の金工研究の真骨頂とすべきものである。同書は汎論（總論）・各論・別冊『附図』によつて明確に構成され、学術論文として完璧な体裁が整えられている。と同時に、汎論第一章には「夫れ刀劍は我国独特的精華なり。其の製作の啻に万国に優絶するのみならず、数百年來武士の魂として最も尊重愛護せられたるものなり」と、従来の彼の著作には見られなかつた硬直した文言が登場している。ここに見られる唐突な右傾化は時局の変化がもたらしたものだらう。

今日配慮しておかなくてはならないのは、〈装劍金工〉とは技術的には〈工芸〉に分類されるものでありながら、〈刀劍〉に従属するものであるがために、否応なく武家の象徴、軍国主義の象徴として一種の思想性を帯びてきたことである。そして近代日本は〈刀劍〉を二度捨てた。一度目は明治九年の廃刀令、二度目は昭和二十年の敗戦である。現代の一般的な美術教育の中で〈装劍金工〉について学ぶ、もしくは鑑賞する機会はほとんどなく、他の工芸と同様の審美的觀点で捉えることは難しい。その評価の変還もまた、今後解きほぐしていくかなくてはならない課題と言える。

## （二）肉筆浮世絵コレクションの展開

装劍金工研究と並行し、羊次郎が神戸時代に開始したのが肉筆浮世絵の蒐

集と研究である。これは明治三十三・四年頃から服部一三（兵庫県知事）・武岡豊太（湊川改修株式会社支配人）・岡本喜兵衛・秋山惣卿（兵庫倉庫株式会社常務取締役）等と共に始めたものという<sup>48</sup>。同地には広重の研究で著名な英国人ハッパー（スタンダード石油支配人）もいた。

このうち、服部一三は最も著名な浮世絵蒐集家であり、明治四十年代には「神戸の服部氏か東京の高嶺〔秀夫〕氏か」と称された<sup>49</sup>。服部は明治二十二年（一八八九）開催のパリ万国博覧会に出品取調委員として渡仏しており、ここで陳列された浮世絵を見たのが端緒とされる<sup>50</sup>。ちなみに当時、日本側から浮世絵は出品されておらず<sup>51</sup>、服部が目にしたのはフランス側の諸芸術館に展示されたビングやゴンスの日本美術コレクションと推測される。特にゴンスは同館に「日本の版画芸術をたどれるように、絵本と版画を貸し出し」ていた<sup>52</sup>。服部はジャポニズムの最盛期に總本山で洗礼を受けたと言えよう。なお、服部が明治十七年（一八八四）のニューオーリンズ百年祭記念博覧会でハーンと出会い、後に松江行きを世話したことはよく知られている。羊次郎との出会いでも重要な役割を果たしたのは不思議な縁と言えるだろう。

羊次郎の浮世絵に関する初論文は、明治四十二年四月の「浮世絵の版行物と肉筆物」（『日本美術』一二二号）である。浮世絵の本質を版画に見るか肉筆に見るかは時代や地域により見解が分かれるが、彼は当初より一貫して肉筆に価値を置き、欧米人の版行物愛玩を「一種の好事的尚古癖に過ぎず」と退けた。前述の神戸グループでは服部を筆頭に競うように肉筆浮世絵が蒐集されており<sup>53</sup>、羊次郎もその影響下にあつたと看做される。

ここからは試論になるが、明治後期の神戸財界人にとって肉筆浮世絵を蒐集することは、同時期の東京の三井系財界人が益田孝を頂点に競い合つて高

価な茶道具を蒐集したのと同じ構図、すなわちビジネス上の社交的役割を担っていたと推測される。だがそうだとしても、「肉筆」を愛好した理由は依然明確でなく、今後、彼らの旧蔵品の比較検討も含めた調査が必要である。

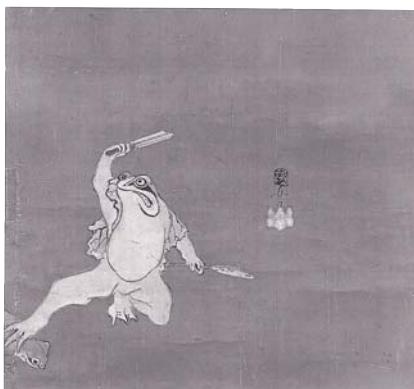
続いて羊次郎は同年八・九月、「北斎改名考」（『日本美術』一二六・一二七号）を発表、後に増補修正し、大正十一年に松江の教文館から出版した。

これは飯島半十郎著『葛飾北斎伝』（蓬枢閣、一八九三年）に次ぐ「我が国で一番目に出版された北斎研究の単行書」と評価されている<sup>56</sup>。翌年には『浮世絵師人名辞書』も同社から出版。しかし以上を除けば、この分野の彼の著作は「浮世絵漫録（全七回）」（『浮世絵』一九一六・一七年連載）をはじめ、隨筆的なものが多数を占める。

羊次郎が蒐集した肉筆浮世絵は、後述の欧米滞在中に日英博覧会会場・ストックホルム博物館・ルーブル美術館・ベルギー王立博物館等で陳列した後、大阪の三越呉服店（大正九年九月）、銀座の資生堂ギャラリー（昭和三年十一月）、恩賜京都博物館（四年三月）、松江の興雲閣（六年五月）で展覽会を行った。昭和八年十二月十八日には東京美術俱楽部で「松陽庵桑原家愛藏品展観入札」を開催し売却を試みている。肉筆浮世絵・近代日本画・墨跡



【挿図6】《遊女歌仙図》  
島根県立美術館藏



【挿図7】歌川国芳筆《双蛙図》  
島根県立美術館藏

を中心としたこの売立目録を見

る限り、時代にも恵まれた彼の蒐集品は、硬軟バランスの取れた確かなものだったという印象

を受ける。その後、一部は松江出身の新庄二郎氏が入手し、昭和五十八年（一九八三）以降、島根県立博物館に収蔵された。

さらに平成十一年（一九九九）和五十八年（一九八三）以降、島根県立博物館に収蔵された。

の島根県立美術館開館に伴い移管され、現在に至る<sup>57</sup>。なかでも『遊女歌仙

図』【挿図6】・菱川師宣筆『立美人図』・懐月堂安度筆『武田信玄像』は羊次郎旧蔵の名品として知られ、また歌川国芳筆『双蛙図』【挿図7】は、羊次郎が号にちなみ『蛙のたはこと』表紙に用いた忘れ難い作品である。

### (三)『欧米美術行脚』の時代

羊次郎は日英博覧会事務局より美術部委員を嘱託され、明治四十三年（一九一〇）二月十六日に横浜を出港、ロンドンに渡った。十月の日英博覧会後、翌年一月にストックホルムのロイヤル・アカデミー日本品展覧会、三月にローマのイタリア建国五十年紀念万国博覧会日本館の委員を歴任。そのかたわら欧米各地の美術館・博物館二〇〇館余りを視察し、大正二年（一九一二）三月二十八日に帰国するまで三年一ヶ月を海外で過ごした。

羊次郎はこの旅の様子を『欧米日誌』と題するノート五冊【挿図8】に記録し、後に清書して稿本『欧米美術行脚』全一二巻【挿図9】にまとめた。後者本文は「双蛙亭用箋」原稿用紙（半葉二四字一一行）で一六九一頁、緒

【史料1】に翻刻し、この壮大な旅の概要を紹介しておく。

ここでは羊次郎が日英博覧会「美術及歴史ニ関スル出品計画委員」に任命された経緯を確認したい。『日英博覧会事務局事務報告』上巻（農商務省、一九一二年、以下『事務報告』）に拠れば、明治四十二（一九〇九）五月当初、同委員に任命されたのは以下三名だった。

委員長（五月六日任命）

正木直彦（東京美術学校長）

委員（五月十四日任命）

今泉雄作（東京帝室博物館美術部長）

伊東忠太（東京帝国大学工科大学教授、工学博士）

関野 貞（東京帝室博物館美術部次長）

大村西崖（東京美術学校教授）

溝口禎次郎（東京帝室博物館美術部次長）

中川忠順（古社寺保存会委員）

片野四郎（古社寺保存会委員）

平子 尚（古社寺保存会委員）

関保之助（東京帝室博物館嘱託）

今村長賀（遊就館長）

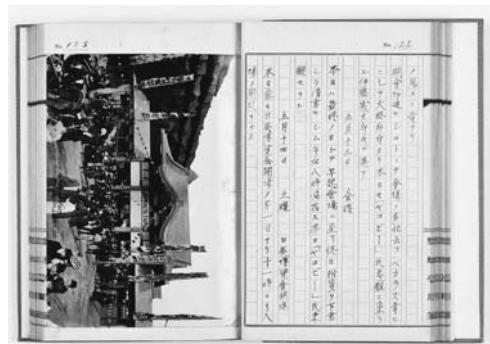
岸 光景（帝室技芸員）

川島甚兵衛（帝室技芸員）

委員は会合を重ね、絵画・彫刻・建築・金工・髹漆・染織の六項目の分類を定め、帝室御物・古社寺所蔵の国宝・名家秘藏品による出品予定目録を作成。借用に先立ち「日英博覧会古美術品取扱規則」を制定し八月二十一日告示。さらに出品者の危惧を払拭するため「古美術品取扱ニ関スル要項」を闡細の説明は今後の課題として、まずは第一巻にある緒言および全巻分目次を



【挿図8】 桑原羊次郎『欧米日誌』全5冊  
島根大学附属図書館蔵



【挿図9】 同『欧米美術行脚』第2巻  
1910年5月14日（日英博覧会  
開幕） 同館蔵

係者に配布する念の入れようだった。

ところが同年九月二十日、委員の一人で将来を嘱望された日本絵画研究者の片野四郎が四二才で病没<sup>⑥</sup>。欠員を埋めるかたちで十一月六日に一名のみ任命されたのが桑原羊次郎だった。

美術官僚・学者・帝室技芸員の居並ぶ中に当時肩書のなかつた羊次郎が任命された背景は、彼の隨想「正木直彦翁追憶—浮世絵研究並に日英博覽会其他」に詳しい<sup>⑦</sup>。これに拠れば、羊次郎は明治四十一年頃、鴻池銀行神戸支店長を辞して上京、海野勝珉（金工家）もしくは米原雲海の紹介で正木直彦と初めて面会した。その際、自らの肉筆浮世絵研究歴を話し、以後、同好の正木の案内で高嶺秀夫・本間耕曹・小林文七といった在京の著名な浮世絵コレクターを歴訪<sup>⑧</sup>。さらに正木の依頼で日英博覽会美術部の仕事を手伝うようになつたという。以下原文を引くと、

一方同博覽会事務局から出品協会会长平山成信氏の名で、予に出品協会側の会計主任として渡英してくれとのことで、同協会の庶務一切久米桂一郎君が担当し、予が会計主任で、平山翁を総帥として久米君と予と三人が英國に出張といふことに決定してゐると云ふのだ。

ところが四十一年の秋予は帰省中、丁度天長節の日〔十一月三日〕に突然正木翁からロンドンに出張してくれといふ電報に接し、急遽上京して正木翁と会見し、予は美術部担任として渡英することに決し、其旨を平山翁に話して諒解を求め、予の代りに銀座の大塚琢造君が総会計主任として出張せらるる事になつた。〔中略〕

そして同博には国宝三十余点を初めとして我国の重美級の出品物が多かつたから、此陳列物の取扱は鄭重の上にも鄭重に取扱はねばならぬといふ意氣で、開会前に正木翁、溝口君と共に毎日同会場に出張して、白

上着でハンマーを揮つて、大荷箱の開函は無論のこと、一切他人を交へず不慣の労働に従事して責任を果したことであつた。そのため疲れきつて毎晩宿に帰ると丸で死んだやうになつて寝込んだものであつた。すなわち、羊次郎は浮世絵趣味を介して後に同委員長となる正木直彦と接触し、一方で平山成信から「会計主任」として渡英を打診されていた。経歴からするとむしろ後者が妥当であり、別ルートの有力な仲介者がいた可能性が高いが、いずれにせよ求められていたのは肩書ではなく、すぐに渡英でき、しかも「重美級の出品物」を扱える人材だった。

羊次郎は明治四十三年四月十五日にロンドン到着。現地で出品浮世絵解説目録 A *Description of "Ukiyo-Ye" Paintings and Prints.* を書き上げ出版、期待に応えた。また、右の展示作業については、『事務報告』にある「古美術品ノ受領、輸送、陳列、保管ノ取扱ハ正木直彦ヲ委員長トシ東京帝室博物館美術部次長溝口禎次郎及桑原羊次郎ヲ委員トシテ専ラ之ニ當ラシメタリ」（上巻三三八頁）という記述からも裏付けられる。浮世絵以外にも、金工品一特に船による輸送で鏽の出た刀装具一の手入れも彼の役割となつた<sup>⑨</sup>。六月十七日には現地で「出品審査ニ関スル事務」委員も嘱託され、同月二十日に会場内日本事務局出張所前で撮影された同委員記念写真【挿図10】が残されている<sup>⑩</sup>。

日英博は同年十月二十九日に閉会したが、羊次郎は前述の通り歐州各地の博覽会委員を嘱託され、『欧米美術行脚』の旅を続けた。こうした任命は彼ばかりでなく、例えは同出品審査委員の執行弘道は帰途インドのアラハバードへ博覽会事務担当として赴いたという<sup>⑪</sup>。

羊次郎は大正二年三月二十八日に帰国。以後、東京九段坂下に居住し、



【挿図10】日英博覽会出品審査委員記念写真  
1910年6月20日撮影 桑原家蔵  
(前列右から2人目に桑原羊次郎)

皮切りに、在外日本美術品とその評価に関する報告や論考を新聞雑誌に次々に発表。翌年六月には浅枝次朗「最近に現れたる思潮の評論」(『研精美術』八七号)に木下杢太郎・石井柏亭・島崎藤村と並んで取り上げられるなど美術界の注目を集め、在京の浮世絵コレクション再訪等も進めた。

また、この欧米滞在期に多くの欧文文献や資料を購入しており、大正六年六月二十二～二十四日に「桑原氏蒐集歐米歴史資料展覽会」が島根鳥取三等郵便局長会主催で開催されている<sup>62</sup>。

#### (四)郷土美術の研究と紹介

帰郷した大正期以降、羊次郎は郷土美術の研究にも大きな足跡を残している。そのきっかけは、大正六年（一九一七）という特別な年に松江という場所に居合わせたことに他ならない。

・『不昧公印譜』秦慶之助、大正六年（一九一七）刊

大正六年は、七代藩主松平治郷（不昧）の百回忌にあたる。松平伯爵家は

高橋龍雄（梅園）を編纂主任として上中下三巻に及ぶ大部の『松平不昧伝』（松平家編輯部編、筹文社刊）を準備し、命日四月二十四日にあわせて刊行。東京四谷の松平邸では前年四月二十三日に不昧公百年忌大茶会が催された。

松江でも数多くの顕彰事業が行われ、白鴎小学校では大正六年五月、私立教育会主催の記念展覧会が開催され、不昧遺墨と関連史料を陳列。二十九日には野津左馬之助の講演が行われた<sup>63</sup>。また、興雲閣では五月二十八日から三日間壮大な「百年忌展観」が開催され、「油屋肩衝」「虚堂墨蹟」「小倉色紙」をはじめとする当時松平家所蔵の不昧遺愛の宝物・大名物が日替わりで計九九点出品、島根県内名家所蔵のゆかりの品も多数陳列された。高橋龍雄はその様子を「古今未曽有の盛事なれば、三都中京を始め天下の数寄者悉く松江に集り、未曾有の盛況を呈せり」と記している<sup>64</sup>。松江で以後、生誕二〇〇年、没後一五〇年、生誕二五〇年と受け継がれる不昧公記念イベントの幕開けである。

この盛況の下、出品者の一人でもあった羊次郎が着目したのは、陳列された不昧遺墨中の「印」だった。不昧の印譜としては、松江藩士・上川権左衛門俊彦が四六顆の印影を採録し嘉永三年（一八五〇）の不昧三十三回忌に発行した『御印譜』が知られており、当時は印章も所在不明だったことから、前掲『松平不昧伝』においてもこれを木版摺にして中巻に掲載していた。これら在来印譜にない印影を新たに確認した羊次郎は、松平家所蔵の『松平不昧伝』印譜版本を借用し、新発見の印影一六顆を加え、同年十月、『不昧公印譜』として市内秦慶之助から出版した<sup>65</sup>。

ところが大正十四年（一九二五）に至り、東京芝の天徳寺松平家墓所改葬の折、偶然にも不昧筆塚の石棺から印章二個が出頭。羊次郎はこれを押捺した印影を松平家から下賜された。從来根拠としてきた『御印譜』をこの真

印影と比較してみた時、羊次郎は改めてその差異に気づき、『不昧公印譜』再版を企図するようになったと考えられる。その差異自体は筆写と木版によるしかなかった時代の技術的制約によるものだが、羊次郎が痛切に責任を感じたのは、これが不昧の書画の真贋鑑定に直結していたためである。同年十一月、羊次郎は六七顆すべての印影を写真複製から作成した『不昧公御印影』を限定三〇〇部で自ら刊行。緒言末尾に「希くは以て不昧公墨蹟鑑賞の真指南車たるを得んか」と記した。藤間寛氏は以上の経緯をまとめ、同書を「今日では不昧印についての基本書となっている」と評価している。

羊次郎が著した不昧関連文献は、外に『不昧公遺墨集』(島根県美術協会、一九二八年)、「不昧公大崎茶屋の図面」(全六回)、「茶わん」(一九三六年・三七年)、「不昧公の父君松平宗衍公」(全四回)、「日本美術工芸」(一九五一年)等がある。

#### ・『出雲陶窯』島根県教育会、昭和八年(一九三三)刊

羊次郎は大正八年(一九一九)十二月「雲善の瓢箪印に就て」(『書画叢談』三巻一二号)、翌年十一月「陶工雲善瓢印と斗門号」を発表した。後者に不昧幼年の号への考察が含まれるように、前述の不昧印譜調査の過程で御用窯への関心を深めたものと推測される。以後、昭和三年(一九二八年)に「出雲の陶工」(全七回)を『書画骨董雑誌』に連載、八年に『出雲陶窯』としてまとめ出版した。

『出雲陶窯』は、近世から昭和初期にかけて出雲地方に存在した楽山焼・宇賀焼・布志名焼・久村焼等の陶窯一四箇所三三件について個々に起源と沿革をまとめたもので、口絵写真一〇図、本文八六頁の洋紙和装本。調査方法については、凡例に「従来何等組織的に説述せし参考書なきを以て、予は親

しく古老に質し、或は窯主に聽き或は実地を踏査して之を取捨総合して本書を編著したり」と記している。なお、口絵巻頭には明治四十五年四月五日にボストン美術館にエドワード・モースを訪問した際の記念写真を掲げており、凡例に「此書が如何に地方的にして貧弱なるものにせよ、陶器研究の動機を予に与へたる同教授を永く偲び且つ之を記念せんと欲する」とあるのが興味深い。

多くの窯のうち、羊次郎が最も継続して力を入れたのは楽山焼だったと思われる。刊行後も調査と再考を続け、「権兵衛の旧窯場」(『日本美術工芸』一四二号、一九五〇年八月)、「権兵衛国屋窯の史料」(同誌一五七号、一九五一年十一月)として発表した。

#### ・『島根県画人伝』島根県美術協会、昭和十年(一九三五)刊

絵画分野においても、羊次郎は『島根県画人伝』という忘ることのできない業績を残している。これは島根県下出身の画家約一八〇人の略歴を雅号五十音順にまとめたもので、口絵写真一八図、本文一四八頁の洋紙和装本。題字は若槻礼次郎、表紙絵【挿図11】は堀機山筆『大社真景図』からとられたもので、原図作品は現在、島根県立美術館寄託なっている。

羊次郎は当初、東京の雑誌社から島根県下の画家小伝を



【挿図11】  
桑原羊次郎著『島根県画人伝』

依頼されたが、伝記不明の者が多いため、まず昭和九年(一九三四)八月一日から地元の『松陽新報』紙上に「島

根県下の画家(未定稿)(全

五回」を連載し約二二〇名の画家を紹介。末尾に自分の住所を示し、遗漏

があれば「小生宛に御一報あらんことを切望す」と呼びかけた。その結果、「幸ひにも各地より続々と画人伝を寄贈せられて、予が新発見を加へて遂に総数約二百八十名に達せり」となった。これは翌月以降、「雲石二州の画家」と題し『塔影』および『書画骨董雑誌』に掲載された。この成果を単行書化したのが本書である。

採録対象は、凡例に「其専門家たると否とを問はず」と記す通り、日本絵画史上の大家・雪舟から松江藩御用絵師・藩主・藩士・学者・歌人、さらに同時代の佐藤喜八郎（愛山）や岡崎運兵衛（雲隣）等余技の者まで実に幅広く収めている。今日では本書にのみ名を遺す画家も多く、郷土美術研究において非常に有用な参考文献となつてているのは間違いない。

しかし、記述内容については『画人伝』の題名が示す通り、ほぼ近世以来の列伝体画人伝の形式に沿つており、名前と画号、出自や師弟関係、位階、没年等を人名辞典的にまとめるにとどまっている。現代の美術史学の眼から見れば、各画家の残した絵画作品そのものや作風の展開に関する記録がないことが惜しまれる。

とは言え、そこにこそ羊次郎の根底にあった伝統的書画觀を読み取るべきかもしれない。同書執筆以前より、彼には『彫金家年表』（一九〇九年）・『古今装剣金工一覧』（一九二二年）・『浮世絵人名辞書』（一九三三年）および『出雲陶窯』（一九三三年）といった一連の美術工芸家辞典類があつたことは既述の通りである。情報を収集して再整理することは、記録好きで記憶力に優れた彼の最も得意とする仕事だった。本書はその画家編だったと言えるだろう。

## むすびにかえて ─近代松江における桑原羊次郎の活動の意義

以上に確認してきた通り、桑原羊次郎は明治最初の年に地方屈指の商家の次男として松江に生まれ、英吉利法律学校進学からミシガン大学留学を経て生涯の武器となる高度な英語力を養った。その一方、父兄の相次ぐ死により、期せずして家督相続者となり、帰郷せざるを得ない立場に置かれた。廢藩後、例えば若槻礼次郎・岸清一といった下級武士出身の青年が後ろ髪を引かれることなく中央へと出て行ったのに対し、大地主でもある商家出身の羊次郎は逆のコースを運命づけられたと言える。バイリンガルの素封家当主という特異なポジションで松江に帰った青年羊次郎は、地域の実業界に定着するに至らず、東京・神戸と活動の場を移しながら模索を続けた。

他方、アメリカ留学中に目にした装剣具コレクターの存在は、彼を同じ蒐集と研究の道に導いた。さらに神戸で開始した肉筆浮世絵の蒐集と研究は彼を正木直彦と結びつけ、博覧会委員として海外で活躍する道を開いた。明治四十三年（大正二年）の『歐米美術行脚』の旅では水を得た魚のように在外日本美術コレクションを歴訪し、ジャポニズム研究の先駆者となつた。近代化の過程で日本人が捨て去ろうとするもの——そしてそこには「かつ、歐米では評価の高いもの」という条件が付く——を研究することが、彼の主要なテーマとなつたと言えるだろう。

そうした経験を得て大正四年に帰郷した羊次郎は、近代的学識と近世的教養、国際的視点と土着的視点の双方から複眼的に郷土松江を再評価することができた。キリスト教への理解を持つて盲唖学校運営に携わり、伝統的富裕層を取り込んで息の長い支援を続け、さらに海外評価を逆輸入するかたちで第一次「八雲会」を設立し、今日まで続く松江におけるラフカディオ・ハーン顕彰活動の基礎を築いた。また、綿密な資料収集によって編まれた『不昧

公印譜』『島根県画人伝』といった郷土美術研究の著作は、今日においても現役で活用されている参考文献である。

また、県内各所に残された羊次郎旧蔵コレクションの功績も忘れてはならない。島根大学附属図書館蔵「桑原文庫」をはじめとする史料群が、県下の各分野の研究者に多くの恩恵を与えてきたことは疑いのない事実である。さらに、旧蔵浮世絵は新庄二郎コレクションを経て島根県立美術館に収蔵され、今日の永田生慈氏の葛飾北斎を中心とするコレクション約一千点の同館寄贈につながる呼び水となつた<sup>68</sup>。

明治一五〇年にあたる平成三十年（二〇一八）は、すなわち羊次郎の生誕一五〇年でもある。「地方創生」が二十七年より説かれ、東京への一極集中は正が国の課題となつてていることは周知の通りだが、中央集権の時代に郷土に帰つて社会事業と郷土美術研究に貢献し、優れたコレクションをこの地に残し桑原羊次郎の事跡は、まさに現代こそ見直されるべきだろう。島根県立美術館では今秋、企画展「生誕一五〇年 桑原羊次郎展」を予定している（同館、島根大学附属図書館、桑原羊次郎・相見香雨研究会共催）<sup>69</sup>。

### 【史料1】桑原羊次郎『歐米美術行脚』緒言、目次翻刻

（全一二巻、稿本、島根大学附属図書館蔵）

〔翻刻にあたり、旧字は新字体に改め、読点を補つた。また、各巻「概目」、目次下部の掲載頁数、および一部カナに付された「『』を省略した〕

#### 緒 言

本書ハ明治四十三年倫敦ニ於テ日英博覽会開催セラル、ニ就キ、其準備トシテ予ハ農商務省ヨリ同博覽会美術部計劃委員ヲ命セラレ、次キテ倫敦出張ヲ

命セラレテ倫敦ニ渡航ス、同年六月同博覽会審査委員ヲ命セラル、而シテ同博覽会ハ同年十一月閉会セシ処、瑞典ニ於テ同国人ノ蒐集セル日本品ノ大展覧会開催セラル、ニ就キ、同國註劄ノ日本公使杉村虎一氏ノ紹介ニヨリ同国ニ赴キ、次キテ明治四十四年二月以太利建国五十年記念世界大博覽会ヲ羅馬（美術部）忠林（農工商部）ニ開催セラル、ニ就キ、平山成信男ノ紹介ニヨリ日本館主任トシテ羅馬ニ滯在シ、翌明治四十五年一月同府ヲ出発シ再ヒ倫敦ニ帰り、明治四十五年三月米国ニ渡航シ紐育ヲ仮寓トシテ各地ヲ歴訪シテ大正二年三月ニ至ル迄テノ日誌ナリ

予滯欧米中、美術工芸其他ヲ鑑賞スル為メ博物館・図書館・美術学校・陳列所・個人蒐集家等ニ出入セシ回数、実ニ二百回ノ多ヲ数フ、英國博物館ニ六回、ルーブル博物館ニ五回、ヴァチカン博物館ニ六回、メトロポリタン博物館ニ九回ヲ始メトシテ一日中ニ二三ヶ所ノ鑑賞ヲナシタルコトアリ斯ノ如ク僅々三年許ノ短年月ニ於テ二百回ノ美術品鑑賞ヲナシタル事ナレバ、一日ニ之ヲ平均シテ旅行日数ヲ含メテ五日ニ一個所ノ鑑賞ヲナシタル勘定ナリ、名所旧跡・宴会・交遊・芝居・映画等ノ諸見物・諸集会等ハ勿論美術鑑賞外ナリ、然レバ予カ茲ニ滞外中ニ相当努力精励ヲナシタリト公言スルモ敢イテ過言ニアラザルベント信ゾ

本書ノ原稿ハ當時予ガ日々遭遇セシ出来事ノ概要ヲ懷中ノートニ略記シ置キ宿所ニ還リテ之ヲ雑記帳ニ詳記シ置キタルモノ彬然タル大冊五巻アリタルヲ以テ今回唯之ヲ淨書セシニ過ギザレドモ、當時ノ記載漏ニシテ今日猶ホニ記憶シ居タルモノハ其不備ヲ追補トシテ之ヲ記入置キタリ

予馬齢八十歳、約四十年前當時ノ知人ヲ追憶シテ感慨無量ノモノアリ、即チ平山成信男・林權助男・杉村虎一氏・鶴見左吉雄氏・正木直彦氏・溝口楨次郎氏・モールス教授・デン教授・グキン氏・ジョーリー氏ヲ始メトシテ本書

記載ノ交遊中、其十中八九ハ既ニ他界セラレテ再ヒ相見ルノ期ナシ、今此稿

ヲ完了スト雖トモ夫レ誰ニカ之ヲ示サン哉、一種悲愴ノ感ナキヲ得ザルナリ

昭和貳拾貳年五月六日

雙蛙 桑原羊次郎識

ニヨレリ

一、本書ハ數年ニ亘リテ記録セシモノ故ニ地名・人名ヲ記スルニ當リテ異名ニ記載セシコトアリ、仮令ハ「フイレンチエ」ヲ「フロレンス」、或ハ「ルーベンス」ヲ「リューベンス」等ノ如シ、是等ハ何レモ其地ノ呼称ニヨリテ統一シ置キタシト思フ

### 歐米美術行脚目次ニ就キ

本日次中左ノ事項ヲ注意スベシ

一、項目ノ上部ニ何等ノ印ナキモノハ總テ美術品ニ關係ナク時ノ出来事ノ重要ナルモノ及ヒ旅行ノ行程ヲ記シタルモノナリ

一、項目ノ上部ニ○印アルモノハ總テ博物館・美術館・図書館・絵画館・陳列所・個人蒐集等ニシテ美術品ヲ有スル個所ナリ

一、項目ノ上部ニ□印アルモノハ前記博物館其他ニ於テ多少ノ日本品ヲ有スルモノナリ



【挿図12】桑原羊次郎『歐米美術行脚』第2巻

1910年6月9日より

左から溝口禎次郎、桑原羊次郎、  
アーサー・モリソン、正木直彦  
島根大学附属図書館蔵

### ○ 第 壱 卷 目 次

明治四十三年

二月十六日  
二月廿三日  
二月廿八日  
三月七日

三月十日

香港着  
新嘉坡着

彼南着  
横浜解纏

二月廿三日  
二月廿八日  
三月七日  
三月十日

三月十七日	国会議事堂再訪（第一回目）	六月八日
三月十八日	□○モリソン氏再訪	六月九日
三月廿六日	正木溝口桑原三人主催大園遊会	六月十二日
三月三十一日	□○カピテン・インマン氏蒐集	六月十六日
四月一日	○大英博物館（第三回目）	六月十七日
四月六日	○大英博物館（第三回目）	六月廿五日
四月十日	□○デヴィス氏蒐集品 George R. Davies	七月一日
倫敦	王立園芸会	七月六日
○ハンプトン・コート	○大英博物館（第四回目）	七月八日
日英博覧会	○ツリバルドайн侯爵蒐集	七月十二日
□○サウス・ケンシントン博物館	倫敦塔	七月十四日
国会議事堂傍聴（第一回目）	四月十八日	七月十八日
英皇帝エドワード七世陛下崩御	四月廿四日	七月廿四日
英皇帝御大葬歎悼觀	五月六日	七月廿六日
朝日新聞社主催觀光団ノ到着	五月二十日	七月廿二日
伏見宮貞愛親王拝謁	五月廿三日	七月廿二日
□○大英博物館 British Museum	五月廿四日	七月廿二日
□○モリソン氏訪問 Arthur Morrison	倫敦	七月廿一日
リッチモンドノ新居	五月廿六日	七月三十日
□○大英博物館（第二回目）	五月三十日	七月三十一日
□○ラファエル氏ノ蒐集	五月三十一日	八月四日
巴里	仏蘭西	八月四日

八月四日	○ルーヴル博物館	グランド・ホテル
八月五日	奈破翁一世ノ墓所	ノートルダム
八月五日	○ドージ宮壁画	ヴエルサイユ
八月六日	巴里凱旋門	瑞西
八月七日	ミラン市	ロザンヌ市
八月八日	ゼネヴァ湖	ゼネヴァ湖
八月九日	○ブレラ絵画館（サンタマリア最後ノ晩餐）	以太利
八月九日	カセドラルトスカラ座	ミラン市
八月九日	フロレンス市	ミケランゼロ作ノ「ダヴィツド」
八月十日	ダンテノ肖像記念	ローマ
八月十一日	○ナショナル博物館	カタコム墓地
八月十一日	フォロ・ロマノ闘獸場	サンポール寺
八月十一日	カタコム墓地	耶蘇ノ足跡
八月十一日	ナボリ市	サンピートロ寺
八月十三日	○国立博物館（ポンペイ発掘物）	ヴァチカン宮同博物館
八月十四日	ポンペイノ廃墟	ポンペイノ廃墟
八月十七日	ミューベン着	伯林
八月十八日	○カイゼル・ウイルヘルム博物館	独逸
八月十八日	□○交通博物館	倫敦
八月二十一日	○大英博物館（第五回目）	ブルッセル
八月廿一日	○クリュドソン氏蒐集品	芝居見物
九月三日	ゼーメス氏未亡人訪問	英吉利
九月十五日	ヘスチング海水浴場	白耳義
九月廿五日	同地博物館	ブルッセル
九月廿八日	マンチエスター市	大英博物館
九月廿九日	□○ベーレンス蒐集品	大英博物館
十月八日	○マンチエスター市松本商会	大英博物館
十月十一日	十月十一日	大英博物館
十月十一日	十月十一日	大英博物館
十月十一日	十月十一日	大英博物館

- ホワイト・ウォース美術館  
リヴァプール市
- ウォーカー・ギャラリー

#### 第四卷

□井上辰九郎氏訪問 同氏蒐集品

倫敦動物園

倫敦大学ニテジョーリ氏日本美術講演  
□○アーサー・チャーチ氏蒐集品 記内録

□○ガバツト氏ノ蒐集品

日英博覧会閉会

□○ハーデング・スミス氏蒐集品

日本人協会ニテ予ノ講演

□○王立裁縫学校參觀

□○ウォター・サミュエル氏蒐集品

○ナシヨナル・ポートレート・ギャラリー第一回

○同、ギャラリ（第三回目）

○テート・ギャラリ Tate Gallery

日本版絵相場ヲ訊ク

□○ジョーリー氏訪問

□○ホークショウ蒐集金工品

〔仏蘭西〕

巴理

□○ルーヴル博物館

明治四十四年

十月十一日	□森田菊次郎氏版絵	一月三日
十月十二日	□ヴエルサイユ宮（第二回目）	一月五日
十月十三日	奈破王一世ノ墓所（第一回目）	一月六日
	エツフェル塔凱旋門	一月六日
	独逸	
十月十三日	柏林 蟻細工ノ展覽会	一月七日
十月十六日		一月八日
十月十九日	瑞典 トロレボルグ港	一月十日
十月廿二日		一月廿六日
十月廿七日	ストックホルム	一月廿七日
十月廿九日	□○ローヤル・アカデミー日本品展覽会	一月十一日
十一月一日	ヘデイン博士ノ開会挨拶	一月二十日
十一月十一日	□○ナシヨナル博物館	一月廿六日
十一月廿二日	ローヤル図書館（松宮觀山譚図錄）	一月廿七日
十一月十三日	○魯国某男爵集藏品	一月一日
十一月十九日	○スカンヂナヴィアン博物館	一月七日
十一月十九日	スカンセン博物館	一月七日
十一月廿二日	「バタ・フライ」ノ芝居見物	一月七日
十一月廿三日	○ハーローイル伯爵蒐集品	一月十日
十一月廿五日	水上競馬ノ參觀	一月十二日
十一月廿八日	○ハーローイル伯爵蒐集品（第一回目）	一月十三日
十一月廿八日	□○アンカークローナル氏長崎絵長巻	一月十四日
	「タイフン」芝居見物	一月十六日
一月三日		一月十七日
	□テールス氏蒐集品	

□ラム氏蒐集品

音楽家リチャード・アンダーンン訪問

瑞典ニテ得タル記念品種々

独逸

伯林到着

仏蘭西

巴理到着

□○ルーヴル博物館

○第五卷

以太利

以太利トリノ着

羅馬

以太利建国五十年記念大博覽会開会

フォロ・ロマノ観物 Foro Romano

サンピートロ寺

サンピートロ寺

カプチニ寺(人骨寺)

日本館開館式挙行

□エリュー・ヴェダ画伯訪問

皇后陛下日本館御入場

□エリュー・ヴェダ画伯訪問

ピアツチャ・ダルミ人類博覽会

1月十九日 ヴィクトリオ・エマヌエレ陛下銅像除幕式

1月二十日 同除幕式余興大花火

1月二十一日 ○ヴァチカン宮ノ博物館

パンテオン

1月廿一日 ヤッタ・フィオリ(花園)

○Museo Nazionale Romano

○Galleria Nazionale

○Museo Capitolino

Fabularium

S. Giovanni in Laterano

三月七日 羅馬府動物園

三月七日 カトリック聖行団

Casino Reospigliosi-Pallavicini

四月三日 ○ボルゲーゼ博物館 Museo Borghese

四月七日 ○S. Pietro in Vinculis (Mose di Michelangelo)

四月九日 S. Pietro 大本

四月十一日 ○ヴァチカン陳列館 Vatican Gallery

四月廿一日 S. Pietro (Sistin Chapel, Raphaels Stanze)

四月廿九日 ○ヘヴェネ氏ノ支那陶器拝見

五月一日 ○ボルゲーゼ博物館

五月六日 ○ヴァチカン新絵画々堂

五月八日 ○バーバリ陳列館(ジョアーネス・チュンシ肖像)

五月廿一日 S. Martina e Luca

六月四日

六月四日

六月七日

六月七日

六月九日

六月十日

六月十三日

六月十九日

六月廿四日

六月廿四日

六月廿五日

七月一日

七月三日

七月五日

七月八日

七月八日

七月十八日

七月廿八日

七月三十一日

八月一日

八月三日

八月五日





- |   |       |  |
|---|-------|--|
| □○サメー博物館 Museo Guimet                   | 1月十一日 | 和蘭 Holland                             |
| ブルッセル Brussels                          | 1月十一日 | ○アムステルダム国立博物館 和蘭焼ノ大蒐集品陳列アリ             |
| □ハロッタ氏蒐集品 Alexandra Halot               | 1月十一日 | ○Vanden Broeck's Collection            |
| ○Musée des Beaux-Arts                   | 1月十一日 | □トマス・ワーパ博物館                            |
| 英吉利                                     | 1月十一日 | ○第九卷                                   |
| 倫敦                                      | 1月十五日 | 亞米利加                                   |
| ○大英博物館 British Museum (銀版画)             | 1月二十日 | 紐育                                     |
| ○National Gallery                       | 1月三十日 | 山中商会支店                                 |
| □Henri Joly's collection                | 1月十一日 | ○メトロポリタン博物館 Metropolitan Museum of Art |
| ○Tate Gallery                           | 1月十一日 | ○メトロポリタン博物館 (第1回)                      |
| ○Wallace Gallery                        | 1月十一日 | ○メトロポリタン歌劇 (Grand Opera)               |
| オックスフォード大学                              | 1月十一日 | 華盛頓                                    |
| ○Tate Gallery                           | 1月十一日 | ○Corcoran Art Gallery                  |
| St. Paul's Cathedral (Painter's Corner) | 1月十一日 | The Capitol 国会議事堂                      |
| Westminster Abbey (Poet's Corner)       | 1月四日  | 国会議事堂附図書館 Congressional Library        |
| △彌陀堂ノ遺像ト其俳句                             | 1月四日  | ○新国立博物館 New National Museum            |
| ○Royal Academy of Arts                  | 1月七日  | 華盛頓ノ邸宅 Mount Vernon                    |
| Bank of England (銀版画)                   | 1月十一日 | ○Smithsonian Institute                 |
| ○Hampton Court Palace Mantegna Gallery  | 1月十七日 | フィラデルフィア 皿田の破鐘                         |
| 白虹譜                                     | 1月十一日 | ○Academy of Fine Arts                  |
| カーリナル祭 Carnival                         | 1月十日  | ○Philadelphia Commercial Museum        |
| □Vanden Broeck's Collection             | 1月十九日 |  |



○公立図書館	七月十日	クラーナ・バーネル Miss Clara Burton
□ローナンア図書館	七月十二日	Neligh Day Nursy of Washington
公立図書館	七月十五日	屠牛場 Stock Yard of Benning
明治大帝崩御 大正元年ナル	七月三十日	屠焼場 Refuse Crematory
○ニューウォーク博物館 Newark Museum	八月廿一日	黒人病院 Freedmen's Hospital
救世軍大将ブース逝去	八月廿一日	第1回排縄運動
□○デン教授蒐集 Prof. Bashford Dean	九月五日	バルチモア市
○スザンヌ・ホップキン病院	九月五日	スザンヌ・ホップキン病院
第一拾刷卷	十月四日	○ペイビーディング Peabody Institution
華盛頓	十月四日	桑原藏浮世絵展覧会
○Smithsonian Institution	九月九日	カレル博士ニノーベル賞授与
□○旧国立博物館	九月十日	養老園 Soldier's Home
大滝見物	九月十日	○メー氏蒐集品 Frederic May
カーネギー図書館 Carnegie library	九月十一日	□○メー氏蒐集品 Frederic May
□○新国立博物館	九月十一日	○ギル氏蒐集品 De Lancey Gill
○新国立博物館	九月十三日	公立図書館
○新国立博物館	九月十四日	○新国立博物館
Rainey's African Hunt	九月十八日	○旧国立博物館
○Smithsonian Museum	九月廿一日	Rainey's African Hunt
Mount Vernon 華盛頓旧邸	九月廿七日	○Smithsonian Museum
動物園 Zoorgical Park Washington	九月廿九日	○リンカーン博物館 Lincoln Museum
	九月卅一日	

○第拾弐卷

紐育

□○マンスフィルド氏蒐集 Howard Mansfield

十一月十日  
○水彩画展覧会

モルガン氏ノ招待

□○金工品陳列 Metropolitan Museum

桑原藏浮世絵展覧会

Hippodrome Christmas benefit

□チャーチー氏蒐集品

○American National Academy

チャーチー氏蒐集品

□Walt McDougall 訪問 (漫画家)

東西絵画ニ就キ愚見新聞ニ発表

○時価五千万弗ノモルガン蔵油絵展覧会

○時価五千万弗ノモルガン蔵油絵展覧会

○モルガン氏陶器大蒐集

□○デイン氏甲冑集 メトロポリタン博物館

○マンスフィルド金工蒐集 メトロポリタン博物館

○時価五千万弗ノモルガン蔵油絵展覧会

○メトロポリタン博物館の絵画 (第六回田)

○公立図書館の絵画陳列

□○サンボルン氏の蒐集品

Greek Refinement by Good Year

メトロポリタン博物館 第七回田

○公立図書館

○メトロポリタン博物館 (第八回田)

○メトロポリタン博物館 (第九回田)

森有礼大久保利通両公写真発見

○近代美術ノ国際大博覧会

ナイアガラ大瀑布

Michigan University

シカゴ市

○Chicago Art Institute

○グキン氏蒐集 Frederick W. Gookin

○Armour Institute of Technology

□ガハソーハス氏蒐集品

一月十四日

セアトル Seattle 着

一月十四日

古屋政次郎氏ニ面会

一月十五日

横浜丸乗船 日本ニ向フ

一月十五日

横浜埠頭ニ安着

一月十六日

一月十八日

一月十九日

一月二十日

一月二十一日

一月二十二日

一月二十三日

一月二十四日

一月二十五日

一月廿四日

一月四日

一月五日

一月七日

一月廿七日

一月一日

一月五日

一月一日

一月五日

一月五日

一月六日

一月六日

一月九日

一月十日

一月十一日

一月廿八日

二二〇一八「明治政府の対外美術戦略に関する研究——一九一〇年日英博覧会をめぐって」筑波大学学位論文（博士）に詳細にまとめられている。

(4) 永田生慈一〇〇七「影印『北斎改名考』『北斎研究』四〇

(5) 林みちこ氏の調査による。なお、同内容は前掲(1)馬場に全て反映されていた。

(6) 松江市史料編纂課編一〇一七『松江市史』史料編8「近現代I」四〇一頁

(7) 前掲(6)、三九九、四一一页

(8) 島根県編刊一九六六『新修島根県史』史料編5（近代中）、六五九（六六四頁）

(9) なお、明治四十年作成と推定される星野禎三郎編「島根県長者地価見立鑑」（前掲(8)六七〇（六七三頁））での桑原羊次郎の位置は県で三七番目、地価二万一四三三円とやや下がっている。

(10) 前掲(6)、六五三、七一五頁

(11) 前掲(6)、四五〇、四七三頁

(12) 松江北高等学校百年史編集委員会編一九七六『松江北高等学校百年史』島根県立松江北高等学校、一七五頁

(13) 島根松江市会『明治廿二年第一回議事録』、および松江市議会編刊一九八一『松

江市議会史』一〇八一頁

(14) 伊藤菊之輔一九七〇『島根県人名事典』国書刊行会が山口巻石の生年を寛政七年（一七九五）としているのはおそらく計算ミスだが、以後もこれが踏襲されて

いる。

(15) この書簡群は近年、島根大学附属図書館に収蔵された。

(16) 「棲碧樓叢書」奥書詳細は島根大学附属図書館OPAC同書注記に公開。

(17) 「懐旧録（中央大学五十年記念）」、桑原双蛙一九三七『蛙のたはこと』私家版、一三七頁

(18) 前掲(12)、松江北高等学校百年史編集委員会、一六九・一七〇頁

(19) 「又と線香は予をして洋行せしむ」一九一七年三月稿、前掲『蛙のたはこと』

(20) 一九三五年十二月稿、前掲『蛙のたはこと』

(21) 桑原双蛙「明治初年の学生生活」『日本美術工芸』四六、一九四七年一月

(22) 前掲(1)馬場、および桑原弘道氏のご教示による。

(23) 「懐旧録（中央大学五十年記念）」二三五頁

(24) 前掲(23)、二三五頁

(25) 前掲(23)、二三六頁

(26) 藤野民次郎「（桑原雙蛙先生追悼録）故桑原双蛙先生を偲びて」『日本美術工芸』二〇六、一九五五年十一月

(27) この経緯については「岡崎翁と竹」一九一九年十二月稿、前掲『蛙のたはこと』

(28) 『松江銀行沿革史』一九〇六年

(29) 前掲『蛙のたはこと』口絵解説

(30) 島根大学附属図書館蔵『独楽集』卷八所収。書簡宛名は「東京永田町二ノ七十

二 古賀方 桑原羊次郎様」。『独楽集』は近年同館に収蔵された羊次郎宛著名人

書簡集（卷子装全一卷、附目録）で、今後、小林准士氏、板垣貴志氏、桑原羊

次郎・相見香雨研究会が読解を進める計画である。

(31) ①廣山謙介一九七九一八〇「明治後期・大正期における鴻池家の企業者活動(1)

(32) (3)『大阪大学経済学』九四・九六・九七、②同一九八二「鴻池家における同族

経営の歴史駆特質——近世から近代への転換期の諸問題——」同誌一〇二

(33) 前掲(3)、廣山(1)(2)

(34) 『神戸新聞』一九〇〇年十二月十五日

(35) 「全国銀行会社録」、交詢社一九〇一『日本紳士録』第八版、同一九〇三第九版

(36) 前掲(3)、廣山(1)(2)

(37) 三和銀行編一九五四「鴻池銀行年表」『三和銀行史』

(38) 福田平治一九六七『ありのまま記』福田静栄に、明治十九年十二月（二十年四月の平治上京の際、「其頃松江より出京し勉強してゐた親友桑原羊次郎君、門野富

五郎君、佐々木佐吉郎君（桑原君の紹介にて東京にて知己となる）等と時々往復してゐた」（二二四頁）、また同書「骨格作製のことども」（昭和十七年五月福田豊誌）に「昨年一月十六日、老人（平治）永眠するや、骨格作製に関し故人竹馬の

友にして山陰盲聴保護会理事長たる桑原羊次郎先生に諮り同会より金百五十円醸出の内諾を得」（二四六頁）とある。福田豊は平治甥。

(39) 四方文吉「眞の盲人観・松江盲聴学校理事就任の辞」同編刊一九三七『欽仰録』

(40) 日本聖公会松江基督教会編刊一九八六『日本聖公会松江基督教会百年史』、および加藤尚子「与志のバッカボーン～キリスト教のことなど」まつえ女性史を学ぶ

会編刊二〇〇三『花守りのひと 盲ろう児の未来を開いた福田与志』に詳しい。

(41) 第一次八雲会記録が昭和十四年時点で現存していたことが以下の太田台之丞発言から分かる。「青山庸君の処にあります。八雲会の第一回からのものが一尺位の

高さに帳簿があります」島根県立松江中学校英語科編刊一九三九『旧師小泉八雲先生を語る』九五頁

(42) 桑原羊次郎一九五〇「自序」『松江に於ける八雲の私的生活』島根新聞社

(43) 「八雲会創立一〇〇年記念講演会・シンポジウム」(二〇一五年七月四日、於松江市立中央図書館)配布冊子所収『松陽新報』(日付不明)記事翻刻

(44) 本文前掲「岸博士と八雲会」

(45) 没後の追悼座談会「桑原雙蛙翁を偲ぶ」『山陰新報』一九五五年十月二十八日のトップ見出しは「装剣具では日本一 浮世絵の研究は『次的』だった。」

(46) 「英國上流社会の日本金工品嗜味」一九二九年三月稿、本文前掲『増補装剣金工談』

(47) これは後に論考を追加し『増補装剣金工談』(津久井書店、一九三〇年)、『日本装剣金工の研究』(大日本教化図書、一九四四年)として刊行した。

(48) 桑原双蛙「正木直彦翁追憶—浮世絵研究並に日英博覽会其他」『塔影』一六一五、一九三〇年五月

(49) 田島志一「浮世絵蒐集家としての故高嶺秀夫氏」『美術之日本』二一三、一九一〇年三月

(50) 服部翁顕彰会編刊一九四三『服部一三翁景伝』

(51) 農商務省一八九〇『仏国巴里万国大博覽会報告書』

(52) ジュヌヴィエーヴ・ラカンブル作成「ジャボニスム関連年表」国立西洋美術館編刊一九八八『ジャボニスム展』図録、七〇頁

(53) 樋口弘一九七一『浮世絵の流通・蒐集・研究・発表の歴史』味燈書屋、二七・二八頁

(54) 前掲(4)

(55) 島根県立美術館二〇一七『新庄一郎が愛した浮世絵』展図録

(56) 片野四郎一八九九『青邱遺稿』中川忠順

(57) 前掲(48)

(58) この記録原本は『双蛙亭漫録』巻一(稿本、島根県立美術館蔵)にある。

(59) 桑原羊次郎『歐米美術行脚』第二巻(稿本、島根大学附属図書館蔵)、一九一〇年四月二十三日(59)五月二十五日条

(60) 前掲(59)、一九一〇年六月二十日条

(61) 正木直彦一九六五『十三松堂日記』第一巻、中央公論美術出版、明治四十四四年四月六日条

(62) 島根大学附属図書館所蔵の同展目録による。

(63) 『大阪朝日新聞』山陰版、一九一七年五月三十日

(64) 高橋梅園一九四四『茶禅不昧公』宝雲会、四三四頁

(65) 桑原羊次郎序文、同編一九一七『不昧公印譜』秦慶之助、および桑原羊次郎緒言、同編刊一九三九『不昧公御印影』

(66) 藤間寛一〇一六「不昧の印影」—研究のあと』『—美の遺産—松平不昧 茶の湯と美術』展図録、松江歴史館

(67) 桑原羊次郎一九三五『島根県画人伝』緒言

(68) 「葛飾北斎らの浮世絵、千点寄贈 研究家永田さん、島根県に」『山陰中央新報』一〇一七年八月二十二日

(69) 「桑原羊次郎・相見香雨研究会」は、島根県在住(開始当時)の研究者有志六名(村角紀子・藤間寛・林みちこ・小林奈緒子・大森拓士・西島太郎)による自主研究会で、近代松江出身の美術史家・桑原羊次郎および相見香雨の業績と背景となった地域文化を現代の視点から検証することを目的に、平成二十六年五月に活動を開始した。二十八年七月に「松江が生んだ美術史家・相見香雨」(九州大学文学部所蔵「自筆調査録」)展実施(島根大学附属図書館展示室)。今後、三十二年に桑原・相見の企画展を計画している。

(むらかど のりこ 松江市史料編纂課専門調査員、  
桑原羊次郎・相見香雨研究会代表)